
ゼロの原作ブレイクな使い魔

amon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの原作ブレイクな使い魔

【Nコード】

N9291M

【作者名】

amon

【あらすじ】

ただのコスプレ好きで何気に凄腕投資家な大学生（男）が、正体不明の声（もしくは作者の趣味）によって、平賀才人の代わりにルイズの使い魔として召喚され、与えられたチート能力と元々の能力でちょこちょこ原作を崩していきます。ご都合展開にご注意を。あと、「主人公は才人じゃなきゃ駄目」「チートオリ主も駄目」という方もご注意を。

Prologue 『強制召喚 良いんだか悪いんだか』（前書き）

この作品は、ある意味実験的な意味合いで投稿しています。もう一つ「ギーシュとして……」という作品を投稿しているのですが、そちらと比べてもしこちらの方が好評であれば、こちらを本命にして、もう片方を削除しようかと思っています。ご意見をお聞かせ下さい。

8/2 頂いたご意見から考え、『ガンダールヴ能力を10倍強化』を無くしました。

8/22 ご意見を頂き、主人公の言葉遣いを少し修正しました。
『ちよつと』『少し』

Prologue 『強制召喚 良いんだか悪いんだか』

俺の名は……、プライバシーという事で伏せておく。仮に、『ジークフリート』と名乗っておこう。

別にドイツ人ではない、日本人だ。なんとなくカツコイイから、オンラインゲームとか、コミュニティとかでハンドルネームにしているのだ。

性別は男、年齢は21歳、大学生、身長178、4センチ、体重約60キロ、自慢じゃないがそこそこイケメン、趣味は読書 と言っても、漫画やライトノベルの類だが……まあ、本には変わりないだろう。

そしてもう一つ、コスプレが趣味だ。

同じような趣味を持つ同志たちとコミュニティを作り、ネット上でHPを開設して製作した衣装の写真をアップし、通販や意見交換を行っている。

さて……自己紹介が済んだところで、今さっき俺の身に起こった事を、順を追って説明していこう。

本日俺は、コミュニティのオフ会で、新作のFFシリーズの赤魔道士の衣装を持参し、会場に赴いた。

赤地に白羽の羽帽子、赤いマント、動き易い様に改造した赤い上

着と白のスカーフ、黒のスラックス、黒の皮グローブ、黒の皮ブーツ、ベルトに秋 原の武器屋で購入した『ヘラクレスダガー』（ネットで購入すれば出るぞ） 皮製品やダガーはともかく、他は全てメイド・イン・俺。仲間からの意見を反映し、センスを向上させた代物だ。

で、会場の更衣室で衣装に着替え、仲間達に見せに会場に入ろうとした、その時だ

俺の前に、緑白く光る楕円の物体が姿を現したのは！

「……俺は知っているぞ。お前は、『ゼロの使い魔』の召喚のゲートだな？」

冷静にツツコミ入れている様に思うだろうが、俺は内心パニックしていた。

何故？どうして！？なんで『ゼロの使い魔』で平賀才人が負うべき運命が、俺の目の前で手ぐすね引いている！？

そして異常事態はそれだけではなかった。

俺は最初、その召喚のゲートには指一本触れず、逃げるように会場に走った。だが……

「な、なんだこれは！？」

会場に入った時に目にしたもの それは、まるで時間が止まっ

たよりに静止した……それぞれ衣装を着込んだコミュニティの仲間達の姿だった。

「お、おい！どうしたんだ！？」

一番仲の良い仲間を見つけて、肩を叩き、声をかけるも全くの無反応　しかも触れた感触が異様に硬い。

まさか……、本当に時間が止まっている……？

そう考えていた時　声が聞こえてきた。

『おい、お前』

「っ！？誰かいるのかッ！？っていうか、動けるのか！？」

周りを見渡すが、誰も動いていない……。

『幾ら探しても無駄だ。私はそこにはいない。お前の心に直接話しかけているのだ』

「はあ！？」

訳が分からん！

『お前が訳が分からなろうが関係ない。時間の無駄だから、さっさと説明するぞ。よく聞け』

心を読んだ！？それにしても、なんたる横暴……。この声の主は碌な奴じゃないな。

『うるさい。お前は平賀才人の代わりに選ばれた。色々特典付けてやるから四の五の言わずに『ゼロ魔』世界に行け』

声は俺の戸惑いも混乱も呆れも放置し、説明を始めた。

っていうか！完全な命令じゃないかつ！？

大体、特典って何だ！？

『先ず、原作に出てきた魔法は『虚無』『先住』も含めて全部、完璧に、応用もありで無限に使える能力だ。使う時はその模造剣を杖として使え。オマケで、絶対折れず、羽のように軽く、斬れるようにしておいてやるから』

「なんだってえーッ！？」

既に無敵じゃないか！！

『次に、ありとあらゆる秘薬の調合スキル。マジックアイテム魔法具の製造技術。そしてハルケギニア文字の読み書きも、日本語と同じ感覚で出来る様にしてやる』

「なんですとぉーッ！？」

っていうか、そんなチート能力があつたら『ガンダールヴ』要らなくね？

『それが無ければ『ゼロの使い魔』は始まらないだろうが』

確かに……って、あれ？いつの間にか、行くのが決定しているぞ？

『そんなものは最初から決定事項だ。という訳で、行け』

「うおいッ！俺の意思は無視かつ！？」

『最初に言っただぞ。四の五の言っなど』

「言わせろ！四の五の言わせろっ！！」

『問答無用だ。行け』

「はっ！？」

さっき避けたゲートが目の前に現れ、向こうからこっちに来る！？

逃げよう！！

でも足が動かない！？

「何だとお！？ぎゃあああああ！！！！」

悲鳴が虚しく響き、俺はゲートに通過させられた。

そしてその直後

「あ、あああ、あなた誰っ！？」

目の前でピンクのロングヘアのツルペタお嬢さんが狼狽しておられた……。

周りを見れば、白シャツに黒のマントの少年少女達……。そして広い芝生の中庭、中世ヨーロッパを思わせる建物……。

ああ、来てしまった。『ハルケギニア』に……。

転移は一瞬だった。何かしらのショックも、身体が捻じれるような感覚もなし……。なんとも味気ないな。

それにしても、あの正体不明の声め！ホントに問答無用で俺を『ゼロ魔』世界に送り込みやがった……。ド畜生め！

「あ、あの、もしもし……？」

「……ん、ああ失礼。少し状況確認をな」

仕方がない……。取りあえず様子見という事で、出来る限り原作に沿ってみるか。

「そ、そう……。で、あなた、誰……？」

誰、か……。ここへ来て、本名を名乗るのも何だな……。ハンドルネームでいいこうか。ついでに、少しキャラを作ってみるか。

「吾輩の名はジークフリート」

「えと……どちらの貴族？」

貴族ではない。だが、一応魔法は使える……はずだ。あの声の言っていた事が、本当ならば……。

「ちよつとルイズ！『サモン・サーヴァント』で貴族を呼び出してどうするのよ！？」

一人の少女がそう言った事で、周りもざわつき始めた。

誰かと思えば、あのタコ足の様な金髪縦ロールはモンモランシーではないか。

「ちよ、ちよつと間違っただけよ！」

「ルイズの間違いはいつもの事だけど、今回のコレは流石に拙いだろう！」

「そうだ！下手すると国際問題になるかも知れないぞ！」

流石にこれ以上話が大きくなるのは頂けんな。

「あゝ、諸君？盛り上がっているところ申し訳ないが……吾輩は（多分、一応）メイジだが、貴族ではないぞ」

「「「「へ？」「」「」」」」

騒いでいた小僧、小娘達が目を点にする。

「き、貴族じゃないの……？」

「うむ。単なる旅のメイジだ」

「~~~~っっ!!まぎらわしいのよっ!!」

キンッ!

「はうッ!?!」

まさかあああ!!こんなところで平賀才人と同じ運命を辿ること
になるうとはあああ!!

お袋さああん!!

い、医者ああ……治療うう……!!そ、そっだ……!

カチャカチャカチャ……

震える手で何とか腰のヘラクレスダガーを引き抜く。

そして、痛みを堪えて呪文を唱える。

「iiiiii……イル……ウォータル……デルウウ」

ポワァ……

ダガーの剣先が光り、股間の切ない痛みがスツと引いた。思い付
きの『治療』^{ヒーリング}が成功したようだ。

「ふうう……淑女たる者、男の股間を躊躇なく蹴り上げるものでは
ないぞ」

「うるさいわね！あんたが、貴族でもないくせにそんな立派な服を着てるのが悪いのよっ！」

理不尽もここに極まったな……。しかし、自作の衣装が『立派な服』と言われるのは悪い気はしない。

±0ということにして、抜いていたダガーを鞘に戻す。

しかし……どうやら、あの声と言った特典というのは本当だったらしい。

今の今まで、それどころじゃなくて気付かなかったが、ヘラクレスダガーが本当に羽のように軽かった。

それにさっきの『治療』^{ヒーリング}では、まるで最初から知っていたように、呪文がスツと頭に浮かんできたんだ。

俺も『ゼロの使い魔』は全巻読んでいるが、呪文なんて一々覚えていない。なのに、コレという事は、やはりあの声の主がくれた能力なんだろう。

これから少しずつ試していくとしよう。

それはさておき……

「ミスタ・コルベール！」

「なんだね？ミス・ヴァリエール」

「あの！もう一回召喚させて下さいー！」

「それは駄目だ。ミス・ヴァリエール」

「どうしてですか!」

「決まりだよ。二年生に進級する際、君達は『使い魔』を召喚する。今、やっている通りだ」

ん……使い魔か。

そう言えば、俺が『サモン・サーヴァント』を使うと、何が出てくるんだろう?

試してみたい気もするが……止めておこう。万が一、俺の中の『虚無』魔法に反応して人間が出てきたりしたら面倒だ。

目の前でルイズを見ていると、特にそう思う。

「それによつて現れた『使い魔』で、今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進むんだ。一度呼び出した『使い魔』は変更する事はできない。何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるに関わらず、彼を使い魔にするしかない」

「でも!メイジとはいえ平民を使い魔にするなんて聞いた事がありません!」

「これは伝統なんだ。ミス・ヴァリエール。例外は認められない。彼は……確かにメイジとはいえ平民かもしれないが、呼び出された以上、君の使い魔にならなければならない。古今東西、人を使い魔にした例はないが、春の使い魔召喚の儀式的ルールはあらゆるル―

ルに優先する。彼には君の使い魔になってもらわなくてはな」

「で、でも……！」

「さて、では、儀式を続けなさい」

「や、やっぱり続けるんですか？」

「そうだ。早くしたまえ。次の授業が始まってしまうじゃないか。君は召喚にどれだけ時間をかけたと思ってるんだね？何回も何回も失敗して、やっと呼び出せたんだ。いいから早く契約したまえ」

渋るルイズだったが、コルベールに言われ、困ったようにこちらを見てきた。

「ねえ」

「何かな？」

声をかけられ、答える。

「あんたもメイジなら、『コントラクト・サーヴァント』の事は知ってるでしょ」

「無論だ、吾輩に使い魔はいないがな。どうせ根無し草、他人の使い魔になってみるのも一興よ」

そうしないと、話が始まらないしな。

「そ、そう……。かかか、感謝しなさいよね！？あああ、あんたみ

たいな落ちぶれメイジが、貴族に、こここんなことされるなんて、
い、一生ないんだから!!」

声を裏返らせるルイズ。俺は別に落ちぶれた訳ではないんだが…
…。

それにしても……。

「わ、我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴ
アリエール。五つの力を司る五芒星^{ペンタゴン}。この者に祝福を与え、我の使
い魔となせ」

ルイズが『コントラクト・サーヴァント』の呪文が唱え、杖を俺
に向ける。

「……ちよつと屈んで」

「うむ」

言われた通りに屈むと、ルイズは杖を俺の額に当てた。

そして目を閉じ、ゆっくり顔を近づけてくる。これから、契約の
キスをする訳だ。

「ん……」

チュウ

俺とルイズの唇が重なる。中々、柔らかで艶やかな感触……。

うゝむ、これが俺のファーストキスか。まさか、相手がルイズになるとは思っても寄らなかった。

まあ、別に減るもんじゃないから、構わないんだが……。この契約のキス、マウス・トウ・マウスでなければ駄目なんだろうか？

やがてルイズが、唇を離す。

「お、おわかりました」

顔を真っ赤にして、ルイズはコルベールに告げた。

「『サモン・サーヴァント』は何回も失敗したが、『コントラクト・サーヴァント』はきちんとできたね」

こらこら、嬉しそうに言うんじゃない、コッパゲ教師。

「相手が平民だから『契約』できたんだよ」

「そうそう。『ゼロ』のルイズの使い魔に呼ばれるくらいだ。そいつもどうせ、大したメイジじゃないさ。そうでなきゃ、『契約』なんてできないって」

「馬鹿にしないで！私だってたまには上手いくわよ！」

自分で「たまに」って言うてしまった……。自覚しているんだな、ルイズ。

「ホントにたまによね。『ゼロ』のルイズ」

また、タコ足縦ロールのモンモランシーが出てきた。

「ミスタ・コルベール！『洪水』のモンモランシーが私を侮辱しました！」

「誰が『洪水』ですって！私は『香水』のモンモランシーよ！」

「あんた小さい頃、洪水みたいなおねしょしてたって話じゃない。『洪水』の方がお似合いよ！」

「よくも言ってくれたわね！『ゼロ』のルイズ！ゼロのくせに何よ！」

「いやはや、小学生レベルの喧嘩だ。しかし……由来はともかく『洪水』という二つ名は、それだけ聞けば結構イケてる気がする。」

強力な水で全てを押し流してしまいそうな、そんなイメージだ。

「こらこら。貴族はお互いを尊重し合うものだ」

コルベールが、ルイズとモンモランシーを宥める。

と、その時

「ぐっ!?!」

あ、熱い！左手が焼ける！！

こ、これが『使い魔のルーン』が刻まれる時の現象か!?!ぐうう……ッ、才人が叫びたくなるのも分かるっ!!

「むう……ぐう……つはあ！ハア……ハア……」

幸い、5秒ぐらいで熱さは消えた。

呼吸を整えつつ左手を見れば、そこにはくつきりルーン文字が浮かんでいる……。これが、『ガンダールヴ』のルーンか。

あの声は、いきなり読み書きができると言っていたが……ルーン文字は適応外の様だ。読めない。

「ふむ……珍しいルーンだな」

いつの間にか傍に来ていたコツパゲ……もとい、コルベールが俺のルーンを見て呟いた。

そして、サラサラと手帳に書き写していく。

「さてと、じゃあ皆教室に戻るぞ」

手帳をしまったコルベールは、『飛行^{フライ}』の魔法で飛んで行く。

他の連中も、同じく飛び始めた。しかし、ルイズは飛ばうとしない。

コモンマジックなら覚醒さえしてしまえば『虚無』系統のルイズにも使えるが、『風』系統の魔法である『飛行^{フライ}』はどうやっても使えないからな。

仕方ない。

「ちと失礼するぞ」

「え？きやつ！？」

グイッ

俺はルイズを『姫だっこ』で抱き上げ、徐にヘラクレスダガーを引き抜く。

「イル・フル・デラ・ソル・ウィンデ」

呪文を唱え、浮かび上がる。

そして、そのまま空を飛び、先に飛んで行く連中を追い越してやった。

「ちょ、ちょっと……！」

「さて、教室とやらは何処だ？」

「だ、だから……！」

「ふむ、ならばあのコルベールとやらの後を追えば良いな？」

「聞きなさいよ！人の話を……！」

叫ぶルイズを敢えて無視し、俺は彼女を抱えたまま、コルベールを追って教室に入った。

そして、その日の夜……。

俺とルイズは、二人でテーブルを挟んで椅子に座っていた。

お互いの理解を深める為の、一種の親睦会だな。ちなみに、俺は今日の夕食は、腹が減ってなかったからパスさせてもらった。

「改めて名乗るわ。私は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。トリステイン王国の名門、ラ・ヴァリエール公爵家の三女よ」

「吾輩はジークフリート。二つ名は『無限』……『無限』のジークフリートである。貴族ではないので家名はない」

『無限』というのは、今日、ルイズが午後の授業を受けている最中に考えた、俺の二つ名だ。こいつは『魔法が無限に使える』というあの声が寄こした能力に由来する。漫画『RAVE^{レイヴ}』に出てくる敵キャラ『無限のハジャ』といういる被るが、気にしないように。

「『無限』って、どういう意味の二つ名なの？」

「それは追々。今は、今後の話し合いが先であろう？マスター・ルイズ」

この呼び方、何となく思い付きでそう呼んだだけで、他意はない。表情を見るに、ルイズ本人にはそこそこ好評のようだ。

「そ、そうね！じゃあ、聞くけど、ジークフリート」

「ああ、長いだろうから、短くジークと呼んでくれて構わん」

「そう？じゃあ、ジーク。あんた、どこの出身？」

東京だ、日本だ、なんて馬鹿正直に言うのは無意味だ。

取りあえず……

「わからん」

「はあ？」

「いや、吾輩は生まれてすぐ両親に連れられて、別の土地に移り住んだのだ。その後も、物心がつく前に何度か移住を繰り返したから、正確にどこで生まれたのか分からんだ」

「ああ、そういうこと」

ルイズは納得するが、この話は本当8割、嘘2割だ。

俺の出生地は東京だが、親父の転勤で物心付くまでに何度か引越したと聞いている。最終的に、実家は静岡で、大学に進学してからはアパートを借りて、東京に住んでいた。

バイトはしていない。余談になるが、俺はこれでも結構な投資家株と為替で、かなり稼いでいる。そこから生活費とアパートの家賃を払い、コスプレ衣装の製作費も出しているのだ。

「そう言えば、旅のメイジとか言ってたけど……」

「独り立ちして後、修行も兼ねてあちこち旅をして回っておったのだ」

「へえ」

嘘八百も良いところだが、まあ、このぐらいは良いだろう。

「時に……吾輩は、おぬしの使い魔となった訳だが……どうなのだろうか？」

「どうって？」

「いや通常、使い魔には、主人の目となり、耳となる能力が与えられるであろう？」

「ああ、そうね。でも……あんたじゃ無理みたいね。私、何にも見えないもん」

まあ、才人でもそうだったんだから、そうなんだろうな……。俺としては、そっちの方が助かる。

「人が使い魔になる、ということ自体が異例の事ゆえ、他の使い魔の様にはいかんのかも知れんな」

「うん……。あと普通の使い魔なら、主人の望むものを見つけてくるものだけど……」

「ああ、材料はともかく、秘薬の調合は出来るぞ？」

あの声から、そんな能力を渡されている。ここに戻ってくる前に、チラッと考えていたら、頭の中にすり込まれているのに気付いた。

「ホントに？」

「うむ。材料さえ揃えば、それこそどんな難病の特効薬でも、作ってみせよう」

「えっ！？どんな難病でも！？」

「む？」

ルイズが顔色を変える。

あ、そうか。姉のカトレアの事があつたんだ。

「本当に！本当おゝにッ！！どんな病気でも治せるのねッ！？」

「う、うむ……多分な」

「多分じゃ困るのよッ！！絶対治してもらわなくちゃならない人がいるんだからッ！！」

「そ、そう怒鳴るなっ。治せるとは思うが、その治したい人とやらの症状を診てみん事には、秘薬も調合のしようがないのだ」

秘薬調合の能力は、勿論ポピュラーなポーションも作れるが、一般的な秘薬が効かない難病の場合は対象となる人物の症状を直接診る必要がある。そこから、必要な素材を割り出し、その症状にピッ

タリの特効薬を作り出すのだ。

「そ、そう……。でも！症状さえ診れば、秘薬が作れるのよねッ！？」

「あ、ああ……。どうでもいいが、マスター。声が少々デカ過ぎやしないか？」

「ホントにどうでもいいわ！」

「いや……。近所迷惑で、割とどうでも良くないことではないかと……。」

「だったら！明日の朝、早速、休学届を出すわ！」

「そ、それでどうする？」

「勿論、実家に帰るのよ！」

また随分と早急な……。

「……聞くが、治したい人とやらは、どこの誰なのだ？」

知ってはいるが、流れとして一応聞いておく。

「私には、二人の姉がいるんだけど、その下の姉……カトレアのことよ。私は、『ちい姉様』って呼んでるの。ちい姉様は、昔から身体が悪くて……とっても綺麗なのに、社交界にも出られなくて……。お父様が国中から高名な水のメイジを呼んで、治療しようとしたんだけど……全然治らないのよ」

「なるほど……」

確かにカトレアを治せば、それは決して悪くない。

彼女を治しても、『ゼロ魔』物語の大筋を外れる様な影響は出ないだろうし……カトレアは、良い人だ。助けられるなら助けてあげたい。

しかし……ルイズの実家であるラ・ヴァリエール領まで行くとすると、確か二日ぐらい掛かるはずだ。

いかな……ギーシュとの決闘イベントが潰れてしまう。

「待つて……ちい姉様！」

明後日の方向を向いて、グツと拳を握るルイズ。

ギーシュとの決闘は、何となく色々な切っ掛け的イベントな気がするので、何とかやつておきたい。

ルイズを止めなければ……！

「ま、待て待て、マスター・ルイズ！ 使い魔召喚の翌日に、いきなり休学などしたら、あの生徒どもがまたゴチャゴチャ言い出すかも知れんぞっ？」

「うつ……で、でも！ ちい姉さまが治るなら……か、構わないわ！」

マズイな……！結構、決意が固そうだ……。

どうすれば……！？そ、そうだ！

「まあ待て！急^せく気持ちは分かるが、少し下調べをさせてほしいのだ！」

「下調べ？」

「うむ、その……ミス・カトレアの症状を診てから『やっぱり無理だ』というのは拙かろう？万全を期すために……色々とな」

「そういうことなら……わかったわ」

ほっ……。咄嗟の言い逃れだったが、なんとか時間が稼げたか……。

ギーシュの件が片付けば、結構な時間が空くはずだから、その間に何とかすれば良いだろう。

「その代わり！ちい姉様の病気、必ず治すのよ？良いわね！？」

「……全力を尽くそう」

取りあえず、その夜はそれで何とかルイズを納得させることに成功した。これで治せなかったら、殺されるかも知れない……。

明日から取りあえず、調べ物のフリぐらいはしなくてはならないな……。

ん？こんなことになったのに、妙に落ち着いているって？

それはな、俺は平賀才人と違って、元の世界に帰りたければ、虚無魔法『ワールド・ドア世界扉』でいつでも帰ることが出来るからだ。

ルイズが寝た後、ふと思いついて試してみたら元の世界への扉が開き、帰る事が出来たのだ。で、コミュニティのオフ会に参加できなかった事を、自宅のPCからメールで仲間達に詫びておいた。

そして、また戻ってきた訳だ。最初に来た時は問答無用だったが、自由に行き来が出来るなら、こっちの方が面白そうだからな。

明日にでも、大学の方に休学届を出して、アパートの大家と実家の両親にも一応、当分留守にする旨を伝えておかないと……なんて言おうか？

そんな事を考えながら、その一日は終わった……。

E p i s o d e ・ 1 『決闘 些か予想外の結末だ』（前書き）

引き続き、ご意見をお聞かせ下さい。

8 / 4 ご意見を頂き、ゴーレム（ヴァルキュリア）のモデルを変更しました。

8 / 22 ご意見を頂き、主人公の言葉遣いを少し修正しました。
『ちよつと』『少し』等々

8 / 31 ご指摘を頂き、ヴァルキリープロフィールの部分を微修正しました。

Episode・1 『決闘 些か予想外の結末だ』

『ゼロ魔』世界、二日目

「…………ぬ？」

目を開けると、知らない天井……………って、アホか。

昨日、正体不明の声に、ハルケギニア 『ゼロ魔』世界に叩き込まれたのだ。

「ふああ……………んっ！」

ゴキ！ゴキキ！

やっぱり、幾ら毛布があっても、床で寝るのは身体に良くない感じだ。どっかのTV番組では健康に良いとか言っていたけどな。

それはさておき、ルイズを起こさねば……………。

「起きろ、マスター・ルイズ。朝だぞっ」

「す……………」

なるほど、この程度では起きないか。

ならば……………！

シャツ！

ダガーを抜いて、呪文を唱える。

「フル・ソル・ウィンデ」

フワ

『レレレレレ浮遊』で、ルイズを50センチほど持ち上げ……

フッ

落とす。

ドサッ！

「んきやつ！？な、何よ！何事！」

「起床の時間だ。マスター・ルイズ」

「はえ？そ、そう……。って誰よあんた！」

「……寝惚けておると、昨日の話を反故にするぞ？マスター・ルイズ」

「昨日の話？」

「姉の、ミス・カトレアの治療」

そう言っていると、ルイズは目をバチッ！と開いた。

「駄目！！絶対駄目ッ！！そんなの許さないわッ！！！！思い出した！！！！あんたは、昨日召喚した使い魔のジークフリート！！！！そうですよっ！！！！？」

「どうやら目が覚めた様だな。おはよう、マスター・ルイズ」

「……あ、あんたねえ……」

「ほれ。そんなことはどうでも良いから、さっさと着替えるのだ」

『念力』の魔法でダンスの下を開け、『^{レヒテーション}浮遊』でパンツを取り、ルイズに渡す。便利だなあ、魔法。

「む、向こう向いてなさい！」

平賀才人だったら気にしないが、メイジという認識の俺だと恥ずかしいらしい。

取りあえず、俺は回れ右。

しかし何とも、あまり感心しない線引きだな……。小さな『選民主義』といった感じだ。

「服も取って」

「ほれ」

再度『念力』でダンスを開け、ブラウスとスカート、そしてマントと留め具を取ってやる。

「ありがとう」

「うむ」

そして、ルイズが着替え終わり、俺もマントと羽帽子を被り、二人揃って部屋を出た。

と、その時 隣のドアが開き、中から赤い髪の女が出てきた。言わずと知れた、『微熱』のキュルケだ。

ほう……実際見てみると、本当に凄まじいスタイルの持ち主だな。

「おはよう、ルイズ」

キュルケはルイズを見てニヤツと笑うと、軽い調子で挨拶をした。それを受け、ルイズがあからさまに顔を顰める。

「……おはよう。キュルケ」

ホントに物凄く嫌そうだ。

「あなたの使い魔って、それ？」

こら、人を指さして笑うな。

「そうよ」

「へえ」

こら、人の顔が無遠慮に見つめるな。

「『サモン・サーヴァント』で、まさかメイジを呼んじゃうなんて、相変わらず規格外ねえ」

「ほつという頂戴」

ルイズは顰めた顔をそのままに目を閉じ、ファイと顔を背ける。

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って、一発で呪文成功よ」

「あつそ」

「折角だから見せてあげるわ。フレーム」

キュルケは、何やら自慢げな声で使い魔を呼ぶ。

すると、部屋からのそりとサラマンダーが現れた。

「ほう、サラマンダーか」

「あら、よくご存じね」

俺の呟きに、キュルケが人を小馬鹿にするような声を出した。

「見て？この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ？ブランドものよー。好事家に見せた

ら値段なんか付かないわよ？」

確かに尻尾の先が燃えている……。ポ モンのヒ カゲか。

「そりゃよかったわね」

ルイズが若干苦々しい声で言う。

「素敵でしょ。あたしの属性ぴったり」

「あんた『火』属性だもんね」

「ええ。『微熱』のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱。でも、男の子はそれでイチコロなのですわ。あなたと違ってね？」

キュルケが自慢げに、得意げに胸を張る。ただでさえデカイというのに、余計に張り出して大変な事になっている……。

ルイズも張り合って胸を張る。……が、やはり容量の差があり過ぎて、何だか悲しくなる……。

「あんたみたいに一々色気振りまくほど、暇じゃないだけよ」

負け惜しみに聞こえるが、見た目は間違いなく美少女なルイズ。性格やら魔法の事に問題が無ければ、結構言い寄ってくる男もいるんじゃないかと思う。

キュルケは余裕の態度で笑い、俺の方を向いた。

「あなた、お名前は？」

「ジークフリート」

「あら、素敵な名前ね」

「礼を言う」

「じゃあ、お先に失礼」

キュルケは髪をかき上げ、颯爽と去って行った。サラマンダーのフレイムも、その後を追って行った。

動きだけ見れば、可愛らしいものなんだがな……。

「悔しー！なんなのあの女！自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚したからってこれ見よがしに見せびらかして！ああもう！」

「落ち着くがよい、マスター・ルイズ。そうやって悔しがっていは、あの娘の思っツボだぞ」

「それはそうだけど……！でもっ！悔しいものは悔しいのよーッ！」

はあ、やれやれ……。

ルイズがひとしきり悔しがった後、俺達は学院中央の本塔にある『アルヴィーズの食堂』に入った。

ただっ広いホールに、長い食卓が三列　それぞれに生徒が席に着き、食事開始を待っている。教師連中は、ロフト中階で卓に着いて歓談している。

それにしても……

「……絢爛豪華な食堂であるな」

「トリステイン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないのよ」

俺の呟きに、ルイズが得意げに指を立てて言った。

「と言うと？」

俺はルイズに椅子を引いてやりながら、尋ね返す事で話に乗る。

ルイズは椅子に腰かけながら、また得意げに語り出した。

「『貴族は魔法をもつてしてその精神と成す』のモットーのもと、貴族たるべき教育を、充分に受けるのよ。だから食堂も、貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬのよ」

「ほ……」

なるほど……。ガキの頃からこんな豪華な生活が当たり前では、そりゃあ傲慢にもなるというものだ。貴族じゃなくて良かったと思う。

「ホントなら、平民はこの『アルヴィーズの食堂』には一生入れな

いんだけど、あんたはあたしの使い魔だから、特別よ。感謝してよね」

「ああ、それなんだが……吾輩は、厨房に行つて賄いを分けてもらおうと思つておる」

「はあ？なんですよ？」

目を丸くして振り向くルイズ。

「吾輩は平民故、こういつた豪華な場所で食事をした経験がなく、正直、居心地が悪いのだ……」

こんなところでメシを食つたら……胃が痛くなりそうだ。

「それに……さつさと食事を済ませて、ミス・カトレアの治療の下調べもしなければならんしな」

「！そうね。そういうことなら、いいわ」

カトレアの名前を出すと、ルイズはあっさり納得する。扱いやすくて助かる。

「マスター・ルイズ。確かここには、図書館があつたと記憶しておるのだが……吾輩はそこに入れるだろうか？」

「ああ、そうね……。いいわ、入る時に何か言われたら、私の名前を出しなさい。図書館はこの本塔の中にあるし、大きいからすぐに分かと思うわ」

「心得た。では、後ほど」

ルイズの承諾を得て、俺は食堂を後にし、厨房へ向かった。

<SIDE：マルト>

「あゝ、やれやれ……！ようやく俺達もメシが食えるな」

貴族のガキどもの朝食と、昼食の仕込みが終わって、ようやく一区切りだ。

「まったく……この仕事、給料は良いんだが、料理人としてはどうにもやり甲斐に欠ける……」。

「コック長ー！」

ん？

「なんだあ？どうしたあ？」

賄いのシチューをよそってる時に、若いコックが慌てて走ってきた。

「き、貴族様が！コック長に話があるってっ！！」

「チッ……またか」

いつもの事だ……。俺達が作ったメシが気に入らねえとか、そういう事でわざわざ厨房まで来ては、グチグチ文句を言ってくる……。

全く、貴族ってのは、嫌な生きもんだ。

「あゝ、わかったわかった。今行くよ……」

と、レードルを鍋の横に置いた時……

「いや、それには及ばん」

「っ!？」

若いコックの後ろに、赤いマントに赤い羽帽子の貴族が……もうそこにいた。

こいつぁ、もしかして……あのミス・ヴァリエールの使い魔になったとかガキどもが噂してたヤツか……？

<SIDE OUT>

声をかけるなり、慌てて駆けて行ってしまった若いコックを追って厨房の奥へ行くと、恰幅の良いオッサンがいた。

この人が、マルトーの親父さんか……。

どうやら、これから朝食だったらしい。こいつはグッドタイミングだったな。

「勝手に入った無礼をお詫びしよう。わざわざ出て来てもらうのも手間だと思ってな」

「あ？あ、ああ……いや、別に構いやしませんかね。ところであなた……」

む？親父さんのこの顔……さては、俺の噂を聞いているな？

今の俺は、結構目立つ特徴的な格好だからな。見ればすぐに分かるか。

「御察しの通り、吾輩、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエール殿に使い魔として召喚されし者。名はジークフリートと申す。メイジではあるが、貴族ではない。よって敬語は不要。吾輩の事は、ジークとでも呼んでくれ」

「へ？あ、ああ……」

俺のフランクさに驚き過ぎて、ついて来れていない顔だな。

まあ、マルトーの親父さんならすぐに慣れて追い付くだろう。それより、俺の朝食だ。

「して、おぬしがコック長のマルトー殿で、間違いないか？」

「お、おう……確かに、俺あマルトーだが……」

「やはり。実は、おぬしに頼みがあって来たのだ」

「な、なんでい……？」

ゴクリ……

マルトーの親父さんが、唾を飲み込んだ音が聞こえた気がする。

そんなに緊張しなくてもいいのに……。よし、だったら少し引く張ってみるか。

「実は……」

努めて神妙な顔を作ってみる。

「じ、実は……？」

「実は……！」

「な、なんだってんだよっ……？早く言えってんだ！」

「うむ、実はな……」

「じ、実は……？」

「実は……！」

「そりゃあもう良いってんだよっ！」

ふむ、確かにいい加減くどくなってきたし……もう止めておこう。

「なに、大した事ではない。ここの賄いを分けてもらいたいのだ」

「はあ？なんでまた？」

「吾輩はミス・ヴァリエールの使い魔、そして平民だ。貴族と同じ卓で食事をする訳にはいかんし、何より……あんな豪華で煌びやかな食卓で豪勢な料理を食すのは、吾輩の性に合わん」

「はあ……変な奴だな、あんた」

「何がだ？」

「普通、平民つてもんは、貴族の暮らしに憧れを抱くもんだ。一度でいいから、あんな贅沢な暮しがしてみたい、ってな」

なるほど、確かにマルトーの親父さんが言うことはわかる。

だが、他人は他人、俺は俺だ。

「贅沢することに興味はない。吾輩は自分の興味がある事を追求して生きていければ、それで良いのだ」

「……ぶっ、はっはっはっ！」

なんかいきなり笑われた。

「こいつぁ面白え！ジークつつたな、あんた！メイジだって言う割に、偉ぶらねえところが、気に入ったぜ！」

「む？そうか？」

「おうよ！そうそう、賄いだったな！すぐによそうから、ちよいと待ってな！」

豪快に笑うと、マルトーの親父さんは新しい皿を出して、そこにシチューをよそってくれた。

その後も、話をする内にすっかり意気投合し、これからは毎食賄いを分けてもらう約束を取り付けた。

いや、実にありがたい。才人みたいな貧しい物を食う破目に陥るのは、御免だからな。

そして、食後は本当に図書館に赴いた。

「失礼。こちらは、学院の生徒か教師の方以外の無断での立ち入りは、ご遠慮いただいております」

入ったところで、司書と思しき女性に声を掛けられた。

「吾輩、この学院の生徒であるミス・ヴァリエールの使いの者である。彼女の命を受け、ここへ調べ物に参ったのだが」

「ミス・ヴァリエールの……？わかりました、そういう事でしたら、どうぞお入りください。ですが、奥の『フェニアのライブラリー』は教師のみが閲覧を許された区画ですので、立ち入らないようお願いします」

「心得た」

その『フェニアのライブラリー』とやらに興味はあるが、面倒を起こすのはよくないし、そこまでの専門書は必要ないからな。

司書さんに許可を貰い、俺は中に踏み込む。

だがまあ、実際のところ、秘薬調合の下調べに來た訳じゃない。必要ないからな。

声に貰ったスキルは、素材の形状や効能、取れる場所の情報も頭に浮かんでくるといふ便利なものだ。

今日、図書館へ來たのは、半分は暇つぶし……もう半分は、こっちの文字がちゃんと読めるかどうかの確認が主な目的だ。

それに……万が一、ルイズが俺を探してここに来て、司書に『そんな人は来ていません』とでも聞かされたら、後で何を言われるかわからんからな……。

「取りあえず……適当に本を読んでみるか」

で、5、6冊程見繕って適当な場所に座って読んでみた結果、文字は読めた。

周りには、他に誰もいなかったので、果たして文字の意味が分かっただけなのか、完璧に読めていたのかはまだ確認が取れない。

それに『書き』の方も……

「ん？」

何か人の気配がしたので、右に振り返ってみる。

すると、奥の本棚の間からコッパゲ……もとい、コルベールが走って来ていた。

「おや？君は、ミス・ヴァリエールの……」

「さよう。使い魔であるよ、ミスタ・コルベール」

「おお、私の名前を覚えていてくれたのかね！」

「うむ、まあな」

最初から知っていたし、重大な過去も知っているのだが……そんなことは言えない。

「吾輩、ジークフリートと申す。長いので、ジークとでも呼んで下され」

「そうかね？では、ミスタ・ジーク」

「ミスタなどと、畏まった呼び方は必要ない。ただ、ジークで結構」

「む、そうかね？では……ジーク君、と呼ばせてもらおうよ」

「まあ、そのぐらいならば」

ジーク君くんだと、少し響きがおかしい気もするが……まあ、いいか。

「ミスタ・コルベールも、調べものですか？」

「ああ、まあ、そうだよ……」

若干、口籠ったな……。

ふと、手元を見れば古めかしい本、タイトルは……見えない……。

だが……そうだ。確かこの時期、コルベールは俺の『ガンダールヴ』のルーンの事を調べていたはずだ。多分、それに関する本だろう。

「教師という職も、何かと大変そうですね」

「ああ、だが……やりがいのある仕事だよ」

ふと一瞬表情が沈んだと思えば、何か熱意を感じさせる顔をするコルベール。

なるほど……自分の過去を忘れた事は、ない訳だ。

「若者を教え、導く……確かに、良き仕事ですね。吾輩は、やろつとは思いませぬが」

「ははは！まあ、それは人それぞれだよ。では、私はこれで失礼するよ」

「うむ、さらばである」

去って行くコルベールを見送り、俺は再び本に目を落とした。

そして、しばらく読書に耽っていた時……

「ジーク！」

「む？」

声に反応して顔を上げると、ルイズがいた。

「どうした？マスター・ルイズ。授業はもう終わったのか？」

「う……」

おや？何やら気まずそうな顔……。

ああ、そうか。授業で『鍊金』に失敗して、教室を吹き飛ばしたのか。

「どうしたのだ？気まずそうな顔して？」

「じ、実は……」

ルイズは色々と言いつつ訳を交えながら、『鍊金』の魔法に失敗して、教室をメチャクチャにした旨を説明した。

で、教室の修理を命じられたので、手伝う様に……との事だ。

仕方がないので、手伝ってやる事にし、教室に向かった。

「むう……、これは中々……」

「……」

教室について見ると……、壁と床は煤とヒビだらけ、窓ガラスは粉々、教卓と黒板はバラバラ……。

これは、素手でやると時間が掛かりそうだ。

「さて、呆けていても始まらん。さっさと修復するでしょう」

「……魔法を使って修理するのは、禁止されてるわ」

まあ、罰掃除な訳だから……。魔法を使って楽をしたら意味がない。

とはいえ、ルイズの場合は関係ないんだろうが……

「禁止されたのは、マスターであろう？ 吾輩、そんなことは聞いておらん。よって、魔法を使ってさっさと修復する」

「あつ、ちょっと!」

何か言おうとしたルイズを無視し、俺は『鍊金』と『浮遊^{レビテーション}』を駆使して教室を修復した。

時間としては、30分も掛かっていないだろう。

「では、吾輩は図書館で調べ物に戻る。マスター・ルイズは暫し時間を潰してから、教師に報告に行くが良からう」

「……」

何か言いたそうなルイズを残し、俺は教室から出た。

あの顔は……劣等感か、はたまた反応の軽い俺への不満か……。どちらにせよ、そこはルイズ自身の問題だ。

それも、時間が解決してくれるだろう。あと、大体……1ヶ月強ぐらいだったか。

まあ、それまでは強く生きろ、ルイズ。

その後は、また図書館で読書を再開。結構、面白い物語や動植物の図鑑、秘薬のレシピがあつて、飽きなかった。

そして、昼食の時間……

「マルトー殿。昼食の賄いを頼む」

「あいよ！そっちに座って待ってな！」

マルトーに言われた通り、厨房の横の供えられた簡単なテーブル

と椅子に腰かけ、食事が来るのを待った。

すると……

「どうぞ」

と、控え目な声が掛かった。

そちらを見れば、黒髪ボブカットにそばかすのメイドがいた。彼女がシエスタだな……へえ、素朴な感じで可愛いじゃないか。

「おお、かたじけない。えーと、君は……」

「あ、私、メイドのシエスタと言います」

シエスタは自己紹介をすると、ちょこんとお辞儀をした。礼儀正しい子だ……。

「あの……」

「うん？」

「あなたが、ミス・ヴァリエールの使い魔になったっていうメイジの方ですか？」

「如何にも。吾輩の名はジークフリートという。吾輩の事は、マルトー殿から聞いたのかね？」

「はい。でも、それだけじゃなくて、召喚の魔法でメイジを呼んでしまったって、学院中で噂になってますわ」

シエスタはにつこりと、屈託のない笑顔を見せてくれた。

「ああ……吾輩、メイジではあるが貴族でない故、そんなに畏まらなくとも良いぞ？」

「いえ、でも、ジークフリート様はメイジですし……」

「『様』など付けてくれるな。ジークとでも呼んでくれてよい。吾輩はただ、少し魔法が使えるだけで、爵位も何も持つてはおらんのだからな。この喋り方は……ただの尊敬する人物の真似ごとだ」

若干嘘が入っているが、まあ良いだろう。

「ああ、そうなんですか！じゃあ、その……ジークさん、とお呼びしますね」

はにかむシエスタ。

ふむ、純粹な感じだ。しかし……才人に惚れた後は、どうも暴走気味になって、少し面倒で痛い娘になってしまふのだからなあ……。

俺としては、出来ればそこは避けて通りたいところだが……なんか無理な気がする。

「あの……、どうかなさいました？」

「むっ？ああいやっ！何でもない！突然見つめたりして、すまなかった」

「い、いえ！全然、気にしてませんから！」

むっ、シエスタが頬を染めている。

いかん、軽くフラグを立ててしまったか……。いや、まだそうと決まった訳ではない。

取りあえず、誤魔化しておこう。

「さて、折角の料理が冷めてはいかんな。頂くでしょう」

「はい！」

そんな元気よく、良い笑顔で見つめていないでくれ、お願いだから……。

取りあえず、賄いのシチューを口に運ぶ。

「うむ、美味である」

「よかった。コック長も喜びます！お代わりもありますから。ごめ
つくり」

「う、うむ……」

だから、見つめないでくれというのに……。って、言うてはいないか。

とにかく、食事を済ませてしまおう。

俺は黙々とシチューとパンを口に運んだ……。

「うむ、馳走になった」

「はい！」

シエスタはにっこり笑うと、俺が食べた食器を下げた。

さてと……。

「うーむ、こんな美味なる食事を、タダで馳走になるのは気が引けるな」

「そんな、気になさなくても……」

「否！恩を受けたなら必ず返すのが、吾輩の流儀。何か、吾輩に手伝えることはないか？シエスタよ」

嘘八百も甚だしいが、これもギーシュのイベントに行く為だ。

「えーと……なら、デザートを運ぶのを手伝って下さいな」

「心得た」

という訳で、俺は割と強引に、デザート配りを手伝うことになった。

勿論、帽子とマントは厨房において来た。給仕がマントと羽帽子を被っただけは変だからな。

シエスタの補助として、俺はデザートのカークが乗った銀のトレイを持ち、彼女の後について行く。

そして見つけた。金色の巻き髪にフリル付きのシャツを着た、一見ハンサムだがなんともアホっぽい男子生徒　　ギーシュ・ド・グラモンを。

「なあ、ギーシュ！お前、今は誰と付き合っているんだよ」

「誰が恋人なんだ？ギーシュ！」

ギーシュは、クラスメイトと談笑していた。

周りの連中は、口々に奴を冷やかす。すると、ギーシュはすっと唇の前に指を立てる。

「付き合う？僕にそのような特定の女性はいないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くものだからね」

なるほど……これでは才人でなくても『死んでくれ』と思っただけな。

ウザったいにも程があるナルシストぶりだ。

と、その時……

ポト……

来た。ギーシュのポケットから、紫の液体が入ったガラスの小壘が落ちた。

ふふん、では行くでしょうか。

「そこな金髪の少年よ、ポケットから壘が落ちたぞ」

「……」

ふん、振り向こうともしないか……。だが、そこで諦める俺ではないぞ。

トレイをシエスタに預け、小壘を拾って、テーブルの上に置く。

「聞こえなかったかね？君の落し物だ」

すると、ギーシュは苦々しげに俺を見ると、小壘を押しやる。

「これは僕のじゃない。君は何を言っているんだね？」

「そんなはずはない。これは、君のポケットから落ちた物だ。まさか、他人の物をポケットに入れている訳ではあるまい？」

「おお？その香水は、もしや、モンモランシーの香水じゃないのか？」

小壘を見とめた周りの連中が、大声で騒ぎだした。

「そうだ！その鮮やかな紫色は、モンモランシーが自分のためだけに調合している香水だぞ！」

「そいつが、ギーシュ、お前のポケットから落ちてきたってことは、つまりお前は今、モンモランシーと付き合っている。そうだな？」

友人達に騒がれると、ギーシュは俄かに慌てだす。

ふふふ……いいぞ、ギーシュの友人達。もつと騒げ。

「違う。いいかい？彼女の名誉のために言っておくが……」

ギーシュが言い訳をしようとした……その時だった。

「ギーシュさま……」

後方のテーブルに座っていた茶色マントの少女が、ギーシュの前に歩いて来た。ボロボロと泣きながら……。

あの娘は確か……ケティ・ド・ラ・ロッタとか言ったか。

「やはり、ミス・モンモランシーと……」

「彼らは誤解しているんだ、ケティ。いいかい、僕の心の中に住んでいるのは、君だけ……」

パチンッ！

ケティはギーシュの言い訳に耳を貸さず、思い切り奴の頬を張っ

た。

「その香水があなたのポケットから出てきたのが、何よりの証拠ですわ！さようなら！」

それだけ言い残し、彼女は走り去って行った。

結局、ギーシュに弄ばれた訳だ。憐れな娘だが……ギーシュ如きに引つ掛かる辺り、あまり男を見る目はない様に思えるな。

と、そんな事を考えている間に、今度はモンモランシーがギーシュに迫る。

「モンモランシー。誤解だ。彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをしただけで……」

ギーシュは首を振りつつ、言い訳をする。その顔は、平静を装っているつもりなんだろうが、冷や汗で台無しだ。

「やっぱり、あの一年生に、手を出していたのね？」

「お願いだよ。『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇の様な顔を、そのような怒りで歪ませないでくれよ。僕まで悲しくなるじゃないか！」

しかし、モンモランシーは聞く耳を持たず、テーブルのワイン壺を掴み、ギーシュの頭にぶっつけた。

「うそつき！」

最後に一声怒鳴りつけ、モンモランシーは去っていった。

「……」

周囲が沈黙に包まれる。

そんな中、ギーシュはハンカチを取り出し、顔を拭う。そして、まるで気落ちした様子もなく、芝居がかった仕草で言った。

「あのレディ達は、薔薇の存在の意味を理解していないようだ」

なんとというクソガキだ……。あくまで、自分の非を認めないつもりらしい。

少し、カチンときた……。

「……何だ、その態度は？」

「む……」

俺が声をかけると、ギーシュは睨んできた。

「女性二人の心を己の欲の為に弄んでおいて、まるで反省の色がない、その不遜な態度は何だ、と聞いておるのだ」

「その通りだギーシュ！お前が悪いぞ！」

周りの連中は、冷やかし半分といった風にニヤニヤ笑いながら、ギーシュを冷やかす。

すると、ギーシュの顔が怒りで赤くなる。

「な、何を言うんだね？元はと言えば、君が軽率に、香水の壘なんかを拾い上げた所為じゃないか」

「ほう……、あの二人の少女達がおぬしに裏切られ、傷ついたのは、吾輩の所為だと言うのか？」

「うぐ……！い、いいかい？給仕君。僕は君が香水の壘をテーブルに置いた時、知らないフリをしたじゃないか。話を合わせるぐらいの機転があつても良いだろう？」

「何が機転か……。何故吾輩が、おぬしの二股などという不道德な行いに協力せねばならんのだ。あとどうでも良いが、吾輩は給仕ではないぞ」

「ふん……。ああ、君は……」

ギーシュは、馬鹿にしたように鼻を鳴らす。

ふふん、原作通りの流れだ……。

「確か、あの『ゼロ』のルイズが呼び出した、平民のメイジだったな。平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ」

ほう……ム力つくなあ。才人の気持ち少し分かった。

「おぬし……今の発言は、遠回しに我が主マスター・ルイズを馬鹿にしておるのか……？己の非も認められん幼稚なガキの分際で……」

挑発の狙いはあったが、割と本気の一言だった。

そして、狙い通り……ギーシュの目が光る。

「どうやら、君は貴族に対する礼を知らないようだな」

「おぬしの様な愚か者に、礼など不用であろう?」

「良かるう。君に礼儀を教えてやろう。ちょうどいい腹ごなしだ」

ギーシュが立ち上がる。

「ほう……どう教えてくれると言っただ?」

「君に決闘を申し込む!」

掛かったな……原作通り、チョロい奴だ。

「ほう、決闘とな?面白い。名門と名高い、トリスティン魔法学院の実力の程……見せてもらおうでしょう」

よし、決闘イベントに突入だ。

俺のチート能力の確認がてら、軽く揉んでやるとしよう。

「して……場所は?」

「貴族の食卓を平民の血で汚す訳にはいかない。ヴァストリの広場で待っている。用意が出来たら、来たまえ」

ギーシュが歩いて行くと、その取り巻き達も、案内役に一人残し、ワクワクした顔でその後を追って行った。

「じ、ジークさん……」

傍にいたシエスタが、震えた声を上げる。

俺もメイジだと言っておいたはずなのに……貴族のブランド力は、相当根強いようだ。

「案ずるな、シエスタ。吾輩もメイジ……如何にここが名門である
うと、あの程度の小倅こせがれに負けはせぬよ」

「え……？」

シエスタの頭をポンポンと、軽く叩く様に撫でてやる。

と、あまりやるとフラグになってしまいうから、気をつけんと……。

「あんた！何してんのよ！見てたわよ！」

「おや、マスター・ルイズ」

「『おや』じゃないわよ！なに勝手に決闘なんか約束してんのよ！」

「違うぞ、マスター・ルイズ。決闘を申し込んできたのは、あのギ
ーシュなる小倅こせがれだ」

俺がそうなるように挑発したのは、秘密だ。

「こうなった以上退く訳にはいかん。吾輩にもちつぽけながら、プライドというものがあるのだ」

「ちょっと……大丈夫なんでしょうね!？」

「おや？吾輩の身を案じてくれるのか？マスター・ルイズ」

「ば、馬鹿言うんじゃないわよ！私が心配してるのは、ちい姉様の治療の事よ！！あんたが怪我でもしたら、その分、ちい姉様の治療が遅くなるじゃないのっ!!」

なるほど、ご尤もだが……ならば何故、頬を染めて微妙に口籠る？

「案ずるな。これでも一人であちこち旅をして来たのだ。あんな小^{こせ}倅^{がれ}に負けるほど、弱くはない」

「……本当に、大丈夫なんでしょうね？」

「大丈夫だ」

俺には、あの声から貰ったチート能力がある。誰であろうと、負けはしない……はずだ。

少なくとも、ギーシュには間違いなく勝てるはずだ。そうでなければ、最低だ。

「シエスタ、厨房に吾輩の帽子とマントがあるはずだ。取って来てくれるか？」

「え……？あ、は、はいっ!」

シエスタは慌てて厨房に駆けて行った。

そして、数分後……俺の赤魔道士の赤帽子と赤マントを取って来てくれた。

「かたじけない」

バサッ！

一言礼を言っ、シエスタから帽子とマントを受け取り、身につける。

「では、参るとしよう。そこな少年、ヴェストリの広場とやらは何処だ？」

案内役として残った一人の野郎に、声をかける。

すると、案内役は顎をしゃくった。

「こつちだ。平民」

俺は先を歩く案内役について行く。

「まったくもう！使い魔のくせに、勝手なことばかりするんだから……！」

なんか、後ろでルイズが愚痴ってるが、聞こえなかったというこ

とにしておこう。

そして案内された先　ヴェストリの広場には、ギーシュが既にスタンバっていた。おまけに、結構な数の野次馬も……。

「諸君！決闘だ！」

「「「「「うおーッ！」「」「」」」」

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの使い魔の平民メイジだ！」

ギーシュが薔薇を掲げると、観客が沸き立つ。暇な連中だ……。

「とりあえず、逃げずに来た事は、褒めてやろうじゃないか」

それにしても、ここは日当たりが悪いな……。昼過ぎだというのは薄暗い。

「おい、聞いているのか？」

ん？

「おお、すまんすまん！余所見をしていて、聞いておらなんだ」

「このっ……！ま、まあ、いいだろう。では、始めるか」

「うむ」

ギーシュが薔薇を掲げるように、俺もダガーを引き抜き、構えた。
と、その瞬間

グンッ

身体がフツと軽くなり、腹の底から力が漲^{みなぎ}ってきた。

これが『ガンダールヴ』のパワーか……。

「ふっ」

その時、ギーシュが余裕綽々で笑い、薔薇を振った。

花びらが一枚、宙に舞い……地面に落ちて……

ペア！

地面が光ると、ギーシュと同じぐらいの身長 of 金属人形が現れた。

あれが、青銅の『ワルキューレ』……。

「決闘の作法として、一応名乗っておくよ。僕の名はギーシュ・ド・グラモン。二つ名は『青銅』『青銅』のギーシュだ。従って、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

「吾輩はジークフリート。二つ名は『無限』『無限』のジークフリートである。それにしても……」

俺は、ギーシュの青銅ゴーレムをじっくり観察する。

「なんだね？僕のワルキューレの優雅さに、目を奪われたかね？まあ、無理もないだろうが」

「貧相な……、実に嘆かわしい」

「な、なんだとっ！？」

少し大袈裟に首を振り、溜め息交じりに言っでやると、ギーシュが目を丸くする。

「そんなゴーレムで戦乙女などと……片腹痛いわ。戦乙女と銘打つならば、せめてこのぐらいの物を作っで見せんかッ！！」

俺は早口で『クリエイト・ゴーレム』の呪文を唱え、ダガーを地面に向ける。

パアア！！

地面が光り、そこから一体のゴーレムがせり上がる。

「見るがいい、これが吾輩のゴーレム 『ヴァルキュリア』だ」

「……っ！？」

ギーシュをはじめ、観客達が息を飲んだのが分かった。

それも当然 俺のゴーレムは、ギーシュのそれとはレベルが違う。

ギーシュのゴーレムは、顔は目と鼻しかなく、手もキッチンミト

ンみたいな手抜きの手、鎧兜も大した装飾が施されている訳でも芸術的な形でもない。本当に出来の悪い人形だ。

対する俺のゴーレムは、しっかりと目・鼻・口があり人間と見間違うほど精巧な顔、手は細くしなやかな五本指、右手に剣を持ち、鎧は軽鎧だが模様もちゃんと入り芸術的、頭も羽飾りをあしらった兜を被っているが髪の毛の一本一本まで再現し、しっかりと三つ編みにしているこだわりっぷり。造形のモデルは、エニックス（現スクエニ）の名作『ヴァルキリープロファイル』のレナス・ヴァルキリアだ。

ちなみに『ワルキューレ』はドイツ語、『ヴァルキュリア』は北欧神話の原語である古ノルド語で、どちらも戦乙女を意味する。

「う、美しい……」

ギーシュが思わず、という風に呟く。

「『クリエイト・ゴーレム』の神髄は、如何に精巧かつ強力なゴーレムを作り出せるかにあると吾輩は考えておる。その考えの下、生み出したのがこの『ヴァルキュリア』だ。とくと見よ、この気品溢れる美しき顔！髪の毛、瞳、睫毛に至るまで精巧に再現した事で、人間の美女と見紛うばかりであろう。そして……吾輩が何よりもこだわった部分が、ここッ！」

俺はゴーレムに『ある動き』を指示する。

ポヨン

「ハッ！？そ、そんな……まさか……っ！？」

ギーシュは、今の動きによる俺のゴーレムの『ある箇所』を凝視する。

どれ、もう一度見せてやるか。

ポヨン

「つつっ！ーや、やはり見間違いではなかったッ！ーそ、その……胸の動きッ！ー！」

そう、ギーシュが叫んだ通り……俺のヴァルクキュリアは、胸の部分までも精巧に再現している。

さっきの『ある動き』とは、ジャンプ　ギーシュが凝視した『ある箇所』とは、その振動で揺れるヴァルクキュリアの胸だったのだ！

本来は、胸の部分は鎧で覆われて揺れるわけがないのだが……今は少し、その……ビキニアーマーっぽく改造してあるのだ。あと、本来のレナスより若干、『増量』していたりする。

「おぬしも『クリエイト・ゴーレム』を得手とする土のメイジならば……このぐらいの『美』を追求してみせいッ！ー！」

「つつっ！ー！？？」

ガガアアンツッ！ー！

俺の割と適当な言葉に、ギーシュは何か衝撃を受けたらしく、ゴーレムと一緒にガックリと膝をついた。

「ぼ……僕の、完敗だ」

……そこまでショックを受けるとは……。

少し不憫に思い、俺は項垂れたギーシュに歩み寄り、跪き、その肩に手を置いた。

「落ち込む事などない、若者よ」

「え……？」

「己が未熟を痛感したならば、その未熟を克服すればよい。おぬしは若い、これからがあるではないか。ここから立ち上がるのだ！ 鍛錬を積み、己に磨きをかければ、おぬしもこのくらい出来るようになる！」

「……」

顔を上げたギーシュに、俺の横に来させ、前屈みにさせたヴァルキュリアを指さす。

ユサ……

「……僕にも、こんなゴーレムが……？」

ギーシュは『ヴァルキュリア』を見て……正確には、屈んだ時に揺れた胸を見て、少しずつ目を輝かせ始める。

面白そうなので、俺は真面目な顔を作って頷いてやる。

「出来るとも！さあ、若きメイジよ！今こそ夢を抱くのだ！」

「ゆ、夢……！」

その時、ギーシュが涙を流し始めた。

「ぼ、僕は……大切なものを失っていた。幼い頃は確かに持っていた、夢を……希望を……煌く心の宝石を……！」

「ならば……ここから、取り戻せばよい！」

「っ！せ、先生……！先生と呼ばせて下さいッ……！」

ガシッ！

ギーシュが俺の手を両手で掴んだ。

割と気持ち悪いが、ここは熱血路線で押し切るとしよう。

「いいとも！」

「先生……！」

そんなキラキラした目で見られても、正直気持ち悪いんだが……それは言わぬが華だな。

『ガンダールヴ』パワーの出番もなしで、予想外の終わり方だが、とにかくこれで……

「むっ！」

横から風の気配……！

見れば、小さな竜巻がこちらに迫って来ていた。

バツ！

咄嗟にヴァルキュリアを割り込ませ、防御させる。

竜巻の出所に目をやれば……これまた生意気そうな野郎が杖をこちらに向けていた。

「ヴィリエ！？今のは何のつもりだっ！？」

ギーシュが叫ぶ。

ヴィリエ………というと、もしかしてタバサに惨敗して逆恨みした拳句、狡い手を使ってキュルケと戦わせようとした、ヴィリエ・ド・ロレーヌのことか？

「ふん……そんな平民に負けて、あまつさえ師事しようなど、貴族にあるまじき行いだ。だから、僕が修正してやろうとしたんじゃないか」

ヴィリエは、明らかにギーシュと俺を見下していた。

こいつ……ムカつくなあ。こいつに比べれば、ギーシュが可愛いもんに思えてきた……。

「……おぬしは、この結果に不満がある、というのだな？」

「当然だ。貴族が、平民に負けていい訳がない。そんな事実、あつてはならない」

決めた……。こいつ、完膚なきまでに……叩き潰す。

「良かるう……。貴様のその思い上がり……。後悔させてやろう」

俺はユラリと立ち上がり、ダガーをひと振り。

パアアアア！……！

先ず、最初のヴァルクユリアが光り、色が変わる。

青銅の鈍い青の鎧から目が覚める様な蒼穹の鎧へと変わり、肌は白銀、瞳は青、髪は透き通るような銀色　モデルの『レナス・ヴァルクユリア』に近い姿だ。

「……ふん！多少、姿と材質が変わったところで、所詮華奢なゴレムじゃないか！僕の『風』に敵うものか！喰らえっ……！」

ヴィリエは呪文を唱え、杖を振る。

ブオオッ……！

あれは『ウインド・ブレイク』だな。しかし、レベルの低い……。

「ふん……」

ボソツと短く呪文を唱え、ハエを払う様にダガーを軽く振る。すると

グンツ！

『あっち向いてホイ』みたく、風は方向を変え、撃ったヴィリエ自身に向かって進んで行く。

「なっ！？う、うわあああっ！？！？」

自分の魔法に吹き飛ばされて、ヴィリエは強かに倒れた。

そこへ追撃

「ラグーズ・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ

『ウィンディ・アイシクル
氷矢』！」

シャシャシャシャッ！！

「ひっ！？」

カカカカッ！！

倒れたヴィリエの服を、氷の矢で地面に縫い付ける。奴にとっては、トラウマ　タバサとの決闘の再現になるのだ。

「ば、馬鹿な……！お前は……『土』のメイジのはずじゃ……！？」

「吾輩はそのような事、一言たりとも言った覚えはないぞ。行け、ヴァルキュリア……。あの身の程知らずに、トドメを刺して来い」

声に出して命令する必要はないのだが、俺は敢えて口でヴァルキユリアに指示を出した。当然……ヴィリエの恐怖心を煽ってやるのだ。

カシャン、カシャン、カシャン……

「し、死ぬ！助けて！殺されるっ！」

さっきの威勢の良さは何処へやら……。縫い付けられて身動きが取れないヴィリエは、恐怖に顔を歪めて泣き叫ぶ。

カシャン、カシャン、カシャン……

「ひいいい！！？許してくれ！頼むっ！命だけは！」

剣を片手に迫ってくるヴァルキユリアを見て、ヴィリエが更にみっともなく泣き喚き、命乞いをする。

「先に戦いを仕掛けてきたのは、貴様であろっが？」

「ま、参ったっ！降参するっ！！！」

「貴族が平民に敗れる事などあつてはならない……。貴様、そう言つておつたはずだが？」

「そ、それは……そうだ！へ、平民と言ってもそれは魔法が使えない連中の話さっ！優れた力を持つメイジがただの平民に負けるのは恥だけど、お前……いや！貴方は平民とはいえメイジじゃないかつ！！それなら負けても不思議じゃないさっ！！！」

ヘラヘラと媚びへつらいやがって……、つくづく胸糞の悪い野郎だ。

「……この期に及んで、まだそんな戯言を抜かすか。見下げ果てた愚か者めが……やはり一度、地獄を見るがよい」

カシャン、カシャン……カシャンっ！

そして、ヴァルキュリアがヴィリエの真横についた。そして、逆手に持ち、切っ先を下に向けたブロードソードを、徐に上に掲げる。

「ひいひい！後生だっ！何でも言う事を聞くから命だけは！」

聞く耳持たぬ　ヴァルキュリアに、剣を下ろさせる。

ヒュッ！ザスッ！

「ぎゃああああああッッ！！！？？？」

ヴィリエの悲鳴が響き渡り……そして、消えた。

「ジークッ！」

その時、ルイズが青い顔で駆け寄ってきた。

「どうした？マスター・ルイズ」

「『どうした？』じゃないわよっ！！なんで！！、！！、殺したのよッ！！？？」

ああ、なるほど……。俺がヴィリエを殺したと思って慌てている訳か。

「……早とちりするでない、マスター・ルイズ」

「え？」

「良く見よ」

そう言つて、ヴィリエの方を指さしてやる。すると、ルイズはそちらを見た。

「……あ」

短く声を上げるルイズ。

「ぶくぶくぶくぶく……」

そこには、地面に縫い付けられたまま泡を吹き、失禁して無様に気絶しているヴィリエの姿があった。

ヴァルクリアの剣は、ヴィリエの頭の横の地面に刺さっている。勿論、ヴィリエには傷一つ付けていない。

「あんな小倅^{こせがれ}を腹立ち紛れに殺める程、吾輩も堕ちてはおらん」

こうして、ギーシュとの決闘イベントは終わった。

色々と思外な出来事はあったが、終わり良ければ全て良し！

これで一週間は時間が空くだろっから、その間にカトレアを治してやれるだろう。

Episode・2 『治療と初恋 お医者様でも草津の湯でも……』

（前書き）

キャラクター崩壊にご注意を。

あと、引き続きご意見・ご感想をお待ちしています。

8/22 ご意見を頂き、主人公の言葉遣いを少し修正しました。
『ちよつと』『少し』等々

Episode・2 『治療と初恋 お医者様でも草津の湯でも……』

あの決闘から二日が経った……。

現在、俺とルイズは馬を駆り、ルイズの実家であるラ・ヴァリエール公爵領へ向かっている最中だ。

学院を出発して、既に一日 ルイズの話では、このペースならあと半日で到着出来るとのこと。

かなりのハイペース。途中の村で、馬を換えては全力疾走 乗馬なんて初体験だった俺には結構キツイ強行軍だ。

乗るのは何となく見様見真似で何とかだったが、この強烈な振動が……。『治療』^{トレーニング}で回復しながらじゃなければ、腰がイカレてしまう。

乗馬がダイエットに効果的だというのが、良く分かった。

何故、ルイズの実家に向かっているか……。それは勿論、カトレアの治療の為だ。

ギーシュのイベントが（色々予想外な形で）終了したので、適当に一日空けてからルイズに「下調べが完了した」と伝えた。

するとルイズは、即座に学院に休学届を提出 次いで、実家に

フクロウで手紙を送った。

そして、その日の内に学院の馬を借りて出発　　現在に至る、と。

で、ルイズの話通り、それから半日かけて日が暮れた頃、俺達はラ・ヴァリエール公爵領　ラ・ヴァリエール公爵の屋敷……って
いうか城？の堀を挟んだ城門に到着した。

バサッ、バサッ！

と、その時……一羽のフクロウが飛んできて、俺の肩に止まった。

「おかえりなさいませ、ルイズ様」

と、流暢に喋り、優雅にお辞儀をした。

人語を喋るフクロウ……これも、誰その使い魔だろうか？

「ただいま、トゥルーカス。母様と父様は？」

「お二方とも、ルイズ様のご到着を今か今かとお待ちでございます」

「ちい姉様は？」

「既に、御屋敷にお戻りになっております」

「わかったわ。みんなに私が帰った事を伝えて来て」

「かしこまりました」

バサッ、バサッ……！

再びお辞儀をすると、フクロウは屋敷の方へ飛んで行った。

そして、巨大な門柱の両脇に控えた20メートルぐらいのゴーレム二体が、堀の跳ね橋を下ろし、俺達は再び馬で城壁の向こうへ進んだ。

で……城に到着した訳なんだが……

「……なんという豪華絢爛」

思わずそんな声が漏れてしまう。

外装も、内装も、調度品の数々も……とにかく豪華！筆舌に尽くしがたいぐらい、豪華なのだ！！美術館など目ではない。

あまり気にして見ていると、目が眩みそうだ……。

内心で豪華さに圧倒されながら、城の玄関を進んでいると、奥から威厳漂う男女の姿が……！

あれが、ヴァリエール公爵夫妻か……。

「父様、母様、ただいま戻りました」

「おお、ルイズ！よくぞ帰ってきた！」

さっきまでの威厳は何処へやら……、ヴァリエール公爵は破顔し、両腕を広げてルイズを迎えた。

ルイズはその公爵に近寄ると、その頬にキスをする。

と、そこで夫人の方が進み出た。

「ルイズ、手紙は読みましたよ」

すると、公爵も顔を引き締める。そして、夫妻揃って、俺を見てきた。

「……その者が、カトレアを治療できるという者ですか？」

「はい、母様」

夫人の言葉に、ルイズが頷く。

それにしても……うゝむ、何という威圧感……後退りあとずさりたくなる。
流石は『烈風』のカリン……。

だが、ここはグツと堪え、出来る限りの礼を取ろう。帽子を取り、跪く。

「お初にお目にかかります、ラ・ヴァリエール公爵閣下、奥方様。吾輩は、ジークフリートと申す者……トリステイン魔法学院の伝統たる『春の使い魔召喚』にて、マスター・ルイズに召喚され、使い魔となった者にございます」

「うむ……、ルイズからの手紙で知っておる。まさか、とは思っていたが……本当に人間とはな」

「は……」

公爵の射抜くような視線が突き刺さる。一瞬見えた目が『娘に手を出してねえだろうな?』という念を送っていた気がする……。

「……ルイズの手紙にあったが、貴様、本当に我が娘カトレアの病を治せるのだろうか?」

「治せる、とは思いますが……御息女のご容体を、直接診てみませぬことには確かな事は……」

「ふん……まあ、それはそうか。よし、ついて来い」

「はっ」

ラ・ヴァリエール公爵と公爵夫人が背を向けて歩き出し、俺も立ち上がってその後を追った。

しかし……今更ながら、不安になってきたな。これでもし『治せない』なんて事になれば、本当に殺されてしまう気がする。

殺されないまでも、その後の扱いはかなり酷くなりそう……そうになったら、もう地球に逃げよう。

「……ここだ」

色々ネガタイプに考えていた時、公爵がとある部屋の前で立ち止まった。

コン、コン

「はい」

中から女性の声……、この声がカトレアか？

「カトレア、私だ。入るぞ？」

ガチャツ……

公爵が部屋に踏み込み、公爵夫人。

それに続いてルイズが入り、俺が最後に部屋に入った。

「ちい姉様！」

ルイズが声を上げて、満面の笑みを浮かべて駆けていく。

「ルイズ！ああ、私の小さいルイズ！お帰りなさい！」

ベッドに腰掛けた、ルイズと同じ桃色の髪をした……慈愛に溢れた女神の様な女性がいた……。

「お久しぶりですわ！ちい姉様！」

ルイズ、本当に嬉しそうだ……。よっぽど、カトレアが好きら

しい。

それにしても、あれがカトレア……拙い、惚れてしまいそうだな。才人じゃないが、俺の好みにドンピシャだ。

だが……自制しなければいかん。どうせ、彼女と俺がお近づきになれるチャンスなど来やしない……。

気を紛らわそうと辺りに目をやる。すると……いるわいるわ、動物の群れ　虎に、熊に、犬に、猫に……うおっ！？大蛇までっ！？

な、何なんだ……、この部屋は……？下手をすれば、この場で食物連鎖が起きてしまいそうなラインナップなのに、喧嘩一つせず、動物達が同居出来ている。

これも、カトレアの慈愛の成せる業か……。

「まあ、まあ、まあ、まあまあ」

ぬ？

声に気付き、再び視線を戻すと、カトレアが俺を楽しげな笑みを浮かべて見ていた。

カトレアは、そのままベッドから立ち上がり、どんどん近付いて来る。あ、この流れは……もしや。

ならば、先制　俺は帽子を取り、跪く。

「お初にお目にかかります、ミス・カトレア。吾輩は、ジークフ

リートと申す者……トリステイン魔法学院の伝統たる『春の使い魔召喚』にて、マスター・ルイズに召喚され、使い魔となった者にございます」

と、礼を尽くして挨拶したのだが……

スト、ペタペタペタ……

「あ、あの……ミス？」

カトレアは動じることなく俺の前に膝をつき、満面の笑みを浮かべたまま俺の顔をさわり始めた。

「あなた、ルイズの恋人ね？」

「……」

ああ、何故にそんなにマイペースなのか、カトレアさん……。

「ただの使い魔よ！恋人なんかじゃないわ！」

ルイズが顔を真っ赤にして叫ぶ。

まあ、俺もその気はあんまり……、ツルペタやツンデレはストライクゾーンちよい外れた。ルイズには悪いがな。

「あらそう」

が、カトレアは楽しげな笑みを崩さずにそう言った。

本当に、分かっているのだろうか？

「ごめんなさいね。私、すぐに間違えるのよ。気にしないで」

「はあ……」

このままじゃ、埒が明かない。さっさと本題に入ろう。

「ミス・カトレア。吾輩は、貴女の病を治療しようと、今日ここに参ったのです」

「あら、そうなの？」

反応軽いな……。自分の現状を受け入れているのか、気にしていないのか……。それとも、半ば諦めているのか？

「はい。その為に、一度貴女のご容体を診させていただきたいのですが……」

「ええ、どうぞ」

本当に軽いな……。

「んんっ！では……どこかに腰掛け、身体を楽にして頂けますか？」

「ええ」

カトレアは立ち上がると、さっきまで座っていたベッドに歩いて行って、腰掛けた。

俺も立ち上がり、腰掛けた彼女に近づく。

と、その時……公爵が俺に近づいて来た。

「断っておくが……」

「何か？」

「……娘に不埒な真似をした時は、命はないぞ？」

「始祖ブリミルに誓って、そのような事は致しませぬ」

内心で呆れつつ、即答する。このオッサン……親馬鹿にも程つてもんがあるだろう……。

「あなた、少し黙っていらして」

「う、うむ……」

夫人が凜とした声で言うと、公爵は渋々引き下がった。やれやれ……面倒臭いオッサンだ。

俺は再び、カトレアに近づく。

「では、ミス・カトレア。お手を拝借してもよろしいですか？」

「はい、どうぞ」

カトレアは右手を差し出す。

俺はその手をそつと取り、脈をはかる様を持つて意識を集中する。

「「「……………」」」

部屋の中が、沈黙で満たされる。おかげで、意識の集中がしやすくて助かる。

カトレアの『血の流れ』みたいなものに集中していると、その容体が読み取れる……。

と、同時に、頭の中に秘薬のレシピと調合方法が浮かんできた。

「ふむ……何とかなりそうだ」

「ホントっ!？」

真っ先にルイズが喰いつく。

「治せるのか!？」

続いて、公爵が声を上げた。

俺は振り返って頷く。

「はい。紙とペンを貸していただきたい」

「これ!」

ルイズが、部屋の机の上に置いてあった紙とペンを持って来た。

そいつを受け取り、頭に浮かんでいる秘薬の材料と、調合に必要な機材を書き出していく。

サラサラサラ……

……これでよし。

「公爵閣下、ここに書き出した品を、書き出した量で揃えることは可能でしょうか？」

「見せてみる」

俺は材料と機材のリストを、公爵に渡す。

「……ここに書いてある物を揃えれば、カトレアの病が治るのだな？」

「お約束致します」

「よし！ジェローム！」

「はっ！」

公爵が呼ぶと、先程の執事が飛んできた。

「ここに書かれた物を、大至急集めよ！金は幾らかかろうと構わん！」

「畏まりました！」

そして、執事はリストを受け取ると、足早に部屋を出て行った。

って……今から集めるのか？もう、結構遅い時間なんだが……。

「材料が揃うまで、しばらく掛かるだろう。部屋を用意させる。それまでは、我が屋敷に泊まるが良い」

「御厚意、痛み入ります」

「……その代わり」

「心得ております。必ずや、御息女の病を治して御覧に入れましよう」

「……うむ。この者を客間に案内しろ」

「かしこまりました」

俺の即答に、公爵は無愛想に答え、傍に控えていたメイドに指示をすると、部屋を出て行った。

「頼みましたよ、ジークフリート殿」

「必ずや、奥方様」

夫人も公爵に続いて部屋を出る。

「では、ご案内します。こちらへどうぞ」

「かたじけない」

そして、客間の一つに案内され、備え付けのベッドに横になり、俺は強行軍の疲れを癒した。

で、少し休んでいた時……

コン、コン……

ドアをノックする音が聞こえてきた。そろそろ、人が寝付くかどうかという時間なのに、だ。

「……どなたかな？」

徐に声をかけてみた。すると……

「私、カトレアよ」

カトレア？なんだ、こんな夜更けに……。

「暫しお待ちを……」

ベッドから起き上がり、ドアを開ける。

向こうには、微笑みを湛えたカトレアが立っていた。

「如何された？ミス・カトレア。このような時間に……」

「お邪魔してもよろしいですか？」

「お邪魔も何も……、どうぞ」

「ごめんなさいね」

カトレアはそう言うと、ペロツと舌を出した。落ち着いた雰囲気
の割に、随分と子供っぽい仕草だ。

そして、スタスタと室内に入り、ベッドに腰を下ろす。

「それで、如何されたのです？先程も申しましたが、今はもう夜更
け。夜更かしは、健康にも美容にも良くありませんぞ」

「少し、あなたとお話がしたかったの。ご迷惑だったかしら？」

「いえ、吾輩は構いませんが……」

「そう、よかった！ご迷惑だったら、どうしようかと思ったわ！」

コロコロと楽しげに笑うカトレア。あれ？カトレアって、こんな
に活発に話す女性ひとだったっけ？

「ねえ、ジークフリートさん？」

「ああ、呼び難くければ、ジークと呼んで下さって構いませぬ」

「そう？じゃあ、ジークさん。聞いても良いかしら？」

「は、吾輩に答えられる事でしたらば」

「じゃあ……あなた何者？ハルケギニアの人間じゃないわね。っていうか、なんだか根っこから違う人間のような気がするの。違って？」

「……」

実際、目の当たりになると凄いな。このカトレアの鋭さ……人の本質が見えているというか。

やっぱり、才人でなくても分かっちゃまうのだな……。

「うふふ。どうして分かるんだって顔ね。私ね、妙に鋭いみたいなの」

「なるほど……。しかし、吾輩は間違いなく人間であります。マスタ・ルイズの使い魔であろうと……、魔法が使え、秘薬の調査が出来ようと……、間違いなく、吾輩は人間なのです。根っこから違う人間、と仰られたが……根っこ　人間の本質に、大差はありませぬよ」

言葉を少し飾ったが、これは紛れもなく俺の本心だ。

あの変な声に、チート能力を与えられはしたが……人間以外の何かになったつもりはないし、なりたくもない。

「……そうね、あなたの言う通りだね。ごめんなさい、変な事言ったりして……」

「いえ、どうかお気になさらず」

そう言つと、カトレアは顔を上げて、ジッとこっちを見つめてきた。

「……」（じい……）

「な、何か……？」

そんな真つ直ぐで透き通つた目で見られると、後退あとずさりしたくなるのだが……。

「あなたって、不思議な人ね」

「は？」

藪から棒に何を……？

「ねえ、あなたの事を教えて下さらない？」

「吾輩なにゆえの？何故です？」

「なぜかしら？よくわからないのだけど……なんだか、とても知りたくなつたの。ねえ、ダメかしら？」

そんな首をちょこんと傾げて、やや上目遣いに見つめないでくれ。惚れてまうやろ！

「……ま、まあ、つまらぬ話になると思いますが、それでよろしければ……」

「ええ！聞かせて下さいな！」

「しよ、承知しました」

瞳を輝かせて笑うカトレアに、またやや圧倒されたが、取りあえず備え付けの椅子に腰かけた。

さて……何からどうやって話すか。

考えつつ、俺は話し始めた。

取りあえずは自分の事から……勿論、全部をバカ正直に話す訳ではなく、地球に関わる単語や名称は伏せ、ハルケギニアでも通用する内容を厳選してだ。

子供の頃、悪戯をして両親に叱られたエピソードとか……。友達と鬼ごっこやらかくれんぼやらをして遊んでいたとか……。

中学校時代に家庭教師がいたことを、ハルケギニアこちらのメイジ風にアレンジして話したり……。

独り立ち つまり大学生になって一人暮らしを始めた辺りのエピソードを、ハルケギニアこちらで旅をしていた風にアレンジして話したり……。

そうして、大体二時間ぐらい喋ったか……。

カトレアは終始笑顔で、俺の話を楽しそうに聞いてくれた。

内心、話に脚色や誤魔化しがあることを見抜かれているんじゃない

いかと冷や冷やしたが……取りあえず、カトレアからツツコミはなかったので、まあよしとする。

「随分長話になってしまいましたな。ミス・カトレア、そろそろ就寝なさいませぬと、本当にお身体に障ります。どうか、お部屋にお戻り下され」

「あら、そう？折角、楽しいお話だったのに……」

そんな残念そうな顔をされても……。

体感だが、今はもう深夜1時、2時ぐらいのはず……。これ以上は本当に身体に良くない。っていうか、俺も少し眠いのだ。

「喜んで頂けたなら幸いです、ミス・カトレア。今日のところは……」

「……分かったわ。考えてみれば、ジークさんもお疲れよね。それなのに、こんな遅くまで……ごめんなさい」

「い、いえいえ！吾輩のことなら、お気になさらず！」

そんな本当に申し訳なさそうに頭を下げられても困る！っていうか、また考えを読まれた？

「と、とにかく！お部屋までお送りします故……」

「いいえ、大丈夫よ。ここは私の実家ですもの」

そう言ってカトレアは、またニツコリと微笑んだ。

ああ、その慈愛に満ちた微笑みは勘弁してくれ……！惚れてまうやろーッ！！氣イつけないはれやッ！！

そんな俺の密かな苦悩を知ってか知らずか、カトレアはゆっくりとベッドから立ち上がり、ドアに向かって行く。

「ジークさん」

ドアに手を掛けたかと思ったら、カトレアは振り返った。

「は、なんでしょう?」

「お話、とっても楽しかったわ。また、聞かせて下さいね」

ズキューンッ！

「はっつ！?」

カトレアは、俺のハートを撃ち抜く微笑みを一つ浮かべ、ドアを開けて出て行った……。

ま、マズイ……今のは、きた……！本格的に……マジで……！！

「~~~~っ！！『サイレント消音』！」

フッ……

せーのっ！

「……………!!」(惚れてまうやろおー……ッ!!)」

魔法って……、便利だ……。

そんな事があつた翌朝から、俺は苦しい時間を過ごすこととなつた……。

俺は一応、客人扱いということで、ヴァリエール家の食卓に招かれたのだが……。

カトレアが……目が合う度にニツコリと、あの俺のハートを撃ち抜いた微笑みを向けてくるようになったのだ。その度にルイズには睨まれることに……。

午後には、彼女にお茶に誘われて、行ってみたら池の傍に置かれたテーブルで2人きり(動物はいたが)で、また俺の脚色した昔の話とか他愛のない話で談笑して……良い香りの紅茶をご馳走になつて……。

まるで恋人同士の様な、夢の様な時間……いや、いつそ夢だったら良かった。夢なら醒めれば、まだ「なんだ、夢か」と割り切れる……。

だが!これは現実なのだ!

勘弁してくれ……。惚れてまうやろお……って、もう手遅れだ。

惚れてしまった……。初恋だ。はあ……。……。

そして、ヴァリエール家で待つこと二日……遂に、秘薬の材料と調査機材が揃った。

「……では、これより秘薬の調査に取り掛かります」

ある一室にどっさり集められた材料と機材を前に、集まったヴァリエール公爵、『烈風』のカリン殿、ルイズ、カトレア、ジェローム以下執事&メイド軍団に向かって、俺はそう告げた。

「秘薬が出来上がるまでは、どのくらいかかるのだ？」

一番前の公爵が尋ねてきた。

時間か……そうだな……。材料を刻んで……、すり潰して……、煮出して……、濾して……、混ぜて……、蒸留して……。

「……およそ、6時間程かと」

「そうか……。では、始めるがいい」

「は。では……」

シャッ！

ダガーを引き抜き、呪文を唱える。

「ユビキタス・デル・ウインデ」

ブウン……

僅かに空気が震える音がして、俺の分身が9人現れた。本体の俺を含めて、10人の俺になった訳だ。

「……貴様、『コピーキタス遍在』を……！」

「さすがに吾輩1人きりでは、丸一日かけても終わりませぬ故。では、始めます」

振り返り、分身達にアイコンタクトを取る。

コク（×10）

分身達と頷き合い、俺達は作業にかかった。

もちろん、ヴァリエール家の使用人に手伝ってもらうという手もあるが、調合方法を知っているのは俺だけだし、調合作業には精密さを要求される部分が多々ある。それに対して一々俺が指示を出していたら時間の無駄だし、下手をすると調合が失敗する恐れもある。

だから、こうして『コピーキタス遍在』で俺自身を増やして作業する方が効率的なのだ。

あと、使ってみて分かったんだが、『遍在』は『NARUTO』に出てくる『影分身の術』とほぼ同じだった。分身の全てに実体と俺の人格があり、俺本体とは意識下で繋がっている。だから、分身の記憶も俺自身の記憶として蓄積される訳だ。

但し、『影分身の術』の様に肉体的疲労や経験値まで蓄積される

ことはない。だから、ナルトみたいな倍速修業は出来ないのだ。まあ、今のところ必要ないから、問題はない。

それはさておき 調合開始だ。

ザクツ、ザクツ、ザクツ……

ゴリゴリゴリゴリ……

ズリズリズリズリ……

先ずは、集めてもらった材料 薬草類、幻獣の骨や爪や内蔵の干物 e t c . e t c . …… を刻み、潰し、すり下ろし、それぞれ必要な形状にしていく。

カチャカチャカチャ……

コト、コト、コト……

同時にピーカーや試験管やフラスコ、アルコールランプ（のような物）を配置。

パツ、パツ……

下ごしらえが済んだ材料を合わせる物は合わせ、それだけの物はそれだけに分け……

ボツ、チリチリチリチリ……

コトコトコトコト……

直接火で炙る物は火で炙り、煮出して濾す物は鍋に入れて水と共に火にかけ……

チャプ……チャプ……

火にかけず、ただ水に漬けて成分を抽出する物はフラスコに入れ、ゆつくりと揺らしながら抽出……

部屋の時計で確認すると……ここまでの作業が、およそ2時間……。作業を継続する。

最初の処理で、粉末状、液状に姿を変えた材料を一つにしていく。但し、ここが一番神経を使う。

決まった順序に沿って、決まった分量ずつ、決まった速度で、決まった温度を保ちながら一つにしていかなければ、調合は失敗……カトレアの病は治せない。

「……………」

ツウウ……

サラサラサラ……

試験管を使い、薬匙さじを使い、コッソリ地球の百貨店で買って来た天秤ばかりを使い、慎重に……順番に材料を大きめの三角フラスコに入れ、合わせていく。

その間、手の空いた分身達は、魔法で室内空気の温度・湿度……そして薬品の温度を管理・調整する。

ついでに、俺（本体）の汗も拭きとる。これは地味に重要だ。万

が一、調合途中の薬に汗が一滴でも入ってしまったら、そこで失敗になるからだ。

「……っ」

考えると余計な冷や汗が出る……。作業に集中しよう……。

余計なことを考えない様に、集中して薬品を混ぜ合わせていく……。

「……よおし……、ふう……」

何とか上手くいった。一息吐く……。

だが、薬品合わせるだけで1時間近くかかった……。しかも、かなり神経を使った所為で、疲労感が半端じゃない……。

人生21年……ここまで神経を集中したことが、かつてあっただろうか？ いや、ない……！

反語はいいとして……まだ作業は残っている。一つに合わさった薬液を、今度はキツチリ2時間かけて蒸留する。

カチャ……

合わさった薬液が入ったフラスコに細いガラス管を通したコルクの栓で密閉し、アルコールランプ用の三脚台に置く。80センチ程の長さのガラス管の先は、別の丸底フラスコの中に入っている。丸

底フラスコの方は、底が僅かに水の入った桶に浸かっていて、これで蒸気になった薬液が凝結して、蒸留される訳だ。

三角フラスコの下に、火を付けたアルコールランプ（のような物）をセット　後は、蒸留されるのを待つ。

ここで少しだけ落ち着けるな……ふう。

で、ジッと待つこと2時間……。

「……よし」

蒸留完了……。

これで秘薬は完成……ではない。

最後の仕上げが残っている。

コトッ

最後の材料　『水の精霊の涙』を、蒸留精製した薬液に合わせれば、秘薬は完成だ。

「……」

ポト……ポオオ

『水の精霊の涙』が加わった事で、フラスコ内の薬液が薄く光る。

これで、秘薬自体は完成だ。

あとは、出来上がった秘薬を『鍊金』で作っておいた6本の小壺に、一定量を量りながら移せばいい。

コポポ……

……よし、完成だ。

俺は出来上がった秘薬を持って、ヴァリエール公爵らの元へ向かった。

「……これが、カトレアの病を治す秘薬か」

テーブルの上に置いた6本のガラス小壺を睨み下ろして、公爵が言った。

大広間的な部屋で、そこに置かれた豪華なソファの上座から順に、公爵、カリン夫人、カトレア、ルイズと座り、俺は公爵の正面の位置に座っている。

「はい。一日2本 起床時と就寝前に1壺ずつ、お飲み頂きます。用法と容量を、お守りいただきますよう」

つまりは、秘薬は三日分ということだ。

「……本当に、これで娘の病が治るのだろうな？」

「は」

一応、即答して頭を下げておくが……正直、確信はない。何しろこの秘薬、頭に浮かんだレシピに従って調合したに過ぎない。

よって、使ってみるまで効果の程は俺にも分からないのだ。

なので……

「無論、万一を考え、秘薬を服用なさる三日間、吾輩が責任を持つてミス・カトレアの容体の経過を見守りまする」

「まあ！」

カトレアさんや……そんな嬉しそうに顔を輝かせて、嬉しそうな声を上げないでくれ。公爵とルイズが睨んでいるし……、貴女は俺には高根の花なのですから……くぅ（泣）。

「……ふん、まあ良かろう」

面白くなさそうに鼻を鳴らす公爵。「治らなかつたらタダではおかんぞ」と言わないのは多分、半ばカトレアの病気に關しては諦めているからなのだ、と思う。

治らなくても、それはいつもの事……。もし治ったならば万々歳。

でも……多分、万々歳の方にしてあげられるはずだ。頼むぞ、チート能力……。

そして、俺のヴァリエール家滞在は続いた。

一日、二日と経つ内に、カトレアはみるみる顔色が良くなり……
ついでに、積極的にもなっていた。庭への散歩に誘われて、腕ま
で組まれたりして……。一応言っておくが、作った秘薬に『惚れ薬』
的な効果は一切ない。

自惚れる訳じゃないが、カトレアは何故か俺に好意的だ。

俺の勘違いじゃなければ両想いという訳だが……だから、余計に
苦しい……。

ハルケギニア
こつちで、地位も何もない俺では、カトレアと一緒に……なれ
ない。

仮に原作の才人のように、手柄を挙げて貴族になっても『シュヴ
アリエ』か、良くて『男爵』が関の山……。次女とはいえ公爵家の
息女であるカトレアとは、釣り合わないし……何より、公爵を筆頭
にヴァリエール家全員が許さないだろう。

はあ……、早く学院に帰りたい。

で、ようやく迎えた三日目……

公爵は、以前カトレアを診たという医者『水』のメイジを呼

び付けた。カトレアの病気が、本当に治ったのか調べさせるのだそう
うだ。

「……………」

見た目、公爵と同年代の人の良さそうな医者のおっさんは、俺と
ルイズ、公爵とカリン夫人、ジェロームさん以下執事&メイド軍団
が見守る中、カトレアの容体を念入りに調べていく。

「……………どうなのだ？」

沈黙を破ったのは、公爵の問い掛けだった。

それを受け、医者のおっさんが徐に立ち上がり、振り返る。

「……………し、信じられませぬ。以前拝見させていただいた時は、間違
いなく、カトレア様は……………病を患っておいでだったはずなのですが
……………。今は、至って健康でございます……………！」

「……………！！……………」

メイジの言葉に、公爵、カリン夫人、ルイズが驚き、次いで喜色
満面の笑みを浮かべた。半ば諦めていたであろう事が、現実になっ
た訳だからな。診られていた当人のカトレアも、嬉しそうに瞳を輝
かせている。

これで俺も一安心だ……………。どうやら、俺のチート能力は確かなも
のだったようだ。

「そ、そうか……………うむーわざわざ、ご苦労であった！帰りは竜籠を

用意しよう!」

「は、はぁ……」

メイジは、何が何やら分からないといった顔で、公爵が用意した竜籠に乗って帰って行った。

そして、その後……

「……よく、娘の病を治してくれた。父親として、心より感謝する」
「か、閣下……!」

大広間にて、俺は公爵に頭を下げられた。

しかし、まさか公爵ともあるう人が……ハルケギニアじゃ平民に過ぎない俺に、頭を下げるだなんて……!

ルイズの父親だから、物凄くプライドの高いオッサンかと思っていたから、予想外の出来事に、正直驚いて慌てた……。

「あ、頭をお上げ下さいまし!吾輩は、ただ出来ることをしただけで……!」

「そのおかげで、我が娘は救われたのだ。礼くらい言わせろ」

「は、はぁ……」

言わせろ、って……変なところで微妙に貴族的だな。

「私もカトレアの母として、心から感謝します」
わたくし

「お、奥方様……！」

カリン婦人までか……。思ったよりも素直に相手に感謝できる人達なのだな。それとも、やっぱりメイジかそうでないかの違いが大きいんだろうか？

それにしても……。自分がした事でここまで感謝されたのは、生まれて初めてだ。

なんだか……。俺も嬉しくなってくるな。

「何か褒美を取らせよう。望みはあるか？」

頭を上げた公爵がそう言ってきた。

褒美、ときたか……。

望み……。あるにはある。が、まさかここで「カトレアさんと結婚させて下さい！」なんて言えるはずない……。笑みが消し飛んで、「ふざけるな死ね」と魔法が飛んでくるのは目に見えている。

だから……

「折角のお言葉ですが……。吾輩、これと言って望みはありませぬ」
こう言うしかない。というか、他には本当に望みはないからな。

すると、公爵が驚いた顔になった。

「何も望みがないと言うのか？遠慮することはないぞ。なんなら、我が家に高禄で召し抱えてもよい」

「いえ、折角ですが……」

普通ならあり得ない程の好条件なのだろうが……、半端に初恋^{カトレ}の人に近い場所に居ることになるのは辛い。それこそ生殺^アした。だから、御免被る。

「……我が家に仕えるのが不満だと言うのか？」

「い、いえ！決してそのような事は……！ただ、吾輩は……！」

そつだ……！ルイズをダシにしよう！

「公爵閣下。一つ、望みが見つかりましてございます」

「ほう、言ってみるがいい」

「は。閣下もご存知の通り、吾輩は現在、ご息女ルイズ嬢の使い魔の身でございます。使い魔の手柄は主人の手柄。よって、我が主マスター・ルイズの望みを叶えてさし上げて頂けませぬか？」

「えっ？私！？」

いきなり話を振られたルイズが声を上げた。

「そもそも此度のミス・カトレアの治療は、マスター・ルイズの命によるものでございます。褒美を受けるはマスター・ルイズであるべきかと」

「いや、それはあんたが『どんな難病でも治せる』って言ったから……！」

「ふむ、お前の言うことにも一理あるな……」

「父様！でも、実際にちい姉様を治したのはジークで！」

「ルイズ」

慌てるルイズをたしなめる様に、カリン夫人は穏やかに言う。

「お父様もそのくらいはわかっていますよ、でも、その当人が『あなたの望みを叶えること』を褒美として望んでいるのです。それに、その者の言う通り、使い魔の手柄は主人の手柄とされるものです」

「で、でも……私だって、突然望みなんて言われても……。ちい姉様がお元気になっただけで、今は胸が一杯だし……」

「まあ、ありがとう。私の小さいルイズ」

困った様にモジモジするルイズを、隣に座ったカトレアが微笑みながら抱きしめた。

しかし、上手くスルーできたのは良かったが、ルイズにも今のところ望むご褒美は無し……。このままだと、また俺に戻ってきそうな気がする。

だったら……。

「恐れながら閣下、提案がございます」

「言ってみるが良い」

「は。マスター・ルイズにも、今のところ望みがないという事であれば、いずれ望みが出来た時にそれを叶えるというお約束を、この場にて結ぶ、というのは如何でしょう？」

「ふむ、なるほど。確かに、焦ることはないか……。ルイズや、お前はそれで良いか？」

「は、はい！父様！」

「うむ、ならば決まりだ」

ルイズの返事に、公爵が頷き、話は決まった。

その日の夕食は、カトレアの快気祝いという事でご馳走が振る舞われた。俺もご相伴に預かり、人生初のビンテージ物の高級ワインを味わわせてもらった。ほんのりと渋く、ほろ苦く、正に『大人の味』だ。

で、その日はぐっすりと寝て、翌朝……、俺達は学院に戻ることにした。公爵が竜籠を用意してくれたのだ。

だが……。

「……あ、あの、ミス・カトレア？」

「何かしら？ ジークさん」

竜籠の中にて、左隣りで俺の腕に寄り添い、ニコニコと笑顔を浮かべているカトレアに意を決して声をかけた。

何故、カトレアがここにいるかというと……出発前に、彼女が「二人を魔法学院までお送りするわ」と言って乗り込んで来たからだ。勿論、公爵は最初それを許そうとはしなかったが、カトレアが頑として譲らなかった。

その時のカトレアには、公爵もカリン夫人もルイズも、ついでに俺も驚いた。いつも通りの微笑みの中にも、相手に有無を言わさない静かな迫力があったからだ。やはり、如何に穏和な性格をしているても『烈風』のカリンの娘、ということなのだろうか？

それはさておき……

「ち、ちと、くっつき過ぎではないかと……」

に、二の腕辺りに、けしからん弾力が……。

「そ、そうよ！ ちい姉様！ くっつき過ぎだわ！」

反対隣に座っていたルイズが、俺の言葉に続いた。

が、カトレアは微笑みを崩さず、俺の腕も離さない。

「あら、ご迷惑だったかしら？」

「い、いや……迷惑という訳ではなく……そう！無闇に異性と腕を組むというのは、些か憤みに欠けると……！」

「そんなことないわ。好きな殿方の傍にいたい……。触れあっていたいと思うのは、自然なことだもの」

「「へ……？」」

ルイズと俺の素っ頓狂な声が重なる。

今なんと……？なんと仰いましたか、カトレアさんっ！？

「ち、ちい姉様！？何言ってるの！？ジークはメイジだけど平民なのよっ！？」

「でも、私の病気を治してくれた恩人よ？」

「そ、それは、でも、だって……ジークは私の使い魔で……」

「まあ、ルイズったら。ヤキモチ焼いてるのね？」

「っ！？ちちち違うわっ！？やややヤキモチなんか焼いてないもんっ！！ジークはただの使い魔で好きなんかじゃないんだからっ！！」

真っ赤になって叫びまくるルイズと、そんなルイズを見てニコニコ微笑みまくるカトレア。

こんな二人に挟まれて、俺はどうしたらいいのだ……？

「じゃあ、二人でジークさんのお嫁さんになればいいわ」

「「な……！？」」

カトレアのぶっ飛んだ提案に、またも俺とルイズの素っ頓狂な声が重なった。

「……！ジークっ！あんたまさか、あの秘薬に惚れ薬でも混ぜてたんじゃないでしょうねッ！？」

「吾輩がそんなことをする訳があるのかっ！いやない！！反語ッ！」

点になっていた目を吊り上げて叫ぶルイズ、叫び返す俺、俺の腕に寄り添いながらニコニコ笑顔のカトレア。

結局、そんな状態が学院に到着するまで続き、折角カトレアの病気を治せたというのに、締まらない終わり方になってしまった……。

Episode・3 『憎悪氷解 しかし、またも話が明後日の方向に』 (前書

遅くなりました。ご意見、ご感想をお聞かせ下さい。

今回もキャラ崩壊にご注意を。

8/22 ご意見を頂き、主人公の言葉遣いを少し修正しました。
『ちよつと』『少し』等々

Episode・3 『憎悪氷解 しかし、またも話が明後日の方向に』

カトレアの病気を治療し、学院に戻った翌日……。

「……やっと着いた」

いきなり何だ？と思うだろうが……俺は今、ガリアの王城『ヴェルサルテイル宮殿』の前にいるのだ。

何の為かって？それは勿論、ガリア王ジョゼフを味方に付ける為だ。

少し長くなるが、順を追って説明しよう。話は、ルイズの実家から魔法学院に戻ったところまで遡る。

竜籠でラ・ヴァリエール領へ帰ったカトレアを見送った後、オスマン学院長に帰りの報告を済ませ、ルイズと俺は一先ず寮の部屋に落ち着いた。

夕食時に、厨房のマルトーやシエスタ達にも帰りの挨拶をして、賄いを分けてもらい、俺はその後、二つの月を眺めながら考えた……。

『この世界で、俺に出来ることはなんだろう？』

『不治の病』扱いだったカトレアさえも治療できた、俺のチート

能力…… まだまだ未知数だが、『虚無』まで使えるというのなら、かなりの事が出来そうな気がする……。ハルケギニアが抱えている様々な問題も、解決できるかもしれない。

ハルケギニアが根本的に抱えている問題として……

一つ目 地下に眠る風石の大鉱脈。

その所為で、近い将来『大隆起』なる大災害が起きて、地上の人間達…… いや、人間に限らず、鳥やらドラゴンやら以外の地上暮らしの生き物が、住処を失うことになる……。

そして、それがロマリアの『聖戦』に繋がる。エルフ達が住む東の砂漠『サハラ』に『虚無』を引っさげて戦いを挑もう、という馬鹿げた戦争だ。

これは一番根っこの問題だな。

二つ目 ガリア王ジョゼフの暴走。

これは目先の問題であり、一つ目の問題にも関わることだが、ジョゼフは現在、クロムウエルというただの司教とアルビオン貴族派を影から操り、アルビオンの内乱を煽っている。ただの『退屈しのぎ』的な目的で、だ……。

ここだけ見ると、冷酷非情な男にも見えてしまうが……その裏には、悲しい過去があったりする。

それに、ジョゼフの頭のキレは恐らくハルケギニア随一 狂気に走りさえしなければ、多分稀代の名君になれたと、俺は思う。

それだけに敵に回せば悪魔の如く恐ろしい。だが逆に、味方につければこの上なく頼もしいということでもある。幸いにして、俺には高確率でジョゼフを味方につけられる『魔法』と『知識』があるからな。

更に、ジョゼフを味方につける利点はもう一つある。

それは、彼がエルフのビダーシャルとコネクションを持っている点だ。これがかなり重要。

ビダーシャルの先住魔法　ここは敬意として『精霊魔法』と言おうか。とにかくそれは、一つ目の問題　風石の大鉱脈を処理する際に、各地に存在するという風石の大鉱脈の探索や掘り出す際の補助など、大いに役立つ。

多分、俺にも出来るんだろうが、幾ら俺がチート能力者でも、一人で何もかも片付けるのは大変過ぎる。

それに出来れば、ビダーシャルを切っ掛けに、エルフと人間の交流の糸口にしたいという願望もある。ティファニアの為にもなるだろう。

利点云々もそうだが……、何よりもジョゼフをこのまま暴走させ続けるのは、悲しい……。

全ての始まりは、ガリア王家に生まれた兄弟の悲しいすれ違い……。王になった日から、弟シャルルを殺してしまった日から、ジョゼフも今日まで苦しんで来たんだと思う。

もう良いじゃないかと……。そろそろ、苦しみから解放されても
いいじゃないかと……。俺は思う。

と、言う訳で 俺はルイズが起き出す前…… 具体的には日の出
前に『^{ユビキタス}遍在』をガリアに送り込んだ。

俺の完璧な『^{チート}^{ユビキタス}遍在』は一度発現させれば、どれだけ距離があろう
と、俺（本体）が杖を手放そうと、意識して魔法を解除するか、俺
（本体）が何らかの理由で意識を失わない限り存在し続ける。

そうして俺（遍在）は、虚無魔法の『^{テレポート}瞬間移動』を繰り返し、時
々道に迷い……。実に3時間近く掛かって、漸くたどり着いた。『^{レポート}瞬
間移動』はドラクエの『ルーラ』と同じで、行った事のない場所へ
は行けない。だから、視力が届く距離を連続ショートカットするし
かなかったのだ。

おかげで、随分時間が掛かってしまった……。と言っても、普通
に歩くよりは圧倒的に早く着けたと思うが……。

さて、長つたらしい説明が終わったところで……。いい加減、中に
忍び込むとしよう。

ここからは、虚無魔法の『加速』で行く。

ギユワ……！

『加速』は、使つと先ず辺りの動きが止まった様に動かなくなる。

少しネタが古いが、サイボーグ009の『加速装置』に近いな。

で、ここから俺は普通に走る訳だ。確か……このやたら広い宮殿の中に、青いレンガで造られた『グラン・トロワ』とかいう王族の居城があつて、ジョゼフはその一番奥にいるはずだ。

それにしても……中庭　庭園っていうんだろうか、滅茶苦茶広い。昔、フランス旅行に行った時に観光した『ヴェルサイユ宮殿』を思い出す……。

だが、問題の『グラン・トロワ』はすぐに分かった。何しろ一番デカイ建造物だし、その青い色も特徴的だったからだ。

で、主観時間で10分ほど走り、『グラン・トロワ』に到着
少し遠かったな……。

そこから難なく潜入に成功　しかし、さすが王の居城……、豪華過ぎるし広過ぎる。目につく調度品なんか、それ一つで何千万とか何億とかしそうな雰囲気醸し出している。余りの豪華さに、目が回りそうだ……。

と、目を回している場合じゃない。ジョゼフを探さねば……。

ジョゼフがいるのは一番奥……。仮にも王がいる部屋、その前には衛兵の一人や二人いるだろう。

と、言う訳で　『加速』を維持して走り回ること、主観時間で凡そ1時間（実時間では恐らく数秒）……。

俺は、ようやく衛兵二人が守る扉を見つけた。

「……『消音』」
サイレント

衛兵の死角に隠れ、まずは周辺の音をシャットアウト。衛兵が異変に気付く前に、次の魔法だ。

「……（眠りを導く風よ）」

音は響かないけど、精霊魔法の言霊を呟く。すると……

（バタツ）×2

衛兵はあっさり倒れた。勿論、無音で……。

何、心配はいらない。空気中の『風』の精霊に働きかけ、その力で眠ってもらっただけ。初歩の精霊魔法だ。

急ぎ、扉に近づき、ササツと倒れた衛兵を隠して中に入る。

部屋の中には……青い髪と髭を蓄えた、精悍な顔立ちの美丈夫がいた。ジョゼフだ。

あと、小姓と思しき、15、6歳ぐらいだろうか？そのぐらいの少年が二人……。そして、その三人の前にはハルケギニアを模ったかたど差し渡し10メートルはあろうかという箱庭が鎮座シオラマしている。

ただの模型でも充分凄いのに、あれが現実のハルケギニアとリン

クしているんだから、恐ろしい話だ……。ジョゼフは正に、神の視点でハルケギニアを眺めている訳だからな。

それはさておき、と……。

扉を閉めると同時に『消音』^{サイレント}を解除　次いで『加速』を使って、近くのカーテンの裏に隠れる。

しかし……隠れたは良いが、困った。ジョゼフ一人なら、そのまま話し掛けることも出来たんだが、あの小姓二人が邪魔だ。

余計な人目につくのは、出来る限り避けたいところだ……。と、思ってみていたのだが……

「……些か興が冷めてきたな。しばし休む。下がれ」

不意にジョゼフが手にしていた駒を置いて、小姓二人を部屋から出て行くように指示した。

どうしたんだ……？　と思つて、小姓が部屋を出て行くのを見送っていた俺だったが、次いで驚かされることになる。

「望み通り、人払いをしてやったぞ？　姿を見せたらどうだ？」

ギクッ！

ば、バカな……！　俺に気付いたというのか……！？

「なんだ、折角入って来たというのに、姿を現さぬのか？　余に何か用があつて、わざわざ忍んで来たのであろう？」

ジョゼフのこの口ぶり……、完璧に俺に気付いているな。

どうやって悟ったのか気になるところだが、こっちとしては望むところだ。

スッ……

俺は、意を決してカーテンの裏から出た。

そして、帽子を取り、恭しく膝について頭を下げる。

「……お初にお目にかかります、ガリア王国国王ジョゼフ一世陛下。我輩は、ジークフリートと申す者にございます」

緊張する……。こうして対峙して、初めてジョゼフの異様さが分かる。

さつき俺の侵入に気付いたこといい、侵入者と知りつつ人払いをしたことといい……、やはりジョゼフという男、ただ者じゃない。

ここにいるのは『遍在』の分身……。仮に殺られても、本体は痛くも痒くもない。だが……、そんなことでは全く安心できない。

そんな、圧倒される雰囲気がある……。

「ほう、侵入者にしては礼儀正しいな。それに、格好も派手だ。よくそれで、この『グラン・トロワ』に侵入できたものだ」

頭を下げていて見えないが、ジョゼフは俺を見て笑っているよう

だ。

「まあよい。面を上げよ。畏まった挨拶など要らぬから、さっさと用向きを言うがいい。余の命でも、殺りに来たか？」

「……真実を」

「うん？」

「……今は亡きオルレアン公、弟君シャルル殿下の真実をお伝えしたく、ここに参上つかまつりました」

俺は、徐に顔を上げてジョゼフを見上げる。

何かの本で、『頭を上げろ』と言われても目だけは伏せておけ、とか書かれていた様な気がするが、今は気にしている余裕がない。

「……………」

ジョゼフは……若干眉を潜め、険しい表情を浮かべていた。

「……シャルルの、真実だと？」

「御意」

ジョゼフの声にも、さっきまでの愉快そうな色が失せている。

「それを知れば、恐らく……陛下は、お望みの『心の痛み』を取り戻せましょう」

「っ！？……面白いことを言うな。貴様が、俺に心の痛みを呼び起こしてくれるというのか？」

「否。陛下の御心を救えるのは、シャルル殿下を措いて他にはおりませぬ。その為に……この場にて、一つ、魔法を使うご許可を頂きたく存じます」

「……やって見せろ」

「御意」

ジョゼフの許可を得て、俺は立ち上がり、ダガーを引き抜く。そして……

「『^{リコード}記憶』」

パアアアアアッ！！

虚無魔法『^{リコード}記憶』を発動　ジョゼフの指に嵌められた『土のルビー』が眩い光りを放つ。

そして……、光が止んだ時、俺とジョゼフはある部屋にいた。

<SIDE：ジョゼフ>

「ここは……父の執務室じゃないか」

俺の指に嵌まった『土のルビー』の光が止み、目を開けてみれば、

そこは『グラン・トロワ』の一室……今は亡き父の執務室だった。

この家具の並び……。これは生前、父が使っていた時のものだ。

「……なん、だ？一体、どうなっているのだ？」

何とも言えぬ、鼻をくすぐる懐かしさが、俺の心をかき乱すと、その時だった。

コツ、コツ、コツ……

誰かの足音が聞こえてきた。

俺は咄嗟に、カーテンの陰に隠れる。姿を見られてはいけない……

…、何故かは分らんが、そんな気がした。

そして、執務室の扉が開く。そこから、入って来たのは……

「っ！……シャルル」

思わず、呟いていた。入って来たのは、かつて俺が殺した、弟シャルルだった。

シャルル、一体、父の執務室に何の用があるというのだ？それに、あの顔……何と険しい顔をしているのだ。

あんなシャルルは初めて見た……。

『……………』

ガタッ……！

父の執務机に歩み寄ったシャルルは、その引き出しを乱暴に引き出し、中身を全て床へとぶちまける。

バラバラバラ……！！

父の宝石、勲章、書類など、引き出しの中身が床に散らばっていく……。

何を……、シャルルは一体、何をしているのだ？

『……っ……うう！』

「……！？」

俺は信じられないものを見ていた……。シャルルが、散らばった床の上に突っ伏し、低い嗚咽を漏らし始めたのだ。

どうしたのだ？一体、何を泣いているのだ？

飛び出して、シャルルに問い詰めたい欲求に駆られる……。だが

……

『……どうして？どうして僕じゃないんだ』

何？

『父さん。どうして僕を王様にしてくれなかったんだ。おかしいじゃないか。僕は兄さんより何倍も魔法が出来るんだぞ。家臣だって、

僕を支持する奴ばかりだ。それなのに……、どうして、どうしてなんだ！訳が分からないよ！』

そう叫び、シャルルは泣きながら一つの指輪を手取る。

あれは……『土のルビー』！？

慌てて自分の手を見るが、ちゃんと同じ『土のルビー』が指に嵌まっている。

何が何やらさっぱり分からん……。一体、どうなっているのだ？

『ジヨゼフ陛下』

その時、聞き覚えのある声に呼ばれた。

姿は見えないが……この声は、先程俺の前に現れた赤い服のメイジ　ジークフリートといったか。奴の声だ。

「そうか……。これは、この茶番は貴様の仕業か」

『然り。しかし、吾輩が都合よく作り出した幻ではありません。これは『記憶』^{リコード}……、対象物に込められた強い記憶……『念』ともいうべきものを鮮明に脳裏に映し出す魔法にございます』

「そんな魔法、聞いた事もない……」

『失われし五芒星^{ペンタゴン}の一角……『虚無』の魔法にございます』

『虚無』……だと？では、こいつは、俺と同じ……『虚無の担い

手』だというのか!?

『今、陛下がご覧になっておられる光景は、『土のルビー』が宿す記憶……シャルル殿下が、生前抱いていた強い想いの記録でございます』

「これが実際に起こった光景だと？バカな！」

『陛下なら……、現代の『虚無の担い手』たる貴方様ならば、ご覧の光景がただの幻か否か、すぐにお分かりになるでしょう』

「……………」

確かに……なるほど、事実か。

俺も一応は『虚無の担い手』らしいから……。説明しようのない感覚だが、少し意識を集中すれば、この目に移る光景が唯の幻ではないと言っ事が分かる。

だが……、これが実際に起こった事だと？では……

『うう……！ううう……っ！！』

では、あの……辺りをはばからずに、両の手で指輪を胸に押し付け、涙を流すシャルルは……本物だと？

『兄さんに勝つ為に、僕がどれだけ努力をしてきたと思ってるんだ。僕の方が優秀だと証明する為に、僕が見えない場所でどれだけ頑張ってきたと思ってるんだ。全て今日の為、今日という日の為じゃないか！』

シャルル……。

そうか、これは……父の死ぬ間際の出来事なのだな。

あの日……床に伏せていた父は、俺とシャルルを枕元に呼び、俺を次王にすると言い残した。その後、シャルルは屈託のない笑顔俺もよく知る笑顔で、こう言ったのだ。

『兄さんが王になってくれて、本当に良かった。僕は兄さんが大好きだからね。僕も一生懸命努力する。一緒にこの国を素晴らしい国にしよう』

あれは、シャルルの本音だと思っていた。だからこそ……俺は打ちのめされたのだ。

どうあがいても勝てぬその心の清らかさ故に、俺はシャルルを激しく憎み……とうとうこの手にかけた。

だが、それは間違いだった……。あれは本音でも何でもなかったのだ。

自分の嫉妬を見せまいとした、シャルルの必死の抵抗……。

それが今……、ようやく、分かった……。

ポタ……

『っ！？……に、兄さん』

シャルルが振り返り、驚愕に歪んだ顔で俺を見ていた。

「どうやら、俺自身も気付かぬ内に、カーテンの陰から出てしまっていた様だ……。」

『違う……、違うんだ。父君の荷物を整理していたら、慌ててしまつて……』

「いいんだ」

慌てた様子で言い訳をしようとするシャルルの肩を、そつと抱^{いだ}く。

『兄、さん……』

シャルルの顔が泣き顔に歪む。俺が全てを見ていたことを悟つたらしい……。

『ごめんよ。僕は悔しい……どうしても、悔しい。分からないよ。どうして僕が王様じゃないんだ？父さんはどうして、僕を王様にしてくれなかったんだ？どうして兄さんが王様なんだ？どうしてだい？本当に分からないんだ。僕がどれだけ頑張ってきたか、兄さんや父さんは知らないだろうね。僕がどれだけ……』

「知ってる。分かってるよ。だからもう泣くな、シャルル。俺もそう思う。どう考えたって、王にふさわしいのはお前だ。だって、お前はあんなに魔法が出来るじゃないか」

俺の『虚無』なんて所詮、何かを爆発させるか、俺自身が妙に早く動けるようになる程度だ。伝説などと謳われる魔法だが、大したことはない。

『兄さん。兄さん……！』

「だからな、俺がお前を王様にしてやる。何、父上の言葉はお前と俺しか知らぬのだから、どうとでもなるよ。お前が王様だ。俺は大臣となつて、お前を補佐しよう。そうしよう。な？シャルル。それが良い。だろう？」

『兄さん……ごめんよ。僕は、どうしようもなく欲深い男だよ。家臣達をたき付けたのは、僕なんだ。僕が根回しをして、家臣達を味方につけたんだ。裏金も使った。兄さんはそんな事はしなかったのに……、僕は……』

「もういい。いいんだ。俺とお前は同じだった。それで俺には十分なんだ。だから、良いんだ。もう、何も言うな……」

心の想いが素直に言葉に出る……、久しく忘れていた感覚だ。

爽やかで、心地よい……。心が、暖かいもので満たされていく。

ああ、そうか……思い出してきたぞ。これは、この気持ちは……喜び。

俺は、嬉しいのだ。

「俺達で、このガリアを素晴らしい国にしようじゃないか。なあ、シャルル。俺達で、世界をもっと良くしようじゃないか」

俺達で、このガリアを素晴らしい国にしようじゃないか。

俺達で、世界をもっと良くしようじゃないか。

俺達なら出来るよ。

なあ、シャルル。

なあ、シャルル……。

<SIDE:OUT>

『^{リコード}記憶』によって投影された過去の光景が収束し、元いた部屋に戻った。

そして、俺の目の前でジョゼフが膝をつき、両手で顔を覆っている。背中が震えている……、泣いているのだな。

「シャルル……。俺達は、世界で一番愚かな兄弟だなあ」

両手を顔から離し、ジョゼフをその手を見て笑った。

「なんだ、俺は泣いているじゃないか。ははは……。あれほど疎ま

しく思っていた『虚無』が出口を見つけるとは、あっけなく、何とも皮肉なものだ」

そう言ったジョゼフの顔は、さっきまでと違って晴れやかだ。憑き物が落ちたって言うか……。

その内、ジョゼフは立ち上がり、袖で涙を拭って俺に振り返った。

「……ジークフリート、といったな。お前には、礼を言わねばならんな。おかげで、ようやく、シャルルと本当に分かり合えた」

「吾輩は、魔法を使ってほんの少しお手伝いさせて頂いたに過ぎませぬ……。陛下がシャルル殿下と分かり合えたのは、陛下御自らの御心が殿下との和解をお望みだったが故でございましょう」

兄弟の愛情が深いからこそ、それが裏返った時の憎しみが深くなってしまうた。

何とも悲しい兄弟だが、分かり合えたなら、救いになったはずだ。今更、という事はない。どれだけ時間が経っていても、遅くなどないのだ。

「ふう……、何だか疲れた。涙を流すという行為が、ここまで疲れるものだったとは……」

ジョゼフは溜め息交じりにそう言うと、部屋の椅子に深々と腰掛けた。

「泣くのは疲れるものでございます。しかも陛下の涙は、この数年間の想いが詰まった涙……さぞ、重たかったことでしょう」

「……ああ、思わず膝をつくほどに重かった。だが、おかげで心の澱みも流してくれた」

そう言つと、ジョゼフは何とも穏やかな笑みを浮かべる。

「ジークフリート、改めて感謝する。お前のおかげで、俺も少しはマシな人間になれそうだ」

「お役に立てたのであれば、何よりでございます」

俺は恭しく膝をつき、頭を下げた。

「さつきも言ったが、何か礼をせねばならんな。何か、望みはあるか？お前は俺とシャルルの恩人だ。俺に出来ることならば、何でも叶えてやるぞ」

「っ！」

思いがけずチャンスが来た。

俺から交渉を切り出そうかと思っていたが、ジョゼフの方から申し出てくれるなら、なお好都合だ。

「……何でも、よろしいのですか？」

「無論だ。この国が欲しい、と言つのなら丸ごとくれてやるぞ？」

「い、いえ、そのようなことは申しませんが……」

何だか、ジョゼフの声が弾んできた様な……？

「おお、そうだ！良い事を思い付いたぞ。俺の娘をやるう！」

「はぁ！？」

突然、何をぶっこきやがるかこの蒼いオッサン！

「そうだ、それが良い。そうすればお前は次のガリア王　俺が退位すればガリアはお前の物だ。なあに、心配はいらん！性格は多少キツいが、器量だけは中々のものだ」

「へ、陛下！吾輩の望みは、そのようなことではなく……！」

「なんだ？娘一人だけでは不満か？ならば……　おお、そうだ！ならば、シャルルの娘も付けてやろう。あれも多少性格に難はあるが、中々の器量良し。きつと気に入るだろう」

「お、お戯れを！」

このオッサン……！さっきまで塩らしくしていたかと思えば、もう俺をからかって遊んでいやがる……！！

「ハッハッハッ！これは楽しくなってきたな！」

「楽しくなどありませんぬっ！」

「ハッハッハッハッ！久しぶりに良い気分だ！なあ、未来の義息^{むすこ}子よ！」

「吾輩の話を、ちゃんと聞いて下され〜ッツ!」

結局……俺はその後、ジョゼフに散々からかわれた……。

だが、何とか必要な交渉は出来たから、まあ良しとしよう。

シャルル公とのわだかまりも解けたみたいだし、原作みたいに命を落とすこともなかった　万々歳、と言っていいだろう。

あとは、タバサや娘のイザベラとの事をなんとかしなければだが……それは追々。今は、ジョゼフを救えた事と、悪魔の頭脳の持ち主を味方につけることが出来た事を喜ぼう。

俺の事を『未来の義息子^{むすこ}』だの『婿殿』だのと呼んで、力一杯からかってくるのは、喜べないが……。

何故、いつも綺麗に終わらず、こつも話が明後日の方向へ行くのだろうか……？

Episode・3 『憎悪氷解 しかし、またも話が明後日の方向に』 (後書

こんな感じで、ジョゼフを殺さない道を作ってみました。

この先、イザベラやタバサ、タバサのお母さん、ジョゼフも含めてガリア王族の方々を和解させて、幸せにしてあげられればと思います。

Episode・4 『デルフリンガー 一応はメインキャラだから』(前書き)

ご意見、ご感想をお聞かせ下さい。

今回は、キュルケの若干のキャラ崩壊にご注意を。

Episode・4 『デルフリンガー 一応はメインキャラだから』

さて……ガリア王ジョゼフを味方につけた時から少々遡り、ラ・ヴァリエール領から戻ってきた日の夜のこと……。

俺はマルトーを初め、厨房のコック達と少し飲んだ。マルトーが、良いワインを奢ってくれたのだ。

厨房の皆と談笑しながら楽しく飲んだ後、『ワールド・ドア世界扉』で地球に戻り、家で風呂に入り、服を洗濯した。

さすがに二日以上、同じ服を着っぱなしは不潔だ。俺の家の洗濯機は、デリケート衣類洗濯機能と乾燥機能がついている。流石に革製品は洗えないから、手で手入れたが……。

そうして身も衣装も綺麗になり、再びハルケギニアへ『土産』を持って、ルイズの部屋に戻ろうと女子寮に入った。

そして、ルイズの部屋のある階に上がった時、『そいつ』はいた……。

「……………」

「キュルキュル」

チヨロチヨロ近づいてきて、俺を見上げて人懐こい鳴き声を出す

サラマンダー……、言わずと知れたキュルケの使い魔、フレームだ。

どうやら、こういう所は原作通りの展開になりそうだ。はあ……
やれやれ。

「……吾輩に、何か用か？火トカゲ君」

「キュルキュル」

クイ、クイ

「こらこら、マントを噛んで引っ張るな。洗濯したばかりなのだぞ？」

グイツ、グイツ

俺の抗議などお構いなしに、『いいからこっちに来い』とばかりにマントを力強く引っ張るフレーム。

このまま抵抗し続けて、折角洗濯したマントを皺にされては敵わん。仕方がない……。

「ええい、分かった！ついて行ってやるから、マントを放せ！」

「キュル」

俺の言葉に満足したのか、フレームはマントを放し、先立ってキュルケの部屋の方へ歩いて行く。

そして、半開きのキュルケの部屋のドアの前で止まり、こっちを

振り返った。

「キュルキュル」

早く来い、ってか……はいはい、わかったよ。

あまり気が進まないが、俺はキュルケの部屋へ向かった。

半開きのドアを開けて中に入ってみれば、真っ暗……。フレームの尻尾の火が、ぼんやりと照らすだけだ。

「扉を閉めて？」

暗がりの奥から、キュルケの声……。取りあえず、ドアは閉めておいた方が良いか。

ガチャ……

「ようこそ。こちらにいらっしゃい」

「それは構わんのだが、使い魔を使って強引に部屋に引き込む、というのは如何なものかな？」

パチン！

指を弾く音と共に、蝋燭が1本ずつ灯っていく。俺の言葉は無視か……。

取りあえず、部屋がぼんやりと明るくなり、奥が見えるようにな

った。そして奥のベッドには、薄ら透けたレースのベビードール姿のキュルケ うん、その手の雑誌のグラビアぐらいは飾れる妖艶さだ。

「そんなところに突っ立ってないで、いらっしやいな」

俺の言葉はガン無視か……。まあ、それはそれとして……取りあえず、お言葉に甘えておくか……。

内心溜め息を吐きつつ、部屋の奥へと進む。

「座って？」

「では、失礼する」

キュルケが自分のすぐ隣を進めるので、俺はそこに腰掛けた。

「それで？ 吾輩に何の用だね？」

努めて普通に尋ねてみる。

だが、キュルケは特に反応するでもなく、赤い髪を優雅にかき上げ、俺を見つめ……突然大きく溜め息を吐き、悩ましげに首を振った。

「あなたは、あたしをはしたない女だと思っでしやうね」

「別に思わぬが」

「思われても、しかたがないの。わかる？ あたしの二つ名は『微

熱」

俺の割と空気をぶち壊すツツコミにも、キュルケは動じない。

「あたしはね、松明みたいに燃え上がりやすいの。だから、いきなりこんな風にお呼び立てしたりしてしまうの。わかってる。いけないことよ」

「うむ、いけないことであるな」

適当に相づち。

「でもね、あなたはきつとお許しくださると思うわ」

そう言って、キュルケは潤んだ瞳で見つめてくる。

改めて見ると、キュルケは間違いなくは極上の美女だ。が、その奔放過ぎる性格が、俺のストライクゾーンから大きく外れている。友人ならば文句ないのだが……恋人は無理だ。

それに、キュルケは将来あのコッパゲ……もとい、コルベールとくつつく予定の女　二人は結構お似合いだと思う。

加えて、今のキュルケがお遊びで俺を誘惑しているのを知っている事もあり、俺の心はピクリともしない。男心なら、その巨乳に高鳴っているのだが……イカン、オヤヂが入ったか。

と、そんな俺の心中など知らず、キュルケは俺の手を握り、一本指を確かめるようになぞり始める。

くすぐったいではないか。

「恋をしているのよ、あたし。あなたに。恋はまったく、突然ね」

確かに、恋は突然だ。それは分かる。

俺がカトレアに惚れてしまった時、カトレアが俺の事を『好き』
と言ってくれた時……あれはどちらも、突然だったからな。

「あなたが、ド・ロレーヌを倒した時の姿……。かつこ良かったわ。
まるで伝説のイーヴアルディの勇者みだったわ！あたしね、そ
れを見て痺れたのよ。信じられる！？痺れたのよ！？情熱！ああ、
情熱だわ！！」

「ほう、情熱か」

「二つ名の『微熱』はつまり情熱なのよ！その日から、あたしはぼ
んやりとマドリガルを綴ったわ……。マドリガル、恋歌よ。あなた
の所為なのよ、ジークフリート」

「ああ、吾輩の事はジークで構わんぞ。その方が呼び易かるう？」

「じゃあ、ジーク。あなたが毎晩あたしの夢に出てくるものだから、
フレイムを使って様子を探らせたり……。ほんとにあたしってば、
みっともない女だわ。そう思うでしょう？でも、全部あなたの所為
なのよ」

いや、俺の所為ではないと思う。

沈黙していたら、キュルケはゆっくりと目を瞑り、唇をやや突き

出すようにして顔を近づけてきた。

さて、それではそつと肩を押さえて……って、ん？

「……ミス・ツエルプストー」

「キュルケとお呼びになって」

そんな事はどうでもいいのだが……まあいい。それよりも、だ。

「では……キュルケ。一つ、言わせてもらって良いかな？」

「なあに？ダーリン」

誰が『ダーリン』か。と、そんなことより……

「髪が少々傷んでいるようだが？」

「……えっ？」

キュルケは閉じていた目を開いた。その目の前に、俺は彼女の髪を一房持っていく。

「ほれ、この毛先を見る。枝毛だ」

「う、嘘!？」

嘘ではない。俺が持った髪の毛先には、確かに枝毛がある。

「……………」

それを見たキュルケは、そこそこショックを受けたようだ。

まあ、無理もない。美容には人一倍気を使っているであろう彼女の事だ。よもや自分の髪の毛が枝毛になっていようとは、思いもしなかっただろう。

だが、ハルケギニアの文明がおよそ地球の中世ヨーロッパより少し上程度だとすれば、幾ら気を使っても、やはり限界があると思う。

何せハルケギニアには、ドライヤーもリンスもないのだから。

「……キュルケ、そんなおぬしにコレを差し上げよう」

「え……？」

落ち込むキュルケに、俺は懷から取り出したガラス小壘を差し出した。その中には、緑がかった乳白色の液体が入っている。

「何、これ……？」

「これは洗髪用の秘薬である」

嘘である。本当はただの『リンスインシャンプー』である。日本のあちこちで販売されている一般的な市販品を、『鍊金』で作ったガラス小壘に移し替えただけの代物である。

「この液を掌に直径2、3 سانت程取り、髪に馴染ませる様にして滑らかに泡立て洗い、泡をたっぷりの湯でしっかりと洗い流し、髪

についた水気をしっかりと拭き取った後、温風で速やかに髪を乾かす。温風は『火』のメイジであるおぬしならば容易たやすいはずだ。以上の事を守り、これからきちんとした洗髪を心掛ければ、傷んだ髪は艶やかに生まれ変わるであろう」

「ほ、本当……！？」

「吾輩、つまらぬ嘘は吐かん」

俺が教えた内容は、現代でこそ常識と言われている事ばかりだが、それが常識になるまでには長い時間が費やされてきた。現在のハルケギニアの住人であるキュルケが知らないのは、無理もない事なのだ。

俺が偉そうに言うことではないか……。

「まあ、明日にでも試してみるが良い。では、吾輩はこれで」

キュルケが手に取ったリンスインシャンプーに目を奪われている隙に、俺はキュルケの部屋から退散した。

バタンッ

そして、廊下に出てふと考える……。

あのリンスインシャンプー、ルイズにと思って家うちから持って来た土産だったんだが……。

よし、もう一度行って取って来るか。

<SIDE:キュルケ>

「……………」

不覚だったわ……。まさか、枝毛になってただなんて……。

美容には気をつけてたはずなのに……。

……^{ジーク}彼がくれたこの秘薬、本当に効くのかしら？これを使ってさ
つき彼が言った様にすれば、本当に髪が今以上に艶やかになるのか
しら？

「……明日と言わず、今から試してみようかしら」

そうだわ、そうしましょ！そうと決まれば早速……って、あら？

「……あつ！？しまった！上手く逃げられたわっ！！」

<SIDE:OUT>

ガチャッ

「マスター・ルイズ。今、戻った」

「おかえり」

部屋に入ると、ルイズは鏡台の前で髪を梳かしていた。寝支度を

整えていたようだ。

「マスター・ルイズ。土産だ」

「？何それ？」

俺が差し出したガラス小壺を見て、ルイズは首を傾げる。

壺の中身は勿論、『ワールド・ド・ア世界扉』で地球の家から再度詰め替えてきた
リンスインシャンプーである。

「洗髪用の秘薬である。使い方は、こちらに書き記しておいた。明日の入浴時にでも使ってみると良い」

「ふうん、あんたが調合したの？」

「うむ、まあ、そんなものだ」

本当は、日本の工場で大量生産された物だが……。まあやろうと思えば、多分俺でも調合できるだろう……。うん、出来る。

「正しく使えば、髪が今まで以上に艶やかになるぞ」

「ホント！？ま、まあっ、くれるって言うなら貰っておくことにするわ！」

やれやれ、もっと素直に受け取れば良いものを……。

あ、そうだ。肝心な事を忘れるところだった。

「ところでマスター・ルイズ。明日は確か、『虚無の曜日』で休日であつたな？」

「……」

「マスター、聞いておるか？」

「……え？え、ええつ、そうよ。それがどうかしたの？」

食い入る様に俺が書いた説明書を読んでいたな、ルイズ……。まあ、いい。

「明日、トリスティンの城下町まで買い物に行きたいのだ」

「買い物？」

「うむ、マジックアイテム魔法具の材料と秘薬の材料を買いきたいのだ」

デルフリンガーを手に入れるのは勿論だが、マジックアイテム魔法具や秘薬の材料を一通り揃えておきたいのだ。

何しろ、これからタバサの母親も正気に戻さなければならぬし、他にもこれから必要になるマジックアイテム魔法具や秘薬は山ほどある。材料は早いに揃えておいた方が都合が良い。

「あんだ、マジックアイテム魔法具も作れるの？」

「材料さえあれば、大抵はな」

「へえ、結構多才なのね」

「うむ、まあな」

正体不明の声に、半ば強引に渡された能力だが……。

「ところで、買い物に行くのは良いけど……あんた、お金持ってるの？」

「多少の蓄えはある」

ジャラッ

懷から、エキユー金貨（コッソリ『鍊金』で作っておいた物だ）が詰まった布袋を取り出す。

ちなみに、エキユー金貨は大体500円硬貨と大体同じ大きさで、袋に入っているのは200枚だ。足りなければ、現地でまたコッソリ追加する。

「そつ、なら良いわ。連れて行ってあげる」

「すまぬな」

「そのくらい良いわよ。じゃあ、もう寝ましょ。おやすみ」

そう言っ、ルイズはベッドに入った。

俺も寝るか……。

部屋の椅子にマントと帽子を掛けて、床に置いた簡易敷き布団の

上に横になり、毛布を被る。この簡易敷き布団、床に直接は身体が痛いので、藁束をシーツで包んで簡単に作った物だ。まあまあ寝心地だぞ。

と言う訳で、俺もそのまま眠りに……落ち……zzz……。

<SIDE：キュルケ>

「……ふわあ……っ」

良く寝た……。もう、太陽があんなに高いわ。

あ、窓が無い……って、そっか。昨日、彼に逃げられた後、ペリッソンとスティックスとマニカンとエイジャックとギムリが次々やって来て煩かったもんだから、窓ごと吹き飛ばしたんだっけ。

まあ、そんな些細なことはどうでもいいわ。今日は『虚無の曜日』で休日……一日をフルに使って、昨夜のリベンジよ！

絶対、ジークをルイズから奪ってやるわ！

早速気合を入れて化粧をしながら考える。どうやって彼を口説くのかしら？ 作戦は、幾らでもあるわ。うふふふ

化粧を済ませて、部屋を出る。

向かうのはお隣　　ルイズの部屋のドアを一応ノックする。

もしジークが出てきたら、抱きついてキスしよう　でも、ルイズが出てきたらどうしようかしら？

「……出てこないわね」

誰もいないのかしら？中に入れば分かるわね。

「『アンロック解錠』」

カチャン

軽く音がして、鍵が開いた。

一応、学院内では『アンロック解錠』の魔法は使用禁止なんだけど、ツエルプストー家の家訓は『恋の情熱はすべてのルールに優先する』！

つまり、恋の情熱に燃えている今のあたしに、校則なんて無意味なこと！

という訳で、ちゃちゃっとドアを開けて中にお邪魔……したんだけど、中にもぬけの殻だった。

「相変わらず、色気のない部屋ね……」

飾り気もないし、ベッドも普通……これじゃあ、男の一人も射止められないはずよね。

と、それよりも……ルイズの鞆が無い。という事は、出掛けたの

かしら？

『ヒヒーンッ』

馬の鳴き声……？

何かと思い窓から外を見てみると……、ジークとルイズがそれぞれ馬に跨り、門から外へ出かけて行く。

「なによー、出かけるの？」

折角、彼を誘惑しようと思って気合を入れてお化粧したのに……。

でも……街中で偶然出会って、ルイズをまいてデートって言うのも……アリね

そうと決まれば……！

<SIDE：タバサ>

「……………」

私は、ベッドの上に座って、静かに本を読んでいる。『虚無の曜日』は好き。一人で、一日中部屋でこつやって本を読んでいられるから。

こつして静かに過ごすのが、私は大好きだ。じつくりと、自分の世界に浸ってられる。

ドンドンドンドンッ！！！

うるさい……。

ベッドの横の杖を手取る。

「……『サイレン消音』」

フ……

静かになった。これでゆっくり静かに本が読める……。

「……………」

(ボタンッ) 無音

しかし、ドアが勢い良く開いて、私の学院で唯一人の友達……キウルケが入って来た。

鍵はかけておいたのに……また『アンロック解錠』を使ったらしい。

パッ！グイッ！

読んでいた本を取り上げられ、肩を掴んで振り向かせられた……。これがもし、キウルケ以外の誰かだったら『ウインド・ブレイク』で吹き飛ばしてるところだ……。

キュルケが恋をした、という事実は分かったけど……だから何なのか、どうして私の部屋に押し掛けてくるのか、ちゃんと説明してくれなければさっぱり分からない……。

「そうね。あなたは説明しないと動かないのよね。ああもう！あたしね、恋したの！でね？その人が今日、あのにつくいヴァリエールと出かけたの！あたしはそれを追って、どこに行くのか突き止めなくちゃいけないの！わかった？」

フルフル……

それで、どうして私の部屋に押し掛けて来るのか、分からない。

「出かけたのよ！馬に乗って！あなたの使い魔じゃないと追いつかないのよ！助けて！」

キュルケに泣きつかれた。けど、やっと事情が飲み込めた。

今から馬を借りて追いかけても、馬に乗って出かけた人達に追いつくのは不可能……。でも、私の使い魔なら追い付ける。

コク……

読んでいた本を閉じて、キュルケに頷いてみせる。

「ありがとう！じゃ、追いかけてくれるのね！」

コク

もう一度頷く。

キュルケは、私の唯一の友達だ。彼女が、私にしか解決できない頼みを持ちこんできた。だったら、受ける……面倒だけど。

ガチャ……

「ピーーッ！」

窓を開けて、口笛を吹く。すると、青空の向こうから、翼を羽ばたかせて私の使い魔 風竜のシルフィードが飛んできた。

ちなみに、シルフィードとは『風の妖精』の名前……。

そして、私とキュルケの二人はシルフィードの背に乗り、魔法学院の外へ飛び立った。

<SIDE:OUT>

馬に揺られること、およそ三時間……。

俺とルイズは、トリスティンの城下町ブルドンネ街に到着
「ヒールンゲ治療」の魔法が無ければ、腰がイカレているところだ。

「テレポート瞬間移動」を使えば楽だし、早いのだが……、今はまだ、ルイズに虚無魔法を見せる訳にはいかん。彼女の成長を妨げる危険があ

る。

それはさておき……こうして実際に見ると、白色の石造りの街は、やはりヨーロッパ情緒が漂う。原作では才人が『道が狭い』と言っていたが、俺はそこまで狭くは感じない。確かに道幅は4、5メートル程度しかないし、大勢の人々が歩いていてごみごみしているが、車などが通らない事を考えれば充分な道幅だろう。

そんな通りの両端には、数多くの露店が並んでいる。道端で声を張り上げて、肉や魚や果物、衣服や布、茶葉や調味料……いや香料？等々を売る商人達……見た目ヨーロッパの下町か市場、といった感じだろうか。

俺は、こういう雰囲気が割と好きだ。なんとなくウキウキする。

という訳で、いざ買い物！買うのは、秘薬の材料と魔法具の材料

『錬金』では作れない物や、買った方が手っ取り早い物だ。

「その薬草と、そっちのポーションを……あとその蛙の干物とトカゲの干物も、それぞれ有るだけ貰おう」

薬草などを扱う店をあちこち巡り

「火竜の爪、鱗、牙、血……それにグリフォンの爪の粉末と羽、それと……『水の精霊の涙』も有るだけ売ってくれ」

マジックアイテム
秘薬と魔法具、それぞれの素材となる品々を、徹底的に買い漁った……。

「……あんだ、どんだけ買っのよ？」

道を歩いていると、ルイズが呆れた声で尋ねてきた。

その視線の先には、今まで俺が買い漁った品の数々……を抱えた荷物持ちの『ヴァルキュリア』が二体 買った物がかなりの量になってしまったので、先程『クリエイト・ゴーレム』で作り出したのだ。

「こんなに買い込んで……よくそんなお金持ってたわね？あんだ」

「まあ、そこそこはな」

そこそこどころか……、俺のハルケギニアにおける財力は無限だ。『鍊金』で、エキュー金貨など幾らでも作り出せる。

しかし……必要とはいえ、一気に揃えとかなりの量になってしまったな。ヴァルキュリア二体の両手が、完全に塞がってしまったている。

ドラクエの『ふくろ』か、ドラえものの『四次元ポケット』でもあれば便利なんだが……

待てよ？もしかして、作ろうと思えば作れるか？

「……………」

「？何よ、どうかしたの？」

「いや……、少し考え事を、な」

これは……能力と相談して、検討してみる価値はありそうだ。

まあ、それは保留として……必要な物も大体揃ったし、後はデルフリンガーだけだな。

「マスター・ルイズ。もう一軒、寄りたい店があるのだが」

「あんだ、まだ買う気なのっ!？」

目を見開いて驚きの声を上げるルイズ。俺は苦笑しつつ、説明する。

「いや、買うかどうかはまだ分からん。寄りたい店というのは、武器屋なのだ」

「?なんでメイジのあんだが、武器屋になんか行くのよ?大体、あんだはもう、その短剣があるじゃない」

ルイズは俺の腰の『ヘラクレスダガー』を指さして言う。

「うむ、まあそうなのだが……吾輩は、剣や槍に少しばかり興味があつてな。トリステインの武器屋は初めて故、見物したいのだ」

「ふん……変わってるわね、あんだ」

「放っておけ」

ちなみに余談だが、俺は刀剣マニアではないが、日本刀が好きだ。あのスラリとした細身の刀身が描く曲線が、何とも言えず美しく感

じる。

「で、武器屋は何処だ？」

「はいはい、こつちよ」

ルイズの先導に従い、通りを歩く。

途中で、悪臭漂う細い裏路地を通り

「……酷い悪臭だ」

「だからあんまり来たくないのよ」

口元をマントで抑えつつ、そこを抜けて十字路に出る。すると、ルイズは立ち止まり、辺りを見回した。

「ピエモンの秘薬屋の近くだったから、この辺なんだけど……」

「ふむ……お？マスター・ルイズ、あれではないか？」

「え？あ！そうよ、あれだわ！」

俺が指さした先には、剣の形をした看板 紛れもなく武器屋だ。

俺達は、羽扉を開けて武器屋の中に入った。

薄暗いな……。昼間だと言うのに、ランプなんぞ点けている。

剣や槍もちゃんと陳列されていないし、見た目立派な甲冑ですら店の端に無造作に置かれている……。なっていないな。

「旦那。貴族の旦那。ウチは真つ当な商売をしてまさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽっちもありませんや」

パイプを啜えたオッサンが、ドスの利いた声でそう言ってきた。客を相手にこの態度……。それでも商人か！あきんどと言ってやりたい。

「客だ。適当に品を見させてもらっぞ」

俺がそう言つてやると、オヤジは大袈裟に驚いた顔になる。

「こりゃ、おつたまげた。貴族が剣を！おつたまげた！」

「やかましいわ。吾輩の勝手であろうが。少し黙っておれ」

「へ、へえ……。ケツ！貴族の若造が、偉そうに……。！」

聞こえないと思って、ボソツと悪態吐きやがった、このオヤジ。

まあいい、聞かなかつた事にしておいてやる。

それよりも、デルフリンガーだ……。さっさと探して、帰るとしよう。

「ふゝむ……」

ガチャガチャガチャ……

あれこれと乱雑に置かれている所為で、デルフリンガーが何処に置かれているのが分からない……。

声を出してくれば一発なんだが、こちらから呼び掛ける訳にも
いらない。そんな事をすれば、ルイズにもオヤジにも怪しまれてし
まう……。

「……ええい、碌なものが無いな、この店は」

思わず愚痴が漏れた。と、その時だった。

『生意気言っんじゃねえ。若造』

今の声は……！

『確かにここにやあ碌な剣は置いてねえ。だが、おめえ、自分を見
た事があるのか？その身体で剣を振る？おでれーた！冗談じゃねえ
！おめえにや棒っ切れがお似合いさ！』

このやや響く様なオヤジ声……、齒に衣着せない口の悪さ……。

間違いない、デルフリンガーだ！

声がしたのは……店の隅に置かれた樽の辺りだ。

『わかつたら、さつさと家に帰りな！おめえもだよ！貴族の娘っ子
！』

「失礼ね！」

ルイズも声がした方を向いて叫ぶ。

俺はそちらに近づいた。

「剣があるだけで、誰もおらん」

『おめえの目は節穴か！』

その声で、ようやく見つけた。錆びの浮いた……と言つより、錆びに覆われたボロボロの剣、これだ！

「剣が喋っている！インテリジェンスソードか！」

少々ワザとらしいかもしれないが、驚いた声など上げてみる。すると……

「やい！デル公！お客様に失礼な事を言っくんじゃねえ！」

オヤジが怒鳴った。

が、それは放っておき、デルフリンガーを手にとってみる。長さ……1.5メートルぐらいか、少し長いな。

それに、重い……。『ガンダールヴ』の力で、振れない程重くは感じないが、それでも扱いやすいとはお世辞にも言えない。

『おでれーた。見損なつてた。てめ、『使い手』か』

「うん？『使い手』だか何だか知らんが、吾輩の名はジークフリー

トだ」

『ふん、自分の実力も知らんのか。まあいい。てめ、俺を買え』

「よかるう。望むところだ」

「えゝゝゝ！？そんなのを買うの？」

俺の即決に、ルイズが声を上げた。

「どうせ買うなら、もっと綺麗で喋らないのにしなさいよ」

「綺麗で喋らない剣など、そこかしこにある。だが、インテリジェンスソードは極めて珍しい。多少、口の利き方と見た目は悪いが、こいつは掘り出し物だ。こいつを買う」

ルイズにそう言い、俺はオヤジに振り返る。

「おい、店主。こいつは幾らだ？」

「へ、へえ……。それならエキユー金貨で１００、新金貨なら１５０で結構でさ」

あれ？原作では確か、新金貨１００で買えたはずだが……値段設定、いい加減なのか？

まあ、いいか。

「よし、買った」

ジャラッ！

懷から袋を取り出し、中の金貨をカウンターに出す。

「ひい、ふう、みい、よ……」

オヤジは慎重に枚数を数えていく。

そして、100枚を数えて頷いた。

「毎度」

「うむ」

ジャラ……！

残りの金貨を袋に戻す。残りは20枚ぐらいか。

「どうしても煩いと思ったら、こうやって鞄に入れば大人しくな
りまさあ」

「分かった」

鞄に収まったデルフリンガーを、改めて受け取る。

が……やはり、俺が扱うには長過ぎるな。何とか短く改造できな
いものか……。よし、学院に戻ったら調べてみるとしよう。

そうしてデルフリンガーを手に入れ、俺とルイズは店を出た。

「最後に良い締めくくりとなった。さて、学院に帰る前にどこかで茶でも飲んでいくか？マスター・ルイズ」

「いいわね、行きましょう」

と言う訳で、俺達は喫茶店カフェを探しに向かう。確か、ハルケギニアにもあったはずだ、喫茶店。

あ、ふと思い出した……。

確か原作では、キュルケとタバサが尾行していたはずだが……今もいるのだろうか？

「……む！」

バツ！

勢い良く振り返ってみる。

が……、見える範囲にキュルケとタバサの姿は無し……。隠れているのか、それともいないのか……わからん。

「何よ？どうかしたの？」

突然振り返った俺に、ルイズが怪訝そうに尋ねてきた。

「いや、何やら背中に視線を感じた様な気がしたのだが……、気の所為だったようだ」

別にそんな視線を感じた訳ではないが、ここは見栄を張っておく。それに、いてもいなくても、俺的には特に問題はない。

気を取り直して、喫茶店カフェを探すでしょう。

俺とルイズは、荷物持ちのヴァルキュリア達を引き連れて、再び大通りの方へ歩き出した……。

<SIDE：キュルケ>

「は……、ビックリしたあ……！」

ジークが突然振り返った時は気付かれたかと思ったけど、どうやら気付かれなかったみたい……ふう。

でも、そんな勘の良い所も素敵

それにしても……！

「『ゼロ』のルイズったら……、彼を買い物に誘って、あたしを出し抜いてデート？ 胸も色気もゼロの癖に、生意気……ッ！」

だけど、このままじゃマズいわ……！

ルイズったら……どこにあんなにお金があったのか知らないけど、

あんなに買い込んだ挙句、最後には彼に剣をプレゼントして気を引こうなんて（全て勘違い）……！

恋でヴァリエールに後れを取る訳にはいかないわ！

タバサを連れて、あたしは二人が入った武器屋に駆け込んだ。

「おや！今日はどうかしてる！また貴族だ」

「ねえご主人」

髪をかきあげて、いつも男子を誘惑する時みたいに微笑んでみせる。胡散臭そうなオジサンは、鼻の下を伸ばして顔を赤くした。

「今の貴族が、何を買って行ったかご存知？」

「へ、へえ。剣でさ」

「なるほど、やっぱり剣ね……。どんな剣を買っていったの？」

「へえ、ボロボロの大剣を一振り」

「ボロボロ？どうして？」

「さあ？あの赤い服の若旦那が、えらく気に入ったようでした……へえ」

「ボロボロの剣を、彼が……？どういうこと？」

「いえね？実はそのボロ剣、インテリジェンスソードでして……」

「インテリジェンスソード？」

「そうでさ、若奥様。意思を持つ魔剣、インテリジェンスソード。一体、どここの魔術師が始めたんでしょかねえ、剣を喋らせるなんて……。とにかくそのボロ剣の野郎ときたら、やたらと口が悪いわ、客に喧嘩は売るわで閉口してまして……。いい加減、どこかの貴族様に溶かしてもらおうかと思ってたんですが、あの若旦那が買って下さったおかげでその手間も省けたし、厄介払いも出来て、ウチとしては大助かりで、へえ」

「ふん」

確かにインテリジェンスソードなんて、ゲルマニアでも滅多にお目にかかれない珍品だけど……。幾ら珍しくてもボロボロの剣を選ぶなんて……。

きっと、ルイズに遠慮したのね。あんなに買い込んで、お金もそう残ってなかったはずだし。

うふ だったら……。

「若奥様も、剣をお買い求めで？」

オジサンが身を乗り出して尋ねてくる。

「ええ。見繕ってくださいな」

見てらっしゃい、ヴァリエール……！

とびっきりの剣をプレゼントして、必ず彼の心を奪ってみせるわ……！おっほっほっほっ

<SIDE:OUT>

「へっくしッ!!」「へっくちッ!!」

見つけた喫茶店カフェで茶をしばいていた俺とルイズは、全く同じタイミングでくしゃみが出た。

なんだろう……？

唯のクシャミじゃない様な気が……。

Episode・4 『デルフリンガー』 一応はメインキャラだから (後書き)

今回のお話は、デルフリンガーの回収と、原作ルートの消化という形にしました。

この同時進行で、ガリアで『遍在』の分身がジョゼフの憎しみを解きほぐしている、という設定になります。

E p i s o d e ・ 5 『盗賊襲来 いや、寧ろウェルカム』（前書き）

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告もお待ちしております。

前話から引き続き、キュルケのキャラ崩壊にご注意を。

ご意見を頂き、原作の焼き回し部分を少しカットしました。内容は変わっていません。 9 / 1 3

Episode・5 『盗賊襲来 いや、寧ろウェルカム』

材料類とデルフリンガーを買い、軽く茶をしばいてから、学院に戻った俺とルイズ……。

俺は学院に戻ってすぐに、マジックアイテム魔法具の作成とデルフリンガー（長いので、以下デルフ）の改造に取り掛かった。

マジックアイテム魔法具は買ってきた材料と『鍊金』で作り出した物を合わせて、問題なく仕上がった。秘薬は、今は必要ないので『鍊金』で自作し、『固定化』を掛けた保存庫に保存して、取りあえず保留とした。

一つ、残念な事が……。ドラクエの『ふくろ』又はドラえものの『四次元ポケット』は、作れない事が判明した……。学院に帰ってから考えてみたのだが、必要な材料も製造法も全く浮かんでこなかった……。

あれば超便利だったものを……くうっ！無念だ……。

まあ、そこは7秒で気を取り直し……。今回一番の大仕事、デルフの改造に取り掛かった。

結論から言うと、これは成功した。が、かなり苦労した……。技術的にではない、主に精神的にだ……。

デルフは言ってみれば、系統魔法と精霊魔法の合作インテリジェンスソード。原作でも明らかにされていたが、エルフの方に『意思剣』という剣に意思を持たせる技術がある。原作に、剣が自らの意

思で敵に向かって斬りかかって行くという、かなり危険な武器に、才人が苦戦している描写があった。

デルフの場合、自分で動く事は出来ないが 『魔法吸収』『ガンダールヴ操作』『外見変化』『意思転移』と、数々の特殊能力が搭載されている。で、調べてみれば……その魔法的構造の複雑なことで、複雑なこと……。

普通のメイジでは、改造なんて手に負えなかっただろう。だが、俺はチート能力のおかげで、難なくデルフの改造を行う事が出来た。

では、何に苦労したのか？というと、それは……

改造する前と途中のデルフが、ギャーギャー五月蠅くて仕方なかった事だ……。

『ギャアアアアッ！！？よせよせ早まるな相棒！ーッ！！やめてー！よしてー！無茶しないでーッ！！』

だの……

『アギヤギヤギヤアアアッ！！？？削れてる削れてるギャアアアアアッ！！？相棒の剣殺し！ーッ！！』

だの、と……

『鍊金』の応用と精霊魔法を併用し、『魔法吸収』の能力に吸収されない様に注意しながら刀身を60センチに短くする、唯でさえ神経を使う改造作業なのに、デルフはこちらの神経が余計に削れるほど騒ぎまくった……。まるで歯医者で歯を削られて泣き叫ぶ子供

……いや、可愛げがない分、それより遥かにタチが悪かった。

おかげで、改造が終わった時には……俺はもうげんなりだった。それ以降は何もする気になれなかった……。

そうして、夜までルイズの部屋でゴロゴロしていたのだが……

「どういう意味？ ツエルプストーリー」

「だから、ジークに似合いそうな剣を手に入れたから、そっちを使いなさいって言ってるのよ」

突然、キュルケがタバサを連れ、またやたら煌びやかな剣を持ってやって来て……ルイズと睨み合いなど繰り広げている。

やっぱりと言うべきか、今日の買い物、キュルケ達に尾けられていたようだ。

やれやれ、こんな所も原作通りか……。

「お生憎様。使い魔が使う道具なら間に合ってるの。ねえ、ジーク」

「うむ……」

と答えつつ、俺はキュルケが持って来た剣を、様々な角度から眺めている。

見た目はとにかくキラキラしていて、けばけばしい剣だ……。刀

身は金色　とは言っても黄金じゃない、真鍮だ。鐔と柄は銀白色
これは銀のメッキだな。そこに所々宝石が飾られている。魔法
は最低限　酸化・腐食しない程度の『固定化』のみ。

一応、『ガンダールヴ』のルーンが反応しているところを見ると、
これでも武器として作られた物らしい。

『ガンダールヴ』のルーンが反応するのは武器として作られた物
体のみ……、形だけの飾り物ではルーンは反応しない。故に、模造
剣や装飾剣には反応しないのだ。俺のヘラクレスダガーは、あの正
体不明の声が武器として作り変えたらしいから反応する。

手抜き of 粗悪品なのか……、作ったメイジがへボだったのか……、
はたまた武器という物を理解していないのか……。

いずれにせよ、この剣に関して言える事は一つ

これは、俺には必要のない物だ。

カシャン

「ふむ……気持ちには有難く思うが、キュルケ。マスター・ルイズの
言う通り、吾輩、剣はもう間に合っている。この剣は、お返りする」

鞘に戻した剣を、キュルケに差し出す。

「そういう事よ、ツエルプストー。あんたの持ってきた剣なんて必
要ないの。分かったら、それ持ってさっさと出て行ってちょうだい」

勝ち誇り、薄い胸を張るルイズ。が、キュルケは気にした様子も

なく、溜め息を吐き、頭を横に振った。

「ふう……ジーク、あなた知らないんでしょう？この剣を鍛えたのはゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿だそうよ？」

「それが何と？」

あっさりと俺が返すと、キュルケは熱っぽい流し目を送ってきた。

「ねえ、よくって？剣も女も、生まれはゲルマニアに限るわよ？トリスティンの女ときたら、このルイズみたいに嫉妬深くて、気が短くって、ヒステリーで、プライドばかり高くって、どうしようもないんだから」

「ッ！！」

ルイズが瞬時に目を吊り上げ、キュルケを睨みつけた。

「何よ。ホントの事じゃない」

キュルケが見下ろし返す。

「へ、へんだ。あんたなんかただの色ボケじゃない！なあに？ゲルマニアで男を漁り過ぎて相手にされなくなったから、トリスティンまで留学して来たんでしょ？」

「言ってくるわね。ヴァリエール……」

顔色が変わるキュルケ、勝ち誇るルイズ。

そして……

「何よ。ホントの事でしよう?」

ルイズのその一言で、二人は杖に手をかけて……

ヒュウッ!

巻き起こった旋風^{つむじかぜ}が、素早くその杖を弾く。

その出所に目を向けると……先が曲がった長杖^{ロングスタッフ}を手にしたタバサの姿が……。

「室内」

タバサは淡々と言った。

タバサが……。なるべく早く、お袋さんを治してやりたいな。そうすれば、少しは心も軽くなるだろう。

「……」

ふと、タバサがこちらを向いた。俺の視線に気付いたようだ。

「……」

俺は数秒程度、その視線を受け止めてから、視線を逸らした。別に、深い意味があつてそうした訳ではない。なんとなく、だ。

と、そんなことをしている間も、ルイズとキュルケの睨み合いは

続いている……。

「なにこの子？さっきからいるけど」

「あたしの友達よ」

忌々しげに言ったルイズの問いに、キュルケが答えた。ルイズは、再び視線をキュルケに向け、睨みつける。

「なんで、あんたの友達が私の部屋にいるのよ」

「良いじゃない」

二人が再びぐつと睨み合う。

原作だと、ここで才人に予先が向かう……。と、考えている傍からキュルケがこちらを見てきた。

「じゃあ、ジークに決めてもらいましょうか」

はあ……。

「キュルケよ……。吾輩、先程からおぬしが持ってきたこの剣を返すと言っているはずだが？」

「え〜!？」

「ふふんっ」

俺の言葉に、キュルケは不満の声を上げ、ルイズは勝ち誇って胸

を張った。

「なんで？どうして？さっきも言ったけど、この剣を鍛えたのはゲルマニアの錬金魔術師シュペー卿で……！」

「生憎だが吾輩、シュペー卿とやらのことは毛ほども知らぬし、高価な物や煌びやかな物にはあまり興味が無い。吾輩が好むのは『機能美』だ」

見栄えを良くする為の装飾が悪いと言っているのではない。単なる俺の好みだ。

無駄のない、機能を重視したデザインにも美しさはあり、俺にはそちらの方が性に合っている。

「そういう訳なのでな。折角の贈り物だが、これは受け取れん」

「そんなあゝ！？あなたの為を買って来たのよゝ！？」

文句を言われても困る。頼んでもいないのに、そちらが勝手に買ってきたのだから……。

「ふふん 見苦しいわよ、ツエルプストー。ジークは要らないって言ってるんだから、いい加減に諦めなさいよ」

「っ！」

キッ！

ルイズの余裕綽々の言葉に、キュルケが鋭い視線を向ける。

「……ねえ」

キュルケが静かだがドスの利いた声で、ルイズに声をかける。

「何よ」

「この際、キッチリ決着をつけませんか？ジークの事は抜きにして……」

「……そうね」

おいおい……。俺がハッキリしても、結局そうなるのか？

いや……。俺として、むしろ『好都合』なんだが……。

「あたしね、あんたのこと、大っ嫌いなのよ」

ハッキリと言い放つキュルケ。

「私もよ」

キツパリと言い返すルイズ。

「気が合うわね」

そして、キュルケとルイズは目付き鋭く睨み合い……

「決闘よ！」

と、言う訳で

俺は二つの月が照らす中庭で、本塔の上からロープで逆さ吊りにされた。『遍在』の分身と入れ替われれば良かったんだが、そんな暇もない程に手際良く拘束されてしまったのだ。

結局、何をどうしようとして……『ゼロの使い魔』はこうなる運命らしい。と言う事で、諦めてぶら下がっている……。

幸い、と言うべきか……俺は、両足首を縛られる程度で済んだので、才人よりはマシだ。いざとなれば、自分の魔法で脱出できる。

とはいえ……。

「……………はあ」

逆さ吊りで腕組みをした体勢で、溜め息を吐く……。

地面の方を見れば、ルール確認をしているルイズとキュルケの姿……………。

「良いこと？ヴァリエール。あのロープを切って、ジークを地面に落としたほうが勝ちよ。良いわね？」

「わかったわ」

腕を組んで言ったキュルケに対し、ルイズは硬い表情で頷いている。

『魔法勝負』となると、自分が不利なことが分らないほど、ルイズは馬鹿ではない。

それにしても……仮にも自分の使い魔で、しかも姉の難病を治した俺に対して、この扱いはあんまりじゃないか？

「はあ……」

溜め息も吐きたくなる……。

チラ……

ふと横を見る。

バッサ！バッサ！

「……」

そちらには、シルフィードに跨ったタバサの姿……。

例によって、この勝負方法はタバサの提案だ。

おのれ……。今のタバサでは仕方がないと分かっているが……やはり、おのれ！

そうやって俺が内心で静かにタバサを呪っている間にも、キュルケ達は話を進めていく。

「使う魔法は自由。ただし、あたしは後攻。そのぐらいはハンデよ」

「いいわ」

「じゃあ、どうぞ」

始まってしまった……。

ヒュウウ……

タバサの風で、俺の身体が左右に割と大きく揺れ始める。

ブラーン、ブラーン

う……逆さ吊りでこの揺れは、結構怖いな……。

「……………」

ルイズは、杖を構えて緊張した表情を浮かべる。

そう言えば忘れていたが、今のルイズの魔法は全て爆発する……
フェイル・エクスプロージョン
いわば『失敗爆発』。それが、今は必要ではあるんだが……。

まさか……、俺に爆発が命中したりしないだろうな？ 如何に失敗
とはいえ、威力は充分ある……。不安だ……。

念の為、周囲の精霊と契約しておこう。

「……ぶつぶつぶつ（精霊達よ、我が声を聞き届けたまえ。一時、

我と契約を交わし、汝らの大いなる力、行使する事を許したまえ」

.....

傍から見れば良く分からないだろうが、精霊と契約することに難なく成功した。まあ、この辺りには俺以外に精霊魔法の使い手はいないから、先約などいる訳がないからな。

これで、いざという時には『^{カウンター}反射』も使えるし、『風』の精霊に頼んでキュルケの『火』の魔法を逸らす事もできる。

だが.....やはり、不安が残る.....！万が一の時は頼むぞ、精霊達.....！

そして.....俺が内心で祈る中、ルイズが呪文を唱え、杖を振った。すると.....

ドカアアンツ！

「うおおおっ！？」

爆風で身体が揺れる！

ルイズの魔法は、俺の背後　本塔の壁を爆発させた。見れば、壁にはかなりヒビが入っている。よし、これで『彼女』が動くはずだ。

それにしても.....直撃こそしなかったが、自分の割と近い所で爆発が起こるといのは恐怖だ！

「『ゼロ』！『ゼロ』のルイズ！ロープじゃなくて壁を爆発させてどうするの！器用ね！あなたってどんな魔法を使っても爆発させるんだから！あっはっは！」

キュルケは、ルイズの失敗に腹を押さえて大笑いする。的にされている俺としては、笑い事ではないのだが……（怒）。

ルイズは悔しそうに拳を握りしめ、膝をついた。

「さて、あたしの番ね……」

キュルケが狩人の目でこちらを見て、杖を軽く構える。

このまま彼女を勝たせるのは癪な気がする……。つい先程、人の気も知らないで笑い転げた事とか……。

「うふ 行くわよ」

キュルケは余裕の笑みを浮かべると、呪文を唱え、杖を突き出した。

ボウッ！

杖の先から、直径20センチ程の火の球が飛んだ。『火』の魔法
『ファイヤーボール』
『火球』だ。

このまま飛べば、ロープに直撃するだろう。が、そう簡単には当てません。

「……ぶつぶつ（精霊達よ。風の流れを生み、迫る火球の軌道を逸

らしてくれ)」

.....

精霊達は彼らの言葉で、了解してくれた。

ググッ

飛んでくる火球が、ロープの2メートルほど手前から緩やかに、軌道を変え……

「え!？」

ボンッ!

ロープの左に逸れ、本塔の壁に当たって弾けた。下では、キュルケが信じられないものを見た様な顔をしている。

当たると確信していた自分の魔法が外れた……。その事実に驚いているのだろう。

だが、それを俺がやったとは誰も思うまい。

魔法を使うには杖が必要 ^{ヘリクレスダガー} それがハルケギニアのメイジの固定概念だ。そして、俺は杖を手にしていない。更に、俺が精霊魔法を使える事は今のところ、この世界の誰も知らない ^{ハルケギニア}。

よって、彼女らには何が起きたのかを知る術は無いのだ。

「そ、そんな……!?!あたしの魔法が外れるなんて……!」

愕然とするキュルケ。それに対し、ルイズは顔を輝かせる。

「あゝらっ！自信満々だった癖に、外したわね？『微熱』！『微熱』のキュルケ！ロープじゃなくて壁を燃やしてどうするの！器用ね！」

「つつゝゝ！！」

キュルケは悔しげに顔を顰め、杖を握りしめ、身体を打ち震えさせている。先程ルイズを大笑いした時の台詞を、ほぼそっくり返されたのが、相当屈辱だったと見える。

あの二人は取りあえず良いとして……、そろそろ来る頃だと思うんだが……。

ズゴゴゴゴ……

来たッ！

「マスター！！キュルケ！！後ろだッ！！」

「「後ろ？」」

俺の叫びを受け、ルイズとキュルケが揃って振り返る。

「な、なにこれ！」

キュルケが声を上げる。

彼女らの視線の先には、30メートル級の巨大土ゴーレムの姿が！

「きゃあああああああ！」

キュルケは悲鳴を上げて真っ先に逃げ出した。こつこつ所は年相応の少女だな……。

俺も早いところ降りなければ！

ダガーを引き抜き、落下防止の為に先ず『飛行^{フライ}』を使っており、それから足を縛るロープを切る。

ブツッ

よし、これで自由だ。

「むっ、いかん！」

ルイズがゴーレムを前に立ち竦んでいる！

急いでそちらに向かって飛ぶ。

ビュンッ！

「マスターッ！」

「きゃっ!?!」

速度を落とさず、ルイズを『姫だっこ』の形で抱きかかえ、ゴーレムの股下をすり抜け、そのまま上空へ上がる。

上空には既に、キュルケを回収したシルフィードが待機しており、俺はその横についた。

「全く、なんなのよ。アレ……」

シルフィードの背で、キュルケがぼやく。

「中々見事な土ゴーレムだ。操っているのは、かなり手練てだれのメイジの様だな」

「そうね……あんな大きな土ゴーレムを操れるんだもの。きっと『トライアングル』クラスのメイジに違いないわ」

俺の首に手を回したルイズが、俺の言葉を肯定した。

ズシィン……！ズシィン……！ズシィン……！

眼下で本塔に竄進する土ゴーレム あれは『土くれ』のフーケのゴーレムだ。

俺は、この騒動を待っていた……。

取りあえず、今はこの状況を見守る。

ゴーレムは本塔の前に立つと、その拳をヒビが入った壁に叩きつけた。ルイズの『失敗爆発フェイル・エクスプロージョン』によって、脆くなった壁はあっさりと突き破られ、そこからフーケと思しき黒ローブの人影が中に侵入。

5分もしない内に、『破壊の杖』らしき物を抱えて中から出てきたフーケは土ゴーレムの肩に乗り、学院の城壁を跨いで外へ逃げ行った。

俺達も一応空から追跡したが、土ゴーレムは学院から離れた草原の真ん中で崩れ落ち、フーケはまんまと逃げ果せた……。

その翌朝、事件が発覚……。

例によって原作通り、教師連中はアレコレ好き勝手喚いた後、事態の責任の追及にスライド ミセス・シュヴルーズが追及されて泣きだした所で、オスマンのジイサマが仲裁に入り……と、この辺りはどうでもいいので割愛する。

重要なのは、ルイズ達への事情聴取が終わってからだ。

「時に、ミス・ロングビルはどうしたね？」

オスマンがコルベールに尋ねる。

「それがその……、朝から姿が見えませんが」

「この非常時に、何処に行ったのじゃ」

「何処なんでしょう？」

と、コルベールがそう言った時……、タイミング良く、噂のロン

グビルが宝物庫に入ってきた。

「ミス・ロングビル！何処へ行っていたんですか！大変ですぞ！事件ですぞ！」

いつになく興奮気味に捲くし立てるコルベール　しかし、ロングビルは冷静。

「申し訳ありません。朝から、急いで調査をしておりましたの」

「「調査？」」

オスマンとコルベールがハモる。

「そうですね。今朝方、起きたら大騒ぎじゃありませんか。そして、宝物庫はこの通り。すぐに壁のフーケのサインを見つけたので、これが国中の貴族を震え上がらせている大怪盗の仕業と知り、すぐに調査を致しました」

「仕事が早い。ミス・ロングビル」

オスマンのジイサマは感心したように言うが、それはそうだろう。
ロングビル「フーケ、なのだから。」

だが……今回、俺はそんな彼女に用があるのだ……。

ロングビルは「近在の農民に聞き込んだ」と言って、近くの森の廃屋に入っていく黒ずくめのローブの男の目撃情報を明かした。そ

の男がフーケで、その廃屋がフーケの隠れ家だろう、と。

勿論、そんなものはデタラメだ。

原作を初めて読んだ時も思ったが……、徒歩で半日、馬で4時間は遠過ぎる。

どれだけ早朝に調査を始めても、現時刻までに往復できる距離ではない。ハルケギニアに懐中時計の類は無いから、キツチリ4時間という訳ではないのだろうが、それでも不自然だ。

まあ、事が事なのでオスマンやコルベール達も慌てていただろうし、ロングビルは学院長秘書としての信望も厚かっただろうから、学院関係者達が気付かないのも、仕方ないと言えば仕方ない、か……。

で……

「では、搜索隊を編成する。我と思う者は、杖を掲げよ」

オスマンの号令により、フーケ搜索隊が編成される事となった訳だが……。

「おらんのか？おや？どうした！フーケを捕まえて、名を上げようとする貴族はおらんのか！」

教師達はフーケに恐れをなし、誰一人、杖を上げようとしなかった。

そこで、ルイズが杖を掲げた。勿論、教師から反対の声も上がったが……

「誰も掲げないじゃないですか」

このルイズの一言で、教師も黙るしかなかった。その時のルイズは、本当にフーケを相手にするには少し危うい感じがした。

何とか、上手くフォローがしてやらないとな……。

そして、ルイズに続き……

「ふん。ヴァリエールには負けられませんわ」

と言って、キュルケもしぶしぶといった感じで杖を掲げ……

「タバサ。あんたはいいのよ。関係ないんだから」

「心配」

短く言い、タバサも杖を掲げた。

そんな彼女の一言に、キュルケは感動した表情を浮かべ、ルイズも唇を噛み締めて、タバサに感謝を述べた。

「ありがとう……タバサ……」

という訳で、ルイズ・キュルケ・タバサ・俺の四人が、フーケ捜索隊としての任務を請け負う事になった。

生徒で捜索隊を編成する事に、教師から反対の声も上がったが、オスマンが彼女らの経歴などを明かす事で黙らせ、案内役としてロングビルを加えた俺達五人は、フーケ退治へと出発した……。

ガラガラガラ……

ロングビルが手綱を握る屋根無しの荷馬車に揺られ、のどかな街道に行く。席順は、御者席にロングビル、彼女の右手側の腰掛けにキュルケとタバサ、左手側にルイズと俺　となっている。

目的は物騒だが、この風景は和む……良いなあ、こういうの。日本では、まず見られない風景だ。

「ミス・ロングビル……、手綱なんて付き人にやらせればいいじゃないですか」

のんびりと流れる風景を眺めていたら、キュルケがロングビルに問いかける声が聞こえてきた。

振り返って、様子を見る。

「いいのです。私は、貴族の名を無くした者ですから」

ロングビルの笑顔の告白に、キュルケは疑問符を浮かべる。

「だって、貴女はオールド・オスマンの秘書なのでしょ？」

「ええ、でも、オスマン氏は貴族や平民だということに、あまり拘

らないお方ですの」

「差しつかえなかったら、事情をお聞かせ願いたいわ」

キュルケは興味津々……悪戯好きの子供の様な笑顔で身を乗り出し、ロングビルに寄る。

が、ロングビルは無言の微笑みであしらう。これが『大人の女性』というものか。

「いいじゃないの。教えて下さいな」

と、キュルケがしつこく聞いた時 ルイズがその肩を掴んだ。

「何よ、ヴァリエール」

「よしなさいよ。昔の事を根掘り葉掘り聞くなんて」

「ふん……」

キュルケは面白くなさそうに鼻を鳴らすと、荷台の柵に寄りかかり、頭の後ろで腕を組んだ。

「暇だからお喋りしようと思っただけじゃないの」

「あんたのお国じゃどうか知りませんが、聞かれたくない事を無理矢理聞き出そうとするのはトリスティンじゃ恥ずべき事なのよ」

うゝむ……この話を長引かせると、場の空気が悪くなりそうだな。止めるか……。

「マスター・ルイズ、キュルケ。二人とも、その辺にしておけ。こんなところで言い争いをして、仕方なからう」

「何よ。使い魔のくせに、ご主人様に文句つける気!？」

ルイズめ、『使い魔のくせに』ときたか。カチンとくる物言いだ
が……ここは抑える。

「……そんなつもりはない。ただ……仮にも我らは、一時的とはいえフーケ討伐の任務を共にする同志 仲間だ。互いの不和は、思わぬ禍を呼ぶ恐れがある。些細な事でいがみ合うのは、得策とは言えんのではないか？」

「……あんたに言われなくても、分かってるわよ」

ブスッ……

擬音が聞こえてくるような不貞腐れっぷりだ……。

俺の言う事は理解できる。が、それを他から指摘されて説教されるのは面白くない……といったところか。本当に、プライドの高い……困ったお嬢だ。

「……そうね、ダーリンの言う通りだわ」

何気に聞き分けの良いキュルケ。だが……その顔は、何か悪戯を思いついた子供の様な……妖しい笑みだ。

と、考えた傍から キュルケは俺の右隣に移動してきた。

「安心して、ダーリン あたしがちゃんと、魔法であなたをサポートするわ。あたし達で、『土くれ』のフーケなんて軽くくやつつけちゃいましょ」

ムニユ

密着して二の腕に胸を押し付けられるのは、男としては良い感触なんだが……って、おや？

「なっ！？ちよつとツエルプストー！誰の使い魔にちよつかい出してんのよ！離れなさいっ！！」

「仕方ないじゃない。好きになっちゃったんだもん」

ムギユ！

右腕がキュルケの胸の谷間に挟まる。

非常に男心が刺激される感触だが……、これは……。

「恋と炎はツエルプストーの宿命なのよ。身を焦がす宿命よ。恋の業火で焼かれるなら、あたしの家系の本望なのよ。あなたが一番ご存知 ひゃんっ！？」

ムニ

俺は思わず、つまんでいた。キュルケが驚いて可愛い声を出し、ビクリと身体を震わせた。

はい、そこ！妙な勘違いはするな。

俺がつまんだのは、キュルケの脇腹だ。

「ちょっ、ダーリン！？いきなり何すんのっ！？」

「……うゝむ、やはり」

「え？」

脇腹をつまんだ右手を握って開いてを数回繰り返し、少し離れたキュルケに顔を向ける。

「キュルケ……」

「な、何よ……？」

「おぬし、少し太っておるな」

「なっ！？」

「ぶっ！」

今、噴き出し笑いをしたのはルイズだ。

「ななな！何言ってんのよジーク！？このあたしが、ふ、太ってるですってえ！？」

「脇腹……つまめたぞ」

「うつ……！？」

キュルケは声を詰まらせると、自分の脇腹に手を当て……つまんだ。

「……っ！」

驚愕……&蒼白。どうやら、今まで自分の脇腹をつまんだりしたことが無かったらしい。

「おぬしの様に身体つきに自信を持つ者は、時に己の体形の変化に鈍感になる場合がある。特に、キュルケは胸が豊かだ。おかげで男達の注目も集まり、それが自信を増長させ、己でも気付かぬ内にじわじわと体形の維持に妥協が生じる。悪循環、という訳だ」

「うつ……」

思い当たる節があるのか、キュルケはつまる様な唸り声を洩らす。

「そう悲観する事はない。おぬしはまだ取り返しがつく」

「っ！ほ、本当っ！？」

「うむ」

俺は頷き、余裕を失った表情のキュルケに向き直る。

「おぬしに身体の『弛み』は、恐らく、不規則な生活からくるものであるっ」

「不規則な生活……？」

「言葉の通りだ。朝は何となく気だるく、イマイチ食欲も湧かぬからと、朝食は果物とジュースだけで済まし……」

「っ……！」ギクッ

「昼は眠気も去り、朝食を適当に済ませたが故に腹が減り、デザートまでしっかりと平らげ……」

「っ……！」ギクギクッ

「夜も、出されたワインを煽り、それが食欲を刺激して肉料理などを口にする……」

「っ……！！」ギクギクギクッ

「このような食生活をしておれば……弛む」

「……ングっ」

「おや？今、キュルケのみならず、ルイズと御者席のロングビルまで息を飲んだぞ？」

「さては……あの二人も、同じような食生活をしていたのだな。しようがない女達だ……」。

「食のみならず、普段の生活の些細な行動にも、弛む原因は潜んでいる」

「え！？ど、どんな……？」

恐る恐る尋ねてくるキュルケ。さっきまでの余裕が嘘の様だ。少し面白い。

「例えば 軽い物、重い物を問わず、その場から動かずに『浮遊』レビテーションを用いて取る」

「え？」

「階段を足で歩いて昇らず、『飛行』フライを用いて飛ぶ。これもまた、弛みを生む原因であろうな」

「そ、そのぐらい、メイジなら誰でもやってる事じゃ……」

「甘い！」

「っ！？」

非常に甘ったれた事を言ったキュルケを、俺は一喝する。そして、少し熱血気味に語る。

「その温い^{ぬる}考えが、肉体の弛みを生むのだ！良いかつ！？一度、二度ならいざ知らず、常日頃そのような事をし続けておれば、身体を動かす機会はどんどん失われる！身体は動かさねば弛むのだっ！その証拠に……見るが良い！！」

俺は素早く、隣のルイズの脇腹に手を伸ばす。

スルッ

「ひゃんっ!？」

ルイズの脇腹は、肉を掴む事ができず、ただ指が滑るだけだった。

「見よ!おぬしのは掴めたのに、マスター・ルイズの脇腹は一切掴めぬ!贅肉皆無の見事な肉体!これは、発育の差などでは断じてない!マスター・ルイズが常日頃から己の身体を動かしているが故なのだ!」

何しろ、ルイズは『虚無の担い手』であるが故に、通常の『系統魔法』は使えない。それが、思わぬ所で役立っている訳だ。

『^{レビテーション}浮遊』も『^{フライ}飛行』も使えず、物を取るのも自分が移動するのも、全て己の手足を動かす。些細なことだが、これが大事なのだ。

「キュルケよ……、おぬしは確かに、女性として素晴らしく豊満な肉体を持ち、メイジとしてもその若さで『トライアングル』に至る程の才能を持つておる。が、それが却って、おぬしの慢心に繋がってしまったのだ。皮肉なことにな」

「っ……!？」

キュルケはガツクリと頭を垂れた。自分でも気付かなかった慢心を指摘され、今までの自信が崩れてしまった様だ。

だが、目が死んでいない。いや……むしろ、燃えている？

「……どうすればいいの？」

「む？」

「この忌々しい弛みを無くすにはどうすればいいのかって聞いてんのよッ！！」

「うおッ！？」

お、驚いた……！勢い良くキュルケが顔を上げたかと思えば、さっきまでとは違う迫力のある声で叫ぶものだから……。

「ジークの言う通り、あたし、慢心してたみたい……。屈辱だわ……！『微熱』のキュルケが、自惚れてただなんて……！許せないわ……っ！自分も見えてなかった自分自身が……ッ！こんなあたしは、あたしが認めない！徹底的に叩き直すわッ！！うふふ、初めての経験だわ！恋以外のことで、あたしの『情熱』が燃え上がるなんてッ！！」

「……そ、そうか……」

鬼気迫る笑みを浮かべるキュルケに、思わず引いた……。

その後、俺は考え付く限りのダイエット法をキュルケに伝授した（というか、させられた）……。まあ、俺は専門家ではないので、教えたのは至極簡単な事だけだ。

例えば、食事に関して　メニュー制限はせず、朝はしっかりと、昼はデザート等を少し控えに、夜は腹八分目程度。夕食以降の間食は厳禁。

次に運動 極力『飛行』^{フライ}『浮遊』^{レビテーション}の使用を止め、自分の手足を動かす。あと、朝の起床時と夜の入浴後の簡単なストレッチ。

最後に入浴 サウナでも湯船でも良いので、最低30分。更にエステティック・マツサージの実施 これは、俺が^{ハルケギニア}ここに来る少し前に興味本位で読んだ本に出ていた全身の引き締め効果があるというマツサージを教えた。

ルイズとロングビルもいつの間にか会話に参加しており、俺は彼女らが満足するまで、雑学の限りを尽くして色々とダイエット&美容のアドバイスを続けた……。

おかしいな……？フーケ退治に行く途中のはずなのに、何故こんなことに？

E p i s o d e ・ 5 『盗賊襲来 いや、寧ろウェルカム』(後書き)

いつの間にか、美容の伝道師になっている主人公でした。

次回、フーケとの対面となります。

Episode・6 『交渉成立 信用は大事だ』（前書き）

大変遅くなり、申し訳ありません。仕事のトラブル、季節の変わり目による体調不良、等が重なり、執筆が滞っております。まだ、身体の方がイマイチ調子が悪く、この先も更新が遅くなるかもしれません。

読んで下さっている皆様には、大変ご迷惑をおかけしますが、何卒ご容赦ください。

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告は随時お待ちしております。す。

Episode・6 『交渉成立 信用は大事だ』

学院からお宝『破壊の杖』ことロケットランチャーを盗み出したロングビルフーケを追うという名目で、学院を出発した俺達……。ひよんな事からダイエツト講座が始まってしまったが、そうこうしている内に目的地の場所の近くの森に到着した……。

「ここから先は、徒歩で行きましょう」

ロングビルの一声で、途中で馬車を降り、徒歩で森の小道を進む。

先頭はロングビル。その後ろをルイズ、キュルケ、タバサの順に縦に並び、殿は俺だ。

殿は、俺が志願した。少し、今回の『計画』を整理しておきたかったからだ。

今回の『計画』 その目的は……『土くれ』のフーケこと、学院長秘書ミス・ロングビルこと、マチルダ・オブ・サウスゴータとの友好関係の形成である。

マチルダは、元アルビオン貴族……かつてアルビオン王国サウスゴータ太守の娘だった。しかし、ある事件により、アルビオン王政府に断罪された王弟モード大公共々御家断絶となり、平民に身を墮とし……、それが原因で貴族を憎み、盗賊『土くれ』のフーケとして貴族相手に盗みを働く様になった。

だが、盗賊になった理由はそれだけではない。

むしろ本当の理由は……アルビオンはウエストウッドの森の集落に住まう少女ティファニアと子供達の為だ……。

モード大公とエルフの女性シャジャルとの間に生まれたハーフェルフの娘にして、『虚無の担い手』 このティファニアの救済も、俺の大事な目的の一つだ。

マチルダもティファニアも、アルビオン王政府によって家族を失った。そして、ウエストウッドの集落に隠れ住み、マチルダはティファニア達を養う為に盗みを働き、ハーフェルフ故に外に出られないティファニアは、親を失って各地から集められた孤児達の面倒を見ている。

正直言って……あまりにも理不尽だ。あまりにも不憫だ。

こんな事情を知っていて、見て見ぬ振りはしたくない。勿論、世界中を広く見渡せば、同じような境遇の人々は数え切れない程いるだろう。

だが！マチルダとティファニアの事情に関して、俺は知ってしまったているのだ。

例え、『偽善者』と言われようとも、俺は彼女達を救いたいのだ！

と、勝手に熱くなって少し脱線してしまった。話を戻そう。

で……とにかく、彼女らの救済を実行するには、先ずマチルダと信頼関係を結ぶ事が重要になる訳だ。

今回のフーケ騒動を利用し、俺はそれを何としても成し遂げてみせる。

ついでに、『ロケットランチャー破壊の杖』も使用不能にしておきたい。

あれはハルケギニアには、危険過ぎる武器だ……。万にひとつ、億にひとつ……。あれが研究されて、下手な兵器など開発されれば、碌な事にならない。

まあ、無いとは思うが……。コルベールが『竜の羽衣』こと『ゼロ戦』れいしきかんじょうせんとつぎ正式名称『零式艦上戦闘機』のエンジンを研究し、後に新型飛行探検船『オストランド東方号』を設計・造船する事を考えると、100%安心はできない。

禍の芽は、早めに摘んでおいた方が良い。幸いにして、『破壊の杖』ことロケットランチャーは単発 一度使ってしまったら、後に残るのは空の筒のみ。

故に今回の騒動で、使ってしまうことにした。

その為に考えておいた段取りを、しっかりと確認しておかなければ……。ば……。

と、考えている内に、森の開けた場所に出た。

「私の聞いた情報だと、あの中にいるという話です」
わたくし

森の空き地の真ん中に建つ木こり小屋の廃屋を指差し、ロングビルが言った。

俺達は茂みに身を隠した状態で、作戦会議を行う。司会進行はタバサである。

作戦は原作通り、奇襲。まず、小屋に偵察兼囃、つまり俺が小屋に近づき、中の様子を確認。フーケがいたら誘き出し、いなければ合図。フーケに土ゴレムを作り出す隙を与えず、魔法の集中砲火でフーケを仕留める、という中々物騒な作戦だ。

という訳で、俺はダガーを引き抜いて『ガンダールヴ』パワーを発動させ、小屋に接近。当然、中にフーケがいる訳がないので、気楽なものだ。

素早く窓から中を確認し、ルイズ達に合図を出す。

すると、隠れていたルイズ達が、恐る恐る茂みから出て来た。

「誰もおらん」

俺の一言で、中に踏み込む事になった。

「罨はないみたい」

タバサが『探知』ディテクトマジックで、罨が無い事を確認し、中に踏み込んでいく。キュルケもそれに続いた。

「私は外で見張りをするわ」

「では、吾輩も残ろう」

ルイズに続く形で、俺は外に残る。そして、ロングビルは……

「それでは、私は^{わたくし}辺りを偵察してきます」

そう言つて、森に向かおうとする。

俺はそれを待っていた……！

「待たれい、ミス・ロングビル」

「っ……何か？」

立ち止まり、こちらに振り返るロングビル。

「どこにフーケが潜んでいるか分からん以上、一人で森に入るのは危険である。吾輩の『遍在』を護衛に連れて行くが良い」

俺は手早く呪文を唱え、『遍在』で分身を作り出す。

「い、いえ……私^{わたくし}なら大丈夫です。それでも、一応はメイジですの
で……」

ロングビルは僅かに動揺し、俺の申し出を断ろうとする。だが、
こうなる事は織り込み済みだ……引き下がらんぞ。

「相手は国中を騒がす怪盗メイジ……加えて、あの森の中で不意を

突かれればひとたまりもない。最悪、人質にでも取られれば、吾輩達も危うくなるのだ。良いから、吾輩（の分身）を連れて行け」

「そ、そうですね……、わかりました……（チッ）」

今、小さく舌打ちしたな……。まあいい、些細な事だ。

そして、ロングビルと俺の分身は、連れ立って森の中に消えた……。

さあ、作戦開始だ。

<SIDE：マチルダ>

「……………」

予定が狂ったわ……。まさか、あの赤い服の男 確か、ジークフリートとか言ったかしら？（の『遍在』）がついて来るなんて……。

折角、森に隠れてゴーレムを作り出して、あの娘達と戦わせて『破壊の杖』を使わせようと思ったのに……。このままこいつについて来られたんじゃ、ゴーレムが作れない。

何とかこの男をまいて、一人にならないと……。

「ミス・ロングビル」

「っ！……な、何でしょうか？」

突然話しかけてくるんじゃないよ！ビックリするじゃないか！

「一つ、言っておきたい事がある」

「？何ですか？」

「すまぬ」

「へ……？」

「眠りを導く風よ」

「え……！？」

な、何……？急に、眠……く……。。

<SIDE:OUT>

フッ……

マチルダの目蓋が落ち、その足から力が抜ける。

トサッ

地面に崩れ落ちる寸前で、彼女の身体を抱きとめる。

「すう……」

うむ、良く眠っている。流石は精霊魔法……不意打ちだった事もあり、効果は抜群だ。

これで二時間は目を覚まさないだろう。作戦の第一段階は、余裕でクリアだ。

眠るマチルダを、そつと地面に横たえる。

「さて、と……」

シャツ

腰のダガーを引き抜き、呪文を唱える。使うのは虚無魔法『忘却』念の為、先程俺に精霊魔法で眠らされた記憶を消去しておく。

『忘却』は、消した記憶の部分を別の記憶で補填する効果があるのだが、これだけ短い記憶では多分補填のしようがないだろう。

「……これでよし、と」

マチルダの記憶の改竄が終わったところで、木の陰に身を隠し、ルイズ達の様子を窺う。

本体とのリンクで確認したが、まだキュルケとタバサは小屋から出て来ていない。

タイミングは、ここで良さそうだ。では、作戦の第二段階に移ろ

う。

再び呪文を唱える。今度の魔法は『クリエイト・ゴーレム』
作り出すのは、土ゴーレム。マチルダのゴーレムと全く同じ奴だ。

そろそろ説明しておこう。

俺が考えた作戦は特に難しい事はなく、マチルダがフーケである
事を周囲に悟らせずにこの事件を終了させてしまっ、というだけの
物だ。そうする事で、半ばなし崩し的ではあるが、マチルダに盗賊
稼業から足を洗ってもらおうという訳だ。

マチルダが偵察を装って森に隠れるのに合わせて、『遍在』を使
って彼女を眠らせる。これが作戦の第一段階。

第二段階 俺が土ゴーレムでフーケを演じる事で原作同様の状
況を作る。そして、早々にロケットランチャーでゴーレムを粉砕
フーケはその威力を見て恐れ戦き、退散した事にするのだ。

という訳で……行け、土ゴーレム！適度に暴れる！

「きゃああああああー！」

隣でルイズが悲鳴を上げる。

目の前には、俺（分身）が作り出した30メートル強の土ゴーレ
ム。うむ、どこから見てもフーケのゴーレムと瓜二つだ。

と、ゴーレムの出来を自画自賛している場合ではない。早いとこ

ろ、キュルケ達からロケットランチャーを受け取って、あれを破壊しなければ……！

バゴオオオンッ！

ゴーレムがその腕で、小屋の屋根を薙ぎ払う。すると

ビュウウウウッ！

小屋から竜巻　　タバサの魔法だ。だが、ゴーレムはビクとしない。

ボオオオッ！！

次いで炎　　今度はキュルケの魔法。だが、炎はゴーレムの表面を黒く焦がしただけで消える。

魔法が終わると、キュルケとタバサは廃屋から走り出て、逃げ出した。彼女らを追わねば……！

ボンッ！

「ぬっ？」

弾ける様な音に振り返ると、ルイズが杖をゴーレムに向けていた。

ああ、そうか。ルイズはそういう娘だった。

「よせ、マスター！あの巨体にその程度の魔法では効果が無い！」

と、一応止めてはみるが……

「いやよ！あいつを捕まえれば、誰ももう、私を『ゼロのルイズ』とは呼ばないでしょ！」

こう返される。

ルイズの『失敗爆発』に反応して、土ゴーレムがこちらを向く。

仕方ないな……！

ガシッ

「なっ、何すんのよっ！？」

「問答無用！」

ギョーンッ！

ルイズの襟首を掴み、『飛行』^{フライ}で上空に素早く飛び上がる。

土ゴーレムは腕を振り上げて、俺達を捕まえようと動くが、俺とルイズは既に射程外 届かない。

「放してッ！邪魔しないでッ！」

「いい加減にせんかッッ！！」

「ッ！？」

怒鳴りつけると、暴れていたルイズは目を見開いて萎縮した。

「勇気と無謀をはき違えるな！命を懸ける事と、命を捨てる事は全く意味が違うのだ！頭を冷やせ！！」

すると……

ぼろ、ぼろ……

ルイズが、口をへの字に曲げ、涙をこぼし始めた。

「だって、悔しくて……。私……。いつもゼロゼロって馬鹿にされて……」

ぽつりぽつりと語るルイズ。

どうやら……思っていたよりも、俺はルイズに信頼してもらえていたらしい。本来であれば、ビンター発でようやく絞り出されるはずの本音を、こつもあつさりと……。

なるほど……。この泣き顔を見せられたら、確かに何とかしてやりたくもなる、か……。

「……わかっておる」

「……え……？」

俺は、泣くルイズを姬だっこに抱え直し、その目を見つめる。

「……おぬしが、周囲の罵倒や中傷に必死に耐え、歯を食い縛り、

弱みを見せず、家名を汚さんと必死で努力してきた事は承知して
おる。付き合いは短くとも、そのくらいの事、おぬしを見ておれば分
かるさ……」

「……ジーク」

「だが……！だからと言って、死に急いではならん。おぬしが死ね
ば……ヴァリエール公爵、奥方、ミス・カトレア、それにもう一人
の姉上も、深い悲しみに包まれる。おぬしの命はおぬしのものだが、
勝手に投げ出してはいかんだ」

「……………」

臭い芝居……と言われれば、その通り。だが、これでも本心
舌先三寸で、ルイズを丸め込もうとしたつもりはない。

「ジーク！ルイズ！」

キュルケとタバサが来た。

さて……、これ以上長引かせても仕方がない。仕上げといくか。

「キュルケ、マスター・ルイズを頼む」

「ええ……。ほら！しっかりしなさいよっ！」

キュルケは俺からルイズを受け取り、叱咤する。

「あなたも早く」

タバサが、俺にもシルフィードの背に乗る様に促してくる。

が、俺は乗らない。

「……ミス・タバサ。その手に持っているのが『破壊の杖』か？」

コク……

タバサは無言で頷く。

「貸してくれ」

「……？どうするつもり？」

尋ねてくるタバサに対し、俺は端的に答える。

「あのゴーレムを破壊する」

「「「え……！？」」」

ルイズ、キュルケ、タバサの三人が驚きの声を重ねる。

「呆けておる暇はないのだ！早くしろッ！！」

「……」

少し躊躇い気味に、タバサはランチャーを俺に渡した。

ギョーンッ！

俺はそれを受け取り、素早く地面に降りる。

「ジーク！」

「来るでない！少し離れている！巻き添えを喰うぞッ！」

叫ぶルイズに返す形で言うと、シルフィードが離れた。

まあ、いくらロケットランチャー 正式名称『M72 LAW』
、66ミリ口径対戦車ロケットランチャーとは言え、巻き添えを喰
うほどの爆風と衝撃が飛ぶ事はないだろうが、一応な。

「さて、と……」

土ゴレムは、降りてきた俺に向かって来ている。勿論、俺がそ
う動かしている。

この芝居もそろそろ飽きてきた……。さつさと、片付けてしまお
う。自分で作った土ゴレムを自分の手で破壊する、というのも可
笑しな話だが……。

それはさておき、手早くランチャーの発射準備にかかる。

安全ピンを引き抜き、リアカバーを引き出す。インナーチューブ
をスライドさせ、引き伸ばす。照準装置を立ち上げ、本体を肩にか
ける……。

『ガンダールヴ』のルーンのおかげで、ランチャーの情報が頭に
流れ込んでくる。正式名称はさておき、威力や口径数などの詳細な
データまで分かるとは、便利なものだ。

照準をゴーレムに合わせる。

安全装置を解除 発射！

ボシュツッ！！

思いの外、気の抜けた音がして対戦車榴弾が撃ち出された。咄嗟に耳を塞ぎ、目を閉じる。

そして

ズガアアアアンツツッ！！！！

ぐうう……！耳を塞いでいるというのに、凄い爆音だ……！

パラパラパラ……

目を開けてみると、ゴーレムの上半身は跡形もなく、白い煙を上げた下半身だけが残っており……やがて崩れ落ちた。

とんでもない威力だ……。あの土ゴーレムには、そこそこの強度があつたはずなのに……。

これなら『300ミリ以上の装甲を貫通できる』というデータにも納得がいく。ここで使っておいて、やはり正解だったな。

「ふう……」

ポン、ポン……

ランチャーを発射前の状態に縮め、服に付いた土埃を払う。また地球の家に戻って、洗濯しなければ……。

バサッ！

お、シルフィードだ。ルイズ達が降りて来たか。

「ジーク！」

と、声を上げたのはルイズ。

だが、それを追い越す様に、キュルケがシルフィードから飛び降り、駆けて寄って来た。

「ジーク！ 凄いわ！ やっぱダーリンね！」

スカッ！

抱き付こうと飛びかかってきたキュルケを、俺は避ける。これは『お約束』というものだ。

「フーケはどこ？」

いつの間にか傍に来ていたタバサが呟く。

「残念ながら、逃がした……」

「「えっ！？」」

俺の用意しておいた言葉に、ルイズとキュルケが驚きの声を上げた。

注目したルイズ達三人に対し、俺は説明する。

ロングビルと共に森に偵察に入った『遍在』だが、途中でロングビルを見失った……。

『何処へ行った？』と辺りを探すと、倒れたロングビルと黒マントを発見　すぐさまダガーを抜いたものの、黒マントに気付かれ、ロングビルを人質に取られ硬直状態となる。

そのまま黒マントと対峙　これが、土ゴーレムが現れた直後。

ロングビルを人質に取られており、迂闊に攻撃する事ができず、しばらく隙を窺うように止まっていたが……俺（本体）が『破壊の杖』で土ゴーレムを粉碎した瞬間に、黒マントが動揺して隙が出来た。

その隙を突いて、『遍在』はロングビルを救出　形勢逆転、不利とみたらしい黒マントは退散した　以上。

流石に不自然さが無い様に、昨夜寝る前に念入りに考えておいた台本　ルイズ達は、しっかり納得してくれた。よしよし、素直な娘達だ……。

で、説明の間に、俺の『遍在』も眠ったマチルダを抱えて合流。全員揃ったところで、俺が手綱を握る馬車で帰路についた。

その途中

「う……うう、ん……？」

精霊魔法の効果が切れた様で、マチルダが目覚めました。

「あ、ミス・ロングビル！目が覚めましたか？」

「え……あ、れ……？こ、ここは……？」

目覚めたマチルダにルイズが声をかけるが、彼女は現状を把握できず、戸惑っているようだ。

「覚えていないんですか？ミス・ロングビル、フーケに眠らされて人質にされかけたんですよ？」

「え……？……ええ！？」

キュルケの説明に対する今の「ええ！？」は、『そんなことがあったのかー！？』ではなく……『そんな馬鹿な！フーケは私よ！？』だったな、多分。

「ジークがゴーレムをやっつけて、フーケを追い払ってくれたのですわ。あの時のダーリン、カッコ良かったわ」

「それはどうも」

御者席に身を乗り出して流し目を送ってくるキュルケを受け流し、

俺は戸惑うマチルダに顔を向ける。

「面目無い、ミス・ロングビル。護衛を買って出ておきながら、みすみすフーケに人質に取られてしまい……」

「え……は、はあ……？」

マチルダは、まだ状況に理解が追いついていないようだ。

この様子を見るに、『忘却』の魔法はしっかり効いているらしい。

「魔法か、魔法薬で眠らされただけだろうから、身体に異常はないと思うが、学院に戻ったら一応大事を取って休むことを勧める。あとで何かあるといかんからな」

「え、ええ……、そ、そうしますわ。……??？」

未だ混乱の渦中にあるマチルダ。

だが、マチルダの事……彼女にとって訳の分からないこの状況で、また行動を起こそうとは思わないだろう。ここで行動を起こすぐらいなら、わざわざ俺達を学院から離れた森の廃屋に誘い込むような回りくどいことはしない。

このまま何の対処もせずに学院に戻ったら、いつか再びランチヤ―を盗み出そうとはするかもしれないが、その点も抜かりはない。ちゃんと今日中に、マチルダには盗賊から足を洗ってもらう予定だ。

上手く話し合えると、良いのだが……。

<SIDE:マチルダ>

どういこと……？

あたしは確か……、このお嬢ちゃん達を、森の廃屋まで誘い込んで……ジークフリートとかいう男の『遍在』と森に入って……。

……。

……。

……。

駄目だ、思い出せない……。森に入ったところで、記憶がブツツリ途切れてる……。

そこから、気がついたらいきなり帰りの馬車の上……訳が分からない。

それにしても……折角、魔法学院の宝物庫から『破壊の杖』を盗み出して、その使い方を調べる為に学院関係者を誘き出したって言うのに……結局何もしないまま、こうして取り戻されてしまうなんて……。

こうなった原因……、考えられるとすれば……ただ一人。

「……」

御者席に座り、手綱を握るジークフリートとかいう男……こいつ以外に考えられない。

森に入った時、あたしの傍にはあいつの『遍在』しかいなかった。

しかも、お嬢ちゃん達の話では、『土ゴーレムが襲ってきた』『あたしがフーケに捕まって人質にされた』ということになっているし、『土ゴーレムとフーケを撃退したのはジークフリート』だというし……。

『土くれ』のフーケはあたしなんだから、あたしが人質にされるなんて事はある得ない。あたしが今まで意識を失っていたんだから、土ゴーレムだって現れるはずがない。

これらのことから考え付く推理は『あの男があたしを魔法が何かで眠らせ、その間に土ゴーレムを作り出し、フーケを演じてお嬢ちゃん達を襲い、それをあいつ自身が撃退した』という事……つまり、あの男の芝居を打ったという事だ。

もし、この推理が正しければ……奴は、あたしがフーケだと気付いている事になる。

でも、そうするとまた疑問が出てくる『何の為にそんな真似をしたのか?』という疑問が……。

そんな手間のかかる事しても、あの男には何のメリットもないはずなのに……。

「……………」

馬車に揺られながら、奴の様子を窺う……。

「……………」

鼻歌なんて歌いながら、呑気な顔で手綱を握っている……。得体の知らない男だわ。

「……………」む？ミス・ロングビル、何か？」

「！いい、いえ……………！なんでも、ありませんわ！」

と、とにかく、あたしの推理が正しいにしろ間違いにしろ、今強引に『破壊の杖』を奪って逃げるのは得策じゃないのは確かだわ。

もし、本当にあの男があたしの正体に気付いているなら、下手に動けば『破壊の杖』どころかあたしの身も危ない。

こうなったら仕方がない……………少し惜しいけど、『破壊の杖』は一旦諦めよう。

あの子達の為にも……………、あたしは捕まる訳にはいかないんだから……………。

<SIDE:OUT>

『破壊の杖』を無事に取り戻し、学院に戻った俺達は、オスマンに事の次第を報告した。

原作と違い、フーケは取り逃がした事にしてあるので、ルイズ達に王室からの褒賞はない。まあ、原作でも戦争が近く、周囲の貴族への配慮という事で『シュヴァリエ』の爵位は授与されなかったから、同じ事だ。

代わりに学院から、俺以外の各々にほんの少しばかりの褒美が与えられる事となり、取りあえず一件落着となった。

「さて、今日の夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。この通り、『破壊の杖』も戻ってきたし、予定通り執り行う」

「そうでしたわ！フーケの騒ぎで忘れておりました！」

舞踏会と聞いて、キュルケが顔を輝かせる。

「今日の舞踏会の主役は君達じゃ。用意して来たまえ。精々、着飾るのじゃぞ」

オスマンの締め言葉で、一同は解散となる……が、俺はまだ、オスマンに話がある。

「マスター・ルイズ。すまぬが、先に行っていてくれ。吾輩は、オールド・オスマンに少し尋ねたいことがある」

「……わかったわ」

ルイズは少し不安そうな顔をしたが、頷いて部屋を出て行った。

「して……ワシに聞きたい事とは、何じゃな？ワシに答えられることならば、何でも答えよう。君に表立って褒美を授ける事ができんが、せめてものお礼じゃ」

そう言うてからオスマンは、コルベールとマチルダに退出を促した。

マチルダは流石に素直に（内心はわからないが）従ったが、ワクワク顔だったコルベールは名残惜しそうに渋々退出していった。

室内に俺とオスマンの二人だけになり、俺は要件を話す。

「あの『破壊の杖』と呼ばれている品、一体、何処で手に入れたのだ？」

「……何故、そのような事を聞くのかね？」

「あれは、吾輩が元いた世界で作られた、恐るべき兵器なのだ」

オスマンは目を細める。

「ふむ。元いた世界とは？」

「吾輩は、この世界の人間ではない」

俺は、地名や国名、魔法の有無に関わる部分を伏せ、自分がハルケギニアとは全く違う異世界から『サモン・サーヴァント』を通じてやって来た人間である事を明かした。勿論、辻褄^{つじつま}を合わせる為に

若干の作り話を織り込んでおいた。

詳しい事は、いずれ必要になったら話す。必要がなければ、話さない。これが、俺の基本方針だ。

俺の話を黙って聞いた後、オスマンは溜め息を一つ吐き、徐に語った。

「……あれをワシにくれたのは、ワシの命の恩人じゃ」

「その恩人とやらは、今は何処に？」

「死んでしまった。今から、三十年も前じゃ」

その後のオスマンの話は、原作の通り。三十年前、森でワイバーンに襲われたオスマンを、地球から来た男がランチャーでワイバーンを粉碎し、命を救ったのだそうだ。

そして、その男は負っていた怪我が元で、オスマンの看護の甲斐もなく息絶えたという……。

ある程度予想はしていたが……やっぱり原作と同じか。

一応、その男の服装や、服のどこかに所属が分かりそうなマークの有無など聞いてみたが、オスマンも覚えておらず、男の遺留品もランチャー以外は残っていないとかで、詳しい事は分からなかった……。

「ワシは彼が使った一本を彼の墓に埋め、もう一本を『破壊の杖』と名付け、宝物庫にしまい込んだ。恩人の形見としてな……」

そう語るオスマンの目は、どこか遠くを見つめていた。

「彼はベッドの上で、死ぬまでうわ言のように繰り返しておった。

『ここはどこだ。元の世界に帰りたい』とな。きっと、彼は君と同じ世界から来たんじゃないかな」

「うむ……恐らく、何処かの国の兵士であろう」

実際にその男を見ていない上に、『ゼロ魔』自体がフィクションで年代も正確ではないので、あまり確かな事は言えないが、原作の『ゼロの使い魔』一巻の初版が2004年6月だった事から考えると……、恐らくは『ベトナム戦争』に出兵していた兵士じゃないかと思う。あれは1960年12月から1975年4月まで続いた戦争だから、年代的には符合する。

その中の一人が運悪く、異世界から『ガンダールヴ』の武器を呼び込む『歪み』の様なものに巻き込まれて、ハルケギニアに来てしまった　という事なのではないだろうか。

まあ、俺がいた『現実』^{ノンフィクション}の地球から来たのか、『架空』^{フィクション}の地球から来たのかは、確認しようがないから分からないが……。

それにしても……考えてみれば、気の毒な話だ……。いきなり異世界に迷い込み、そこで独り、命を落とすことになるうとは……。

せめて、その男の冥福を祈ろう……。

「……君も、元の世界に帰る事を望んでおるのかの？」

オスマンが神妙な顔で、そんな事を尋ねてきた。どうやら、黙っていたのを見て勘違いさせたようだ。

「いや、吾輩はその男とは違う。この場にいる事に納得している。マスター・ルイズの使い魔という立場も、苦には思っておらん」

何しろ俺はチート能力により、『ワールド・ドア世界扉』を使って、自由に地球とハルケギニアを往復できる訳だしな。

と、それは良いとして……確認したかった事は確認できた。もういいだろう。

「吾輩が聞きたかった答えは聞いた。感謝する、オールド・オスマン」

「いや、感謝するのはワシの方じゃ。よくぞ、恩人の杖を取り戻してくれた。改めて礼を言うぞ」

「吾輩は、主あかじの共をしたに過ぎぬよ」

それで話は終わり 俺は帽子を取って一礼し、学院長室を後にした。

しかし……少しだけ不安が出てきたな。

死んだ兵士が、果たして『ノンフィクション現実』の人物なのか、『フィクション架空』の人間なのか……。『フィクション架空』ならば問題ないが、万が一『ノンフィクション現実』の存在だ

っ
たら……。

俺の、考え過ぎだと良いのだが……。

その夜

「……………」

ここは『ヴェストリの広場』　そして、ここにいる俺は『遍在』
本体は『フリッグの舞踏会』の会場の端で、料理をつまんでいる。

何故、俺がこんな場所にいるかというと……ある人物を待っているからだ。

ザッ、ザッ、ザッ……

どうやら、来たようだ。

「よく来てくれた」

「……………」

声をかけると人物は立ち止まり、こちらを向いた。

「来なかったらどうしようかと不安になっていたところだ」

とあるFFの名物キャラの台詞などを口走りつつ、やってきた人物に姿を見せる。

「……やっぱり、あんただったのね。こんな手紙を、あたしの服に忍ばせたのは……」

その人物が、一枚のメモ用紙を俺に突きつけてくる。

そこにはこう書いてある

『二人だけで話したい。『フリッグの舞踏会』が始まる頃、『ヴェストリの広場』にてお待ちしている。マチルダ・オブ・サウスゴータ殿』

そう……。俺が待っていたのは他でもない、マチルダだ。

ちなみに手紙は、森で眠らせた時に、彼女の服のポケットに入れておいた。

「……聞かせてもらおうじゃないの。何処で調べたのか知らないけど、人の古い名前まで使って呼び出した、その話ってヤツをね……」

警戒心満々だな……。だが、この程度は覚悟の上だ。

「単刀直入に言おう。ミス・マチルダ、吾輩の仲間にならんか？」

「は？」

マチルダの目が点になった。さっきまでの警戒心も、一瞬だが消し飛んだ。

「吾輩は今、ある計画を遂行する為に陰ながら動いておる」

「計画？」

「うむ。ただ、その計画……吾輩一人では中々大変でな。優秀な協力者が欲しかったところなのだ」

「……全然話が見えないわ。その計画っていうのは、一体何なのよ？」

「『聖戦阻止計画』」

「!？」

『聖戦』の単語に反応したか、マチルダの表情が強張る。

「まだ陰で流れる不吉な噂程度の情報だが……ロマリアが、『聖戦』に向けて緩やかに準備を進めているという話がある」

「ま、まさかっ!？」

マチルダが焦りを含んだ声色で言う。

勿論、実際はそんな噂は流れていないだろうし、流れていたとしても俺が聞いた訳でもない。第一、現ロマリア教皇ヴィットーリオは、ジョゼフとは別の意味で恐るべき頭脳の持ち主……、『うっかり情報を漏らす』などというヘマはやらん。

自分自身が『虚無の担い手』であることを早い段階で知り、他の

『虚無の担い手』も同時期に出揃う事も予測がついているはずだ。

で、現在は手駒^{ジュリオ}を使って、『火のルビー』と他の『虚無の担い手』を搜索中、と……。

「おぬしも知つての通り、『聖戦』が発動して『聖地』が取り戻せ
た例^{ためし}はない。エルフ達は全てが強力な魔法の使い手だ。我らが束に
なつてかかるうと、無残に敗北を喫するのがオチであり、今日^{こんにち}まで
の歴史でもある。『聖戦』など、悪戯に国を疲弊させるだけの愚行
だ。何としても、阻止せねばならぬ」

「……あんたの話が本当なら、確かにその通りね」

本当なら……か。まあ、話だけでは与太話と言われても仕方がない。

それにこれは、マチルダの関心を引く為のエサのようなものだ。
別に、事の真偽はどうでもいい。

「そんな訳で、吾輩は信用のおける協力者が欲しい。協力してはく
れぬか？ミス・マチルダ」

「信用のおける、ねえ……。あんた、会って間もない、このこそ泥
を信用するっての？」

多少皮肉っぽく尋ねてくるマチルダ。意表を突かれたお返しのも
りか？

なら、俺は更に意表を突いてやろうじゃないか。

「フッフッフッ……」

不敵に笑って見せる。すると、マチルダは怪訝な顔をする。

「な、何よ……?」

「吾輩が、何も知らずにおぬしを信用していると思っているのか?」

「え?」

「フッフッフッ、吾輩は知っているぞ。おぬしが、アルビオンはウエストウッドの集落にある小さな孤児院に、生活費を送っている事を」

「っ!?!」

「盗賊として貴族から奪った物品を闇で捌いた金……、ここで学院長秘書として得ている給金……。おぬしは、自身の必要最低限の生活費を除き、ほとんどの金をそこに送っておるだろう」

「ど、どうしてそれをつ!?!」

「フッフッフッ、これでも情報には敏いのだ」

「……………」

マチルダは、愕然としている様だ。

まあ、当然だな……。ある程度　マチルダの正体ぐらいなら、裏社会の情報網で何とか掴む事ができるが、彼女が孤児院に送金し

ている、なんて細かい事実まで調べ上げる輩はいないだろうからな。

俺は調べた訳ではなく、原作を読んで知っているだけだ。

「盗んだ金品で私腹を肥やすだけの輩ならば取るに足らん、正に『こそ泥』だが……おぬしは違う。誰かの為に、何か出来る。吾輩は、そんな人間こそ信用する」

「……」

<SIDE：マチルダ>

「……」

この男、何とも底が見えないって言うか……、分からないわ……。

あたしの古い本名やウエストウッドの孤児院の事を知っているわ……、敵だったあたしを仲間にしよとするわ……、『聖戦』を阻止しようとか言い出すわ……。

こんなあたしを、『信用する』とか言い切るわ……。

あたしが『誰かの為に、何か出来る』人間……？

そんな事言われたの……、生まれて初めてだよ。

「……聞きたいんだけど」

「なんだ？」

「あたしがここで『断る』って言ったら、どうする？」

「頼み込む」

「……何だって？」

ジークフリートの余りの即答ぶりと、余りの珍回答に、あたしは自分の目が点になったのを実感する。

今の質問はある意味『探り』で、どんな反応が返ってくるかで、この男の真意が少しは分かるかも知れないと思ったんだけど……全然分からない。

予想の遙か斜め上をいく答えが返ってきた……。

「吾輩にはどうしても、おぬしが必要なのだ。故に、おぬしが願ってくれるまで、何度でも頼む。おぬしが了承してくれるまで、決して諦めぬ」

「……………」

こいつ……、本気で言っている。あいつの目が、本気だわ……。

どうして？ どうしてそこまで、あたしを……？

「……なんで、そこまでして、あたしなんか拘るんだよ？ 優秀なメイジなんか、余所に幾らでもいるだろうに……」

「まあ、居るのだろうが……吾輩の知る中には、おぬしかおらぬ。実力、実績、性根……これらを兼ね備え、尚且つ吾輩が信頼できると踏んだ人物は、な」

ここまで言い切られると、悪い気はしないねえ……。

<SIDE:OUT>

「……全く、困った奴だね。他人の都合なんか考えないんだからね」

フーケは口元をクツと歪め、不敵に笑いながらそんな事を言う。

「つまり、あたしに選択の権利なんてないって事じゃない」

「そんな事はあるまい。延々と頼み込む吾輩を、おぬしが延々断り続ければ良いのだから。まあ、吾輩は諦めんが」

「それって、遠回しの強制。でしょ？」

俺にそんなつもりはないのだが……まあ、受け身のマチルダからするとそうなるか。

「そうだな。そういう事になるだろう」

ここは素直に認めておく。実際、是が非でもマチルダを仲間にしたい。ティファニア達を救済したい訳だから、『強制』というのも間違いではない。

ワルドの様な脅しなんて、あくどい真似はしない。が、あくどくなければ手段は選ばない。それが、俺のやり方だ。

「だったら、ハッキリ『仲間になれ』って言いなさいな。命令もできない男は嫌いだわ」

確かこの言葉、マチルダがワルドに対して言った答えと同じだな。

ようし、お望みとあらば、そうしようではないか。

「吾輩の仲間になれ、マチルダ」

そして、右手を差し出す。

すると……

「良いわ。仲間になってあげる」

ギュッ

マチルダが俺の右手を握った……。

こうして俺は、『フリッグの舞踏会』の陰でマチルダを仲間に引き入れる事に成功。正直、どうなる事かと不安だったが……、上手く仲間に引き入れられて良かった。

これで、マチルダとティファニアと孤児達に満足な生活をさせてやれる。後々、^{のちのち}ロマリアに利用されない様に匿ってもやらないとな。

その為の隠れ場所にも、考えがある。

その為にも……、次はタバサの番だ。

Episode・7 『家族 何よりも大切なモノ』（前書き）

遅くなりました。体調は何とか回復したのですが、中々良いアイデアが思い付かず、時間が掛かってしまいました。何とか、上手く書けていると良いのですが……。

今回はタバサ、というかガリアの『王家族』おうかぞくの救済編になります。

一話で全て詰め込むと字数が多くなり過ぎるので、二話に分けてお送りしたいと思います。

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。

Episode 7 『家族 何よりも大切なモノ』

マチルダを仲間にする事に成功した翌朝 俺は早速、タバサと彼女の母親を救うべく、こっそりと『遍在』をガリア王ジョゼフの元へと送った。

ついでに……ガリア王族の方々のわだかまりも、出来れば解消しておきたいところだ。

シュンッ！

『瞬間移動』完了 ここは『グラン・トロワ』、ジョゼフの部屋の間……カーテンで仕切られた一角だ。

以前来た時に、あらかじめジョゼフに頼んでおいた『瞬間移動』の移動地点だ。

この時間なら、ジョゼフは既に起きて朝食を取り終えているはず……。

スッ……

カーテンを少しだけ開き、中の様子を窺う。

すると……

「……………」

ペラッ……

執務机に着き、何かの書類に目を通して、ジョゼフの姿があった。

他に人は……見当たらない。一応、精霊魔法で調べる……。

うん……いないな、よし。

パサッ

俺はカーテンから出て、姿を現した。

「……む？おお！婿殿ではないか！久しぶりだな！」

俺を見とめると、ジョゼフは破顔して弾んだ声を上げた。

「お久しぶりでございます、ジョゼフ陛下。御健勝のご様子で何より」

「ああ、すごぶる健勝だ。多少、政務が忙しくなったがな。近頃はそれすら心地良い」

そう言つと、ジョゼフは手に持った書類をヒラヒラと揺らして見せる。

「何か問題でも？」

「大した事ではない。これは、ただの業務報告だ。おお、そうだし、一つ、お前に良い報せがあるぞ」

「良い報せ……ですか？」

「ああ、地下に眠る風石の鉱脈の事だ」

「っ！」

前に来た時に、伝えておいた事柄だ。場所の調査と、出来れば、発見次第早急に採掘しておいてほしいと頼んでおいたのだ。

「それで、その後どうなりました？」

「内密に調べさせたが、ガリア領内だけでも既に十数力所、地下に眠る大鉱脈が発見された。交渉で配下にしたエルフの話では、どの鉱脈も放置すれば、数年以内に限界を迎え、大地が空に浮かび上がるそうだ」

配下にしたエルフ……ビダーシャルの事が。

「やはり、そうでしたか……」

たった一週間（8日）ちよつとの調査で、しかもガリアだけで十数力所……思ったよりもずっと多い。この分だと、まだまだ増えそうだ。

だが、まだ数年の猶予がある。それなら、何とかかなりそうだと、そうだ。限界が目前に迫っている場所があった。

「陛下。火竜山脈地下の鉱脈は、どうなりました？」

「あそこは既に採掘を始めている」

「本当ですか？」

「ああ、あそこは最も限界が近いらしくてな。エルフと余のミューズ『ミューズ・トリプル神の頭脳』に、採掘作業を任せてある」

「なるほど」

それなら安心だな。ビダーシャルの精霊魔法とシェフィールドの『ガーゴイル魔法人形』を併用すれば、安全かつ迅速に採掘ができるだろう。

「未だ採掘は終わらんが、フフフツ……！これまでに掘り出された風石だけでも、とんでもない量だぞ？」

ジョゼフは、噴き出すのを堪える様な含み笑いを浮かべる。

「と、申されますと？」

「フフツ……空軍を年中遠征させても、向こう十年は余裕、というほどだ」

「そ、そんなに……！？」

さすがにガリア空軍の規模やら、一度の遠征にかかる風石量やは知らんが……大国ガリアの空軍ともなれば、その規模も半端ではなく、同様に消費する風石量も半端ではないはずだ。

それが向こう十年遠征し放題だと言っただから……とんでもない量なのだろう。

「余と弟の仲を取り持つてくれたばかりか、ガリアにこれ程の利益をもたらしてくれるとは。お前のおかげで、我が国の未来は明るい！感謝するぞ、ジークフリート！」

「お、お役に立てたならば、何よりにございます」

と、軽く会釈したところで　そろそろ本題に入ろう。

「陛下。吾輩本日は、陛下にお願いしたきことがあり、ここに参上いたしました」

「ほう、お前から余に頼みか？何でも言ってみろ。未来の義息子の頼みとあらば、大抵の頼みは聞いてやるぞ！」

未来の義息子は、ともかく……ジョゼフが俺に好意的なのは有難い。

「で、一体何なのだ？その頼みとやらは」

「は。今は亡きシャルル殿下の忘れ形見、シャルロット様とその母君の事にございます」

「……ふむ。我が姪と義妹いもつとか……」

ジョゼフは、少し神妙な表情と声色に変わる。

「……それで？あいつらをどうしたいと言っただ？」

「あのお二方のみならず、陛下とイザベラ姫殿下にも関わる事にございます」

「何？」

若干戸惑いの色を滲ませるジヨゼフ。

そんな彼に、俺はこう告げた。

「陛下。吾輩、『家族』は仲睦まじくあるべき　　そうであってほしい　　と、考えております」

<SIDE：タバサ>

「……………」

「きゅいきゅい！全く、あの意地悪姫ったら！お姉さまとシルフィが一生懸命任務を終わらせて来たっていうのに、伝言なんか残していなくなっただけに！」

シルフィードが不機嫌な声で喚く。

北花壇騎士の任務を終えた私は、シルフィードの背に乗り、『あの場所』を目指して飛んでいる。

今回の任務は、リュティスの北東側にある繁華街、その東西に延びる通り『ベルクート街』のとある賭博場の取り締まりだった。問題の賭博場の主のギルモアという男は、『エコー』という『先住

魔法』を扱える動物を利用して、見破られないイカサマで客から大金を巻き上げていた。

そこで、昔……オルレ안의私の屋敷で、コック長を務めていたトーマスと出会い、彼と戦うことになった……。彼は、自分を拾ってくれた恩義から、ギルモアのイカサマに加担していたのだ。

『彼らを逮捕しろ』という命令は受けていなかったから、魔法で眠らせて、適当な宿に置いてきた。ギルモアはともかく、昔、良くしてくれたトーマスを罪人にしたくはかったから……。

それで、いつものように小宮殿^{プチ・トロワ}に戻り、任務報告をして任務終了……と思つたら、そこにいつもいるはずの、従姉^{イザベラ}の姿がなく、代わりに言伝が残されていた。

『任務が終了次第、オルレアン邸へ向かえ』

こんな事は初めてだ……。一体、何をしようというのだろうか？

もし……万が一……母様に、心を奪われた母様に何かしようというのなら……その時は……。

「きゅ、きゅい？お姉さま、どうしたのね……？何だか、背中の鱗がピリピリするのね……」

「……何でもない。それより、急いで……」

「きゅ、きゅいーりよ、了解なのねっ！」

ギュンッ！

シルフィードが力強く羽ばたき、速度が上がる。

母様……。

<SIDE：イザベラ>

「……………」

「まったく、一体どうなってるんだい……？何故、私がオルレアンの屋敷に来なくちゃならない……？」

事の始まりは、数日前……。

エレ……『七号』に賭博所の任務を与え、あいつが出発した翌日だ。いきなり、今まで顔を出したことさえなかった父上……ジョゼフがやって来て、私にこう言ったんだ。

『出掛けるぞ、イザベラ。支度をしろ』

やって来たのも突然なら、言う事も突然だった。最初、『何を言ってるのか？』と、我が耳を疑ったよ……。

それだけ言うと、父上は部屋から出て行き、私は訳も分からないまま、取りあえず身支度を整えて、小宮殿を出たんだ。^{フチ・トロワ}そして、玄関前で止まっていた馬車に、父上と一緒に乗り込んで……オルレア

ンの屋敷まで来て……あの赤い服の男　ジークフリートに会った。

詳しくは分からないけど、父上が言うには『自分の大恩人』だそうで……、その上……その上……！

私の！？『未来の夫』おおっ！？冗談にも程があるよっ！！

あの男も、父上がそう言った時は『ハ、ハハ……』って苦笑いしてたし……！失礼な奴だね！

父上はまるで人が変わったみたいだ。私の勘では、それもあの男が関わっていると見たね！

で、その後……父上と、ジークフリートと、私の三人で、心を失った……叔母上に会いに行ったんだ……。

覚えているさ……。叔父上　オルレアン公が謀殺されて、その弔いと銘打ち、宮廷で開かれたパーティの最中、あの子に渡された飲み物に『毒』が仕込まれていて、叔母上があの子を庇ってそれを飲み、心を病んだ……。

……知ってはいたけど、正直、見て気分の良いもんじゃなかったよ……。

虚ろな瞳……、痩せこけた身体……、枯れ木の様な細い腕に小さな人形を一つ、大事そうに抱きかかえ、叔母上はベッドの上にいた……。

ちよつとだけ、見覚えがある。あの人形は、昔……あの子が大事にしていた人形……。

今更だけど……その姿は痛々しくて、顔を背けたくなる思いだった……。

部屋に入った私達に気付いた時の叔母上は、怯えたように顔を歪め……

『誰……っ！？下がりなさい無礼者っ！王家の回し者ね！？私からシャルロットを奪おうというのねっ？誰があなた方に、可愛いシャルロットを渡すのですか！』

まるで、何かに取り憑かれたかの様に、人形を抱き締め、叔母上は私達に向かって喚き続けた……。

『恐ろしや……！この子がいずれ王位を狙うなどと……、誰が申したのでありましょうか。薄汚い宮廷の雀達にはもううんざり！私達は静かに暮らしたいだけなのに……下がりなさい！下がれ！！』

そう言って、テーブルに置いてあったグラスを投げつけてもきた。

幸い、私にも父上にも当たらなかった……。

記憶におぼろげに残っていた叔母上は、美しく、慈愛に満ちた笑みを浮かべていたっていうのに……、今やこの変わり様……。

口には出さないけど……、見ているのが辛かった。私にだって、そのぐらいの良心はある……。

その時……父上がぽつりと呟いた言葉がある。

『なるほど……。俺は、これに何も感じなかったのか……。』

何を言っているのかは、良く分からなかったけど……。

父上は、悲しそうな……。寂しそうな……。それでいて怒っているよ
うな……。とても複雑な面持ちだった。

それからもう二日……。私達はこの屋敷に泊まり込んでいる。

何故私が？と不満に思わないでもないけど、父上が『しばらく滞在する』と言う以上、文句なんか言えようはずもない……。

父上は、あれから日に一回は必ず叔母上の様子を見に行っている
みたい……。

ジークフリートって男は、私達を叔母上と会わせた後、父上と二、
三言葉を交わして奥の部屋に籠ったきり……。

おかげで、私は寝室と広間を行ったり来たり……。する事も、出
来る事もなく、暇潰しの相手もない……。

屋敷でただ一人の使用人　ペルスランとかいう老執事はいるけ
ど……。父上に『ここにいる間は、おとなしくしている』と言われ
ている。

それにしても、あの老いばれ……。顔には出していないけど、あい
つも、私や父上に良い感情は抱いていないね……。

当たり前だろうけどさ……。

「……ふん……」

居心地が悪い……。イライラする……。

まさか、こんな気分を味わう事になるなんてね……。

なんだって、私がこんな……。『罪悪感』なんて……とっくに忘れていた感情を、掘り起こされなくちゃならないんだ……。

ガチャ……

「イザベラ姫殿下、こちらでしたか」

苛立っていた矢先、ジークフリートが広間に顔を出した。

「……何の用だい？私は今、機嫌が悪いんだよ」

実際に気分が悪かったから、睨みつけてやったんだが……

「そのようすな。ですが……その苛立ちは一旦治め、吾輩について来て頂きたい」

ジークフリートの奴……、まるで何事もないみたいに返してきた。

こんな反応は初めてだ……。調子の狂う男だね……。

「……何処へさ？」

「オルレアン夫人の寝室にございます」

「はあ？」

叔母上の部屋にだって？

「なんで私が、またあの部屋に行かなくちゃならないんだい？」

行っただって、また叔母上は私達を見て怯えて、喧しく喚くだけだろうが……。

「は。これより夫人の解毒治療を行います故、姫殿下にも是非に立ち会って頂きたいのです」

「え……？ げ、解毒だって……！？」

確か……叔母上が飲んだのはエルフが調合した『特殊な水魔法』の毒で、普通のメイジには解毒薬の調合ができないものだって聞いてたけど……。

「あ、あんた……、叔母上の解毒薬を調合できたっていうのかい？」

「御意。これが、その解毒薬にございます」

ジークフリートはそう言って、手に持った小壺を見せた。

な、何者なんだい、この男……？

奴は、解毒薬の小壺をしまい、私の前に歩み寄って来た。

「既に、ジョゼフ陛下とペルスラン殿は、夫人の寝室へ向かわれました。あとは、吾輩と姫殿下のみ。さあ、参りましょう」

「……ち、父上も？」

「は」

どうということだ……？

そもそも、叔母上の毒は父上が飲ませた物のはず……。なのに、解毒薬を作る男を引っ張って来て……。しかも、治療に立ち会ったなんて……。

人らしい情愛なんか、欠片も持っていなかったはずの父上が……何故、今になって叔母上を？

この男……一体何をしたんだ！？

<SIDE:OUT>

「……あんた、父上に何をしたんだい？」

「む？」

イザベラは、探る様な……警戒する様な目で俺を見てきた。

「父は……あの人は、自分の弟を殺し、娘である私さえちっとも愛さない。人らしい情愛など、何一つ持っていない人間だ。それが、

何処の馬の骨とも知れないあんたを『大恩人』なんて呼び、今になつて自分が殺した弟の妻の身を案じるなんて、どう考えてもおかしいじゃないか！あんたが、父に何かしたんだらう！？」

なるほど……。以前のジョゼフを知っていれば、おかしく思つても無理はないな。

「吾輩は、ジョゼフ陛下に『真実』をお伝えしたに過ぎませぬ」

「『真実』？」

「御意」

怪訝な顔をするイザベラに、俺は敢えて全てを話した。

俺が『虚無』の『記憶』^{リコード}を使い、ジョゼフに弟シャルルの本心を伝えた事……。

シャルルが、自分が王座に就く為に裏金まで使つて根回しし、家臣どもを味方につけ、ジョゼフを追ひ落とそうとしていた事……。

「そんな馬鹿な……。あの、叔父上が……？」

イザベラは驚きを隠せない様子だ。

これだけでも、シャルルという人物がどれ程周囲に好印象を与えていたのが分かる。だが……それも、言つてしまえば『猫被り』。

「この世に、完全無欠の人間などおりませぬ。どんな人間も、『良心』と『悪心』^{あくしん}の両方を持つているもの……こればかりは、恐らく例外はありますまい。亡きシャルル殿下然り……、ジョゼフ陛下然り……。無論、吾輩も同じく……そしてイザベラ姫殿下、貴女も……」

「……っ!？」

再び驚いた様な表情で、俺を見るイザベラ。

「愛情と憎悪は、表裏一体……。ジョゼフ陛下も、シャルル殿下を兄弟として深く愛しておられたからこそ、反動で憎しみも深くなっ
てしまわれた……。姫殿下と、シャルロット殿のように……」

「っ!？」

「今でこそ、お二方の関係は良好とは申せませぬが……昔は仲がよろしかったと窺いました。何でも、『小さなエレーヌ』『イザベラ姉さま』と互いを呼び合い、本当の姉妹の様であつたとか」

「……っ……」

イザベラの目が、動揺に揺らぐ。

実際には誰にも聞いていないし、原作にもそうハッキリ書かれていた訳ではない。カマをかけるつもりで言ってみたが、この動揺の仕方を見るに、間違っ
てはいなかったようだ。

だっ
たら……脈はある。

「嬉しかったのでしょうか？『イザベラ姉さま』と呼ばれ、無邪気に慕ってくれた事が……」

「……っ……！」

「姫殿下……本当は、憎んでいる訳ではないのでしょうか？本当は、羨ましかっただけなのでしょう？魔法が上手で、皆に愛され……、ご自分が欲するものを全て持っていた、シャルロット殿が……」

「~~~~ツツー！ああそうさッー！そうだよッー！私は羨ましかったッー！エレーヌが羨ましかったんだッー！！！」

ぶわっ……！！

遂に、イザベラは自分の想いを暴露した。

「母上は私が幼い頃に死んで……！父上は私をちつとも見てくれないで、愛してくれなくて……！！宮廷の連中は、『王の娘』のご機嫌を取りながら、陰で魔法が上手くできない『私』^{イザベラ}を蔑むばかりだった……！誰も『私』^{イザベラ}を愛してくれない……。誰も『私』^{イザベラ}を見てくれない……！！」

イザベラは、泣きながら……叫びながら……膝から崩れ落ちる。

「どうして……私がこんな惨めな思いをしなくちゃならないのさッー！！？私が何したって言うのよッー！？私は望んでこうなったんじゃないッー！ガリア王家に生まれたのも、魔法が下手なもの……私の所為じゃないのにいッッー！！」

泣き崩れるイザベラの姿は……とても小さく見えた。

親とはぐれた迷子……、はたまた、母親を求める赤ん坊……。

俺まで、泣きたくなるほど……哀しい姿だ。

イザベラが言った通り……彼女に、全ての責任がある訳ではない。
彼女もまた、この世界に蔓延する『魔法至上』^{ハルケギニア}の思想の、犠牲者の
のだ。

俺自身、魔法の恩恵を受けている身として余り大きな事は言えな
いが……、悪い『差別』を生んでしまうこの風潮だけは大きな問題
だと思う。

今更だが……始祖ブリミルも、厄介なものを残したものだ。

と、無責任な始祖はさておき……、今はイザベラの心の方が大事
だ。

「……わかつているさ」

「え……？」

ぎゅっ……

イザベラが顔を上げると同時に、俺は彼女の頭を胸に抱き寄せた。

「周囲の人間は、他人事だと思って、勝手な事ばかりをほざく……。それを向けられる者の気持ちを知らうともせず、陰でせせら笑う……。そのような地獄の中で生きてゆく事を宿命づけられたおぬしの苦しみは、吾輩には計り知れまい……」

「……っ」

抱きしめていたイザベラの両肩に手をかけ、ゆっくりと離し、未だ涙を流す目を正面から見つめる。

「だが……なあ、イザベラ姫よ……。他者から受けた痛みや苦しみを、シャルロット殿に『家族』に晴らすなど滑稽だ」

「……家、族……？」

「そうだ……。先程おぬしは、『誰も^{イザベラ}私』を愛してくれない』『誰も^{イザベラ}私』を見てくれない』と言ったが、決してそんな事はない。シャルロット殿は、おぬしをちゃんと見ていた。慕って……愛してくれていたではないか！」

「……エレ……又が、私を……愛して……？」

「そうだと……！そしておぬしも、そんなシャルロット殿を愛しく思っていたはずだ！」

「つつ！！？」

「イザベラ……、おぬしとシャルロット殿は『家族』なのだ！おぬし達が従姉妹だからではない。互いを想い合う『絆』があるからだ！『家族』は何よりも大切なものだ！決して、捨ててはならない！今、おぬし達の『家族の絆』は薄れつつある……だが！まだ消えてはいない！！今ならまだ取り返しがつく！おぬし達は、『家族』に戻る！！」

「っ……一体どうすれば……、私は、どうすればいいの……？」

イザベラは、先程までの強気な態度ではなく、心細そうに尋ねてくる。

俺は、そんなイザベラを安心させようと、肩を軽く叩く。

「……勇気を出すのだ。勇気を出し、正気を取り戻した叔母上殿とシャルロット殿に胸の内を全て打ち開けるのだ。大丈夫……。叔母上殿も、シャルロット殿も……きっと分かってくれる」

「……もし……、分かってくれなかったら……？」

不安の表情……、無理もないか。『やはり拒まれたら……』というネガティブな思考は、そう簡単には拭いきれるものではないだろうからな。

俺は服の袖で、イザベラの涙をそっと拭う。

「分かってももらえるまで、誠意を持って一生懸命に話すのだ。諦めてはならぬ。吾輩も微力ながら、手助けする。例えばどんな事があるうとも、吾輩はおぬしの味方だ。決して、見捨てはせぬ」

「……っ！」

ぶわ……！

イザベラは、再び涙を溢れさせる。俺は、そんな彼女をもう一度抱きしめた。

イザベラも、やはり歳相応の少女……。ただ、自分を曝け出す事と、人の本心に触れる事が怖かったただけなのだ。

恐れる余り……虚像を纏い、周囲の人間を威嚇し、遠ざけていた。本来、頼りになるはずの父親が『狂人化』していたのも大きな要因だろう。

正直、安心した。今のイザベラと今のジョゼフなら、父娘関係の修復も夢ではない。

オルレアン夫人とタバサ……全力で、和解させよう。

ジョゼフ、イザベラ、オルレアン夫人、タバサ、そして『もう一人』……この五人が、きちんと『家族』として打ち解けること。

それが最も重要なことだ。

<SIDE：タバサ>

バサッ！

「っ！」

屋敷の前に着陸したシルフィードの背から飛び降り、玄関に走る。

バンッ！

勢いをそのままに、扉を開き中に入った。いつもは、ペルスランが出迎えてくれるところだけど、今は待っていてられない。

廊下を一直線に、母様の寝室を目指す。

ダッダッダッ……！

「母様……！」

どうか、無事でいて……！

私にはもう……母様しかない。母様まで失ったら……私は……
今度こそ独りぼっちになってしまおう……！

そんなの……嫌……！！

バタンツ！！

「母様っ……！」

「……っ……！」

屋敷の玄関と同じく、勢いをそのままに扉を開き、部屋に突入した。

寝室には、ジヨゼフとイザベラ、それにペルスランと……え？

「……あなたは……」

あの顔……、赤を基本とした服装は、間違いなくルイズの使い魔

……ジークフリート……。

何故……彼が、ここに？

全く予想だにしない人物がいた事で、私の思考は混乱し、停止してしまふ。そこへ、更に追い打ちをかける様な事態が待ち受けていた。

「……シャル、ロット、なの？」

「……え……？」

不意に聞こえてきた、懐かしい声に……我に帰る。

声を追って、視線を向けた……その先には……。

「……母様……？」

いつもなら、虚ろな瞳で……私を見て怯えていた、母様が……。

「ああ、シャルロット……！分かる……！貴女が分かるわ……！！」

私を見て……、涙を浮かべ、嬉しそうに……笑っている……。

「……ふ、え……」

さつきまで、何を思っていたのか、思い出せない……。

目元が……熱い。身体が、震える。堪えていないと、何かが溢れてしまいそう……。

「シャルロット……こちらへ来て。貴女の顔を、この母にもっとよく見せて頂戴……」

「……っ、母様あー!!」

私は、それまで思っていた事が全て吹き飛び、ただただ泣きながら、母様の胸に飛び込んでいた……。

一体、母様の身に何が起こったのか……。何故、ジョゼフやイザベラと一緒に、ジークフリートがここにいたのか……。

色々、疑問は尽きないけど……。

今は……、人形タバサではなく、私シャルロットを見てくれる母様が……嬉しくてたまらなかった。

Episode・8 『和解 仲良き事は美しきかな』（前書き）

大変遅くなりました。やっと、なんとか形に出来ました。

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。
す。

Episode・8 『和解 仲良き事は美しきかな』

時は少々遡り

ジョゼフとイザベラをオルレアンの屋敷に連れ出してから一日が経過した頃……俺（の『遍在』その二）は、ジョゼフから借りた飛行竜型魔法人形ガイゴイルで、ある場所に向かって飛んでいた……。

「……あれか」

見えてきた。

陸路が通じていない突き出した岬……、船を接岸する場所もない切り立った岸壁……、空以外からは立ち入る事ができない『陸の孤島』……。

その突端に建つ、小さくもなく、大きくもない建物……。

あれが目的地『セント・マルガリタ修道院』 原作に於いて、傷心のルイズが逃げ込んだ場所である。

今回、竜型魔法人形ガイゴイルを使ってここに来たのは、帰りを考慮しての事だ。行きは『瞬間移動』でショートカット出来たが、帰りは俺一人ではない。まだ、俺の能力ちからを知られる訳にはいかない……。よって『瞬間移動』は使えないからな。

さて……要件を速やかに、穏便に済ませるでしょう。

バサッ！

竜型魔法人形^{ガーゴイル}で、修道院の玄関前に降り立つ。

と、その途端

バタン！

「お兄さま！」

「むっ？」

修道院の扉が勢い良く開き、長い銀髪の少女が飛び出してきた。

「…………お兄さまじゃない…………」

その娘は俺を見るなり、『ガツカリ』という擬音を見せ付ける様に落ち込んだ。

失礼な娘だ…………と思う反面、少しだけ嬉しくもあった。

この反応が、教えてくれた。この娘が、俺がここにやって来た『目的』 亡きオルレアン公シャルルと夫人の二人目の娘、タバサの妹にあたる少女、ジョゼットだ。そう思ってみれば、声もタバサに似ていた様に思える。

いきなり会えたのは、僥倖と言っていい。

「失礼だが、ここの」

「一体、何事でしょうか？」

俺がジョゼットに話しかけ始めた所で、院の中から初老の人の良
さそうな女性が出てきた。

恐らく、この人が修道院長だろう。向こうから出て来てくれると
は、ありがたい。

「お騒がせしてしまい、申し訳ない。この修道院の院長殿とお見受
けするが？」

「はい、私がこの『セント・マルガリタ修道院』を任された者です
が……、貴方は……？」

「これは失礼を、申し遅れました。吾輩は、ジークフリートと申す
者……ガリア王ジョゼフ一世陛下よりの使者にござる」

こう名乗る事は、ジョゼフから許可を貰ってある。

「っ！？こ、これは失礼致しました！」

院長は、俺が名乗った途端に慌てて膝を着いた。

「その様に畏まる必要はありません。どうか顔を上げ、お立ちくだ
され。院長殿」

「で、ですが……」

「その様に顔を伏せられては、要件をお伝えする事も出来ませぬ。

どうか……」

「……畏まりました」

院長は、おずおずと立ち上がり、顔を上げた。

よし、長居は無用だ。チャッチャと済ませよう。

「さて、院長殿。早急で申し訳ないが要件をお伝え申す。吾輩は……この修道院にいる、修道女スールジョゼットを引き取りに参ったのです」

「「ええっ!?!」」

院長と一緒に、傍で空気になり掛けていたジョゼットが声を上げる。今更だが、やはりこの娘がジョゼットで間違いない。

「一つお尋ねするが、院長殿……。貴女は、ジョゼットの出生については、どの程度ご存知か？」

「い、いえ、私わたくしは……何も……」

目を逸らす院長。

この反応、多分、あらかた事情を知っているな。だが、それを口にするのは恐ろしい、と。

だったら、態々むづか聞き出す必要はない。

「……さようか。ならば、結構。吾輩は別に、貴女を糾弾しようという訳ではありません故ゆえ」

「は、はい……」

「それより、これを……」

俺は1000エキューが詰まった袋を、院長に差し出す。ここに
来る前に、『鍊金』で作っておいた物だ。

「こ、これは……?」

「ジョゼフ陛下よりお預かりした、ジョゼットの今日までの養育費
でござる。恐らく、足りぬとは存ずるが……何分、事情が事情故、
ご理解頂きたい」

「い、いえ、そんな……滅相ありません!」

院長は慌てて首を横に振ると、慌てて金貨袋を受け取った。

そして、俺は置いてきぼりになっていたジョゼットに向き直る。

「さて、ジョゼットよ。そういう訳なので、急ですまぬが、荷物を
纏めて来てくれ。纏まり次第、ここを発つ」

「え? ええ! ? ええええええええ! ! ?」

<SIDE:ジョゼット>

「……………」

どうして、こうなったんだろう？

もう見えなくなってしまった、15年以上も過ごしてきた私の家
『セント・マルガリタ修道院』を振り返って思う。

修道院に、この赤い服の男の人　ジークフリートさんがやって来て……、私を引き取りに来たって言うて……、私は訳も分からな
いまま荷物を纏めて……、一応、修道院のお友達や修道院長とお別
れして……、今はこうして、ジークフリートさんの後ろで、竜の背
中に揺られている……。

あの修道院から出る　そんな事、考えた事もなかった。

そもそも、どうして私？

ジークフリートさんは『ガリアの王様の使い』らしいんだけど……
…、どうしてそんな人が私を引き取るのかしら？

なんだか、不安……。

そんな事を考えていた時だった。

「不安かね？」

「えっ！？」

ドキッ！

突然の一言に、吃驚してしまう。

もしかして、この人は私の心が読めるの！？そう思って、顔を見上げると、振り返ったジークフリートさんは笑っていた。

「何やら、吾輩の腰に回った手に力が入っていた様なのでな」

「あ……」

そうか……、私、いつの間にかジークフリートさんの身体に回した手に力が入っていたんだ。

ちよつと、恥ずかしい……。

「まあ、不安に思う気持ちは分かる。吾輩は、おぬしに詳しい事を何一つ話しておらんからな」

「は、はい……」

「では、今話そう。ジヨゼット、おぬしはこれから、おぬしの『家族』の元へ行くのだ」

「え？」

私の……『家族』？

「あ、あの、私の『家族』って……？」

「うむ、その辺りも含め、順を追って話そう。最初に、何故おぬし

「があ、セント・マルガリタ修道院」に預けられたか……それから話そう」

「はい」

「このガリア王国には、ある恐ろしい因習がある」

「え？」

「ガリア王国の、恐ろしい因習……？それが、私が修道院に預けられた理由と、どんな関係が……？」

「高貴なる家に生れし双子は、家を分かつ『忌子』^{いみこ}として、後から生まれてくる赤子を……世間に知られる前に殺めてしまう、というものだ」

「ええっ！？あ、赤ちゃんを……殺しちゃうんですか！？」

「ああ……。それは何千年もの昔、ガリア王国に生まれた双子の兄弟が、王座をめぐり、血で血を洗う争いの果てに、共に斃れたという悲しい歴史に由来する習わしでな。貴族、王族にとって、家が分かれ、権力闘争が起こる事は悪夢……。故に禍の種は、芽を出す前に潰してしまおうという訳だ」

「酷い……！」

「そんな理由で……自分の赤ちゃんを殺しちゃうなんて！」

「だが……、その因習に抗う者達もいた」

「えっ？」

「如何に古くからの決まり事だとしても、それだけで生まれたばかりの我が子を殺す事に、躊躇いを持たぬ親ばかりではない。だが、その因習に真つ向から刃向えば、一族全てに累が及ぶ。それ故……愛する我が子を守る苦肉の策として、誰の目も届かぬ場所に隠す事を思い付いた」

「誰の目も、届かない場所………あつ！？」

もしかして、それが……！？

そう思い至つて顔を上げると、ジークフリートさんは頷いた。

「そうだ。おぬしが預けられた『セント・マルガリタ修道院』あそこもそうした場所の一つなのだ。恐らく、あそこに預けられた他の修道女の幾人かは、同様の事情で預けられた者達であろう」

「……」

そうだったんだ……。だから、私達はあの場所で生活していたんだ。そう言えば、修道院で皆とそんな話を話した記憶がある……。

『わたしは、貴族のなにがしかの忘れ形見で……』

誰かがそんな話をしていた。あの時は、ほんの冗談だと思ったけど……。本当だったんだ……。

そして、ジークフリートさんが今、その話をしたって事は……私も……。

「……私も、そうして預けられたのですか？」

「そうだ。おぬしを守る為……、共に暮らす事は出来ずとも、生きてさえいればと……。いつの日か、おぬしが幸せになれるようにと願ってな」

「……………」

なんだか……不思議な気持ちになった。

私の事を愛してくれた人がいた　あまり実感は湧かないけれど……そう思うと、胸の奥がちよつとだけくすぐったくて、暖かい。

この気持ちが……、なんだか嬉しい。

でも、ということは……。

「あの……。私も、どこかの貴族の娘、なんですか？」

「まあ、その通りだが……正確には、ちと違う」

「？どういう意味ですか？」

「おぬしは、貴族ではなく『王族』の娘なのだ」

王、族……？

「……………はい？」

<SIDE:OUT>

ポカンと口を開けて、目を点にして固まったジョゼット。

予想通りと言えば、予想通りの反応だ。

誰だって、突然「お前は王族だ」なんて言われれば、困惑の10や20はするだろう。或いは、冗談だと思って聞き流すか、笑うか、呆れるか。

ジョゼットの反応を見ると、俺は思わず苦笑してしまうのだが……。

「ふふふ……、驚きを通り越して、どう反応すれば良いのか分からないかね？」

「え！？いえ、はい！だって、そのっ！」

「まあ、落ち着きなさい。その辺りも、これから説明する」

「は、はい！お願いしましゅっ！」

ビシッ！という擬音が聞こえるぐらい、姿勢を堅くするジョゼット。そして、台詞を囁んだ……ぷっ！

っ、いかん……笑っては……！

「ゴホン！あー……おぬしのご両親はな、現ガリア王ジョゼフ1世陛下の弟君御夫妻なのだよ」

「お、王様の……弟君！？」

「うむ。オルレアン公シャルル　それが、おぬしの父君の名だ」

「……」

「尤も……シャルル公は、数年前に亡くなられたが、な」

「！……そう、ですか」

敢えてシャルル公の死因については言わなかった……。

こういう事は、部外者の俺ではなく……本人から語ってもらうのが良いだろうと思ったからだ。

それに、ジョゼットもこんな所でそんな話までされても、困ってしまうだろう。

とにかく、今はジョゼットに関する説明だけに留める。

「だが、母君と姉君は生きておるよ。母君は、最近まで病を患っておいでだったが、今は治療が進められており、程なく全快される予定だ」

何しろ、解毒剤を『遍在その一』がオルレアンの屋敷で調合中だ。明日には、正気に戻ったオルレアン夫人と会わせられるだろう。

「母さんと、姉さん……。どんな人達ですか？」

少しずつ関心が出てきたのか、そんな事を聞いてくるジヨゼット。
良い傾向だ。

「うむ。先ず……。母君は、とてもお優しい方だ。おぬしを、あの修道院に押し込めてしまった事を、心の奥ですつと悔いておられた」
はずだ……。

「姉君は、そうだな……。小柄で、物静かで、本を読むのが好きだな。あと、少々人付き合いが苦手だ。だが、顔はおぬしそっくりで……ああっ！！」

しまった！俺とした事が……。すっかり大事なことを忘れていた！

「ど、どうしたんですか？」

「大切な事を思い出した。すまぬが、一度地上に降りるぞ」

「は、はい」

俺は魔法人形を手近な森の中に着陸させた。森の中にしたのは、誰かに見られるのを避ける為だ。

そして、ジヨゼットと向き合う。

「ジヨゼット。実はおぬしには、姿を変える魔法が掛けられている

のだ。おぬしの正体を、悟られぬようにな」

「そうなんですか？」

「うむ。故に今ここで、その魔法を解除する。目を閉じて、そこでジッとしていなさい」

勿論、それもそうだが……それ以上に、もっと重要なことがある。

「はい」

素直に従って、目を閉じてくれるジョゼット。良い娘だ。

彼女に内心で感謝しつつ、俺は杖を^{ダガー}引き抜き、呪文を唱える……。

「ナウシド・イサ・エイワーズ……ハガラズ・ユル・ベオグ……ニード・イス・アルジーズ……ベルカナ・マン・ラグー」

そして、杖の切っ先をジョゼットに向ける。

スウウウ……

ジョゼットの周囲の空気が歪む。だが、その歪みはすぐに治まる。

これでよし、と。

さて、次だ。俺は『加速』をかけ、ジョゼットに気付かれない様に彼女のペンダントを外し、元の場所に戻る。

そして、『加速』を解除。すると、ジョゼットの髪が光り出し、

みるみるタバサと同じ顔に変わって……否、戻^{かえ}っていった。

「ジョゼット……もう目を開けても良いぞ」

「……終わったんですか？ なんだか、顔に変な感じがしましたけど」

「これで見てご覧」

懐から手鏡を取り出し、顔をペタペタ触っているジョゼットに渡す。

「……これが私の本当の顔？」

鏡を見て呟くジョゼットに、俺は頷いて見せる。

「そうだ。ずっと隠されていた、おぬしの素顔だ。どうかな、感想は？」

「……綺麗な髪。だけど、なんだか自分の顔じゃないみたいだわ」

「ははは、それはそうだろうな。今までの顔で、今日まで生きてきたのだ。違和感を覚えるのは無理からぬこと。だが、その顔こそ紛れもなくおぬしの素顔なのだ。大丈夫、直に慣れるであろう」

「は、はあ……あれ？ ペンダントが、ない」

気付いたか……。

「ペンダント、とな？」

自分で白々しく思いつつ、ジョゼットに敢えて尋ねる。

「はい。あの修道院にいた時から、ずっと身に付けていた物で、修道院長から『どんな時でも、決して外してはいけない』って言われていました」

「なるほど。では、それがおぬしの顔を変えていた魔法具マジックアイテムだったのだな。今の吾輩の呪文で、その封印が解けたのだ。だから、消え去ったのだろっ」

勿論、呪文もペンダントもそんな代物ではない。

ペンダントは、ただ外せば『フェイス・チェンジ』が解ける物……、さつき唱えた呪文は虚無魔法『忘却』のルーンだ。

ジョゼットが魔法について詳しくないのを利用させてもらった。

「ジョゼット……話は替わるのだが」

「はい？」

「あの修道院に、ロマリアの司祭が訪ねて来たことなどはあったか？」

「え？え」と……はい、何度か訪ねていらっやいました」

「その司祭、どんな風貌だったか分かるかね？服装とか、年齢とか……」

「いいえ、私はその司祭様には直接お会いした事ありませんから」

「そうか……」

よし、『忘却』はしっかり効いたな。

「でも、どうしてそんな事を聞くんですか？」

「いや、深い意味はない。ふと気になったただけだ」

種明かしをすると ジョゼットには『竜のお兄さま』ことジュリオの事を『完全に』忘れてもらったのだ。少し気の毒だとは思ったが……。

何しろヤツは、ロマリア教皇ヴィットーリオの犬 ジョゼットには、その血筋を利用する目的で近づいた。何やら、段々と本気で好きになってしまい苦しんだ、とか何とか勝手な事をほざいていたが 知った事ではない。

ジョゼットを、奴らの良い様に利用させてなるものか。

「さて、魔法の解除が済んだところで、改めておぬしの家族の元へ向かうでしょう。まだまだ先は長いのでな」

「はい」

こうしてジョゼットの顔を元に戻し、余計な記憶を消し去り、俺達は再びオルレアンの屋敷を目指して出発した。

そして　オルレアンの屋敷にて、オルレアン夫人が正気を取り戻した約一時間後、ジョゼットを連れた『遍在B』が帰還……。

最初にジョゼットを見た時、タバサ、イザベラは目を見開いて驚き……、オルレアン夫人は病み上がりの身体を顧みずジョゼットに駆け寄り、涙を流しながら抱き締め、しきりに詫びの言葉を繰り返した。

唯一、ジョゼフだけは余り動揺せず、夫人に抱き締められたジョゼットを見つめていた。

その後……大広間にて、俺が仲介に立ち、ガリア王族一同はそれぞれ自分の思いの丈を互いに打ち明け合った……。

先ずはジョゼフ　彼は自らが抱いていた弟シャルルへの劣等感と、それにより愛情が憎悪へと裏返し、シャルル公を殺めるに至ったことを包み隠さず語った……。

俺が補足として、シャルル公が王になる為に裏で工作をしていた事実を伝えると、やはりと言つべきが、タバサは非常に驚いていたが、オルレアン夫人が呟いた一言で、更に驚く事となる……。

「やはり……、そうだったんですね」

その一言に、俺を含め全員が注目した。

話を聞くと……驚くべき事に、夫人は薄々ではあったが、シャル

ル公がそのような事をしていた事に気付いていたと言うのだ。

無論、確信もなく……、何より『夫に限ってそんなことはない』という願望があり、ずっと黙っていたのだそうだ。

「……夫は、生前、私にこう言いました。『この国を良くしなければならぬ』と。ガリアは大国……、なかなか総身が一つに纏まるという訳には参りません。国中の貴族はかつての誇りを忘れ、誰もが己の目先の利益の為に汲々としている。それを見越しての言葉でありました」

「……シャルルらしい言葉だ」

微笑みを浮かべたジョゼフの一言に、夫人は頷く。

「はい。ですが、陛下も昔はそうお考えだったではありませんか？」

「……まあな。『国』というものの実態など、まるで見えていなかった頃の話だが……」

自嘲気味の言葉には、どこか哀しげな色が見え隠れしているな……。亡き弟を思い、己が行いを悔いているのだろう。

「ですが……、夫はどこかでその真心を誤ってしまいました。その理由は、薄々感じてはありましたが、先程の陛下とジークフリート殿のお話で確信に至りました。しかし、それも今となってはせんない事……。私はただ、夫のその言葉に報いたく思います」

「……」

夫人を、隣に座ったタバサが見上げる。

直接的ではないにしろ、夫人は『ジョゼフを恨みはしない』と言った。その事に、多少なりとも戸惑いがあるのかもしれない。

だが……タバサの為に、ここでジョゼフへの憎しみは捨てさせなければならぬ。

俺は、彼女に話しかける。

「タバサ……いや、この場は敢えて、シャルロット殿と呼ばせて頂く」

「……」

「ジョゼフ陛下、そして御母上のお気持ちを聞いて……貴女は、今、何を思う？」

「……………」

タバサは、僅かに表情を曇らせ、俯く。

ふむ……、まだ自分の心が分からない、と言ったところか。それはそうか……。

今まで、ジョゼフを激しく憎み、その命を狙って、あらゆる苦痛・屈辱に耐え忍んできたのだ。そう簡単に、気持ちを切り替える事は出来ないだろう。

ならば……タバサの答えは、一先ず置いておこう。

「……イザベラ殿下」

「えっ？わ、私……！？」

「ええ。貴女にも、この場で告げたい思いがあまりのはず……。御父上、叔母上、そしてシャルロット殿に、知ってほしい自分の思いが……」

「……う……」

イザベラは、僅かに躊躇いと怯えの表情を浮かべる。

が、彼女の思いを知れば、タバサも己の憎しみを解きほぐす事が出来るかも知れない。そこまでと言わないまでも、ジョゼフへの殺意を薄れさせる事が出来るかも知れない。

それだけでも、大きな前進だ。

ジョゼフもこれから父親として、己の娘とどう接するべきかを考えられるはず……。この『家族』を纏める為に、イザベラの『内に秘めてきた思い』は重要な鍵となる。

俺は『大丈夫』の意を込めて、頷いて見せた。

「……わかったわ」

イザベラは一度俯くと、意を決した様に顔を上げる。

そして、自身の抱き続けてきた思いを語った。

魔法が上手く、皆に愛され、自身が欲しながらも得られない物を全て持っていたタバサが羨ましく……嫉ましかった。

父ジョゼフが、自分を決して愛していない事を知りながらも、心の何処かでその愛情を諦めきれなかった。

苛立ち、腐り、思うがままに周囲の人間に牙を剥いていた日々の中で……、心は孤独に苛まれ……誰かとの繋がりを求めている。

「……」

俺も含めて……この場にいる誰もが、イザベラの独白を黙って聞き続けた。

イザベラは、まだ声に怯えが感じられるものの、しっかりと一生懸命に話している。

大丈夫……。ジョゼフも、オルレアン夫人も、そしてタバサも……きっと分かってくれるはずだ。

「……そんな時、そこにいるジークフリートにここに連れて来られて……色んな話を聞かされたわ。父上と叔父上の事、私と……え……エレーヌ、の事……」

「……！」

躊躇い、怯え気味なイザベラの一言に、タバサが目を見開いて彼女を見る。

「……ジークフリートは、言ったわ。私達は『家族』なんだって……、『家族』に戻るって……。それから、私、考えてみたの……。そして思ったわ……。自分には、父上と叔母上とエレヌしかないないんだ」って」

「「「……！！」「」」

「思えば私達ガリア王家の一族は……。お互いを随分と憎み合ってきたわ。兄弟が……。従姉妹が……。最初は、憎んでなんかいなかったはずなのに……。実際、私はジークフリートに言われるまで、ずっと忘れていたわ……。私が……。『小さなエレヌ』を愛おしく思っていたことを……」

「……」

タバサは一見無表情に見えるが、その瞳には揺れ動く『何か』が確かにあった。

「だから……。だから……。もし、叶うなら……。エレヌ、そして叔母上。あなた方と、『家族』に……。戻りたい」

「……」

「エレヌ……。私は……。あなたにずっと劣等感を抱いていたの。父上が、あなたの父……。シャルル叔父上にそう感じていたように。あなたはとても魔法が出来て、皆から愛されていた。でも、私はそうじゃなかった……」

「……イザベラ」

自らの思いを語る娘を、ジョゼフが少し申し訳なさそうな……
父親』の目で見つめる。

「今まで、散々酷い仕打ちをしておいて……勝手な事を言っているのは、分かっているわ。でも……これが、今の私の正直な気持ち」

「……」

タバサは、僅かに俯き、下を向く。

迷っているのだろうか……？

「シャルロット殿」

俺は、差し出がましいと思いつつ、彼女に声をかけることにした。

「イザベラ殿下は、正直なお気持ちを打ち明けた。今度は、貴女の番だ。今、貴女は何を思う？」

「……私は……」

「迷う事などない。今、その心にある思いを、正直に、何も飾らずに吐き出すのだ。この場の誰も、それを咎めなどせぬ」

「……」

一度は顔を上げたタバサだったが、再び俯いてしまう。

やはり、余計な事だったか……？

と思い、僅かに焦ったが……その心配は杞憂に終わる。

「……私は、イザベラに……『姉さま』に……恨みは、ない」

「「「「！」「」」」」

今、タバサは確かにイザベラの事を、『姉さま』と呼んだ。

イザベラが勇気を振り絞って、タバサを『小さなエレーヌ』『エレーヌ』と呼んだ様に……！

イザベラの勇気に、タバサが応えたのだ！

「恨みが、ない……？ どうして……エレーヌ、私は、あなたをあんなに辱めたのよ？ 酷い事も沢山言っただわ。それに……叔母上の事だつて……」

「……母様の心を奪ったのは、姉さまじゃない。それに、今はこうして、母様の心は戻った」

そう言つと、タバサはジョゼフの方を向く。

「……ジョゼフ。私は今まで、いつか貴方の首を取る為に生きてきた。父様を殺し、母様の心を狂わせ……私から、全てを奪った貴方が……憎かった」

「……だろうな。当然の事だ」

「でも……もう、貴方の首はいらない。家族を失う苦しみを、イザベラ姉さまに与えたくないから」

タバサはそこで言葉を切ると、徐に立ち上がり、杖の先をジョゼフに向ける。

「だからと言って、貴方を簡単に許すことはできない」

「……ならば、お前は俺に何を望む？この命がいらんのならば、俺の何が欲しいのだ？」

「『人生』」

「……ほう。『人生』……とな」

「ガリアの王として……ガリアを、良い国にして。亡き父シャルルが望んだ事を、父の分まで貴方がやって。老いて死ぬまで 途中で死ぬことも、投げ出すことも、許さない」

「……分かった」

スッ……

ジョゼフが徐に立ち上がる。そして、懷から杖を取り出す。

何をする気かと見守っていると、タバサの杖と交差させた。

「我、ガリア王ジョゼフ1世は、ガリアの象徴たる『交差する杖』を『争い合う杖』ではなく『支え合う杖』とする事を、この場……

この時……そして、我が愛する弟シャルルと、その娘にして我が愛する姪シャルロットに誓う」

「……確かに聞いた」

「万難を排し、やり遂げる。お前達『家族』の為に……そして、俺自身の為にもな」

そう言つと、ジョゼフは杖をしまつ。タバサもまた、杖をさげた。

「すまなかつた……、シャルロット」

次いで、ジョゼフはオルレアン夫人の方を向く。

「すまなかつた……、我が義妹^{いぎむと}よ」

「……陛下……いいえ、義兄^{あにこうえ}上」

そして……最後に……

「すまなかつた……、イザベラ。我が娘よ」

「……！父、上……」

「……」

ギュッ

ジョゼフは、イザベラを抱き寄せる。イザベラは一瞬驚いたようだが、すぐに肩を震わせてその胸に顔を埋めた。

多少ぎこちなくはあったが、それは父娘おやこの和解が為った瞬間
そして、俺の苦勞が報われた瞬間だった。

さあ、最後の仕上げだ。

「ジョゼット」

俺はジョゼットに声をかけた。

「ぐす……は、はい！」

ジョゼットは、涙を浮かべていた。

「……これを」

ポケットに入れておいた白いハンカチを差し出す。

「あ、ありがとうございます……」

受け取り、涙をそっと拭うジョゼット。

さて、では改めて……。

「吾輩が、おぬしをこの場に連れてきた理由……分かるかね？」

「ぐす……い、いいえ」

「知ってほしかったのだ、おぬしの『家族』の事を……。『家族』とは、その喜びも悲しみも分かち合うものだ」と、吾輩は思っている。故に、敢えておぬしにもこの場にて、全ての事実を聞かせた。そこで、おぬしに問う　先程の話を聞き、今、おぬしは何を思う？」

「……」

ジョゼットは、ハンカチを膝の上に置き、タバサ達全員の顔を見渡す。

「……王族とか、王家とか……難しい話は、良く分かりません。けど……」

「うん？」

「とても……素敵な人達だと思います！」

「「「「！」「」」」」

笑顔で言い切ったジョゼットに、タバサ達が目を見開く。

「最初……叔父さんが、父さんを殺して、母さんを病気にしたって聞いた時は、酷い人だと思いました。でも……叔父さんも、苦しんだんだって、話を聞いて分かりました。母さんも、シャルロット姉さんも、イザベラ姉さんも……ちゃんと謝った叔父さんを、許して上げて……優しいなあ、って」

「……別に、許してない」

「や、やめてよ……恥ずかしいじゃないか」

タバサとイザベラが、恥ずかしそうにそっぽを向く。実に微笑ましい光景だ。

「だから……だから私も、みんなと『家族』になりたいです！」

「ジョゼット……」

今度は、オルレアン夫人が涙を浮かべ、ジョゼットを抱きしめた。

少し……俺も、ジンときてしまったのは、内緒の話だ……。

こうして、タバサ達ガリアの一族は、『家族』に戻った。

ジョゼフとシャルルの代で、二つに分かれてしまった『家族』が、再び一つに戻ったのだ。

俺の苦勞が、本当に報われた……。彼らを救う事が出来た……。

訳も分からず、あの声に与えられたチート能力だったが……こうして役立てる事が出来たなら、悪くない。

Episode・8 『和解 仲良き事は美しきかな』（後書き）

こんな形で、ガリア王族の皆さんを一つにまとめてみました。いかがでしたでしょうか？

兎にも角にも、ガリア王族救済編はこれで幕引き 次回は、舞台をトリステインに戻します。

Episode・9 『アルピオンへ 必ずやウェールズ皇太子を……』 (前書

またも大変遅くなりました。

注意：今回は、原作消化のような形になります。

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。
す。

Episode・9 『アルビオンへ 必ずやウェールズ皇太子を……』

タバサ、ジョゼフらのガリア王族達を和解させる事に成功し、いよいよアルビオンはティファニア達を迎えに

行くつもりだったのだが……、それは少し延期となった。

俺は当初、ジョゼフ達を和解させた後、オルレ안의屋敷でティファニア達を預かってもらい、ジョゼフの保護下に置こうと考えていた……のだが、『すぐに』という訳にはいかなかった。

その理由は、オルレアン夫人の体調だ。

事情を話したところ、ティファニアや孤児達をオルレ안의屋敷に受け入れる事は、夫人やジョゼフは快く了承してくれた。だが、その時にイザベラから『待った』が掛かった。

オルレアン夫人は長い間、エルフの毒薬で精神を病み、その影響によって身体がだいぶ衰弱していた。俺の調合した解毒薬で精神は治ったのだが、身体の衰弱は残ってしまった訳だ。

そこで、しばらく俺が主治医となり、方薬と彼女の身体ほつやくのケアをすることに。そして、夫人の身体がある程度回復するまで、ティファニア達の引っ越しも延期　という事で話が決まったのである。

ティファニア達の引っ越し　これは、確かに早い方が良いのは間違いないが、無理を押して夫人やジョゼフ達に迷惑をかけては意味がないし、流石にそこまで急を要する案件でもない。夫人の身体

は魔法薬と『水』の治癒魔法のケア、そして日々の食事できちんと栄養管理をしていれば、一週間（8日）もあれば回復する見込みだ。

ちょうど良い具合に、これから一週間（8日）となると、原作通りならばアンリエッタ姫が学院に来て、ルイズがアルビオン行きを決めるイベントがある。ならば、それに便乗するのが良いだろう。

ちなみに、ジョゼフは既にアルビオン貴族派からは手を引いている。が、だからと言って既に動き出してしまう奴らが止まる訳ではない。

アルビオンの内乱は現在も続いており、原作通り、劣勢の王党派がニューカッスル城に集結し、空で貴族派の補給線を断ちながら地味に抵抗を続け、『風前の灯火』状態……。

このまま原作通りに事が運べば、王党派は全滅　皇太子ウェー
ルズ・テューダーの命は……………。

だが無論、俺は彼を見捨てるつもりは更々ない。

原作を読んでいた時も感じていた事だが、ウェールズ皇太子は死ぬべき人物ではない。加えて、原作において彼の辿った運命があまりにも悲惨過ぎた……。

自ら掲げた大義の為に死ぬことすら許されず、裏切り者に命を奪われ、死後すら魔法具マジックアイテムで利用され、愛する者を誘拐しかけ……最後
にその愛する者の腕の中で、自分として息を引き取る。何たる悲劇
いや、『悲劇』という言葉すら生温い。

幸いにして、ジョゼフは今や俺の味方　『アンドバリの指輪』

は既に『水の精霊』に返還されており、クロムウエルの手には無い。彼奴に、死者を操る術はない。

そうしたガリアの後ろ盾は失ったが、最初の勢いがあるだけに王党派を潰すことは残念ながら出来てしまうだろう。しかし、その後の戦争は恐らく、あつという間に敗北するはずだ。相応の犠牲を伴って、な……。

俺が『虚無』を駆使して、クロムウエルを殺^やってしまうなり、貴族派に攻撃を仕掛け戦力を潰すぐらいは容易だ……が、『人殺し』の類はしたくない。

チート能力があるうが、俺の基本は『一般庶民』 越えたくない一線というものがある。

それに、無闇やたらと俺が力技で解決してしまうと、ハルケギニアこの世界全体の発展の妨げになる気もする。

なので、こちらの問題は、主にこちらの人間の力で解決してもらう。その方が、俺としても原作知識を活用できるので都合が良い。

と、前置きが長くなったが、取り急ぎ決定事項は二つ

一つ、アルビオン王党派は生き延びさせる。

一つ、ティファニア達の引っ越しは、アンリエッタ姫の依頼でアルビオンに行く時に乗じて。

方針が定まったところで、早速仕事に取り掛からなければならぬ。

第一に、ウェールズ以下アルビオン王党派の潜伏場所の確保。

亡命させて生き延びさせるのは良いが、ただアルビオンを脱出すれば、それで済む話ではない。貴族派 『レコン・キスタ』と戦争になるまでの間、身を潜める場所が必要だ。

トリステインは、『レコン・キスタ』の狗があちこちに潜んでいるので却下だ。あとはゲルマニアとガリアのどちらかだが……ここは勿論、頼れる味方^{ジョゼフ}がいるガリアに決まりだ。

ゲルマニアでも悪くはないのだが、予備知識が全くないので一からリサーチをかけると、一週間で王党派全員を収容できる物件を探すのは、如何に『遍在』を散らせてもかなり厳しい。しかも……そうして動き過ぎると、俺自身の情報が噂として広まることも考えられる。考え過ぎかもしれないが、それが元でロマリアに目を付けられでもしたら、非常に厄介な事になる……。

「と、言った次第でして……何処か、都合の良い場所など御存知ありませんか？ 陛下」

トリステイン魔法学院の上空、雲の上にて、俺は手にした小さな『鏡』に映るジョゼフに尋ねた。

この『鏡』は、俺が能力で作った通信用魔法具^{マジックアイテム} 名付けて『テールの鏡』 同じ鏡を持つ者同士で、顔を見ながら通信が出来る。簡単に言えば、携帯電話の様な物である。

現在、この『テルの鏡』を持っているのは現在のところ ジョゼフ、イザベラ、オルレアン夫人、タバサ、ジョゼット、そして俺の6人だけだ。有事の際に連絡が取れるよう、そして、例え離れていても何時でもお互いの顔を見て話が出来るようにと作った。

ちなみにもう一つ、移動用魔法具^{マジックアイテム} 名付けて『転移の姿見』という姿見鏡の魔法具^{マジックアイテム}もある。これは、原作16巻に登場する、トリステイン王宮とド・オルニエールの屋敷を密かに繋いでいる魔法鏡^{マジックミラー}と同じ『瞬間移動^{テレポート}』を姿見鏡に組み込んだ品だ。

現在、トリステイン魔法学院（タバサの部屋） ガリア王国『グラン・トロワ』（ジョゼフの書斎）及び『プチ・トロワ』（イザベラの部屋） オルレアンの屋敷 この四カ所を、それぞれ密かに結んでいる。

いつでもお互いに会いに行けると、皆、とても喜んでくれた。

閑話休題

『ふむ、なるほどな。それならば、幾つか使えそうな城や屋敷があるぞ』

鏡の向こうで、ジョゼフはそう言った。流石はジョゼフ……近頃は政務に精を出し、ガリアのほぼ全域を把握しているだけあって頼りになる。

「本当ですか？」

『ああ。最近、調子に乗り過ぎた馬鹿共を随分捕えたからな。直轄領となり、未だ後任の領主が決まっていない領地が幾つかある。元の持ち主共の財産は根こそぎ没収し、そいつらに与していた者共も残らず捕えたが、城や屋敷はそのままにしてあるからな』

「おお……！」

容赦のないところは、狂王時代から変わらず……。今はそれが良い方向に向かっているので、順調に『名君』へと進化している。

それとはともかく、今はアルビオン王党派の話。その数は約300。非戦闘員を合わせても、400人ぐらいと見積もって……。ニユールカッスル城に集結・籠城しているのを考えれば、城を一城借りられれば大丈夫そうだな。

「では、400人程を収容できる城を一城、暫しの間、お借りしたいのですが……」

『400人が……。それだけの人数となると……。『グラウビュンデ^{グラーヴ}ン領』の城が良かろう』

「『グラウビュンデ^{グラーヴ}ン領』……でありますか？」

聞いた事のない名前だ……。

『ああ、ガリアの東側の内陸に位置する領地だ。その領主……ああ、元領主だな。そいつはな、裏でロマリアの坊主から賄賂を受け取り、『新教徒狩り』に託け領民を捕えては人身売買で更に不当な財を得ていたのだ』

「なんと……!？」

こんなところにも、ロマリアの魔の手が……。しかも、『新教徒狩り』だけでも許せんというのに、人身売買とは……言語道断だ。

「……して、その元領主のお裁きは、如何様に？」

『一族諸共、死刑にしようかともチラツと考えたが……労働力として使った方が有益だと思ってな。岩塩の鉱山に送った。今頃は一族諸共、たつぷりと汗を流しているだろうよ。血反吐も、吐いているかも知れんな、フッフッフ……!』

「……さ、さようで」

思わず顔が引き攣ってしまう……。ジョゼフ、すっかり王者として覚醒したようで……。

それはさておき、やはりジョゼフに相談したのは正解だった。こ
うもあつさり、アルビオン王党派の隠れ家を確保できたのだから。

「では、陛下。その『グラウビュンデン』の城……暫し、吾輩にお
貸し下さい」

『貸すだけで良いのか？なんなら、領地も付けて譲っても良いのだ
ぞ?』

「いえ、そのお気持ちだけ頂戴いたします。吾輩、領地の経営など
の学はありませぬし……それに、善からぬ輩に目を付けられ、身動
きが取り難くなる恐れもあります故」

『フフ、それもそうだな』

ジョゼフはやや目付き鋭く、俺の言葉に頷いた。

善からぬ輩　それは、ガリア国内の不穏分子であつたり、ロマリアの鼠であつたり……此処ハルケギニアには、油断ならない輩が常に刺客の如く隠れ潜んでいる。自分の存在を目立たせる行動は、出来うる限り避けるべきだ……。

『分かった。では、城の方は俺が手配しておく。準備が出来次第、こちらから連絡するから、数日待て』

「御意。御心に感謝いたします、陛下」

『フツ、礼には及ばん。他ならぬお前の頼みだ。ではな』

ジョゼフはそう言つて男前な笑みを浮かべると、通信を切つた。

「……よし、これで受け入れ先はOKだ」

後は、実際に会つた時、俺がウェールズを説得できるかどうか、だ。これは、俺の頑張り次第　。

裏切り者ワルドに関しては、別に考えがあるし……取り急ぎ、問題はな
いか。

その先の事は、オリヴァー・クロムウェルを筆頭に『レコン・キスタ』の出方を見て、決める事にしよう。シェフィールドの操縦無しの彼奴がどう動くか……、小心者が追い詰められた時、何をして

かすかを考えると少し不安だが、いざとなれば俺も形振り構ってられない。チート能力とは、そういう時の為にある。

しかし、そうならなければ良いと個人的には思う。俺は、神や仏ではないのだから……。

そうして、一週間はあっという間に過ぎて行った。

俺の一週間は、そこそこ忙しかった。往診にオルレアンの屋敷に通ったり……、ジョゼフからの連絡を受け、『グラウビュンデン城』の下見と下準備を済ませたり……、ルイズ達と学院で平凡に過ごしたり……。

ああ、そうだ。余談になるが、この一週間の中で、ギーシュの『錬金』の修行を見たりもした。

あいつ、見た目に反して意外と根性がある。そして、素直だ。

俺が他の漫画などを参考に、半ば思い付きに近い修行法を言い渡すと、それを文句も言わずに実行する。その上で、確実に上達しているのだ。

あいつの十八番『青銅のワルキューレ』。今や、前の様なクオリティの低い人形ではない。姿形は、人間に大分近づき、動きも洗練されてきている。

と言っても、俺の『ヴァルキュルア』に比べれば、まだまだ人形のレベル……と、比べるのは流石に可哀想か。俺のは反則だからな。

そして、運命の日がやってきた……。

「トリステイン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおな~~~~り~~~~ッ！」

衛士の大声で、馬車の扉が開く。生徒達の視線が一気に集まる。だが……。

「……」

出てきたのは長い筒状の帽子をかぶり、灰色のローブを着込んだ老人。なるほど、あれがマザリーニ枢機卿か……。

『次期教皇』とまで言われていた切れ者という話だが……、白髪に眉間に刻まれた深い皺、そしてコケた頬……如何にも『苦勞人』という感じだ。生徒らは鼻を鳴らしたが、マザリーニはそれを見せず、馬車の横に立つと続いて降りてきた女性の手を取る。

トリステイン王国王女アンリエッタ・ド・トリステインのお出ましである。

すると

「~~~~わああ~~~~！！~~~~」

先程の気のない態度は何処へやら……。生徒達から大歓声が上がる。

「あれがトリステインの王女？ ふん、あたしの方が美人じゃないの」

隣にいたキュルケが、鼻を鳴らしながらそう言う。

「ねえ、ダーリンはどっちが綺麗だと思う？」

コラコラ、しなを作って擦り寄るなと言うに……。

「さてな……。強いて言うなら、そうだな、『淑やかさ』ならば姫君、『色香』ならばキュルケ、と言ったところか」

余談だが……近頃、髪がツヤツヤサラサラなところ見るに、俺が教えた洗髪法は守っている様だ。

「そんなの分かってるわよ。あたしが聞きたいのはあ、ダーリンがどっちを好きかってこと。ねえ、どっち？」

「黙秘する」

「ああん！もう、つれないんだから！」

やれやれ、だ。

クイクイ

「ぬ？」

袖を引かれて振り返る。

「……」

「タバサ？」

「……ぼそぼそ（何か手伝えることはある？）」

「……！」

タバサは小声でそう尋ねてきた。

また余談になるが……、タバサはあのガリアの一件以来、俺に付いて歩く様になった。

俺が裏で、色々と動き回っている事をあの和解の場で明かしたところ

『私に手伝える事があれば、手伝わせてほしい』

と、言ってきたのだ。本人曰く『恩返し』だそうだ。

母親を救った事や、イザベラとの間を取り持った事……それに、ジョゼフとも和解が成った事が、なんだかんだで嬉しかったらしい。

閑話休題 声を潜め、タバサに答える。

「……ひそひそ（いや、今はまだ。だが、ありがとう）」

「……………」

コク……

小さく頷き、タバサは手に持っていた本を開いた。それにしても、顔に出してはいなかったつもりなのだが……俺の僅かな表情から、『何かある』と読み取るとは、タバサの洞察力には恐れ入る……。

それはともかく、アンリエッタ姫の大名行列に目を戻す。

そして、すぐに見つけた……。幻獣グリフォンに跨る羽帽子の男……裏切り者ジャン・ジャック・フランス・ド・ワルド。

「……………」

姿だけ確認し、俺は顔を逸らす。まさか、こちらの視線に気付くとは思わないが、念の為だ。

さて、マチルダ無しの奴が、果たしてどう動くか……。

だが……どう動こうとこの俺ある限り、お前の好きにはさせん。

その夜……

コポコポ……

俺はルイズの部屋にて、秘薬の調合をしていた。

試験管の薬液を混ぜ合せ、出来上がった秘薬を小壘に移す。今回の秘薬は、単なる傷薬だ。

自分で言うのも変だが、すっかり慣れたものだ。ここ何日か、アルビオン行きの準備で、様々な薬や道具を作っていたからな。

それにしても……

コト……

小壘を置き、機材を片付け、ルイズの方を見る。

「……………」

ネグリジェ姿でベッドに腰掛け、ボくつと宙を見つめるルイズ。

「マスター・ルイズ、いつまでそうしているつもりだ？眠らないのか？」

「……………」

返答なし、か。やれやれ……昼にワルドを見てから、ずっとこの調子だ。

この様子を見るに、ルイズの中には、ワルドに対する『純な思い』が僅かながらあるのだろう。

問題は……その思いが、幼い頃そのまま、ということか……。

コン……コン……

「ん？」

ノック……？あつ、姫が来たか！

コン、コン、コン

「っ！」

呆けていたルイズが顔を上げ、ブラウスを肩にかけ、立ち上がる。
ドアに向かい、そして徐に開いた。

ドアの向こうには、黒頭巾を被った少女 アンリエッタ姫が立
っていた。

「……あなたは！？」

ルイズは驚いた声をあげるが、アンリエッタ姫は口元に指を立て
る。そしてマントの隙間から杖を取り出し、短くルーンを吹き、振
った。

「……『ディテクト・マジック 探知魔法』？」

「どこに耳が、目が光っているか分かりませんかね」

ルイズの声に、アンリエッタ姫が答える。

しかし……言葉では用心している風に言っているが、その実、後

ろから尾行して来ているギーシュにも気付いていない辺り、間が抜けているというか……。

『ディテクト・マジック 探知魔法』で室内を調べ終わると、アンリエッタ姫は頭巾を取り、顔を見せる。

「姫殿下！」

ルイズが慌てて膝をついたので、俺もゆっくりと膝をついて目を伏せた。

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

同刻 俺は、『遍在』でマチルダの部屋を訪ねていた……。

「明日だってっ！？」

マチルダが、素っ頓狂な声を上げる。

俺は、明日アルビオンへ行く用事が出来た旨を伝え、それに便乗……という訳でもないが、ティファニア達を迎えに行こうと持ち掛けたのだ。

しかし、予想通りというか……マチルダは難色を示した。

「ちょ、ちょっと待ちなよ！そんな急に明日だなんて、無理だよ！

あのエロ爺の所為で、仕事が山積みだつて言うのに……！」

そう、ネックとなるのは『明日』という急な日程と、マチルダの秘書としての仕事だ。

勿論、俺とてそれを忘れるほど馬鹿ではない。ちゃんと対策を用意してある。

「心配するな、マチルダ。これを身代わりに使え」

「ん？なんだい、それ？人形……？あつ、もしかして『スキルニル』？」

説明しよう。『スキルニル』とは 人間の血を元にその人間を外見、性格、能力すべてを完全に複製する魔法の人形である。

「確かに『スキルニル』だが、これはこのジークフリート謹製。従来の『スキルニル』に吾輩の独自改良を施した代物だ」

「へえ、独自改良つてどんな？」

「まず、起動に必要な物を、血から毛髪に変更した。ただし、抜き取ってから5分以内の物でなければ効果はない」

「へえ〜。一々血を流さなくて済む分、お手軽になった感じだね」

「うむ。次に……回収時に、記憶の補完を可能にした」

「記憶の、補完？」

「つまりだな。身代わりになっておった間の人形の記憶を、回収時に自身に取り込む事が出来るのだ。それによって、周囲の人間と齟齬を生む事を避けられる」

「へえ〜〜！便利〜〜！」

目を輝かせるマチルダ。何か、不穏な気配を感じる……。

念の為、釘を刺しておこう。

「一応……断わっておくが、これに仕事をさせ、己は悠々自適等という駄目人間的発想は許さんぞ？」

「っ！？そつ、そんなこと！考えてないわよっ！！」

「……」

考えていたな……。

「コホンツ！と、とにかく、それさえあれば、あの爺に怪しまれる事なくアルビオンへ行けるって訳だねっ？」

やれやれ、だ……。まあ、便利な物に下心が出るのは仕方のないことだろうから、大目に見ておくでしょう。

「オホン！さて、問題も解決したことだし、明日の早朝、ここを発つでしょう。今夜中に支度を済ませておいてくれ。本体の方の話も、そろそろ纏まる頃合いだ」

俺の『遍在』で生み出す分身と本体は、精神のラインで繋がって

いる。念じる事で、一方の記憶を任意に受け取る事が出来るのだ。

で、本体側だが……丁度、ルイズがアンリエッタ姫の頼み　ア
ルビオンへ恋文回収の任務を、一も二もなく承諾したところだ。

「頼もしい使い魔さん」

「はっ」

俺（本体）は、先程からずっと跪き、顔を伏せたままだ。一応、
自己紹介も簡単に済ませてある。

「私の大事なお友達を、これからよろしくお願いしますね」
わたくし
スッ

アンリエッタ姫の細い手が、俺の視界に入ってくる。

「ひ、姫さま！そんな、使い魔にお手を許すなんて！」

ルイズが驚いた声で言った。

「良いですよ。この方は私の為^{わたくし}に働いて下さるのです。忠誠には、
報いるところがなければなりません」

「……身に余る光栄、恐悦至極に存じまする」

ある意味でお決まりの台詞を言い、そっと姫の手を取り、その甲

に自分の唇を軽く触れさせる。

しかし、だ。残念ながら、俺は王国や王族に忠誠を誓うつもりは全くない。俺は、俺の目的の為に動く。

忠誠はルイズと……ドアの向こうの奴に任せておこう。

「……恐れながら、アンリエッタ姫殿下に申し上げます」

「……なんでしょう?」

「此度の任務……マスター・ルイズと吾輩だけでは、成し遂げるは些か困難かと存じまする」

「な、何言ってるのよッ!？」

俺の発言に、ルイズが声を上げた。俺はそれを、そっと手で制する。

「マスター・ルイズ。吾輩は何も、臆病風に吹かれてこのような事を言うのではない。これはトリスティン王国の未来の明暗を分ける重大事……失敗は許されぬ。客観的に見て、戦場の真ただ中に飛び込むに等しく、最悪……ウェールズ皇太子にお会いする前に、我らが命を落とす可能性もあるのだ」

「……そ、それは……」

一応、ルイズもその辺りの事は理解している。だからこそ、俺の言うことに感情的に反発してこないのだ。

「せめて、あと二人……いや、一人でも味方が多ければ、成功の確率が格段に上がる。そこで、姫殿下」

「は、はい……？」

「吾輩らの他にもう一人、此度の任務に加える御裁可を頂きたく存じます」

「もう一人、ですか……？ですが、この任務を他の者に知られるのは……」

「ご安心を。その者は信用できます。少なくとも姫殿下が厳命されれば、任務内容を口外するような真似は致しますまい」

「ちょっと待ちなさいよ、ジーク。百歩譲ってもう一人加えるのは良いとして……一体誰を加えるって言うのよ？」

ルイズは怪訝な声で言う。

「うむ、それはな……」

俺は跪いた体勢のまま、上体をドアの方に向ける。

「ギーシュッ！そこにいるのは分かっておるぞ！出でよギーシュッ！」

ガタッ！

「ぎ、ギーシュですって！？」

ドアの向こうで音がすると、ルイズが驚きの声を上げたのはほぼ同時だった。

そして、俺は『アンロック解錠』と『念力』の連携でドアを勢い良く開く。

「うわわっ!？」

ドタッ!

ドアに張り付いていたと見えて、ギーシュは前のめりに倒れる形で部屋に入ってきた。

「『レレレション浮遊』」

フワ……

「わ、わっ!？」

ギーシュの身体が浮かせ、完全に室内に入れた所で、再び『念力』でドアを閉じる。勿論、音もなくて。

「さて、ギーシュよ……」

「は、はい、先生……」

宙に浮かぶギーシュが、気まずそうに苦笑いを浮かべる。

「おぬしが姫殿下の後を尾け、盗賊の如くドアの鍵穴から様子^{うかが}を覗いて、先程の話を最初から盗み聞きしておったことは、この際不問とする」

「さ、最初からっ！？って、ジーク！あんた、ずっと気付いてたの！？」

「無論」

ルイズの叫ぶような問いに、俺は普通に頷く。

「教えなさいよッ！！」

ビシッ！

良いツツコミだな、ルイズ。だが、ノって漫才に興じている場合ではない。

ギーシュを下ろし、再びアンリエッタ姫に向き直る。

「姫殿下、この者はギーシュ・ド・グラモンと申しまして、マスター・ルイズと同じくこの学院の生徒にございます」

「グラモン？もしか……あの、グラモン元帥の？」

アンリエッタ姫がきよとした顔でギーシュを見つめる。すると、ギーシュはシャンと背筋を伸ばした。

「息子でございます、姫殿下！」

ここぞとばかりに、自身をアピールするか。見上げたものだ……
例えそれが虚栄心でも、女に見栄を張りたい男心でも。

まあ、この場と状況と俺には好都合　援護してやろう。

「恐れながら姫殿下。この者こそ、先程吾輩が申し上げたもう一人でございます」

「この方が？」「ええっ！？」「先生っ！」

アンリエッタ姫がきよとんと、ルイズが驚き、ギーシュが満面の笑みで目を輝かせ、それぞれ同時に声を上げた。

「ちょ、ちょっと待ちなさいっ！ジーク、あんた正気ッ！？」

「無論」

「無論って！？このギーシュよっ！？」

「どういう意味だね！？あと、指をささないでくれたまえ！」

賑やかな奴らだ。

「マスター・ルイズ。近頃のギーシュは、そう馬鹿にしたものではないぞ？魔法の腕も上がっておるし……それに、だ」

俺はそこで耳打ちに切り替える。

「……ぼそぼそ（何より、先程の話を聞かれた以上、下手に口を封じるよりは、巻き込んでしまった方が有益であろう）」

「……ひそひそ（そ、それは……確かにそうかも）」

よし、ルイズは納得の方向に傾いた。

「ギーシュ、聞いていたのなら事情は分かっておるな？これは困難な任務だ。吾輩とマスター・ルイズだけでは手が足りぬ。手を貸せ。おぬしも、アンリエッタ姫殿下のお役に立ちたいであるう？」

「勿論です！」

「あなたも、私の力になつてくれるというの？」

「任務の一員に加えて下さるなら、これはもう、望外の幸せにございます！」

単純な奴だが、これで良し。ギーシュもそこそこ役に立つだろうし、あいつの使い魔 『ジャイアントモール』 のヴェルダンデが大いに役に立つ。

「ありがとうございます。お父様も立派で勇敢な貴族ですが、あなたもその血を受け継いでいるようね。ではお願いしますわ。この不幸な姫をお助け下さい、ギーシュさん」

「姫殿下が僕の名前を呼んで下さった！姫殿下が！トリスティンの可憐な花、薔薇の微笑みの君がこの僕に微笑んで下さった！！」

ぐら……

「せいっ！」

スパァンッ！

「あ痛ッ!？」

後ろに倒れかけたギーシュの頭を、俺は素早く叩く。^{はた}

「姫殿下の前で無様を晒すでない、ギーシュ!おぬしもトリスティン貴族の端くれならば……否!男の端くれならば、見事堪えきってみせよ!」

「は、はい!先生!」

何とか持ち直したな。それでこそ、我が弟子　なんてな。

その後、アンリエッタ姫がウェールズ皇太子宛に手紙をしたため、旅の資金の足しにと『水のルビー』をルイズに預け、明朝出発という事で話は決まった。

例によつて、と言うべきか……。こつそり盗み見たのだが、アンリエッタ姫は手紙の最後に亡命を勧める……いや、むしろ懇願する一文を付け加えていた。

これも『女心』というものだろうか……。

そんな姫の望みを叶える為ではないが、ウェールズ皇太子以下アルビオン王党派は、必ず生き延びさせる……。

現アルビオン王ジェームズ1世、そして王位継承者ウェールズ・テューダー……王党派の面々は、『背水の陣』に追い込まれようと忠義の為に命を懸けてテューダー王家に付き従っている。

少々皮肉な話だが、『内乱』という危機によってふるいに掛けられ、選りすぐられた忠臣達 後のアルビオンの執政を円滑に行う為には、王だけでは不足。それを支える臣下の者達が必要だ。

だからこそ、王党派全員を救わなければならない。今の俺になれば、それが可能はずだ。

我が知力、体力、チート能力の限りを尽くし……ウェールズ皇太子の死亡フラグを叩き折ってやろう。

Episode・9 『アルビオンへ 必ずやウェールズ皇太子を……』 (後書

次回以降の主人公の活躍をお楽しみに

という事で、どうか一つ。

次回の更新をお待ち下さい。

Episode・10 『引越し ティファニアに救いを……』 (前書き)

ティファと孤児の子供達の救済の話になります。

ですが、果たして上手く仕上がったかどうか……あまり自信がありません。

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。
す。

Episode・10 『引越し ティファニアに救いを……』

あさもや
朝靄の中、俺達はアルビオンへ向かう準備を整える。馬に鞍をつけ、必要な荷物を括りつける。

服装は全員いつもと変わらない。俺は赤魔道士服、ルイズとギーシュは制服に乗馬用ブーツだ。

「あの、先生。お願いがあるのですが……」

「なんだ？」

出発の用意の途中、ギーシュが困った様に話しかけてきた。

「なんだ？などと聞き返しはしたが、要件はすぐにわかった。使い魔を連れて行きたい、という相談だ。」

「僕の使い魔を連れて行きたいんです」

「ほう、使い魔とな？マスター・ルイズ、どうする？」

俺はルイズに話を振った。

「別に構わないけど、あんたの使い魔って何なの？」

「紹介しよう」

そう言ってギーシュは足で地面を叩く。すると……

モコモコ……ズボ！

地面が盛り上がったかと思えば、そこから茶色の巨大モグラが姿を現した。

ギーシュは破顔して膝をつき、小熊ほどもあるモグラを抱きしめる。

「ヴェルダンデ！ああ！僕の可愛いヴェルダンデ！」

「あんたの使い魔ってジャイアントモールだったの？」

ルイズがモグラを指差して、ギーシュに尋ねた。ギーシュは、モグラを抱きしめながら頷く。

「そうだ。ああ、ヴェルダンデ、君はいつ見ても可愛いね。困ってしまうね。どばどばミミズはいっぱい食べてきたかい？」

モグラが「モグモグ」と鼻の奥で出す様な鈍い鳴き声を上げると、ギーシュはまた破顔する。

「そうか！そりゃよかった！」

メイジと使い魔、だからだろうか？あれで一応、会話が成立しているらしい。

「ねえ、ギーシュ。ダメよ。その生き物、地面の中を進んでいくんでしょう？」

「そうだ。ヴェルダンデはなにせ、モグラだからな」

「そんなの連れていけないわよ。私達、馬で行くのよ」

「いや、連れて行こう」

「ジーク!?」「先生っ!」

口を挟んだ俺に対し、ルイズは驚愕の目を、ギーシュは尊敬と感謝を混ぜて大袈裟にしたような輝く目を向けてきた。

「まあ、聞くが良い。ジャイアントモールの地中を掘り進む速度ならば、馬にも十分に付いて来られるはずだ。それにその……ヴェルダンデだったか。そやつがいれば、比較的安全にウエルズ皇太子にお会いできるかも知れん」

「え?ど、どういうことよ?」

「うむ、それはな……おっと、『レレニーション浮遊』」

フワ……

『モグ!?モグモグモグっ!??』

どさくさに紛れて、ルイズに（正確には『水のルビー』に）向かおうとしたヴェルダンデを宙に吊り上げる。

「な、何よこのモグラ?いつの間に私に近寄って来てたの?」

「マスター・ルイズ。そやつは、おぬしが指に嵌めておる指輪を狙っておるのだ」

「っ！？姫様から頂いた大事な指輪をつ！？」

ルイズは咄嗟に、右手を後ろ手に隠す。と、同時にギーシュが頷きながら呟いた。

「なるほど、指輪か。ヴェルダンデは宝石が大好きだからね」

「うむ。ジャイアントモールは、我々人間にとって貴重な鉱石や宝石を好む習性があるからな。『土』のメイジにとっては、良き協力者であろう」

「流石、先生！良くご存知で！」

まあ、原作から得た知識だな……。

「……モグラの生態なんてどうでもいいわよ。それより、ジーク。さっき言いかけた事だけど、どういふことなのか説明しなさいよ」

「ああ、そうであった。つまりだな……」

と、説明しようとした時、『風の精霊』達が客の存在を教えた。くれた。

「何？どうかしたの？」

「……向こうから誰が来る」

「「えっ！？」」

俺の言葉に驚き、示した方向の朝靄あさもやに目を向けるルイズとギーシユ。すると、その中から一人の長身の青年貴族が現れた。

広いつばの羽根付き帽子に黒のマント　やはり現れたな、ワルド。

「おはよう、諸君。僕は姫殿下より、君達に同行することを命じられた王宮魔法衛士隊グリフォン隊隊長のワルド子爵だ。此度の任務は極めて重要であるが故、君達だけでは心許ないらしい。しかし、お忍びの任務故であるゆえ、一部隊を付ける訳にもいかぬ。そこで僕が指名されたってワケだ」

ワルドは帽子を取り、一礼してきた。

「……………」

俺にはその仕草が、鼻を摘まみたくなるほど胡散臭く感じた。それが果たして、原作知識に寄るものなのか……それとも、俺自身の第六感に寄るものなのかは分からない。まあ、間違っても男の嫉妬ではないのは確かだ。本当だぞ？

「ワルド様……」

声に気付いて振り返ると、ルイズが何やら落ち着かない様子だった。

「久しぶりだな！ルイズ！僕のルイズ！」

ワルドはワルドで、ルイズに気付くとワザとらしい程に人懐こい笑みを浮かべ駆け寄り、その身体を抱き上げた。

別に嫉妬を抱きはしないが、『僕のルイズ』などという台詞は聞
いていて怖気おそけを感じる……。一応これも『文化の違い』なのだろう
か？

「お久しぶりでございます」

「相変わらず軽いな君は！まるで羽のようだね！」

「……お恥ずかしいですわ」

ルイズは、照れたようにそう言う。ワルドはルイズを地面に下ろ
すと、帽子をかぶり直し、俺達に顔を向けてきた。

「ルイズ。彼らを紹介してくれたまえ」

「あ、あの……、ギーシュ・ド・グラモンと、私の使い魔のジーク
フリートです」

紹介され、ギーシュは深々と頭を下げ、俺も帽子を取って頭を下
げる。

俺が再び顔を上げた時、ワルドがこちらに歩み寄ってきた。

「君がルイズの使い魔かい？人とは思わなかったな」

「お初にお目に掛かる。吾輩、ジークフリートと申す。以後、お見
知りおきを」

気さくな口調と笑み……。こいつは果たして、俺の事をどこまで

知っているのだろうか？

「僕の婚約者がお世話になっているよ」

「いえ、大したことでは……む？婚約者？」

知っているが、一応演技で驚いたふりなどしておく。

「ああ。僕は君の主人、ルイズ・フランソワーズの婚約者だ。知らなかったかい？」

「ええ、マスター・ルイズからは何も……」

チラッと見ると、ルイズはバツが悪そうな表情を浮かべ、顔を逸らした。

「まあ、無理もないか。何しろ十年も前に僕が魔法衛士隊に入隊してから、軍務が忙しくて碌に会いに行けなかったからな。はっはっは！」

「なるほど」

何が可笑しいのか、豪傑笑いをするワルドに、俺は適当に答えておいた。

まあ、そうしていただけるのも今の内だ。精々、笑っておくが良いさ……。

そうして合流してきたワルドを加え、俺とギーシュはそれぞれ馬、

ルイズはワルドのグリフォンに騎乗　俺達はようやく魔法学院を
出発した。

同刻、マチルダの部屋

「本体達が出発した。吾輩らも、出掛けるとしよう」

本体の出発を感知し、『遍在』の俺はマチルダにそう告げた。

「出発は良いんだけど……本当に、荷物はこれだけでいいの？」

マチルダは、手にした小さなバッグを示して言う。

そのバッグは肩にかけるタイプで、中には一日分の寝巻と着替え
しか入っていない。昨夜、俺が用意するのはそれだけでいいと言っ
たのだ。

何しろ、行きはあつという間だからな。

「案ずるな。吾輩に任せておくが良い」

「任せておくが良いって言ったって、ここからアルビオンへは最低
でも二日は掛かる距離だよ？」

「普通に馬などで行けば、な」

「？馬で行くんじゃないの？まさか、竜で行くとか言い出すんじゃ

ないだろうね？」

「いいや、竜も馬も使わぬ」

「……さっぱり分からないわ。それじゃあ一体どうやってアルビオンまで行くのよ？ いい加減、ちゃんと説明してくれても良いじゃないのさ」

「口で説明するよりも、実際にやってみせた方が早い。ちと、失礼するぞ」

グイ

マチルダの腰に手を回し、自分の方に引き寄せる。

しかし……これは……。

「ちょ、ちょっと……！」

「ほう……。マチルダ、おぬし、腰が細いのだな」

「へっ!？」

「きちんとした生活を送っているようだな、感心感心」

「い、いきなり何、言い出すのさ!？」

「む？思った通りの事を口にしたただけだが？」

「……………」

<SIDE:マチルダ>

全く……、こいつは次から次へと唐突過ぎるよ……！

いきなりあたしの腰に手を回して抱き寄せたかと思えば、腰が細いと言ってくるし……。悪い気はしないし、強引なのも嫌いじゃないけどさ……。

「さて、ではそろそろ行くぞ」

「だ、だから、行くなってどうやって……」

「『レポート瞬間移動』」

シュン！

「……えっ！？」

あ、あれ……？私は魔法学院の自分の部屋にいたはず……。

でも今、私の目の前に広がる光景は……青空の下だし、辺りは街道みたい……。それに、少し遠くに見える、あの城壁……見覚えがある。

ま、まさか……！？

「こ、こは……もしかして……!？」

「さよう、シティオブサウスゴータ 観光名所と名高いアルビオンの古都である」

「ええええええッッ!!??」

<SIDE:OUT>

「『サイレント
消音』」

マチルダの絶叫が、既^{すん}でのところで辺りに響かない。

折角、『瞬間移動^{テレポート}』でシティオブサウスゴータにほど近い人気のない場所に転移したというのに、叫ばれては困るからな。まあ、叫んだところで人は来ないと思うが、用心の為だ。

ちなみに、シティオブサウスゴータにはアンリエッタ姫が来るまでの一週間の内に『遍在』で訪れておいたのだ。『飛行^{フライ}』で飛んで、交通費0でな。

流石に、ロンディニウムやニューカッスルには、迂闊に近付くと人の目に留まる恐れがあるので行っていない。

「……!……!??」

おっと、どうやら絶叫が終わり、俺への質問攻めに変わった様だ。

このまま無音にしておきたい気もするが、説明もしなければならぬ事だし、やむを得ん。

『サイレント
消音』を解除する。

「・・・じゃないか……て、音が……っ！？さあジーク！今度こそ洗いざらい説明してもらおうっ！一体これはどういうことなんだいッ！？」

「分かった分かった。説明するから、そう捲し立てるな」

「良いからさっさと説明しな！さあ説明しなッ！すぐ説明しなッ！」

ジリ！ズイ！グイ！

顔が物凄く近い……。

今、俺が少し前に出れば、うっかり『チュッ』となってしまうだろう。まあ、やらんがな。

さて、本当にいい加減説明しておくか。

「あゝ、さっきの魔法から説明するが……あれは『瞬間移動』^{テレポート}といつて、一度行った場所に瞬間移動できる魔法なのだ」

「瞬間移動！？そんな魔法、聞いた事もないわ！」

「それはそうだろうな。今は失われし伝説の系統『虚無』の魔法であるからして」

「はあっ？きよ、『虚無』だって！？」

「信じられん気持ちは十二分に分かる。だが、吾輩は嘘は言っておらんぞ。事実だ。吾輩は『虚無』系統の魔法が使える。『虚無』だけではない。『土』『水』『風』『火』の四大系統、更にはエルフや亜人が使う『精霊魔法』。俗に『先住魔法』と呼ばれる魔法も使う事が出来るのだ。粗方だな」

「……………」

マチルダは目を見開き、言葉も失くしてしまった。

流石に表情から相手の感情を読み取る術は持ち合わせていないので、よく分からないが……恐らく混乱しているのだろう。

俺の言ったことは、この世界の常識ハルケギニアからすれば荒唐無稽も良いところ。四大系統、伝説の『虚無』、先住魔法……それら全てが扱える人間などいるはずもない。

しかし、たった今『瞬間移動』テレポートでここまで転移した事実がある為、『あり得ない』の一言で否定もできない。

まあ、俺の魔法はあの声に与えられた能力の一つに過ぎないから、その常識にはそもそも当てはまらないのだがな。

「……マチルダ、そう考え込むな。無理に信じろとは言わぬ。戯言と聞き流しても構わぬぞ？」

「……いや、今更あんたを疑うつもりはないよ」

お？意外な言葉が返ってきたぞ？

「疑わぬのか？」

「現にこうして、魔法学院の私の部屋からここまで来てる訳だし……さつきは、ちょっと理解が追いつかなかっただけさ」

ほほう、マチルダは中々柔軟な頭の持ち主だったようだ。非常に良い事だし、俺としても有難い。

「それにしても……あんたって、滅茶苦茶だね」

「ふふ……我が事ながら、自分でもそう思う」

呆れ笑いを浮かべるマチルダに、俺も似たような笑いで答えた。

「さて、いつまでも苦笑いを続けておる訳にもいくまい。先を急ごう」

「はあ、そうだね……。それじゃあ、ちゃっちゃと行きましょうか」

そうしてマチルダの案内で、ティファニア達がいるウエストウッドの集落へ向かった。

サウスゴータから南西に大体150〜160kmほどだろうか？
マチルダを抱きかかえ、俺の『飛行^{フライング}』で飛ぶこと、手元に時計がないので感覚だが、大体二時間程 途中、マチルダの指示を受け、森の中に降りる。

「この森の中に、ウエストウッドの村が？」

「ええ、ここから少し奥へ行ったところよ。ついて来て」

マチルダの先導で、森の木々を縫うように奥へ……。

で、大体15分ぐらいだろうか？少し開けたところに、ログハウスのような家が見えてきた。

「あの家か？」

「そう。ウエストウッドはね、集落とは言っても孤児達と、その面倒を見てるあたしの妹分の娘しかいないのよ。それに、あんたも知ってるの通り、あの娘は外には出られないから……」

ちなみに、俺がティファニアの事情を知っている事も、マチルダには事前に話してある。その時も驚いていたが、舌先を駆使して丸め込んでおいた。

「だから、おぬしが仕送りをすることで何とか生計を立てておった訳だ」

「まあね……」

苦笑いを浮かべてそう言うマチルダ。今は足を洗ったとはいえ、やはり盗賊稼業で稼いだ金を送っていた事には、多少後ろめたさがある見える。

と、話しながら歩いている内に家の庭のような場所に出た。すると……

「よい、しよっ！」

家の陰から、誰かが薪を抱えて出てきた。いや……『誰か』ではない。

木々の間から差し込む朝陽を受けて、まるでそれ自体が輝いているかのような長く美しくしなやかな金髪……。透き通る水晶のような白い肌……。細く引き締まった腰に、重厚な存在感を放つ巨乳……否！あれはもはや……『爆乳』！！

なんとというか、もう……凄いの一言に尽きる。才人が『胸革命』バスト・レヴォリューションとはしゃいでしまうのも、不本意ながら頷けてしまう。

間違いない……あの娘が、ティファニアだ！

ドスッ！

「ぐはっ！？」

み、鳩尾……！？みぞおち

激痛に思わずしゃがみ込む。

「う、ぐううう……！な、何をする……！？」

見上げれば、マチルダがこめかみに青筋を立てて、こちらを睨み下ろしていた。

「……このスケベ」

「い、言いがかりだ……！」

若干ドモってしまった俺を、どうか軽蔑しないでほしい。くう…。

「ふんっ！」

不機嫌そうに鼻を鳴らすマチルダ。

いくらティファニアを大事にしているからといって、そこまで怒らなくてもいいだろうに……。

「えっ……マチルダ姉さん!？」

と、ティファニアがこちらに気付いたようだ。薪をその場に置き、嬉々とした笑みを浮かべて駆けてくる。

ブルン、ブルン……!

ぬう、なんという……!

ギロツ!

「うつ!？」

さ、殺気……!？

「あつ……！？」

ティファニアが俺を見て立ち止まる。そして、慌てて耳を隠した。
「ただいま、テファ。ああ、心配しなくていいよ。こいつはあたしの仲間で、お前の事も知ってるから」

「え……？」

マチルダに紹介され、俺は立ち上がり、帽子を取って会釈する。

「初めまして、ティファニア。吾輩はジークフリートと申す者、以後、見知り置いてくれ」

「え、あ、はい、初めまして……！ティ、ティファニアです！」

慌てて頭を下げるティファニア、勿論耳は隠したままだ。

「まあ、ここで立ち話もなんだね。取りあえず、中に入ろうじゃないか」

マチルダが促し、ティファニアも頷き、俺達は家の中に入った。

そして、三人でテーブルを囲む。

「あ、あの……お茶、どうぞ」

「ああ、かたじけない」

ティファニアの手からお茶を受け取る。紅茶に近い薄茶色のお茶だ。

ク……コク

「うむ、美味しい」

俺に茶葉の良し悪しなど分かりやしないが、このお茶は渋すぎず、ほろ苦くて良い塩梅で香りも良い。丁寧に入れられている。

「あ、ありがとうございます……！」

「ははは、そう緊張せんでくれ」

「は、はい……」

ティファニアは恥ずかしそうにお盆で顔を隠しながら、自分もテーブルにつく。

「あの……ジークフリートさん？」

「長くて呼び難くだろう。ジークとでも呼んでくれて構わんし、喋り方も畏まらなくて良いぞ、ティファニア」

「あ、えと……それじゃあ、私の事もテファで良いです。ジークさん。それで、質問なんだけど……」

「うん？」

「マチルダ姉さんと一緒にここへ来ていたけど、ジークさんと姉さんは、どういうお知合いなの？」

「ああ、マチルダの仕事先で知り合ってたな。ちょっとした事から意気投合して、仲間になったのだ」

「ジークさん、マチルダ姉さんが何をしているのか知ってるの？」

「無論」

「教えて！私がいくら聞いても、全然話してくれないのよ？」

「ああ、そうなのか」

そう言えば、原作でもマチルダは自分の仕事の事を伏せていたっけな。

「よし、分かった。教えよう」

「ちょ、ちょっとジーク!？」

マチルダは慌てて、俺の服の袖を引っ張る。

「なんだ？魔法学院の学院長秘書をしている事が、そんなに恥ずかしいのか？」

テファに見えない角度で、マチルダにウィンクをする。

「あ……いや、その……ちょっと、ね」

マチルダは恥ずかしげに顔を赤くし、俺の袖から手を放す。俺の意図を、察したようだ。

「魔法学院？秘書さん？」

テファは首を傾げる。

「うむ。トリステインに、あちこちから貴族の子女達を集め、魔法や教養を教える場所があるのだ。それがトリステイン魔法学院。その一番偉い人物が学院長で、マチルダはその人物を手伝う仕事をしておるのだ。誰にでもできる仕事ではないのだぞ」

「へえ〜！姉さん、凄いわ！」

「そ、それほどのもんじゃないよ……！」

テファが尊敬の眼差しを向けると、マチルダは照れ臭そうに頬を染める。

盗賊稼業からは足を洗ったのだし、俺が言ったことは紛れもない事実だ。決して後ろ暗くなく、そして誰に話しても恥ずかしくない仕事なのだから、何も問題はない。

「でも、そんな凄い仕事をしてるって、どうして教えてくれなかったの？」

「いや、その……何となく、照れ臭かったんだよ」

「そうだったの。ふふ、姉さんったら！」

テファとマチルダ……外見的には、全く系統が違って一見では姉妹には見えないが、こうして仲睦まじく笑い合う姿は正しく姉妹だ。善きかな、善きかな。

と、そうだ。和んでいる場合ではなかった。

本題に入らねば……。

「マチルダ、そろそろ例の話を……」

「ああ、そうだね」

マチルダは頷くと、テファの方に向き直る。

「テファ。実はね、今日あたし達はね、あんた達を連れに帰って来たんだよ」

「え？連れに、て……」

「要するに、引っ越すんだよ。みんなで」

「で、でも……、私……」

テファは、困った様に身をよじらせる。

恐らく、自分がハーフエルフである事がネックになっているのだろう。だが、心配無用　ちゃんと手は考えてある。

「テファ、おぬしが不安に思うのは自分がハーフエルフであること。そうだな？」

「……」

コク……

テファは、俯き加減で頷いた。そんなテファに、俺は自信を持って頷き返す。

「そういうことならば、心配はいらぬ。ちゃんと考えてある」

「え？」

俺は腰のベルトに付けておいたバックから、用意しておいた物を取り出し、テファの前に置いた。

「綺麗……！これ……耳飾り？」

尋ねてくるテファに、俺は頷く。

俺が用意しておいた耳飾りイヤリングは、耳たぶを挟む様に着けるタイプの物である。ピアシング（耳に穴をあけること）をして着けるタイプは、俺は好かん。と、それはさておき

「ただの耳飾りイヤリングではないがな。まあ、論より証拠　着けてみるが
良い」

「え、ええ」

テファは耳飾りイヤリングを手に取り、少し不安げにその長く尖った耳の耳たぶに着けた。

すると

パアアア……

テファの耳が淡く光り、尖った先から徐々に短くなっていく。

そして、光が治まる。

「テファ、これで自分の耳を見てみるが良い」

「え、ええ」

俺が差し出した手鏡を受け取り、テファは自分の耳を映す。

「あ……！わ、私の耳が、短く……！？」

そう、今のテファの耳は普通の人間と変わらない。パツと見、今のテファはどこからどう見ても『人間』の美少女だ。

「ど、どうなってるの！？」

「その耳飾りは、^{イヤリング}『フェイス・チェンジ』という顔を変える魔法を込めた魔法具でな。^{マジックアイテム}耳だけを人間のそれと同じに変えるよう調節した物だ」

本来『フェイス・チェンジ』はその名の通り、顔全体を変える魔法だが、俺のチート能力にかかれば、顔のパーツのみを変えるよう調節できる。

テファの場合、耳さえ短くしてしまえば何の問題もない。

「それさえ着けておれば、人前に出てもエルフだ何だと恐れられる心配はない。必要がなく、鬱陶しい時は簡単に外せるしな」

しかし、一度着ければ着けた当人以外には外せない仕様になっている。故に、誰かに外されたり、何かしらの事故で外れて正体がバレる心配もない。ただし、装着者が死亡した場合はその限りではないが……。

「テファ、赤の他人である吾輩が言っても信じられんかもしれんが……生活は吾輩が保障する。無論、子供達も全員だ。おぬしも年頃の娘、こんな森の奥でひっそりと隠れて暮らすより、外の広い世界を知った方が良いと思う。それに、近頃のアルビオン国内は乱れておる。いつ何時、どんな危険が振りかかるやも知れぬ。ウエストウッドにはおぬしと子供達しかおらんし、マチルダもそうそう帰っては来られぬから、おぬしらの事をとても心配している」

「……………」

トン……

名前を出したせいか、マチルダに軽く肘をぶつけてきた。ふふふ、赤い顔をしてな。

「オホン！まあ、とにかくだ、テファ。考え得る問題は解決している。後は、おぬしの勇気だけだ」

<SIDE：ティファニア>

「……っしょ」

荷物は、これで最後かな？

マチルダ姉さんとジークさんから聞かされた、急な引っ越しの話……。ちよつと驚いたけど、私も外の世界がどんな所なのか見てみたいと思っていたし、ジークさんから貰ったイヤリングがあれば、ハーフェルフの私でも人前に出られる。

何だか、色んな事が突然過ぎて夢でも見ているような気分……。

「……ジークさん、か。不思議な人だなあ……」

赤い服と帽子、珍しい黒髪で優しくそうな顔、少し変わった話し方をする男の人……。マチルダ姉さんが言うには、私がハーフェルフな事とか色々な事を知っているらしい。

でも……あの人は、私のことを全然恐がっていなかった。エルフを恐がらない人なんて、珍しい……。

人間はエルフを恐がっている。私を恐がらないのは、何も知らない村の子供達だけ……。なのに、ジークさんは私がハーフェルフだと知っていて、それでも普通に接してくれた。

それに……私もジークさんは恐くない。きっと、ジークさんが私を恐がっていないって、分かるからだと思う。

私達の引越し先をお世話してくれたり、私が外に出られるように
マジックアイテム
につて魔法具を作ってくれたり……。

どうして、あんなに親切なんだろう……？

「テファお姉ちゃん、まだ？」

「早く早くうー！」

あの声は、エマとサマンサね。

「はい！すぐ行くわ！」

あの娘達に答えてから、さっき纏め終えた荷物を抱えて、家を出
た……。

「……」

振り返って、今日まで暮らしてきた家を見上げる。あの日から今
日まで、暮らしてきた私達の家……。これで、お別れだね。

「……」

今日まで……ありがとう。

「テファお姉ちゃん、どうしたの？」

後ろから来ていたエマが、袖を引っ張ってきた。

「うっん、何でもないわ」

「ふうん。ねえ、テファお姉ちゃん」

「なあに？エマ」

「ガリアってどんなところ？」

エマがそんなことを聞いてきた。引越し先はガリア王国にある
って、ジークさんが言った。

「さあ、私も行ったことがないからよく分かんないな」

「楽しいといいね」

「楽しいわ、きっと」

私は笑って、そう言えた。

エマや子供達を安心させる為、というのもあるけれど……何とな
く、本当に楽しい事が待っていると思えたから。

「じゃあ、早く行こー！」

「うん、みんなで一緒にね」

<SIDE:OUT>

エマに手を引かれ、テファが荷物を抱えて出てきた。

「荷物はそれで最後か？」

「ええ、これで最後です」

それでは、行くでしょうか。彼女達の新天地へ。

「よし。ではこれより、引越し先へ向かう。みんな、それぞれ隣としっかり手を繋げ」

「「「「「はい！」「」「」「」

子供達が揃って良い返事をする。

素直すぎやしないか？と思うだろうが……、その理由はマチルダにあると言っている。

最初にマチルダが俺を紹介した時、誰だったかは忘れたが言ったのだ。

『その人、マチルダ姉ちゃんの恋人？』

この言葉を皮切りに子供達がわいわい騒ぎ、マチルダも真っ赤になっすぎてあぎゃあ騒ぎ。何やら良く分からない流れで俺という存在が受け入れられたのだ。出会って3、4時間しか経っていないが、今では『ジーク兄ちゃん』の愛称で呼ばれている。

別に文句がある訳ではないが、少しだけ「良いのだろうか？」と
思わない事もない。まあ、深く考えないでおこう。

子供達 ジャック、サム、ジム、サマンサ、エマが順に手を繋ぎ、エマの手をテファが繋ぐ。そして、テファの手をマチルダが繋ぎ、もう片方の手が俺の右肩に触れる。最後に、俺は右手に杖ダガーを持ち、左手は引越し荷物が入った木箱に触れる。

「よし。それでは行くぞ。『瞬間移動』」
テレポート

シュン！

「着いたぞ」

「……え？」

テファと子供達が目を点にし、マチルダは微妙な表情を浮かべる。

然もありなん。何しろ、一瞬にしてウエストウッドの森の中から、ガリアのオルレアン邸の前に転移したのだからな。

「さて、吾輩は先方に挨拶をしてくる。マチルダ、子供達への説明は任せた」

「はいはい」

若干投げやりな返事を返すマチルダから離れ、俺は玄関へ向かった。

「御免！ジークフリートでござる！誰かおられぬか！？」

「はい！すぐ行きますー！」

あの声は、ジョゼットだな。

「あ、ジークさん！いらっしやい！」

やはりな。奥から走って来たジョゼットが、俺を笑顔で迎えてくれた。

「元気そうだな、ジョゼット。どうだ？ここの生活には慣れたか？」

「えへへ、まだちょっと変な感じがしますが、母さんやペルスランさんが優しくしてくれるから、少しは」

「それは結構。さて、話は変わるが……事前に鏡で伝えておいた、孤児達を連れてきたのだ」

「あの子達ですか？」

ジョゼットは身体を斜めに傾け、俺の後ろの子供達に目をやる。俺も振り返りながら頷く。

「何だか……きょとんとしてますけど？」

「ふふふ、いきなりこんな屋敷に連れて来られて、戸惑っておるのだろうよ」

本当に『いきなり』だったからな。その辺りは、マチルダが適当に説明するだろう。

「時に、奥方のお加減は如何かな？」

「はい、もうすっかり良いみたいで！お料理とか、お裁縫を教えてもらっているの！」

「ほう、それは良かったな」

ジョゼットとオルレアン夫人は、順調に失った母娘おやじの時間を取り戻している。善きかな、善きかな。

と、俺が内心和んでいた時

「まあ、ジークフリート様。よくお越し下さいました」

奥から、オルレアン夫人がやってきた。

「これは奥方様、ご機嫌麗しゅう。お顔の色がよろしいご様子で何より」

「全て、貴方のおかげですわ。どれほどお礼を申し上げれば良いか……」

「おっと、奥方様！頭をお上げになってくださいまし。感謝のお言葉であれば、もう十分過ぎる程に頂きました故」

何しろ、往診で会う度に感謝されているからな。本当に、もう十分過ぎる。

「オホン！本日は、以前お話しした孤児達を連れて参ったのです」

「あちらの子供達ですわね？」

夫人も俺の後ろの子供達を見やる。

「はい。おーい、みんな！こっちへ来い！」

振り返って呼び掛けると、マチルダとテファが先導して、子供達が寄って来る。

「ご紹介します。アルビオンから連れて参りました子供達です。さあ、みんな。これからお世話になるこの屋敷の奥様とお姉さんに、ご挨拶だ」

「「「「はい！」「」「」」」」

子供達は揃って返事をする、一人ずつ自己紹介を始める。

「初めまして！ジャックだよ！」

「サムです！」

「おれ、ジム！」

「サマンサです！」

「え、エマ、です」

子供達が終わると、今度はジョゼットが自己紹介を返す。

「私はジョゼット。よろしくね！」

続いてテファ。

「は、はい！初めまして。私は、ティファニアと言います。これから、お世話になります」

テファは、少々たどたどしいが挨拶をして頭を下げる。と、その時……

ゆさ……

「……お、おつきい……！」

ジョゼットがそんなことを呟いた。そして、自分のソレを見降ろし……

「……はあ」

切ない溜め息を吐く。まあ、気持ちは分からないでもない……。

それはさておき、最後はマチルダの番だ。

「お初にお目にかかりますわ、奥様。私は、^{わたくし}マチルダと申します。此の度は、この子達の身受けをして下さり、感謝の言葉もございません」

「まあ、ご丁寧に。ですが、そのように畏まる必要はありません。困った時は、お互い様ですもの」

夫人は優しい微笑みを浮かべて、マチルダに答える。

さて、お互いの自己紹介が終わったな。それとは別に、夫人とジョゼットには話しておかないといけない事がある。

「奥方様、ジョゼット。二人に少々お話ししておかねばならぬことがあります」

「え？」

「まあ、一体何でしょう？」

「それは後ほど……ティファニアとマチルダを交えて」

そして、屋敷に引越を開始。荷物を運び入れ、子供達の部屋を決め、ペルスランに屋敷内を案内してもらい、引越しは数時間で終了した。

順応性の高い子供達は、広い屋敷内を『探検』と称して走り回り、大いにはしゃいだ。

テファもジョゼットと打ち解け、昼食・夕食の準備を手伝うなどして仲良くなった。

そして夕食が済み、子供達が初めての風呂で温まり、はしゃぎ疲れて寝静まった後……応接室に俺、マチルダ、テファ、夫人、ジョゼット、ペルスランが集まった。

向かいのソファに座る夫人、ジョゼット、ペルスラン。こちら

側は真ん中にテファ、左側にマチルダ、右側に俺が座る。

「……奥方様、ジョゼット、ペルスラン殿。こんな夜更けにお集まりいただき、誠に申し訳ない」

前置きし、俺は話を切り出した。

「今朝申し上げた、話というのは……このティファニアの事です」

すると、俺の隣にテファに三人の視線が集中し、それを受けたテファは少し萎縮する。

「……テファ。イヤリング耳飾りを」

「……はい」

テファは躊躇いがちに頷き、イヤリング耳飾りを外す。

ポオオオ……

その瞬間、テファの耳が淡く光り、本来の姿に戻った……。

「え？み、耳が……」

「っ！？その尖った耳は……」

「な、なんと……！？」

テファの長く尖った耳を見て、ジョゼットは戸惑い、夫人とペルスランは驚愕する。

「……これが、吾輩がお話ししておきたかった、ティファニアの本当の姿です」

「……………」

テファの顔に、怯えの色が見える。恐いのだろうな……。

だが、夫人やジョゼット、ペルスランなら大丈夫のはずだ。

「……ジークフリート様」

「はい、奥方様」

「何か、事情がおありの様ですね。聞かせて、下さいますか……？」

「……畏まりました」

俺は、一度マチルダとテファに視線を向ける。

「……………」

コクリ……

二人とも頷く。俺も一度頷き返し、夫人達にテファの事情を語った。

テファが、今は亡きアルビオン財務監督官モード大公とエルフの

間に生まれた娘である事

四年前、テファとテファの母の存在が当時のアルビオン王家に知られ、モード大公が肅清を受けた事

マチルダの実家サウスゴータ家も、モード大公に味方してテファ達を匿った為に、取り潰しにあった事

その時、テファの母は王軍の手にかかり死亡し、テファは難を逃れ、マチルダと共に逃げ延び、今日までウエストウッドの森の奥でひっそりと隠れ住んできた事

全てを語り終えた時、オルレアン夫人達は皆、目を伏せ俯いた……。

「う、うう……テファさん、可哀想……！」

ジョゼットは、テファの境遇に涙を流す。

「まこと、何という悲劇……！如何にエルフに対する恐怖があったとはいえ、無抵抗の者の命を奪うなど……！」

ペルスランもまた、テファの悲劇に涙し、人間の残酷さに嘆く。

「……………」

すっ……

その時、それまで沈黙していた夫人が立ち上がり、テファの前に

歩み寄る。

「……テファさん」

「は、はい……」

「……」

そっ……

「え……？」

ぎゅっ

夫人は何も言わず、テファをそっとその胸に抱き寄せた。

「あ、あの……！」

「……私^{わたくし}には」

「……え？」

「私^{わたくし}には、貴女に何と言葉をかければ良いか、分かりません」

「……」

「ですから……、せめて、いつさせて下さい。私^{わたくし}には、この程度の事しかできませんから……」

「……っ」

ぽろ……

テファの目から、涙が零れた……。

「う……う……」

やがて、テファは嗚咽を漏らし、夫人の胸に自らしがみついた。

「っ、……えええん！！……ええ、えええ……ん……！」

テファはその綺麗な顔をくしゃくしゃに歪ませ、夫人の胸の中で、今までの悲しみを全て洗い流すように泣く。そんなテファを、夫人はそつと抱きしめ、母親が子供をあやすように、優しく頭を撫で続けた……。

大きな声を上げて泣きじゃくる彼女の姿は、まるで迷子の子供の様に小さく、儚かい。

恐らくテファは、子供達の前で年長者として振る舞い続け、今まで誰にも泣きつく事ができなかったのだろう。母を失い、姉のマチルダは出稼ぎで傍におらず……。

本当は、誰よりも泣きたかったはずだ……。誰かに、慰めてほしかったはずだ……。

「……っ……」

マチルダも泣き叫ぶテファを見て、涙を浮かべ口元を押さえる。

「うえええん……っ!」

オルレアンの応接室にテファの泣き声が響き渡る……。

やはり……ここにテファ達を連れてきて良かった。

人の痛みや悲しみを知っているオルレアン夫人や、テファと同じく素直な心の持ち主であるジョゼットなら、きっとテファを受け入れてくれる……。その考えは、間違っていないかった。

これで、テファも心から救われるだろう。

本当に、良かった……。

Episode・10 『引越し ティファニアに救いを……』 (後書き)

こんな感じでした。

如何でしたでしょうか？

Episode・11 『ラ・ロシエール出港 ワルドも傭兵も相手にしたくな

今回は若干の変化はありますが原作に近く、ウェールズと会う前の繋ぎの回になります。

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。

2/17 グレネードについてご指摘を頂き、スタンからフラッシュに修正しました。

2/17 ワルドの決闘前の口上についてご指摘を頂き、ジークの考えを少し加筆・修正しました。

『遍在』がテファ達を旧オルレアン領の屋敷に送り届けた翌朝

俺は、港町ラ・ロシエール最高級の宿『女神の杵』亭の物置き場で、ワルドと向かい合っていた。

「昔……、と言っても君に分かるかどうか分かんが、かのフィリップ三世の治下には、ここでよく貴族が決闘したものさ」

「ほほう、それはそれは」

ワルドの口上を、俺は適当に聞き流す。

一応、説明しておこう。

学院を出発した俺達は、その日の夕方にはラ・ロシエールに到着した。で、原作通り、ワルドが雇った傭兵共に襲われた。

そこへ、キュルケとタバサが駆けつけて来て傭兵共を一蹴。そのまま強引に合流して、アルビオンまでついて来る事に……。

ちなみに……夕食の席で、俺はタバサに思い切り足を踏まれた。そして、こう呟かれた。

『手伝わせほしい、と言ったはず……!』

あの時の視線と、足は痛かった……。

ああ、それと……その時に一応、テファ達の事を伝えておいた。
これも知らせていなかったとなったら、今度はどんな制裁を見舞われるか分からないからな。

話を戻そう。

例によってアルビオン行きの船は、アルビオン大陸が最もラ・ロシエールに近づく『スヴェルの月夜』 二つの月が一つに重なる夜の翌朝にならなければ出ない。つまり、丸一日ラ・ロシエールに足止めされることになった。

そこで宿を取り、『キウルケ・タバサ』 『ワルド・ルイズ』 『俺・ギーシュ』の三組に分かれて宿泊……。

その翌朝 つまり今朝、ワルドに決闘を申し込まれた訳だ。

気になるのは、その時のワルドの台詞だ……。

『君は伝説の使い魔『ガンダールヴ』なんだろう？』

無論、俺は「何の事か？」と、とぼけた。

『……その、あれだ。フーケの一件で、僕は君達に興味を抱いたのだ。学生の身でありながら、巷を騒がせていた盗賊『土くれ』のフーケを退けるなんて、頼もしくもあり末恐ろしくも思った』

ワルドの台詞は原作とは大分違っていた。

『僕は歴史と、兵に興味があつてね。昨日、グリフォンの上でルイ

ズから聞いたところ、フーケのゴーレムを『破壊の杖』を使って撃破したのは君だというじゃないか。そこで持ち合わせの知識から辿り着いたのだ。あらゆる武器を使いこなす伝説の使い魔『ガンダールヴ』に』

筋の通った説明……。原作知識を持っていなかったとしたら、思わず納得してしまったかもしれない内容だった。

だが、奴は俺に初めて会った時に『人とは思わなかったな』と言った。にも関わらず、ルイズから話を聞いただけで<俺』『ガンダールヴ』>が成り立つのは矛盾している。

始祖ブリミルの4体の使い魔は、名前と能力はある程度知られているが、姿形に関しては正確な描写がなかったはずだからな。

つまり、どうやったかは分らんが、奴は学院に来る前からルイズが俺を召喚した事を予め知っていたのだ。

更に原作知識になるが、奴はそれより前から、ルイズが『虚無の担い手』であると予想し、目をつけていた節も見られる。

『もしそれが事実なら、伝説の使い魔の実力がどのぐらいのものだか、知りたいんだ。ちょっと手合わせ願いたい』

それら矛盾を突いてワルドを軽く追い詰めてやるのは簡単だが、今はその時ではない。

ここで下手に矛盾を指摘する様な真似をすると、俺を厄介と見て、夜の襲撃の際に本気で命を狙ってくるかも知れない。

幸い、奴は自分の強さに絶対的な自信を持っている。ならば、それを利用してもらうまで……。

という訳で、俺はワルドの手合わせの求めに敢えて応じたのだ。

「古き良き時代、王がまだ力を持ち、貴族達がそれに従った時代……、貴族が貴族らしかった時代……、名誉と、誇りをかけて僕達貴族は魔法を唱えあつた。でも、実際はくだらない事で杖を抜きあつたものさ。そう、例えば女を取り合ったりね」

「それはまた豪気なことで」

ワルドの口上を、右手に杖ダガーを持ち、適当に相づちを打つ。

「ところでワルド殿、手合わせはいつ始めるので？」

「立会には、それなりの作法というものがある。介添人がいなくて
はね」

「ほう。して、その介添人とは？」

知っているけどな。

「もう呼んである。直に来るだろう」

ワルドがそう言うと、物陰からルイズが現れた。

「ワルド、来いって言うから来てみれば、何をする気なの？」

「彼の実力を、ちょっと試してみたくってね」

「もう、そんな馬鹿な事やめて。今は、そんなことしている時じゃないでしょう？」

「そうだね。でも、貴族という奴は厄介だね。強いかわい、それが気になるのもう、どうにもならなくなるのさ」

お生憎様だ……。俺は自分の能力を貴様に教えてやるつもりは、更々ない。

「ジーク、やめなさい。これは、命令よ？」

「マスター・ルイズの命令では、致し方ない。ワルド殿。申し訳ないが、この手合わせ、辞退させて頂きたいのだが……」

「……（チツ）」

一瞬だが、ワルドの口元が動いた様に見えた。舌打ちでもしたか？

次の瞬間には、ワルドはルイズに穏和な表情を向けていた。

「ルイズ、僕らは何も仲違いで喧嘩をする訳じゃないよ。これから任務を共にする仲間同士、実力を知っておきたいのさ。どうせ今日一日はラ・ロシエールに足止めされるのだし、構わないだろう？」

「でも……」

「ルイズ、この手合わせは僕が挑んだ事なんだ。ここで彼に引かれ

ては、僕の立場がない。すまないが、承諾してもらおうよ」

口調と声色こそ穏和だが、どこか有無を言わさない威圧感がある
ワルド。

「……………」

ルイズもそれを感じたのか、それ以上、止めようとはしなかった。

「では、始めるか」

「…………致し方ない」

こちらに杖の先を向けてくるワルドに対し、俺も一応構える。

「全力で来たまえ、使い魔君」

ふん、お断りだ。

「それは……吾輩から仕掛けて構わぬ、と受け取っても？」

「ああ、構わないとも」

「では、お言葉に甘えて…………！」

そうして、ワルドと俺の『手合わせ』が始まった頃……

「もぐ、もぐ…………うむ、なるほど。ハシバミ草は確かに苦いが、口

の中がさっぱりするな」

「もぐ、もぐ……あなたは食通」

……本体の俺は街の外れの食事処で、タバサと一緒に朝食を取っていたりする。

今頃ワルドと戦っているのは俺の『遍在』だ。種明かしをすると、奴が俺に手合わせを申し込んできた時に、隙を見てすり変わっていたのだ。

ワルドを油断させ、俺の能力を見せない為の細工、というのも勿論あるが……本音は、ただ怪我をしたくないだけだ。

現状、戦闘技能は間違いなくワルドの方が上　　まともに戦えば、俺に勝ち目はない。

チート能力があるとは言っても、俺は戦士でも何でもなし。『ガンダールヴ』の力はあるまで『武器を持つと身体能力が上がり、持った武器の扱い方が分かる』というだけの代物　いきなり『最強の達人』になれる訳ではない。

結局、最後に物を言うのは当人の地力なのだ。

とはいえ、俺が全力で戦ったならワルドに勝つのは難しくないだろう。『加速』で背後に回り込んで刺すなり、フルパワーの『カッター・トルネード』で千切れ飛ばすなり、超巨大『ブレイド』で斬り飛ばしてしまうなり、手段を選ばなければやり様は幾らでもある。だが……ルイズの目がある以上、揮える力は大幅に制限されてしまう。

性根はともかく……本物の戦闘能力を持つワルドとハンデをつけて戦えば、合いたくもない痛い目に合うのは明らか　ならば、戦わなければならない。

『遍在』に交代選手となってもらい、本体は雲隠れ　『遍在』なら幾ら傷付こうと、本体の俺は痛くも痒くもないからな。『スキルニル改』を渡した時にマチルダに偉そうな事を言った手前、少々バツが悪いが……これは自衛の為だと思って納得しておく。

と、いう訳で……一人で過ごすのも味気ないと思い、既に俺の能力を知っているタバサに、黙っていた詫びも兼ねて時間潰しに付き合ってもらったのだ。

ちなみにタバサは俺達と合流した時は、余程慌てて来たらしく寝巻姿だったので、適当に服を購入して着替えてもらった。無論、食事も含めて代金は俺持ちだ。

『遍在』は手合わせに適当に負けた後、一人になった所で消える手筈になっている。

うむ、細工は完璧だ　。

「もぐ、もぐ……んっ、美味かった。タバサ、吾輩はもう終いにするが、おぬしはどうする？まだ食うか？」

「もぐ、もぐ……食べる」

「うむ。おゝい、追加してくれ！」

その後、タバサは五回ほど料理を追加注文して、ようやく満足した。

朝から良くあれほど食えるものだ。……というか、あの細身の身体はどこにあの大量の料理が入るのだろうか？

俗に大食い^{フードファイター}の選手などと呼ばれる人々は、腸内の乳酸菌が赤ん坊並に多くて食ってもすぐに消化しエネルギーに変わってしまうらしく、その気になれば幾らでも食べられ、尚且つ太らないらしいが……タバサもそうなのだろうか？

羨ましい様な、羨ましくない様な……。まあ、タバサの大食いはさておき

食事を取り終わるか、終わらないかぐらいの時間に、ワルドと『遍在』の手合わせも予定通り　つまり『遍在』の敗北に終わり、俺はタバサと二人で夕方までラ・ロシエールの観光をして時間を潰した。

そして、夜……

「……………」

俺は一人、宿のベランダから一つに重なり、銀色に光る月を眺めていた。先程までは一階の酒場で、ギーシュ達と食事していたのだが、途中で抜け出したのだ。

一人でこの先の事を考えたかったのと、後はワルドへの演技だな。

奴はどうやら、俺のチート能力にはまるで気付いていないようだ。恐らく『ガンダールヴ』のルーンを持った平民メイジ……その程度の認識だろう。

『遍在』はワルドと戦う際、『ウィンド・ブレイク』『エア・カッター』『エア・ハンマー』しか使っていない。その上、見様見真似の素人剣術　ワルドにも隙だらけだと言われた。速いだけで、動きに無駄が多く、魔法の扱いも力任せで単調過ぎると　余計なお世話だが、正しい指摘だ。

とはいえ、ワルドはもう俺を問題視はしてこないだろう。これで多少は動き易くなる。

「ジーク」

ん？

「マスター・ルイズ？」

声に振り返ると、ルイズが心配そうな顔でこちらを見ていた。いつの間に……？

「どうかしたのか？」

「どうかしたのか、って……」

ああ、そうか。ワルドに負けて、俺が落ち込んでいると思ったのか……。

「ふふふ……」

「な、何が可笑しいのよ……!!?」

「優しいな、マスターは」

「なっ!?!」

ボツ!

ルイズの顔が、音を立てる様に赤く染まった。

「ははは!顔が赤いぞ、マスター・ルイズ?」

「な、ななな!何言ってるのよっ!!」

「ふふ……ありがとう、マスター・ルイズ」

「えっ……?!」

一転してきよとした顔になるルイズ。

「ワルド殿に敗れ、吾輩が落ち込んでいると思い、励ましに来てくれたのであろう?」

「そ、そんなんじゃ、ないわよ!」

そんなに赤くした顔を逸らしても、説得力はない。なんだかんだ言いつつ、優しい娘だ。

素直じゃないのはルイズの愛嬌だ。

「まあ、どちらでも良いさ。だが、吾輩はそれほど落ち込んでおらんぞ」

「えっ？」

「ワルド殿は魔法衛士隊、それもエリートと名高い『グリフォン隊』の隊長を務めるほどの人物。実力は間違いなく一流だ。対して吾輩は、長らく一人で生きてきたが、生き抜く事を優先してきたのでな。本格的な戦闘は、殆ど経験しておらなんだ。昼の敗北は、必然と言えよう」

負ける事を、俺自身が望んでいた訳だしな。

「……そ、そう」

安心した様な、どこか残念そうな表情を浮かべるルイズ。

「今日は、良い勉強をさせてもらった。まあ、少々痛かったがな」

「あ、そうだわ！怪我、大丈夫……？」

「案ずるな。元より大した傷ではないし、既に治療も済」

ガシャアアアンツ！！

「「っ！？」」

今の音は、下から……はっ！？

「マスター!!」

「え!？」

バツ!

俺が咄嗟にルイズを抱えて飛び退った瞬間

ドオオン!!

轟音を立て、ベランダの俺達がいた場所が砕けた。危なかった…!!

「な、何なの?!？」

「どうやら……敵襲の様だな!」

一瞬の事だったが、あれが『風』の魔法なのは分かった。そして、その射角も……!

俺は空を、月の方を見上げる。すると……やはりいた、黒マントの白仮面　ワルドの『遍在』!

原作ではマチルダがゴーレムで襲って来る場面だが、こちらでは俺が先に仲間にしてしまったからな。と、そんなことより逃げねば!

「マスター・ルイズ!こっちだ!」

「え、ええ!」

ルイズの手を引き、宿の中へ。そして、一階へ通じる階段を駆け降りる。

すると、既に一階は戦場と化していた。

一階で飲み食いしていたタバサ達が、テーブルを倒してバリケードとし、入口側に陣取った傭兵共と交戦している。

俺とルイズも、敵の矢に注意しながらそこへ合流した。

「参ったね」

ワルドの言葉に、キュルケが頷いた。

「やっぱり、この前の連中は、ただの物取りじゃなかったわね」

「先程、吾輩とマスター・ルイズも奴らの一味と思しきメイジに襲われた。もはや、あやつらがアルビオン貴族派の差し金であるのは明白……情報は筒抜けという事だ」

「一体、どこから……」

ルイズの呟きに、俺は首を振る。

「分からんし、今はそれを考えている場合ではない。何としても、この場を切り抜けねば」

「ダーリンの言う通りだけど……奴ら、中々手強そうよ?」

キウルケが杖をいじりながら、倒したテーブルの端から敵の様子を窺う。

「……奴らはちびちびとこっちに魔法を使わせて、精神力が切れたところを見計らい、一斉に突撃してくるわよ。そしたらどうすんの？」

「僕のゴーレムで防いでやる」

ギーシュがやや青い顔で言った。今日までほんの少しだが、魔法の訓練に付き合ってたからギーシュの力は原作より随分上がったというはずだが……流石に、あの傭兵の人数を相手にするのは無茶というものだ。

「ギーシュ。おぬしの力量を疑う訳ではないが、傭兵共のあの数を相手にするのはまだ無理だ。やめておけ」

「ダーリンの言う通りよ。あんたの『ワルキューレ』じゃあ、一個小隊が関の山ね」

「や、やってみなくちゃ分からない」

「落ち着くがよい、ギーシュ」

「せ、先生……。で、でも……！」

「聞け、ギーシュ。吾輩達はあらゆる障害をくぐり抜け、生きてアルビオンに行かねばなんのだ。こんな所で傭兵など相手にしておる場合ではない」

「そ、それはそうですが……戦わずにどうやって、この場を切り抜けるのですか？」

「フッフ、心配無用。こんな事もあるうかと、用意しておいた物がある」

俺は懷に手を入れ、用意しておいた物^{ぶつ}を取り出す。

「？ダーリン、なあにそれ？」

キュルケが疑問符を浮かべて、俺の手にした物^{ぶつ}を指さす。

俺の手にあるのは、直径3センチ程の玉が2つ　それぞれ別物だ。

「フフ、まあ見ておれ」

あ、いや、見ていては不味い……！

「皆、目を瞑れ」

「「「え？」「」「」

ルイズ、キュルケ、ギーシュの三人は疑問符を浮かべる。

「……………」

ス……

タバサは何も言わず、素直に目を瞑った。信頼してくれているな。

「一体、何をするつもりだね？」

ワルドは胡散臭そうにこちらを見ている。

この野郎……俺の『遍在』に勝ったからといって、調子に乗りおつて……！今に見ている……！

「ジーク、一体何をする気なの！？ちゃんと教えなさいよっ！」

ああもう、ルイズもこんな時に面倒な……！

ええい、もういい！幸いタバサは目を瞑っている。俺と二人なら、何とかなるだろう！

意を決し、俺は勢い良く立ち上がり

「ふんッ！」

玉を勢いよく傭兵に向けて投げつけた！すかさず、懷から用意しておいた物ぶつその2を取り出して装備！

コン、コンコン……

「な、なんだこりゃ？」

傭兵共の視線が転がる玉に集まる。そうだ、精々刮目かつもくして見るが良い！その方が、効果が

ボンッッ！！

高まる！

カアアアアアーッッッ！！！！

「「「「「ぐあああああッッッ！！！！？？？」」「」「」」

クククッ！これぞジークフリート特製フラッシュグレネード！強力な閃光により、敵の視覚を奪う魔法手榴弾。この強力な閃光の前に、目が暗まない人間は存在せぬ！

近くで喰らった奴らは、下手をすると失明するかもな……ククク。

「「「うぐうあああッッ！！！！？」」「」「目があッ！！？」」「痛えええッッ！！？」」

用意しておいた物^{ぶつ}その2 サングラス越しに、悶え苦しむ傭兵共の姿が見える。だが……俺の攻撃は目潰しだけではないぞ！

プシュウウウ……！

閃光とは時間差で発動するもう1つ 激しく白い煙を噴き出す。

「『ウインド』」

俺は風を起こして、その煙を傭兵共の方へ流す。すると……

「な、なんだ……ぐ！？ゲホッ！ゲホッ！！」

閃光のダメージが比較的軽い連中が煙を吸い込み、咳き込み始め

る。

「ぐ、あ、ああ……か、身体が……痺れ……！」

バタツ、バタバタツ……！

崩れる様に倒れていく傭兵共。これぞジークフリート特製パラ
イズグレネード！有効範囲はやや狭いが、強力な神経ガスを噴出
する制圧型魔法手榴弾^{マジック}。ガスを少量でも吸い込んだ者は全身が痺れ、
数日間はスプーン一本まともに握れない！

「ぐ、が、あ、ああ……！」「か、身体が……！」「……動か
ねえ……！」

地面に痙攣するように倒れた傭兵共。

悪く思っ……。ワルドなんぞに雇われたのが、貴様らの運の尽
きだ。

だが、安心するが良い。後遺症を一切残さない……はずだ。

さて、傭兵共はこれで良し……。

問題は……こちら側か。

「ぎゃああああ！？め、目がああ……！！！」

ギーシュは目を押さえて、床を転げまわっている。割としっかり
喰らってしまった様だ。

「くううう！？目が痛い……っつ！！」

ルイズも両手で目を押さえて蹲っている。

「う、うう……！め、目が……くっ！」

ワルドもか……。フツ、ざまあみる。

「う、くう……！め、目を瞑れって、こっとう事だった訳ね……！」

キュルケは割と落ち着いている。恐らく、他より一瞬早く目を瞑ったおかげでダメージが少なかったのだろう。

「タバサ、おぬしは無事だな？」

「……」コク

「では、宿の裏にシルフィードを呼んでくれ。この場を脱出し、棧橋へ向かう」

「分かった」

それでは、俺はルイズ達を運ぶか。

「『クリエイト・ゴーレム』」

ヴァルキュリアを4体作り出し、それぞれルイズ達を担がせ、俺達6人は裏口から宿を脱出。外に出たところで、ギーシュにヴェルダンデを呼び出させ、その後シルフィードに全員で乗り込み棧橋へ。

シルフィードが「6人と1匹なんて重いよね！」と文句を言ったが、タバサが杖で説得^{なぐって}して黙らせた。

あとシルフィードの背の上で、ルイズ達の目には『治療^{ヒーリング}』をかけておいた。治した途端にルイズには掴み掛られ、ぎゃあぎゃあ文句を言われたが……。

ともあれ、竜^{シルフィード}で飛んで栈橋に行つたおかげで、途中『遍在^{ワールド}』の妨害もなく、俺達6人と韻竜1頭とモグラ1匹は全員無事に目的の船の前に到着した。

枯れた巨大な樹を利用して造られた、地球ではあり得ない建築方法の栈橋を実際に見た時は内心感動したが、その感動に浸る暇がないのが残念だ。

「な、なんでえ？おめえら！」

「船長はいるか？」

甲板で寝ていた船員が、船に乗り込んだ俺達に気付いて起きた。酒臭い……、酔いつぶれて寝ていたみたいだな。

まあ、面倒な出港交渉はワルドに任せておけばいい。

俺はその場を離れ、交渉が纏まるのを待つ。

ワルド交渉中……………。

「出港だ！もやいを放て！帆を打て！」

交渉成立 『風石』の不足をワルドが補い、積荷の硫黄の運賃と同じ額の金を払うという事で話が纏まった。船長の号令のもと、船員達が手際よく出港の準備を整える。

そして、『風石』の力で宙に浮かぶ帆船が、帆に風を受け、俺達を乗せて出港した。

アルビオンはスカボローの港に到着するのは、明日の昼過ぎ頃になるとの事……。

まあ、ウェールズ以下王党派にはその前に会えるはずだし、危険な陣中突破もしなくて済むはずだ。

あとは、俺が上手くウェールズ達を説得するのみ……。頑張ろう！

Episode・11 『ラ・ロシエール出港 ワルドも傭兵も相手にしたくな

キュルケ、タバサ、ギーシュ、そしてヴェルダンデも連れて行きま
す。

ぶっちゃけると、重要なのはシルフィードとヴェルダンデだけなん
ですけどね。タバサとギーシュは主人って事で……あれ？

もしかして、キュルケいらな あ、いえ、何でも……！

そ、それではまた次回ということ……！

Episode・12 『説得 悲劇は見たくないから……』 (前書き)

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。
すが……ああ怖い！上手く書けているかどうか自信がない！

今回は本当に難産でした！！難産の結果、こうなりました！！もう
自暴自棄です！！
やけくそ

2 / 27 ご指摘を頂き、若干修正しました。

3 / 4 Ep・13の修正の為、『四天王』からの連絡部分を修正
しました。

Episode・12 『説得 悲劇は見たくないから……』

ワルドに雇われた傭兵共の襲撃をかわし、アルビオンへの船に乗り込み、ラ・ロシエールを出港した俺達

空を歩き、夜が明け、空に浮かぶアルビオン大陸を目の当たりにし、そして……

現在、空賊に捕まっている。

まあ、空賊といってもウェールズ達なのだが……アルビオンが見えたのとほぼ同時に、彼らに乗っていた船『マリー・ガラント号』が拿捕されたのだ。本物のラピュタを見た感動に浸る暇もなかった。

船を積荷も船員も丸ごと全て奪われる形で、俺達　　というかルイズ達が貴族の子女である事に気付かれ、こちらの船にご招待された訳だ。

船の上であり、敵船の大砲がこちらを向いている事もあって、ルイズ達の安全上抵抗する訳にもいかず、またその必要もない為、俺達はあっさり捕まった。幸いにして、キュルケとタバサがそれぞれゲルマニアとガリアの出身者である事は、二人が黙っていてくれたので気付かれていない。貴族派よりはマシだと言っても、面倒な事になるのは変わらないからな。

そして、今は彼らの船の船倉に押し込められている。全員が杖を

奪われ、シルフィードやヴェルダнде、それとワルドのグリフォンは『眠りの雲』^{スリープ・クラウド}で眠らされ、甲板に括りつけられているはずだ。

周りには、酒樽やら小麦か大麦が入った麻袋やら、火薬の樽やら砲弾やらが雑然と置かれていた。まあ、別にどうでもいい事だが……。

そんな中で、俺達はそれぞれ思い思いに過ごしている。

キュルケとタバサはいつも通り、爪の手入れと読書……この二人は比較的余裕だ。ある程度、戦いや窮地に慣れているのだろう。

ギーシュは青い顔で膝を抱えて何やら震えている……。小心者、と思わない事もないが、ギーシュの反応は普通と言っていいたいだろう。あいつは、父親が『元帥』でもあるから、余計にこの状況は危機的に感じられるはずだ。

ワルドは何が面白いのか分からんが、船倉の積荷を見物……。こいつはまあ、どうでもいい。

そしてルイズは……俺の隣で、暗い顔で座り込んでいた。

「……………」

こんな時、気の利いた慰めの言葉でもかけてやれば良いのだろうが……残念ながら、俺は何も言ってやれない。何を言っても、慰めどころか不安を煽ってしまいそうな気がする。

こんな時は、黙って傍にいい方がいい……と思う。というか、そ

れしか出来ん。

ガチャッ！

そんな事を思っていた時、船倉の扉が開いた。

「飯だ」

太った男が、スープ皿を差し出してくる。

「……」

近くにいた俺が受け取ろうと手を伸ばしたが……

ヒョイ

「……何の真似だ」

野郎、俺の手が届く直前で皿を持ち上げやがった……。一応、分かっていたつもりだが……。実際やられると腹が立つな。

「飯は、質問に答えてからだ」

「空賊が……。吾輩達に何を聞く事がある？」

「お前達、アルビオンに何の用なんだ？」

「旅行よ」

いつの間にか立ち上がっていたルイズが、俺が答えるより先に答

えた。この時期に『旅行』は、言い訳としては苦しいと思うのだが……。

「トリステイン貴族が、今時のアルビオンに旅行？ 一体、何を見物するつもりだい？」

「そんなこと、あなたに言う必要はないわ」

「恐くて泣いていた癖に、随分と強がるじゃねえか」

「……」

ルイズは顔を背ける。男は軽く笑うと、スープ皿と水の入ったコップを置いて、出て行った。

俺はそれを手にとって思う。人質六人に、スープと水が一人前ずつ……随分な扱いだ。

「……ワルド殿」

「なんだい？」

「吾輩ら六人で、この少ないスープでは腹の足しにもならぬ。マスター・ルイズら四人で、分けてもらおうと思うのだが……如何か？」

「ちょ、ちよつとジーク!？」

ルイズが声を上げるが、ワルドがそこに被せる様に言う。

「そうだね。レディ達を空腹にさせるのは忍びない。分かった、僕

も遠慮しよう」

「ワルド!？」

「かたじけない」

一応、礼を言っておく。

俺は適当な木箱をテーブルに見立て、スープと水を置いた。

「さあ、マスター・ルイズ、ギーシュ、タバサ、キュルケ。四人で、このスープを分けて飲んでくれ」

と、言っただが……

「……あんな連中の寄こしたスープなんか飲めないわ」

ルイズがそっぽを向いてしまう。まだ、意地と誇りの区別がつけられないらしい。
プライド

「全く……ホントに、トリステイン貴族はしょうもないわね。こんな時につまらない意地を張るなんて」

キュルケが呆れ顔で言った。

「なんですって……!？」

「食べなければ、いざという時動けない」

タバサはそれだけ言うと、木箱に寄って座った。

「良いこと、ヴァリエール？こうして捕まっちゃった以上、あたし達に出来るのはせめて体力を温存しておく事ぐらいなの。いざ、チヤンスが来た時に何とかできる可能性を、少しでも高くする為にね。大体あんた、何だか知らないけど大事な任務があるんでしょ？それをやり遂げなくて良いの？」

「良い訳ないでしょッ！！」

「だったら、少しぐらいの屈辱は我慢しなさいよ。任務より意地を優先するなんて、三流以下もいい所よ」

言うだけ言つて、キュルケもタバサの横に座った。

キュルケも中々言うじゃないか。流石は、軍人の家系と言ったところか……肝が据わっている。見直したぞ。

「マスター・ルイズ。二人の言う通り、食わねば身体がもたぬ。気持ちは察するが、今は辛抱してくれ」

「……………分かったわよ」

ルイズも渋々と言った態度で、スープを飲みに行った。

四人でスープを分けると、やはりあつという間に無くなり、する事が無くなり、すぐに最初の状態に戻った。

手持ち無沙汰、とはこの事……。

ええい、ウェールズの部下め。早く来い……！

バタンツ！

来た！

『噂をすれば影が差す』というが、考えているだけでも影は差す様だ。

「おめえらは、もしかしてアルビオンの貴族派かい？」

痩せこけた男は、俺達を一通り見渡すと、笑いながらそう聞いて来た。

「……………」

俺達は誰も答えない。

「おいおい、だんまりじゃ分からねえよ。でも、そうだったら失礼したな。俺達は、貴族派の皆さんのおかげで、商売させてもらってるんだ。王党派に味方しようとする酔狂な連中がいてな。そいつらを捕まえる密命を帯びてるのさ」

「じゃあ、この船はやっぱり、反乱軍の軍艦なのね？」

男の言葉に反応したのは、やはりルイズだった。

「いやいや、俺達は雇われてる訳じゃあねえ。あくまで対等な関係で協力し合ってるのさ。まあ、おめえらには関係ねえことだがな。で、どうなんだ？ 貴族派なのか？ そうだったら、きちんと港まで送

ってやるよ」

「っ！」

ギーシュがパツと顔を明るくした。人質にならなくて済むと、希望を見出したようだな。

だが、残念だなギーシュ……。

「誰が薄汚いアルビオンの反乱軍なものですか。バカ言っちゃいけないわ。私は王党派への使いよ。まだ、あんた達が勝った訳じゃないんだから、アルビオンは王国だし、正統なる政府はアルビオン王室ね。私はトリステインを代表してそこに向かう貴族なのだから、つまりは大使ね。だから、大使としての扱いをあんた達に要求するわ」

「……!?」「……」「……」

ギーシュが希望を打ち砕れ、声にならない悲鳴を上げる中……俺、キュルケ、タバサの三人は目を伏せていた。

そう、ルイズはこういう馬鹿正直な娘なのだ……。話さなくて良し事……。いや、むしろ話してはいけない事をペラペラと……。本当に、大使には向かない性格だ。

「正直なのは確かに美德だが、お前達、ただじゃ済まないぞ」

「あんた達に嘔吐いて頭を下げるぐらいなら、死んだ方がマシよ」

言い切ったよ……。嘔を吐くのが嫌だというなら、せめて黙秘す

るべきだと思っただが……。

「……………」

見れば、キュルケとタバサはすっかり呆れ顔……、ギーシュは絶望に打ちひしがれてガックリ肩を落としている。

それぞれの気持ちは、十二分に理解できる。俺とて、この空賊がウェールズ率いる王党派だと知らなければ、多分ギーシュに近い反応をしたと思う。

小心者と笑ってくれるな？この状況は、それほどの恐怖だという事だ。

「頭に報告してくる。その間にゆっくり考えるんだな」

男はそう言い残し、去って行った。

「お、終わりだ……！」

遂に黙っていらなくなったのか、ギーシュが頭を抱えて呟いた。

そんなギーシュに、ルイズは腰に手を当てて毅然と言い放つ。

「情けないわね。あんたもトリスティン貴族なら、最後まで毅然としてなさいよ」

「何を言っただね！？元はと言えば、君の所為じゃないかッ……！」

「最後の最後まで、私は諦めないわ。地面に叩きつけられる瞬間ま

で、ロープが伸びると信じるわ」

真っ直ぐにそう言うルイズが、才人は眩しかったらしいが……俺にはとてもそうは見えない。

「おめでたいわね……」

キュルケがそう吐き捨てた。

「なんですって……!？」

「……ヴァリエール。あんた、さっきあたしが言った事、もう忘れたわけ？それとも、あたしの言う事なんて、まともに聞いてなかったのかしら？」

「どういう事よ……ッ!？」

「だから、あんたには大事な任務とやらがあるんでしょう？なのに、余計な事をペラペラ喋って……。これで貴族派に引き渡されるなり、殺されるなりしたら、任務は完全に失敗よ？」

「う……っ!」

「別に嘘を吐けとまでは言わないけど、せめて何を聞かれても何も喋らないぐらいはするべきだったんじゃないかしら？」

「う、う……」

キュルケの言う事は、至極正論 恐らく、ルイズも理解できるから何も言い返せないのだろう。結局、黙ったままルイズは隅の方

でしゃがみ込んだ。

ルイズには悪いが、俺もキュルケと同感である。結果的に、ルイズは任務の達成よりも自分の意地を優先した事になるのだ。

相手が運良くウェールズ達だったから良かったものの、これが仮に本当に貴族派の息のかかった空賊だったなら、俺達は元よりトリステインも破滅だ。

危なっかしいなあ、今のルイズは……。

「頭が呼びだ」

そうして、先程の男が再び呼びに来たのは、少し経ってからの事だ……。

全員揃って連れて行かれた先は、船の甲板の上に設けられた船長室……。そこには黒く汚れたシャツに、赤い布で髪を無造作に纏め、眼帯で左目を隠した男がいた。^{ウェールズ}格好だけ見ると、まるで『パイレーツ・オブ・カリビアン』のジャック・スパロウみたいだ。豪華なテーブルの上座に行儀良く座り、水晶のついた杖をいじっている。

あの杖……アンリエッタ姫が持っていた杖をレイピア型にしたような杖だな。僅かに『風』の精霊力を感じる……。あの水晶は、含有量こそ少なめだが風石の結晶が含まれているようだ。

「おい、お前達、頭の前だ。挨拶しろ」

「……っ」

男に突かれたルイズだが、変装したウェールズを睨むばかりだ。

当のウェールズは、面白そうに笑っている。

「気の強い女は好きだぜ。子供でもな。さてと、名乗りな」

声色を低く変えている様だが、やはり青年風のよく通る声をしているな。

「……大使としての扱いを要求するわ」

ルイズは、まだ言っている……。

「そうじゃなかったら、一言だってあんた達になんか口を利くもんですか」

口を利いているじゃないか……、浅いなあ……。

「王党派と言ったな？」

「ええ、言ったわ」

「何しに行くんだ？あいつらは、明日にでも消えちまうよ」

「あんたらに言う事じゃないわ」

ルイズの気丈な言葉に、ウェールズは更に笑みを深めた。

「貴族派につく気はないかね？あいつらは、メイジを欲しがっている。たんまり礼金も弾んでくれるだろうさ」

「死んでも嫌よ」

そう言った時のルイズは、声や表情こそ気丈だが、身体は小刻みに震えていた。当然だ……丸腰で敵に囲まれ、いつ殺されるかも分からないこの状況で、怖くない訳がない。ギーシュなど、よく見なくても分かる程に真っ青な顔で震えている。

「もう一度言う。貴族派につく気はないかね？」

「っ！」

ルイズはキツと顔を上げ、手を腰に当てて胸を張る。

「ないって言うてるでしょ！同じ事を何度も言わせないでッ！」

「……」

ウェールズは眼光鋭くルイズを睨み、しばしルイズと睨み合う。

「……」

沈黙……。室内が、ピンと張り詰めた空気で満たされる。

どのくらいそうしていたか……、重苦しい空気に嫌気がさしてきた頃……

「……フッ」

ウェールズの嘖き出し笑いが、その空気を破った。

「フフフツ……あっはっはっはっ！トリステインの貴族は、気ばかり強くて、どうしようもないな。まあ、どこぞの国の恥知らず共より、何百倍もマシだがね」

そう言うウェールズは笑いながら立ち上がった。

ルイズ達は、その態度の豹変ぶりに戸惑い、顔を見合わせる。

「失礼した。貴族に名乗らせるなら、こちらから名乗らなくてはな」

その言葉と共に、周りの連中も感じの悪いニヤニヤ笑いをやめ、一斉に直立した。

ウェールズも頭の黒髪のカツラ、眼帯、付け髭を取り去り、正体を現す。

「私はアルビオン王立空軍大将、本国艦隊司令長官……。本国艦隊といっても、既に本艦『イーグル号』しか存在しない、無力な艦隊だがね。まあ、その肩書きよりこちらの方が通りが良いだろう」

居住まいを正し、ウェールズは威風堂々と名乗った。

「アルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ」

「……」

ルイズ、キュルケ、ギーシュの三人が目点を点にしている。ぷっ…

…い、いかん笑っては……！

「アルビオン王国へようこそ。大使殿。さて、御用向きを窺おうか」
ウェールズは、爽やかな笑みを浮かべて、俺達に席を勧めた。

何はともあれ、全員無事にウェールズ皇太子以下アルビオン王党派に接触できた俺達は、そのままニューカッスルの城まで招待される事になった。

ルイズ達は最初、ウェールズが本当に皇太子かどうか疑っていたが、ウェールズの『風のルビー』とルイズの『水のルビー』が共鳴した事で、彼が本物だと信じた。そして、アンリエッタ姫からの密書^{ラブレター}を渡し、姫からの恋文を返してもらった事になった、と……。

俺達を乗せた『イーグル号』は、貴族派の監視の目を掻い潜り、大陸の下からニューカッスルに帰還した。

「ほほ、これはまた、大した戦果ですな。殿下」

港に着艦し、船を降りたウェールズと俺達を出迎えたのは、一人の爺さんだった。確か……名前はパリーと言ったか。

パリー爺さんは、『イーグル号』に続いて港に入った『マリー・ガラント号』を見て、顔をほころばせた。

「喜べ、パリー。硫黄だ、硫黄！」

「「「「うおおっ！！」「」「」」

ウェールズが叫ぶと、集まっていた兵士達が歓声を上げた。

「おお！硫黄ですと！『火』の秘薬ではござらぬか！これで我々の名誉も、守られるというものですな！」

硫黄は、黒色火薬の原料になる。だから、ハルケギニアでは『火』の秘薬と呼ばれているらしい。

「くうう……！先の陛下よりお仕えて60年……、こんな嬉しい日はありませぬぞ、殿下。叛乱が起こってからは、苦渋を舐めつばなしではありましたが、なに、これだけの硫黄があれば……！」

パリー爺さんの言葉に、ウェールズはにっこりと笑って頷く。

「王家の誇りと名誉を、叛徒共に示しつつ、敗北する事ができるだろう」

「荣誉ある敗北ですな！この老骨、武者震いが致しますぞ。して、ご報告なのですが、叛徒共は明日の正午に、攻城を開始するとの胸、伝えて参りました。全く、殿下が間に合って、良かったですわい」

荣誉ある敗北か……。そんなものは絵空事だ。

「してみると間一髪とはまさにこの事！戦に間に合わぬは、これ武人の恥だからな！」

ウェールズ達は、心底楽しそうに笑い合う。俺が素人だから分か

らないだけなのかも知れないが、彼らからは死を目前に控えた人間の『恐怖感』や『悲壮感』が微塵も感じられない。

明日の正午に全滅する……なんて、実は嘘なのではないかとさえ錯覚してしまいそうだ。

原作にはウェールズに関する描写が少なく、どの方向から説得すれば良いのか、正直困った……。これは、思ったよりも説得は大変かも知れんな。

だが……諦めたらそこで試合終了だ！何とか、頑張らねば！

そうして密かに闘志を燃やして間に、俺達はウェールズに案内され、城内の彼の部屋に招かれた。途中で、キュルケとタバサは「あたし達は遠慮するわ」と言ってウェールズの部屋には入らず、別室に案内された。二人とも、気を利かせてくれたらしい。

で、部屋に入った訳だが……正直、とても王族の居室とは思えない部屋だった。木製の簡素なベッド、椅子と机が一組、唯一の装飾と言えば壁に飾られたタペストリーぐらい……。どうやら私財はとつくに売り払ってしまったようだ。

それはさておき……結論から言えば、目的のアンリエッタ姫の恋愛は無事に返してもらえた。

それに原作同様、ウェールズは自分達王党派の敗北を悟ってよかった。

『我が軍は300。敵軍は5万。万に一つの可能性もありえない。我々に出来る事は、はてさて、勇敢な死に様を連中に見せることだけだ』

ルイズが『ウェールズの討ち死もその中に含まれるのか？』という質問に対しても、ウェールズのあつさりこつ答えた。

『当然だ。私は真つ先に死ぬつもりだよ』

その時のウェールズには、全く迷いがなかった様に思える……。

しかし俺にはウェールズ達は、自分達が敗北し、この世を去った後の事を『見て見ぬ振り』をしようとしている様にも思える。

直接話した訳ではないが、ウェールズの表情や言葉を聞いて一つ感じた事がある。それは……ウェールズは、『荣誉ある敗北』など存在しない事を心の底では理解しているのではないか、という事だ。

彼は馬鹿ではない。むしろ、聡明な男だろう。だが……如何せん、思い込んだら極端に視野が狭くなる傾向があると見た。

一先ず、その辺りから攻めてみるか……。

王党派の最後の晩餐が始まるまで、少しだけが時間がある。確認を取ったところ……パーティーはあと1時間ほどで始まるのとことだ。

短い様な長い様な微妙な時間だが、チャンスはここしかない
！！

この俺の、一世一代の大博打　　伸るか反るか……勝負だ！

「ウェールズ皇太子殿下」

「おや？君は、ラ・ヴァリエール嬢と一緒にいた……」

「はっ、申し遅れました。ジークフリートと申します」

「何か私に用かな？」

「はっ。恐れながら、殿下にお願いしたき議がございます」

「おや、ワルド子爵に続いて君もかね？」

そう言えば、奴もルイズと結婚するとかで、ウェールズに媒酌を頼んだのだったか。あんな裏切り者と一緒にされるのは心外だが、そんな事は今はどうでもいい。

「無礼は重々承知。ですが、何卒お聞き届け下さいますよう……何卒！」

膝をつき、頭を下げて頼み込む。ここで断られては元も子もない。

「ああ、構わないとも。私に出来ることならば、何でも言ってくれたまえ」

よし！

「それでは、宴が始まるまで、暫しお時間を頂戴したく存じます」

「……何か込み入った話の様だね。分かった、私の部屋に行こう」

「御心に感謝致します」

さあて……、本番はここからだ。

あいつら、間に合ってくれと良いが……。

<SIDE：ウェールズ>

「さて……、それでは改めて伺おうか。私に、頼みたい事とは一体何だね？」

私室に戻り、私はラ・ヴァリエール嬢の従者 ジークフリート
と名乗った彼と向かい合う。

「その前に……暫し、お待ちを」

彼は腰の短剣を引き抜き、呪文を唱えた。

使った魔法は『ディテクト・マジック探知魔法』と『サイレント消音』……余程、他には聞かれた
くない内容らしい。

「余り時間がありませぬ故、単刀直入に申し上げます」

そう前置きすると、彼は私の前に膝をついた。

「ウェールズ皇太子殿下、どうか亡命のご決断を。命を粗末にしてはなりません。貴方は生き延びるべきお方だ！」

「……ふふふ、案じてくれるのか、私達を。君もラ・ヴァリエール嬢と同じく、心優しいのだな」

ラ・ヴァリエール嬢といい、目の前の彼といい……トリスティンには、アンリエッタの傍には真っ直ぐな人が多い様だ。

「しかし……悪いが、それは出来ない」

「何故です……？殿下がその御命を落とされれば、正統なるアルビオン王家の血筋は完全に途絶えてしまうのですぞ……？」

「それは重々承知している。だが……それは、内憂を払えなかった我らテューダー王家が負うべき罰であり、課せられた最後の義務だ」

私は部屋の窓辺に立ち、一つに重なった月を見上げる。

「我々の敵である貴族派『レコン・キスタ』は、ハルケギニアを統一しようとしている。『聖地』を奪還するという、理想を掲げてな。理想を掲げるのはよい。しかし、あやつらはその為に流されるであろう民草の血の事を考えぬ。荒廃するであろう、国土の事を考えぬ」

エルフ達によって奪われた『聖地』……。歴史上、幾度となく奪還を目指し、先祖達がエルフ達に戦いを『聖戦』を挑んできた。しかし、その度に多大な犠牲を伴って敗北を続けてきた……。

「我らは勝てずとも、せめて勇氣と名誉の片鱗を貴族派に見せつけ、ハルケギニアの王家達は弱敵ではない事を示さねばならぬ。奴らがそれで、『統一』と『聖地の回復』などという野望を捨てるとも思えぬが、それでも、勇氣を示さねばならぬ。それが我らの義務だ。王家に生まれた者の義務なのだ」

「恐れながら、申し上げます……。殿下、それでは駄目です」

「え……？」

思わず振り返ると……跪いたまま顔を上げた彼が、厳しい表情で私を見つめていた。

「勝てずとも、せめて勇氣と名誉を見せつける……。王家達が弱敵ではない事を示す……。残念ながら、それは不可能です。敗者は弱者として罵られ、打ち捨てられ、いずれ忘れ去られるが運命……。王党派が最後に少々悪足掻きをして見せたところで、貴族派の者共には何も示せませぬ。貴族派が、相手の死に様から何かを感じ取れるような高潔な輩ならば、内乱など起こるはずもありませぬ」

「……手厳しいな。だが……君の言う通りだ」

それは、私が目を逸らしてきた真実だった……。

あの貴族派が、我々の死に様などを顧みるはずがない。本当は、分かっていた事だ……。それでも、戦う事で少しでもこの世界に何かを残せるなら、我らの犠牲も決して無駄にはならない。そう自分に言い聞かせ、誤魔化してきた事だ……。

しかし……

「……しかし、やはり逃げる訳にはいかぬ。私がトリステインへ亡命したならば、貴族派が攻め入る格好の口実を与えるだけだ。トリステインに……アンリエッタに、迷惑が掛かる」

愛するが故に、知らぬ振りをせねばならぬ時がある。愛するが故に、身を引かねばならぬ時がある。

私の死を知って、アンリエッタは悲しんでくれるだろう。だが……悲しみは時が癒してくれる。彼女もいずれ私の事を忘れ、いつか自分の幸せを掴んでくれるはずだ。

「恐れながら……殿下、ご心配には及びませぬ」

「え？」

「亡命先は、トリステインにあらず　ガリア王国にございます」

「なんだって!？」

ガリアが、私に亡命を……? いや、しかし彼はヴァリエール嬢の従者のはず……。どういうことだ?

「君は……、ヴァリエール嬢の従者ではなかったのか!？」

「いいえ、正確には『使い魔』にございます」

「……つ、使い魔？」

「はい。この左手のルーンが、その証」

彼はそう言うと、左手の手袋をはずし、甲に浮き出たルーンを見せてくれた。

どうやら、本当にヴァリエール嬢の使い魔らしい……。しかし、人が使い魔になるとは……。

い、いや！そんなことより、今は彼とガリアの繋がりの方だ！

「使い魔だというのなら、尚の事おかしいじゃないか！どうして君が、ガリア王国の密命で動く？！そして何故、ガリアが私を助けようとするのだ！？」

「ガリア王国の密命ではありません。これはあくまで、吾輩個人の意思……。ガリア王ジョゼフ一世陛下には、僅かにご助力を頂いたに過ぎませぬ」

「個人の意思……？ガリア王から助力を……？それでは、私に亡命を勧めるのはアンリエッタでもガリア王でもなく、あくまで君の独断だというのか！？」

「正に、その通りでございます」

馬鹿な……！彼はヴァリエール嬢の使い魔という身でありながらガリア王と繋がりを持ち、トリステイン王国の密命でもガリア王国の密命でもなく、自らの意思で私を亡命させようとこのアルビオンにやって来たというのか……！！？

訳が分からない……！彼の真意は、一体……？

「君は一体……何者なのだ？」

尋ねると、彼は厳しい表情を浮かべ、徐に立ち上がる。

「……吾輩は『無限』のジークフリート。悲劇を嫌悪する者」

<SIDE:OUT>

「悲劇を……嫌悪する者？」

ウェールズが俺の言った言葉を繰り返す。

「ウェールズ殿下……。貴方は、ご自身が討ち死なされた後に起こり得る悲劇を想像した事がお有りか？」

「そ、それは……」

目を逸らすウェールズ。やはり、何も考えていなかった訳ではないらしい。流石に、死後の自分が操られ、アンリエッタ姫誘拐に利用されるとまでは考えが及ばないだろうが……。

「貴族派に乗っ取られたアルビオンが、トリステインへとその魔手を伸ばすはもはや必定……。トリステインはゲルマニアと軍事同盟を結び、これに対抗するでしょう。現状から鑑みるに、トリステイン・ゲルマニア連合の戦力はどれだけ多く見積もっても6万がやっと……。対するアルビオン貴族派は5万、しかし地の利と天下無敵

と謳われた空軍を有しており……双方の戦力はほぼ五分五分か、或いはやや連合が不利でありましょう。戦は、泥沼と化します」

原作では確か、戦争は3、4ヶ月ぐらい続いたはずだ。割と早期に終結したとはいえ、その間に一体、何百人、何千人が命を落としたことか……。

「多くの民が血を流し、国土は荒れ果て……。やがてアンリエッタ姫殿下は、己が憎しみに駆られ、多くの死者を出し、祖国を疲弊させた事への罪の意識に苛まれ苦しまれるでしょう。そこまで……しかと考えた事がお有りか？ そうなれば、もはや『迷惑を掛ける』などという次元の話ではありませぬぞ？」

「う……っ！」

血の気が引いている。そこまでは考えが及ばなかった、という顔だな。

「吾輩は、そんな悲劇を見たくない。貴方さえ生き延びて下されば、確実にその悲劇を回避できるのです！ あらゆる悲劇を回避する策を携え、吾輩はここに参ったのです！ 貴方のみならず、王党派全員の命を救う為に……！」

「！？ 全員だつて……！？」

ウェールズが驚いた、その時だった。

ブルブルブルブル……！

懐に入れておいた『テルの鏡』が震動した。俺は、すぐに懐から

鏡を取り出す。

「吾輩だ」

鏡に、外見年齢17、8歳でセミロングの赤髪をした、女と見間違う様な細面の美男子が映る。

『遅くなりまして申し訳ありません、我が主ジークフリート様。我ら『四天王』、所定の位置に到着いたしました』

「おお、よくぞ来た！待っていたぞ！命令あるまでその場で待機、指示を待て」

『了解いたしました』

ブン……

鏡から映像が消え、通信が切れた。よし、何とか間に合った！これで勝つる！

「じ、ジークフリート殿、今のは一体……？」

「殿下、お喜び下され。たった今、我が配下の者から連絡が入りました」

「え……？」

「我が配下の者達が、脱出船4隻を引き連れ、現在アルビオン大陸の下 ニューカッスルの港付近に到着したとの事。これで王党派300名、誰一人欠く事なく脱出可能です！」

「っ！？ほ、本当に……本当に、臣下達も救ってくれるのか？我々を……やり直す機会を与えてくれるのか！？」

ウェールズの顔に、希望を見た人間の輝きが映る。

さあ、仕上げの一押しだ　俺は大きく頷く。

「御意。準備は万端　後は、殿下のお言葉を待つのみ。さあ、殿下……」
「ご決断を！」

E p i s o d e ・ 1 2 『説得 悲劇は見たくないからな……』 (後書き)

い、如何でしたでしょうか……？ (ビクビク)

説得の結果と、主人公の配下『四天王』の正体については、次回明かされます。

はあ……二次創作とはいえ、文章を書くって、難しいですね……。

Episode・13 『脱出 色々で大仕事だったな……』 (前書き)

毎度の事ながら、更新の際は緊張します……！

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。
す。

3 / 4 『四天王』部分を大幅に修正しました。

Episode・13 『脱出 色々で大仕事だったな……』

準備が整い、アルビオン王党派の最後の晩餐がいよいよ始まるう
としている。

俺は、会場の隅に立ってホールの光景を眺めている。ルイズ達も、俺とは別の場所で大人しくしている。あのギーシュでさえそうだ。

流石のギーシュも、この空気では貴婦人に声をかける気にはなれないらしい……。

「諸君。忠実なる臣下の諸君に告げる。いよいよ明日、このニューカッスルの城に立て籠もった我ら王軍に反乱軍『レコン・キスタ』の総攻撃が行われる。この無能な王に、諸君らはよく従い、よく戦ってくれた」

そう挨拶したのは、現アルビオン王ジェームズ1世 老王は足が弱っているのか、ウェールズに支えられている。

それにしても……ウェールズの父親という割には、少し歳を取り過ぎにも見える。祖父だと言われた方がしっくり来る気がする。

「しかしながら、明日の戦いはこれはもう、戦いではない。恐らく一方的な虐殺となるだろう。朕は忠勇な諸君らが、傷つき、斃れるのを見るに忍びない。ごほっ、ごほっ……！」

言葉の途中で、咳き込むジェームズ1世……。何か病気を患って

いるようだ。

「従つて、朕は諸君らに暇を与える。長年、よくぞこの王に付き従つてくれた。厚く礼を述べるぞ。明日の朝、巡洋艦『イーグル号』が、女子供を乗せてここを離れる。諸君らも、この艦に乗り、この忌まわしき大陸を離れるがよい」

老王の最後の命令　　しかし……

「陛下！我らはただ一つの命令をお待ちしております！『全軍前へ！全軍前へ！』。今宵、美味い酒の所為で、いささか耳が遠くなっております！はて、それ以外の命令が、耳に届きませぬ！」

一人の貴族の勇ましい言葉を皮切りに、他からも同様の声が上が
る。

「おやおや！今の陛下のお言葉は、何やら異国の呟きに聞こえたぞ？」

「耄碌するには早いですぞ！陛下！」

その言葉に、老王は目頭を押さえる。ここからでは聞こえないが、口元が動いていたので、アルビオン貴族達の忠誠心に感動して何か呟いたのだろう。

「よかるう！しからば、この王に続くがよい！さて、諸君！今宵は良き日である！重なりし月は、始祖からの祝福の調べである！よく、飲み、食べ、踊り、楽しむうではないか！」

顔を上げ、力強い仕草で杖を掲げた老王の言葉に、会場が大いに

沸き上がった。

宴の始まりである。

「お客人！このワインを試されなされ！お国の物より上等と思いま
すぞ！」

「何！いかん！その様な物をお出したのでは、アルビオンの恥と
申すもの！この蜂蜜が塗られた鳥を食してご覧なさい！美味くて、
頬が落ちますぞ！」

「わっはっはっ！アルビオン万歳ッ！」

もう何度目になるかな……。アルビオンの貴族達が、ご機嫌な様
子で料理やら酒やらをすすめるのは……。

ルイズ達の方だけかと思えば、目敏く俺を見つけてはこちらにも
やって来る。最後の晚餐を心から楽しもうというのは分かるから、
口には出さないが……正直、かなり鬱陶しい。

開始から数十分……ルイズは既に場の雰囲気になれず退場し、
ワルドもそれを追って出て行った。

キュルケ達もつい先程、引き上げて行った。実は、タバサに頼ん
で会場の外へ連れ出してもらったのである。

これから起こる事は、今はあいつ等（タバサは別として）に知ら
れない方がよい。

さて、頃合だ……。

ルイズ達が全員、会場を出た事を確認し、俺は玉座に程近い場所で貴族達と歓談しているウェールズに目を向ける。すると、ウェールズがこちらに気付いた。

コク……

俺はウェールズに頷いて見せる。事前に打ち合わせておいた、合図である。

「……！」

コク……！

ウェールズも気付いて頷き返してきた。そして、歓談の中から抜け、玉座に向かって歩いていく。

さあ、始まるぞ。

<SIDE：ウェールズ>

ジークフリート殿からの合図があり、私は父ジェームズ1世が座る玉座に歩み寄る。

流石に、緊張する……。果たして、私の言葉が皆の胸に届くだろ

うか……？

いや、違う！そうではない！

届く事を期待するのではなく、私が己の力で届けるのだ！全く……、彼から教わったばかりだというのに、悪癖とは中々抜けられないものだな。

だが、自分の未熟を嘆くのは後だ。そんなことより……今はすべきことをしよう。

我がアルビオンの未来の為に……！

「父上」

「おお、ウェールズ。どうだ？今宵の宴を、しかと楽しんでおるか？」

「はい。……父上、しばしこの場をお借りしたく存じます」

「む？それは構わぬが……一体、何をするつもりじゃ？」

「父上、しばしの間……この不肖の息子の勝手をお許し頂きたいのです。そしてどうか……私を、信じて下さい」

「……」

父上が眼光鋭く、私の目を見つめている。

今でこそご高齢となり、病に犯され衰弱しておられるが……かつ

ては、この『白の国』アルビオン王国を治めてこられたお方……肉体は衰えていても、眼光は未だ衰えていない。

「ウェールズ……我が息子よ。朕は、お前を疑った事などない。好きな様にやってみなさい……」

「父上……！ありがとうございます……！」

父上のお許しを頂き、私は玉座の前　壇上の一步前へ出る。

「……皆！宴を楽しんでいる最中だとは思うが、しばし歓談を止め、私の話に耳を傾けてほしい！」

ざわ、ざわ……

「おお、ウェールズ殿下が我らにお言葉を下さるぞ！皆の者！静まるのだ！」

ざわめく会場で、パリーが皆を静めてくれる。

臣下の貴族達は歓談を止め、会場がシンと静まり、壇上の私に注目が集まる。

「……」

アンリエッタ……私に、勇気を……！

さあ、いくぞ……！

「忠勇なる臣下の諸君！今日まで良く、我らテューダー王家に仕え、

戦ってくれた。父上も言われた事だが、皇太子たる私にも改めて礼を述べさせてほしい」

「「「おお……！！」「」」

「ウェールズ殿下！万歳！」

「アルビオン万歳！」

沸き上がる彼らの声援を、私は右手を上げて収める。

「さて……これもまた、父上が既に言われた事になるが、明日は反乱軍『レコン・キスタ』の総攻撃である。残念ながら、我らの最期の日となるだろう……」

「「「「「……」「」」」」

「忠勇たる臣下の諸君にだからこそ、私は正直に言おう。私は……悔しいッ！」

ざわ……

会場に僅かにざわめきが戻る。

しかし……私は何故か、緊張が解れ、気持ち落ち着いていた。恐らく、今まで抑えてきた本音を、口に出して言えたからだろう。

「私はこのアルビオンが好きだ。私を育んでくれた、空に浮かぶこの大地を愛している。ここに住まう民を愛している！親愛なる民、勇敢なる忠臣達よ！諸君は、私の誇りだッ！！」

「「「おおおおッ！！」」」

「皇太子殿下、万歳ッ！！」」「アルビオンに栄光あれーッ！！」

「だからこそ、たまらなく悔しいッ！！民が、故郷が『レコン・キスタ』に蹂躪されるのは、どうにも我慢ならぬッ！！」

「「「うおおおおッ！！！」」」」

会場中から、歓声が巻き起こる。あちこちで、目元を押さえる者達も見える。

沸き立った彼らの姿に、私の目頭も熱くなる。

彼らを死なせたくない……。その思いがより一層強くなるのを感じる……。

これから私が言い出す事を聞いて、彼らはどう思っただろうか？

幻滅するだろうか？ 憤るだろうか？

例え何と思われようと、私の思いは変わらない。私はもう、後戻りする気はないのだ。

「皆を死なせたくないッ！そして……私も死にたくないッ！！」

「「「ええ……っ！？」」」」

ざわっ………！

「こんな情けない私で、すまないと思う。しかし、これはこの私
ウェールズ・テューダーの嘘偽りのない気持ちだ！！私は、まだ
まだ皆と共にありたい！！皆と共に、アルビオンを良い国にしてい
きたいッ！！なのに、明日で皆も私も終わりだなんて嫌だッ！！」

会場に困惑のざわめきが起こる中、私は敢えてそのまま続けた。

「今日、私はある人物にこう言われた。討ち死などしても、反乱軍
に王家の名誉と勇気を見せ付けることなど、不可能だと……。敗者
は弱者として罵られ、打ち捨てられ、忘れ去られるが運命だと……
！！」

ざわざわっ……！

ざわめきが強くなり、貴族達の顔に怒りの色が表れ始める。だが
……この言葉に憤ってはいけない。

「鎮まるのだ、諸君ッ！憤ってはならない！！この言葉は事実だ！
我々が、大義という名のお題目に夢中になり、目を逸らし続けてき
た真実なのだ！！私はこの言葉に、己の愚かさを気付かせてもらっ
た！！」

そう、彼が……ジークフリート殿が気付かせてくれたのだ。死な
ど、逃げでしかないのだという事を！

「皆も知つての通り、反乱軍『レコン・キスタ』は『ハルケギニア
統一』と『聖地奪還』を掲げている！すなわち、このまま明日、我
々が全滅すれば、彼奴らはその魔手を他の国々にまで伸ばすだろう
！！戦火は拡大し、数え切れぬ民が血を流し、多くの土地が荒れ果

てることとなるうー！」

「「「「「.....」」」」」

会場が打って変って静まり返る。

彼らも気づき始めたのだ……。我々が潰^{つぶ}えた後の、『未来』に……。

「我々はまだ良い！ただ戦って『荣誉ある敗北』だと思いながら死ねば良いのだから……！だが、その後には『レコン・キスタ』が残ってしまう！！我々は、自分達が出した汚点の始末を、他国の王達と民達に押し付ける事になるのだ！！こんな無責任な事があるうか！？」

「「「「「つー！！」」」」」

どよっ……！

さあ……いよいよ、本題だ。

「故に私はこの宴が始まる前に、一つの決意を固めた！！今、その決意を諸君に伝える！！」

一度目を閉じ、深く呼吸をする。

ドクン……ドクン……！

心臓の鼓動が、聞こえる……。この先への緊張とこれまでの興奮……この先への不安とこれまでの充実感……全てが入り混じり、今

の私の胸は張り裂けんばかりに高鳴っている。

だが……この胸の高鳴りは、悪くない！

「アルビオン王国皇太子ウェールズ・テューダーは、この場にいる全員と共に、アルビオンを脱出するッ……！」

<SIDE:OUT>

どよっ……！！

ウェールズは、迷いのない凜とした表情で、きっぱりと言い切った。

その所為で、周りの貴族達が非常に騒がしいが……俺の目には、ウェールズに対して悪い感情を持っている様には見えない。

好感触、とまではいかないが、掴みは悪くないと思う。

更に、ウェールズの演説は続く。

「私の正気を疑う者もいるかも知れない！だが、私は本気だ！！この場にいる誰一人置き去りにはせぬッ！！未熟な私には、諸君の支えが要る！！私は生き延び！力を蓄え！いつの日か必ず正統なるアルビオン王国を再興してみせるッ！！その時こそ！果たせなかった王族の義務を、果たしてみせるッ……！」

「「「「「.....」」」」」

沈黙が会場を包む。貴族達の声はおるか、息遣いすら聞こえてこない。だが……

「諸君！見ての通り、私はこういう男だ！未熟の上に、大甘の大馬鹿の若造だ！だが、それら全てを承知の上で敢えて言おう！！」

ウェールズが言葉を重ねることに、貴族達の顔から迷いが消えていくのが分かる。

それを見て、俺も思わず笑みが浮かんでしまう。と、その時、壇上のウェールズと目が合った。

「「.....」」

コクッ×2

俺とウェールズは示し合わせた訳でもないのに、全く同時に頷き合った。

さあいけ、ウェールズ……！

「ついて来いッー！！」

今までで、一番大きく力強い声

「私について来いッー！！」

単純だが力強い言葉が、会場中に響き渡る。

そして

「「「「うおおおおおおおおおおおッ
ッッッ！！！！！！！」」」」

城全体が揺れているのでは、と錯覚するほどの貴族達の怒号が、
会場を包み込んだ。

「私はどこまでもウェールズ様について行くぞおおッッ！！！」

「私も！！アルビオン王国に！！テューダー王家にッ！！ウェール
ズ殿下に永遠の忠誠を誓うッ！！！」

「「ウェールズ殿下万歳ッッ！！アルビオン王国万歳ッッ！！」」
」

そこかしこから、まるで競い合う様に祖国と王家とウェールズを
褒め称え、不滅の忠誠を誓う言葉が巻き起こる。

ほんの少しだけ俺が助言したとは言え、ここまで臣下達の心を掴
むとは……何たるカリスマ性。どうやらウェールズは、俺の想像を
遥かに超えた『指導者の器』だったようだ。

彼が治めるアルビオン王国は良い国になりそうだ。楽しみだな。

「ジークフリート様」

「っ！」

不意に後ろから掛かる声！心臓がビクリと震えてしまった……！
ああ、驚いた……。

「……来たか、『ルビカンテ』」

振り返るとそこには、黒のマントを『燃え盛る炎』を模した留め具で留めた、炎のような赤髪でスラリとした長身の美男子が立っていた。

「はい、我ら『四天王』……参上いたしました」

見れば、ルビカンテの後ろに、彼と同じく黒のマントを羽織った者達が三人……。

「『スカルミリオネ』」

「ういッス」

マントを『砕け散る岩』を模した留め具で留めた、身長2メートルはあるつかという筋肉型の相撲取りのような大男……。

「『カイナッツォ』」

「クカカカ……！」

『荒れ狂う海』を模した留め具、青白い肌に広く裂けた口元、鮫のようなギザギザの歯……何とかギリギリ人間という風体の男……。

「『バルバリシア』」

「はあい」

『吹き荒ぶ嵐』の留め具に、露出の多い踊り子のような服装の妖艶な金髪美女……。

「ご苦労だった。我が『四天王』よ」

彼らの正体は、俺が魔法で生み出した『……人造人間』である。

俺はアルビオンに来る前に文献を漁り、この世界にも『ホムンクルス』という存在があり、大昔に研究されていたらしい事を知った。非常に興味をそそられ、且つ、信頼できる仲間がもう少し欲しいと思っていた事もあり、俺はチート能力を駆使して彼らを生み出したのだ。

だが、彼らはただの『ホムンクルス人造人間』ではない。

彼らの『核』となっているのは、俺が精製した『精霊結晶石』だ。『精霊結晶石』とは、簡単に言えば『火石』『風石』『土石』『水石』の高純度・高圧縮結晶のことである。名称は俺が考えた。

そんな物が『核』となっている彼らは、それぞれが強力な精霊力を秘めている。ルビカンは『火』、スカルミリョーネは『土』、カイナッツォは『水』、バルバリシアは『風』。名前は、『FF4』のボスキャラ『ゴルベーザ四天王』から頂戴した。

勿論、四人とも強力な魔法の使い手で、各々の属性の魔法を『系統魔法』『精霊魔法』共に極めている。もはや『人間』と『精霊』

の中間的存在と言ってもいい。

ただ不思議なのは……姿は俺が考えてそうなる様に調整したのだが、人格や個性が何故か生まれた時に既に出来上がっていた事だなどどこから得たのか、ハルケギニアの一般常識や魔法に関する知識も最初から身につけていた。更に、全員が等しく俺には絶対服従を誓っている。

こればかりは、俺のチート能力を持っても謎だ……。生命の神秘とでも言うべきか……。

まあ、それはさて置き……そろそろ俺も行かねば……。

「ルビカンテ、やる事は分かっているな？」

「はい。アルビオン王国皇太子ウェールズ・テューダー以下王党派約300名を、ガリア王国直轄領『グラウビュンデン領』へ速やかに移送　その後、我らは各地へと飛び、各々の任に就きます」

「結構。では、後は任せたぞ」

「お任せあれ」

ルビカンテが礼を取り、彼に残っている『四天王』達が一糸乱れず礼を取った。彼らは非常に優秀　ウェールズ達の脱出の準備は、ルビカンテ達に任せておけば大丈夫だ。任せて安心、『四天王』。

俺にはもう一つ……片付けなければならない仕事が残っている。

それを片付ける為、俺は会場を後にした……。

「ちょうど良い所で会ったね」

あらかじめ聞いておいた俺の宛がわれた寝室に向かう廊下を歩いていたら……ワルドが待ち伏せていやがった。

だが、まあ確かに……『ちょうど良い所で会った』というのには同感だ。

「ワルド殿か……、如何された？」

「明日、僕とルイズはここで結婚式を挙げる」

原作通りの言葉を……原作通りの冷たい声で言いやがった。ここまで分かりやすく動いてくれると、本当に助かる。

「……このような時に、このような場所で、ですか？」

内心、笑いを堪えつつ、俺も原作通りに返してやる。

「是非とも、僕達の婚姻の媒酌を、あの勇敢なウェールズ皇太子にお願いしたくなってね。皇太子も、快く引き受けてくれた。決戦の前に、僕達は式を挙げる」

「……然様か」

状況は大分変っているはずだが……本当に、原作通りだな。

会場がウェールズの亡命の意思表明で盛り上がっているのを知っ

ているのか、知らないのか……。いや、奴は『風』のスクウェアメイジ……気付けないはずはない。

だが……ウェールズが明日決戦に臨むにしろ、亡命するにしろ、明日の朝に結婚式の媒酌の約束を取り付けてある。ウェールズの命はその時に貰えばいい。その方が怪しまれないだろうし、自分の実力なら何も問題ない。故に、慌てる必要はない。

……とでも、高を括っているのだろうよ。

「君も出席するかね？」

「……そうですね。是非、出席させて頂こう」

「そうか。ならば、明日の朝、礼拝堂に来たまえ」

「承知した」

「では、明日」

「ええ……」

ワルドは俺の横を通り過ぎようとす。

だが、残念だったな……。

「おやすみ……」

ワルド
貴様に明日など……

「浅はかな裏切り者よ……」

ない。

びくん

「……何か言ったかね？」

一瞬、身体を硬直させた後……まるで今の言葉が聞こえなかった様な反応をするワルド。

「ええ、『おやすみ』と……」

「そうか、おやすみ」

笑みを浮かべて俺が答えると、ワルドも笑みを浮かべて返し、そのまま自分の部屋に向かって歩いて行った。

それを見届けてから、俺も歩みを再開する。

「……完了、だな」

やってみて思った事だが……コレは余り気分の良いもんじゃない。

だがこれで……、裏切り者^{ワルド}はもうこの世に存在しない。そこだけ良しとして、納得しておこう……。

しばらく歩いていると……途中で、窓の傍に立ち月を見上げるル

イズに出会った。

「……………！」

ルイズは俺に気付くと、涙で滲む目を拭う。しかし……………涙はすぐに滲む。

傍に歩み寄ると、ルイズは瞳に溜まる涙をそのままに、俺の胸にもたれかかり、顔を押し付けてきた。

「……………どうした、マスター・ルイズ……………」

あやす様に、頭を撫でながら尋ねる。

「嫌だわ……………、あの人達……………、どうして、どうして死を選ぶの？ 訳分かんない。姫様が逃げたって言ってるのに……………、恋人が逃げたって言ってるのに、どうしてウェールズ皇太子は死を選ぶの？」

「……………マスター」

こういう時……………相手が何を思っているか知っている、というのは決して良い事ではない。実際に、こうして嘆くルイズを前にすると、つくづくその事を実感する。特に俺は、ルイズに隠し事が山ほどある訳だしな……………。

後ろめたい気持ち……………罪悪感……………。とにかく、気分が重い……………。

「私、説得する。もう一度説得してみるわ」

「やめておけ……………」

「どうしてよ」

「おぬしの役目は、目的の手紙を回収し、無事に姫殿下の下へ持ち帰る事のはず……。他国の王族を説得するなど、越権行為だ……」

越権行為か……。俺が言えた義理か……。

こうして尤もらしい事を言っ、ルイズを押し留める……。俺がした事を、知られない為に……。この先の未来を、自分にとって都合の良いものにする為に……。

自分が悪事を働いているとまでは思わないし、ルイズ自身の成長を妨げないようにする意味もある……。とはいえ、だ。

「……早く帰りたい。トリスティンに帰りたいわ。この国嫌い。嫌な人達と、お馬鹿さんでいっぱい。誰も彼も、自分の事しか考えてない……。あの王子様もそうよ……。残される人達のことなんて、どうでもいいんだわ……」

目の前で涙を零すルイズに対する、この罪悪感はどうすればいい……？

「……もう、部屋に戻って休んだ方が良い。明日になれば、トリスティンに帰れる……」

「……うん」

俺の胸から顔を離し、赤くなった目を一度擦り、ルイズは肩を落としてトボトボと廊下を歩いて行った。

「……はあ……」

その姿が見えなくなっただけから、俺は我慢していた溜め息を吐いた……。

「……どうしようもない、か」

ルイズへの罪悪感は、結局俺自身が招いたものだ……。飲み込んで、受け入れるしかない。

「……勝手にくよくよしていても始まらない」

気持ちを切り替えよう。タバサ達に明日の事でも話しておくか。

頭を掻きながら、俺はタバサ達に宛がわれた部屋へ向かった。

そして迎えた翌朝……。

「……」

始祖ブリミルの像……らしい石像が置かれた、ニューカッスルの城に併設された礼拝堂に、礼装に身を包んだウェールズ、俺、タバサ、キュルケ、ギーシュの五人はいた。

地下の港では、『マリー・ガラント号』『イーグル号』に加え、俺が手配しておいた4隻の脱出船に、王党派全員が搭乗を開始して

いる。

この茶番が終わる頃には、出港できるはずだ。

ギイイ……

考えている内に堂の扉が開き、ルイズとワルドが入場してきた。

「……………」

ルイズ……酷い顔だ。現実を理解が追いついていない……心此処にあらず、という虚ろな顔をしている。

辛抱してくれ……。もう少しすれば、悪くない形で決着がつかはずだ。

<SIDE：ルイズ>

「……………」

私……どうしてここにいるんだろう？

今朝早く、私はいきなりワルドに起こされて、ここまで連れてこられた。

『今から結婚式をするんだ』

そう言われて、私は有無を言う間もなく、アルビオン王家から借りたつていう魔法で永久に枯れないようにされた美しい花があらわれた『新婦の冠』を頭にのせられ、新婦が纏う純白のマントを纏わされた……。

「では、式を始める」

ウェールズ皇太子の声が、とても遠くから聞こえた気がする……。目の前にいるはずなのに、声は遠いし、姿も遠くに見える気がした。

「新郎、子爵ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。汝は始祖ブリミルの名において、この者を敬い、愛し、そして妻とすることを誓いますか？」

「誓います」

ワルドの声も遠く聞こえる……。隣に立っているはずなのに……。

私は今、下を向いているから、彼の姿が見えない。すると、本当にワルドが遠くにいる様に感じた……。

「……………」

私は……ワルドに憧れていたはずじゃなかったの……？

「新婦、ラ・ヴァリエール公爵家三女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール……」

ウェールズ皇太子殿下が読み上げる詔が、徐々に耳に入らなくなっていく……。

私は私に問いかける。

憧れていた頼もしいワルド……。私の父様と彼の父様が交わした、結婚の約束……。

小さかった頃、ぼんやりと想像していた未来……。それが今、現実のものになろうとしている。でも……。私は、これを現実だと思えない。

ワルドの事は嫌いじゃない。むしろ、好き……。だと思う。でも、どうしても……。『彼との結婚』という未来に心が動かない。ドキドキしない。

姫様のお願いを聞かずに喜んで死のうとするウェールズ皇太子や、王党派の人達を見たから？

違う……。それは確かに悲しかったけど、今の私の事とは関係ない。

「……………」

答えが見つからない……。そう思っていたら、不意にジークの姿が目に入った。そして、目が合った。

「……………」

ねえ、私は……。どうしたらいいと思う？

コク……

「！」

私が考えていたら、ジークが小さく頷いた……！まるで、私の心の声が届いたみたい……。

勿論、何か答えてくれたわけじゃない……ただ頷いただけ。

だけど、何故か私の心は軽くなった。背中を押してもらった様な気がした。

そしてまた不意に思い出す……昨夜、廊下でジークの胸にしがみ付いて泣いた事を……。

あんな事……男の人の胸に飛び込むなんて、初めてだった……。

ポッ

か、顔が熱くなってきちゃった……！

わ、私……まさか……もしかして……？

でも……考えて、少しドキドキしたけど、この気持ちの本物なのか自信がないわ……。

あいつは、その……まあまあ魔法の腕も立つみたいだし、お薬でちい姉様の病気を治してくれたし、落ち着いてるし、そこそ頼りになるけど……！

「……あ……」

そうだ……私、少しだけドキドキしたわ。ワルドにはもうドキドキしないのに……。

そうか、あいつの事はともかく……ワルドの事は、もう答えが出ていたんだ……。

「新婦？」

「！？」

気付いて見れば、ウェールズ皇太子殿下がこつちを見てた。

考え事をしている内に、式が続いていたんだわ……！

「緊張しているのかい？仕方がない。初めての時は、事が何であれ、緊張するものだからね」

ウェールズ皇太子殿下は、優しい笑みを浮かべる。

「まあ、これは儀礼に過ぎぬが、儀礼にはそれをするだけの意味がある。では繰り返し。汝は始祖ブリミルの名において、この者を敬い、愛し、そして夫とすることを誓いますか？」

「……」

深呼吸をする。気持ちを落ち着けて、自分の決心を伝える為に……。

「ワルド、ごめんなさい……」

「ルイズ……？」

「新婦？」

ワルドとウェールズ皇太子殿下が、怪訝な顔を向けてくる。

正直、心苦しいけれど……私も貴族として、けじめを付けな
いといけない。意を決して、ワルドの方を向く。

「私、貴方と結婚できない」

「新婦は、この結婚を望まぬのか？」

そう尋ねてきたウェールズ皇太子殿下の言葉に、私は頷く。

「その通りでございます。お二方には、大変失礼を致すことにな
りますが、私は、この結婚を望みません」

「……………」

ワルドがそっと目を閉じる。やっぱり、気を悪くしたかしら……？

「子爵、誠にお気の毒だが、花嫁が望まぬ式をこれ以上続ける訳
はいかぬ」

「……………」

ウェールズ皇太子殿下が、残念そうにワルドに言った。でも、ワ
ルドは目を閉じたまま何も言わない。

「ごめんなさい、ワルド。憧れだったのよ。もしかしたら、恋だったかも知れない。でも、今は違うの。私は……」

「分かっていたさ」

「え……？」

ワルドは目を開き、優しい笑みを浮かべて言った。

「ルイズ、そしてウェールズ皇太子殿下……お二方に、お詫びを申し上げたい。このような『茶番劇』に付き合わせてしまって……」

「子爵、『茶番劇』とはどういう意味だね？」

「そのままの意味にございます、殿下。私は、ルイズの気持ちに気付いておりました。ルイズが私との婚姻を望んでいない事を……」

「ワルド……？」

「すまなかった、ルイズ。だが、こうでもしなければ、君は本当の気持ちを言ってくれなかっただろう？君は、昔から意地っ張りだからな」

ワルドは悪戯っぽい笑みを浮かべて、そんな事を言ってきた。

「そそ、そんなこと！……ない、こともないわね」

「はははっ！やはり意地っ張りだな！君は！」

「も、もっっ！」

楽しそうに笑うワルドに、私は少しだけ昔を思い出す。家に来ていた頃、よく私をからかって笑っていたわ……。からかわれるのはいつも恥ずかしかったけど、不思議と嫌な気持ちにはならなかったけ……。

「はははっ！」

「……ふふ！」

何だか、心が軽くなった。それに気付いた時には、私も笑っていた。

そうしてひとしきり笑い合つと、ワルドは表情を引き締め、帽子を取り、ウェールズ皇太子殿下に向かって跪いた。

「ウェールズ皇太子殿下、改めてお詫びを申し上げます。此の度は……」

「子爵、詫びなど必要ない。貴族として、また男としてけじめをつけようという君の高潔な精神には、感服したよ」

「殿下……。しかし……！」

「もし、どうしても償いをしなければ気が済まないというのであれば、彼女達を無事に、トリステインに送り届けてくれたまえ」

「……殿下の寛大なる御心に、感謝致します」

ウェールズ皇太子殿下とワルドのやり取りを見て、私は心から安

堵していた。

良かった……。ワールドが分かってくれて……

ワールドは、昔と……私が懂れていた頃から変わっていなかった。とても立派な貴族……彼なら、いつかきっと、他に良い人を見つけて、幸せになってくれるわ。

本当に……良かった！

<SIDE:OUT>

「へえ、ちょっと意外だね。あの隊長さん、結構筋の通った男だったのねえ」

目の前で円満に終わった結婚式……キュルケが感心したように呟いた。

「……………」

タバサは無言だが、少しだけ笑みを浮かべている。

「か、格好いい……！」

ギーシュは目をキラキラと輝かせて、ワールドに尊敬の眼差しを送っている。

そして、俺は……。

「……ふう」

安堵の溜め息を吐いていた……。

何とか俺が望んだとおりの展開で、事が終わった……。

ああ、いい加減に説明しておこう。

あの原作と全く違う好青年なワルドは、昨夜までとは全くの『別人』と言っていていい存在だ。

手品の種は『水』の魔法『^{ギアス}制約』　心を操る、強力な催眠術のような魔法である。

かけられた本人も気付かず、任意の条件を満たして発動するまでは、術にかかっているのかどうかも見破れない。発動すれば目の中に魔力の光が現れるが、完全なものはその光が現れない。当然、俺のチート能力による『^{ギアス}制約』は、光など現れない。

ラ・ロシエールで隙を突いて奴に暗示を掛けておいたのだ。そして、昨夜の言葉……

『浅はかな裏切り者よ……』

あれが『^{ギアス}制約』発動の鍵として、俺が設定しておいた言葉だった。

そして、『^{ギアス}制約』発動の瞬間　それまでの裏切り者の^{ワルド}人格は完

全に消え去り、俺が植え付けた新しい人格のワルドに変わった、という訳だ。

ラ・ロシエールの時点で人格を入れ替えても良かったのだが……何となく、裏切り者ワルドがどう行動するのを見たかったのだ。才人の代わりに俺が来ている事……そして俺の介入によりマチルダがいない、という原作と違う状況で、果たしてどの程度、奴の行動に変化が生じるかを確かめてみたかった。

結果は、殆ど大差無し……。何かしら想定外の事態が起きるかもと警戒していたのだが、何事もなく安堵した。

ちなみに、新ワルドの性格はと言うと……『うたわれるもの』に登場する武士もののふ、ベナウイ・クロウ・オボロの良いトコ取り、という感じになるように設定した。だが、俺が操っている訳ではない。あくまで、今後もトリステインの為に働かせる事を目的とした『人格入れ替え』である。

新ワルドは、もはやトリステイン王国を裏切る様な真似はしない。トリステインが道を踏み外さない限り、彼は天命を全うするまで、王国の騎士であり続けるだろう。

これで今回のアルビオンでの仕事は、ほぼ達成したと言っていいだろう。

ウェールズ達は全員生き延びさせたし、裏切り者ワルドは人格を入れ替え、結婚式も円満に終わり、ルイズが心に傷を負わずに済んだ。

ミッション・コンプリートである。

その後、貴族派が進攻を開始した時には、既にニューカッスルは『もぬけの殻』 ウェールズ達も俺達も、それぞれ城を脱出し、それぞれの目的地へ飛んだ。

一件落着……。これで、しばらくは落ち着いて過ごす事が出来そうだ。次の波瀾に向けて、しっかりと身体を休め、色々と準備を整えておかねば……。

Episode・13 『脱出 色々で大仕事だったな……』 (後書き)

如何でしたでしょうか？

はしやぎ過ぎかな？とも思いましたが、ウェールズにはこれくらいやらせても大丈夫かな？とも思ったので、思い切ってこのような形にしてみました。

ぼちぼち、原作から離してオリジナルの展開を考えてみようかと思っています。

それでは、また次回の更新で。失礼致します。

Episode・14 『コルベール 初めて抱いた尊敬……』 (前書き)

大変、大変長らくお待たせしてしまいました……！

ようやくPCが直り、家の方も落ち着いて来たのですが……今後、更新は不定期になる見込みです。気長にお待ち頂けると、幸いです。

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。
す。

Episode・14 『コルベール 初めて抱いた尊敬……』

アルビオンでの任務を終え、無事トリステインに帰還した俺達は、シルフィードとワルドのグリフォンに分乗し、直接トリスタニアの王宮に乗りつけた。

が……中庭に降り立った俺達は、あっという間にマンティコアに跨った魔法衛士達に囲まれた。

例によって、アルビオンが貴族派『レコン・キスタ』に威圧され、次はトリステインに攻めて来る　という噂が立ち、王宮は厳重な警戒態勢が敷かれていたのだ。

原作では少々マンティコア隊の連中と揉め事になっていたが、俺達は大丈夫。何しろ、グリフォン隊隊長のワルドがいたのだから。

しかし……マンティコア隊隊長ド・ゼッサールは、ルイズの母にして前マンティコア隊隊長『烈風』カリンの後継者　マンティコア隊のモットー『鋼鉄の規律』をも受け継ぎ、実践していた。

揉め事にこそならなかったが、如何にラ・ヴァリエール公爵の三女、グリフォン隊隊長のワルドの二人と云えど『規則は規則』と言って、中々通してくれなかった。

俺はその時の彼を見て、少し安堵を覚えた。融通が利かないのは少々困りものだが、あの分ならばド・ゼッサールは裏切ることはないだろう。

その後、偶然か、或いは騒動を聞きつけたか、中庭に現れたアンリエッタ姫の取り成しで、俺達は無事王宮内に通されたのだった。

本来任務に関わっていないキュルケとタバサ、そして後付けで任務に加わったギーシュは謁見待合室で待機……。人払いをした謁見の間において、ワルドが護衛任務の報告を済ませ離脱……。

最終的に、ルイズと俺の二人だけが、アンリエッタ姫の私室に招き入れられた。そこで、ルイズが事の次第 ウェールズと出会ってからアルビオンが出るまでの全て（ただしルイズ主観）を報告
そして、今回の成果……問題の恋文がアンリエッタ姫の手元に戻った。

「……………」

アンリエッタ姫は、俺達が回収してきた恋文ラブレターを悲しげに見つめている。

「姫様……………」

「……ねえ、ルイズ。あの方は、私わたくしの手紙を、きちんと最後まで読んでくれたのかしら……………」

「……はい、姫様。ウェールズ皇太子は、姫様のお手紙をお読みになりました」

ルイズが頷いて答えると、アンリエッタ姫は悲しげに…………寂しげ

に笑った。

「ならば、ウェールズ様は私を愛しておられなかったのね」

馬鹿なことを言うな！と言いたい……。

「では、やはり……、皇太子に亡命をお勧めになったのですね？」

ルイズの問い掛けに、アンリエッタ姫は頷いた。

「ええ……。死んで欲しくなかったんだもの。愛していたのよ、私^{わたくし}」

窓の外を向き、虚ろな目で空を見上げるアンリエッタ姫。

「私^{わたくし}より、名誉の方が大事だったのかしら……？」

流石に聞き捨てならんな……。

「恐れながら、姫殿下。それは違います。ウェールズ皇太子は、貴女様やトリステインに迷惑を掛けぬ為に、亡命を拒まれたのです」

「私^{わたくし}に、迷惑を掛けない為に……？」

ぼんやりとした顔で振り返るアンリエッタ姫に、俺は頷いてみせる。

「皇太子が亡命したならば、貴族派が攻め入る格好の口実となります。皇太子は、その危険を悟っておいででした」

「ウェールズ様が亡命しようがしまいが、攻めてくる時は攻め寄せ

てくるでしょう。攻めぬ時には沈黙を保つでしょう。個人の存在だけで、戦は発生するものではありませんわ」

知ったような事を……。

「お言葉ですが、姫殿下……貴族派が、正々堂々正面から攻めて来るとお思いであれば、それは大きな間違いです」

「え……？」

「大軍同士がぶつかり合う事ばかりが戦ではありません。敵国に間諜を送り込み、内部から突き崩すこともまた戦の範疇……。皇太子がトリステインに亡命したことなど、そうそう隠し通せるものではありません。皇太子の生存を知れば、奴らは執拗にトリステインに刺客を差し向けてくるでしょう……。それは同時に、トリステイン国内の有力貴族達への刺客ともなり得ます……。皇太子が危惧しておられたのは、そういうことです」

実際には、ウェールズがそこまで深く考えていたかどうかは知らん。あくまで、現在トリステイン国内に売国奴がチラホラいる現状から考えた、俺の考察を言っただけだ。素人考えだが、全般的外れという訳でもないはずだ。

「……………」

俺の話したことを想像だにしなければ、アンリエッタ姫の顔が蒼白になっていく。

あまり悪く言いたくないが……今のアンリエッタ姫は思慮が浅過ぎる。その上、弱い……いつも誰かに甘え、縋り付きたがっている。

自分の行動に自分で責任を取ろうという覚悟が微塵もない。

今回の件もハッキリ言つて、ギリギリのところだった。ラフレター 恋文の事やその回収に独断で密使を送った事、その密使に魔法学院の生徒おまけに国の有力貴族であるラ・ヴァリエール公爵家の三女を送り込んだ事……問題行為は山積みだ。万が一、これらが露見でもしようものなら、一大事だ。

トリスティンの基盤の安定には、先ずアンリエッタ姫の意識改革が必要だな。

その為に、ウェールズには色々と協力してもらわねばなるまい……。

「姫殿下……残された者に悲しみと苦悩があるように、死に逝く者にも悲しみと苦悩はあるのです。それが、愛する者を残して逝く者ならば、尚更……」

「……その通りですわね。わたくし 私は……なんて酷い女でしょう。自分だけが、悲しいつもりになって……ウェールズ様のお気持ちを疑うなんて……」

今にも泣き出しそうな雰囲気で、アンリエッタは悲しげに呟いた。

「姫様……。私がもっと強く、ウェールズ皇太子を説得していれば……」

ルイズが申し訳なさそうに言う。

実はウェールズは俺が説得して亡命させた、なんて口が裂けても

言えんな。後々、ウェールズにもすっかり口止めしておかねば……。

「いいのよ、ルイズ。あなたは立派にお役目通り、手紙を取り戻してきたのです。あなたが気にする必要はどこにも無いのよ。それに私は、亡命を勧めて欲しいなんて、あなたに言った訳ではないのですから」

ルイズの手を握り、ニツコリと微笑むアンリエッタ姫……。俺には、痛々しい顔にしか見えん……。

「私の婚姻を妨げようとする暗躍は未然に防がれたのです。わが国はゲルマニアと無事同盟を結ぶことが出来るでしょう。そうすれば、簡単にアルビオンも攻めてくる訳にはいきません。危機は去ったのですよ、ルイズ・フランソワーズ」

危機は去った、か……。本当の危機は、これからなのだが……。

「姫様、これ、お返しします」

ルイズがポケットにしまっておいた『水のルビー』を取り出し、アンリエッタ姫に差し出す。が、アンリエッタ姫は首を振り、その手を押し返した。

「それはあなたが持っていないさいな。せめてものお礼です」

「こんな高価な品を頂く訳にはいきませんわ」

「忠誠には、報いるところがなければなりません、いいから、とっておきなさいな」

ルイズはやや考え込むが、やがて頷いてから指輪を自分の指に嵌めた。

いくら忠誠に報いるところが必要と言っても、王家の秘宝をこんなにあっさり渡してしまつて良いものだろうか？と思わないことも無いが、ルイズには『水のルビー』が必要なので黙っておく。

さて、では例の物を……

「姫殿下、これを……」

「え？こ、これは……！」

俺が差し出したソレを見て、アンリエッタ姫が目を見開く。

「『風のルビー』ではありませんか……！？もしや、ウェールズ様から預かってきたのですか？」

「ええ」

これは事実だ。アルビオンを脱出する直前、結婚式が終わった後ウェールズから預かったのだ。

『ジークフリート殿！』

『ウェールズ皇太子殿下、何か？』

『君に、一つ頼みがあるのだ』

そう言つて、ウェールズは俺に『風のルビー』を渡してきた。

『アンリエッタには、いずれ必ず会いに行くつもりだが……当分は無理そうだ。だから、これを……』

と、いった次第で 現在に至る。

「……ウェールズ様が……」

呟きながら、アンリエッタ姫は『風のルビー』を左手の薬指に通し、魔法でサイズを合わせた。

そして、愛しそうに指輪を撫でる。

「ありがとうございます。優しい使い魔さん」

「勿体無いお言葉です……」

そんなやり取りを経て、任務報告は無事終了し、俺達は魔法学院への帰路についた。

途中、キュルケが任務内容を知りたがってしつこかったが、俺もルイズも、おまけにギーシュも黙秘を貫き、タバサが無言で制したこともあって、最後にはムスツとした不機嫌な顔で渋々引き下がった。

そして、俺達が魔法学院に帰り着いてから3日後 アンリエッ

タ姫とゲルマニア皇帝アルブレヒト3世の婚姻が発表された。式は1ヶ月後、ゲルマニアの首都ヴィントボナで執り行われるとのこと。それに先立ち、トリステインとゲルマニアの間に軍事同盟が締結された。

その翌日、アルビオンの新政府樹立が公布され、トリステイン・ゲルマニア両国に不可侵条約の締結が打診された。いずれ、向こうから破ってくる偽りの不可侵条約を……。

両国は協議の結果、これを受諾……ハルケギニアに束の間　少なくとも、1ヶ月　の平和が訪れる。

そんなハルケギニアの流れの中、俺はウェールズと今後の話をする為、『遍在』をガリア王国『グラウビュンデン領』の城へと送り込んだ。

「驚いたよ！だが、よく来てくれた！ジークフリート殿」

いきなり城に現れた俺に、最初こそ驚いていたウェールズだったが、すぐに笑顔で歓迎してくれた。

「君のおかげで、我々は全員こうして生き延びることができた。どれだけ感謝しても足りないよ。本当に、ありがとう」

「勿体無いお言葉なれど、そのお言葉はまだ早いかと存じます。ウェールズ殿下、『レコン・キスタ』がアルビオンを征服し、『神聖アルビオン帝国』なる戯けた名を掲げ、新政府樹立を宣言したことは、ご存知でありましょうか？」

その名を聞いた途端、ウェールズは笑顔を潜め、険しい表情を浮かべた。

「ああ、聞いている。トリステインとゲルマニアの軍事同盟締結の翌日の事だったそうだね……」

締結式からは、一週間が経過している。既に、トリステイン・ゲルマニアの軍事同盟締結とアルビオン新政府樹立、そして不可侵条約受諾のことまで広く知れ渡っているようだ。

「生き延びはしたが……何も出来ないと云うのが、辛いところだ。時々、アルビオンで戦死していた方が楽だったのでは、と考えてしまっよ」

「何を仰られます。出来ることならば、いくらでもありますぞ。殿下」

「え？」

俺はウェールズに、少し前から考えていた提案を持ち掛けた。

提案内容は、ウェールズに少数精鋭を率いてのアルビオン国内でのゲリラ活動。これは、原作6巻にあるメンヌヴィルの襲撃を見て思い付いた作戦だ。

ウェールズには、何人かの手練の部下を集め、アルビオンに戻ってもらう。そこで、貴族派を内部から攪乱してもらうのだ。

アルビオン各地拠点において物資の強奪や施設の破壊……、貴族

派内部にいる現状を憂いている者達の引き抜き……、民衆の扇動……等々

これらの行為は、地味なようで実は大きな効果を発揮する。何しろ、自分達の懐にいつの間にか敵が入り込んでいる訳だからな。

トリステインへの侵攻や、逆に攻めてくるトリステイン・ゲルマニア連合の迎撃ばかりに気を取られれば、その隙にウェールズ達による破壊工作で痛手を被る。陣地内に敵が入り込んだ事に気付いたとしても、そちらへの対処に人員を裂けば、対連合軍戦力が低くなる。

元々アルビオンを故郷とするウェールズ達　アルビオンの地理に明るいのは言うまでもない。地図に載っている道に加えて、各地に存在する抜け道等の細かい地理もある程度把握しているはず……。潜入・隠密行動には、正にお誂え向きあついでという訳だ。

「なるほど……！我々も、『レコン・キスタ』に煮え湯を飲ませてやれる上に、トリステイン・ゲルマニア連合の援護にもなるという訳か！」

どうやら、ウェールズは好意的に俺の提案を受け取ってくれた様だ。下手をすれば、貴族・王族のプライドに障るかと思っただが、取り越し苦労だったな。

「早速パリー達を集め、潜入部隊を編成しよう」

「よろしくお願い致します。ハルケギニアのより良き未来の為に」

「ああ、任せてくれ！」

俺はある程度のヒントを提供するだけ……後は、ウェールズ自身に頑張ってもらおう。

というより、俺に考え付くのはこれぐらいが限界なだけだ。作戦の詳細を煮詰めるのは、ウェールズ達の方が向いている。何しろ、内乱の時は空賊に化けて、貴族派の補給線を断っていた経験がある訳だしな。

「では、吾輩はこれにて失礼致します」

「もう帰るのかい？」

「あまり長居をして、殿下にお茶でも出されては申し訳が立ちませぬ故」

「あっははは！これは一本取られたね！」

「ははは！何かありましたら、『テルの鏡』でお呼び下さい。吾輩でお力になれることでしたら、いつでもお助け致しますぞ」

「ありがとう。本当に、君には世話になりっぱなしだ。亡命先に物資の手配まで……この恩は、いつか必ず返させてもらおうよ」

「ならば、後のアルビオンに善き治世を。では、これにて」

そこで俺は魔法を解除 『遍在』の分身は消え去った。

「……ウェールズ達はこれで良し」

もう一つの案件の進行具合はどうか？

懷から『テルの鏡』を取り出し、アルビオンに潜伏しているカイナッツォを呼び出す。

ブルブルブルブル……！

『クカカカ、これはジークフリート様……！如何なされました……？』

「カイナッツォ。例の……『白炎』のメンヌヴィルの事だが、何か掴めたか？」

『……申し訳ありません。コレと言って有力な情報は何も……』

「そうか……」

ウェールズ達を亡命させた後、メンヌヴィルとその手下共の行方を四天王に探らせていたのだが……まだアルビオンにはいない、という事だろうか？

何故、メンヌヴィルを探しているかという……コルベールに関する問題だからだ。

あの人には過去を受け入れて、前に進んで欲しい……。その為には、メンヌヴィルとの対決は不可欠だと思う。

だが……状況が色々原作と違うだけに、今のクロムウエルがメンヌヴィルを雇って魔法学院を襲ってくるかが分からない。だから、何とか所在だけでも掴んでおこうと思った訳なのだが……一筋縄ではいかないらしい。

「分かった。苦勞を掛けてすまんが、カイナッツォ……引き続きアルビオンでの調査を継続せよ」

『クカカカ、お任せあれ……！』

通信終了　アルビオンにいないとなると、今は他の国にいて考えた方が良いか。念の為、他の四天王達にも探らせておこう……。

現時点でやれる事・やるべき事・やってはいけない事・やらない方が良いい事……それらの塩梅に頭を悩ませ、暗中模索状態でいると時間というのはあっという間に過ぎていく……。

そんなある日……俺は狙っていた切っ掛けに巡り合った。

「さてと、皆さん」

教室に入ってきたコルベールが教室を見渡し、ニコニコしながら教壇の上にある装置を置いた。

「それは何ですか？ミスタ・コルベール」

誰だか知らないが、生徒の一人が質問する。

置かれたのは、長い円筒嬢の金属筒に金属のパイプが延び、それが鞆ふいこに繋がって、円筒の頂点にクランクがついており、それは脇に立てられた車輪に接続され、その車輪は扉のついた箱にギアを介して繋がっている　という、ゴチャゴチャした装置だ。

だが、あれこそがコルベールの発明　彼がそうとは知らずに独学で辿り着いた『エンジン』の理論を用いたカラクリ箱　俺は、あれが見たかった。

あれを見る為に、アルビオンから戻ってからこちら、俺は日々ルイズの授業に付き添っていたのだ。

「おほん！えー、『火』系統の特徴を、誰かこの私に開示してくれないかね？」

そう言ってコルベールが教室を見渡すと、生徒の視線はキュルケに集まる。

当のキュルケは、授業中だというのに専用のヤスリで爪を磨いている。俺も中学・高校時代、ああいう教師を舐めきった態度の女子を良く見かけたものだ。

「情熱と破壊が『火』の本領ですわ」

「そうとも！」

キュルケの態度を気にせず、コルベールは笑顔で答えた。

「だがしかし、情熱はともかく、『火』が司るものが破壊だけでは

寂しいと、このコルベールは考えます。諸君、『火』は使い様ですぞ。使い様によっては、色んな楽しい事ができるのです。いいかねミス・ツエルプストー。破壊するだけじゃない。戦いだけが『火』の見せ場ではない」

「トリステインの貴族に、『火』の講釈を承る道理がございませんわ」

キュルケは自信たっぷりに言い放つ。コルベールは、そんな嫌味にも動じず、笑顔を崩さないが……俺はああいう態度を取る人間は好かん。

やはり……メンヌヴィルの一件は必要だな。コルベールの為にも、キュルケの為にも……。下手をすると大きな犠牲が出る事を考えると気は進まんが……そこは何とか俺がフォローするしかないか。自分で選んだ選択とはいえ、難易度が高いなあ……。

「でも、その妙なカラクリは何ですか？」

「うふ、うふ。よくぞ聞いてくれました。これは私が発明した装置ですぞ。油と、火の魔法を使って、動力を得る装置です！」

つと、話が進んでいた。コルベールが嬉々として、カラクリ箱の説明を始める。

「まず、この『ふいこ』で油を気化させる」

シュコッ、シュコッ

「すると、この円筒の中に、気化した油が送り込まれるのですぞ」

コルベールは慎重な顔で、筒の横に開いた穴に、杖の先を差し込み、呪文を唱える。

ポツポツ、ボボボボ……！

断続的な発火音に続き、聞き慣れたエンジンに近い小さな爆音が響く。すると、筒に取り付けられていたクランクが動きだし、車輪が連動して回転し始めた。

「ほら！見て御覧なさい！この金属の円筒の中では、気化した油が爆発する力で上下にピストンが動いておる！」

楽しそうなコルベールの言葉に続き、横の箱の扉が開く。すると……妙に可愛らしいデザインのヘビの人形が顔を出したり、引っ込めたりを繰り返した。

「動力はクランクに伝わり車輪を回す！ほら！するとヘビくんが！顔を出してぴよこぴよこご挨拶！面白いですよ！」

コルベールが熱く語るが、辺りを見れば生徒達はつまらなそうに眺めていた。誰も、あの装置に使われている技術の有用性を理解していない。

「で？それがどうしたっていうんですか？」

誰かのとぼけた声と感想……。

原作を初めて読んだ時は、どうしてあの装置の凄さが分からないのかと、ここの連中を馬鹿にしたものだが……正直な話、実際に見

てみると、あの装置の出来では仕方のない事なのかもしれない。ハルケギニアは魔法の弊害で技術の進歩が遅れている世界だし、何より…… あれはヘビ人形が動くだけの玩具だからな。

「えー、今はまだ愉快なヘビくんが顔を出すだけです、例えばこの装置を荷車に載せて車輪を回させると。すると、馬がいなくても荷車が動くのですぞ！例えば海に浮かんだ船の脇に大きな水車を付けて、この装置を使って回す！すると帆がいりませんぞ！

「そんなの、魔法で動かせばいいじゃないですか。何もそんな妙ちきりんな装置を使わなくても」

教室中がその意見に同意する反応を見せる。

ここは実際に見ても、こいつらの理解力の無さに呆れるばかりだ。魔法が人間の力である以上、常に一定の効果を維持できない事が何故分からののか……いや、それよりも何故、装置に任せておけば、魔法を温存し別の事に使えるという発想が出てこないのか……。

科学と魔法 両方が合わされば、ハルケギニアは今頃凄まじい発展を遂げていただろうに……惜しいな。

「諸君！良く見なさい！もつともつと改良すれば、なんとこの装置は魔法がなくても動かすことが可能になるのですぞ！今はこのように点火を『火』の魔法に頼っておるが、例えば火打石を利用して、断続的に点火する方法が見つかれば……」

「興味深い」

「「「「「！？」」「」」」」

俺の一言が、教室中の視線を集めた。

ざわついていた教室が一気に鎮まる中、俺は席を立ち、装置の前に歩み寄る。

「ふむふむ……」

値踏みという訳ではないが、改めて装置をじっくり観察してみる。物凄い手作り感のある見た目……だが、全くのゼロからエンジンの基礎を考え付くというのは凄い。コルベールはやはり天才だ。

「ミスタ・コルベール。貴方はこの装置を独学で……？」

「え、ええ！そうですよ」

「だとすれば、素晴らしいの一言ですな。よもやトリスティンに来て、エンジンの原型が見られるとは思いませんだ」

「えんじん？」

コルベールがきょとんとして、こちらを見つめてくる。

「然様^{うづや}。吾輩^{われら}が前にいた国では、これを改良し実用化した物が広く普及しておりましてな。先程、ミスタが仰られた『馬がいなくとも動く荷車』や『帆がなくとも海を進む船』が実際に作られ、人々の暮らしを豊かにしているのです」

「なんと！やはり、気付く人は気付いておる！ジーク君！是非ともその辺り、詳しい話を聞かせてほしい！」

よし、喰いついて来た。

「それは吾輩も望むところ。ミスタ・コルベール、貴方とは一度じっくり話がしたいと思っていた」

「おお！では後で、私の研究室に来てくれたまえ！」

「ええ、是非」

そう約束を取り付け、俺はルイズの隣の席へと戻った。

「……ひそ（余計な事言うんじゃないの。変に思われるわよ）」

座ったところでルイズに袖を引かれ、釘を刺された。だが、こればかりはやめる訳にはいかなかったのだから、仕方がない。

「……ぼそぼそ（すまぬ、以後は自重しよう）」

まあ、こう言っておけば大丈夫だろう。

予想通り、ルイズはそれ以上何も言わなかった。そして、前を見ればコルベールが先程よりもイキイキした顔で教室を見渡していた。俺が装置に興味を示した事が、相当嬉しかったらしい。

「さて！では皆さん！誰かこの装置を動かしてみないかね？なあに！簡単ですぞ！円筒に開いたこの穴に、杖を差し込んで『発火』の呪文を断続的に唱えるだけですぞ。ただ、ちよつとタイミングにコツがいるが、慣れればこのように、ほれ」

そう言ってコルベールはまた、装置を動かしてみせた。

「愉快なヘビくんがご挨拶！このように！ご挨拶！」

しかし、誰も手を挙げない。まあ、仕方ない……。

あくまで装置に興味を持ったのは俺だけであって、他の連中は相変わらず理解しようとすらしていない有り様なのだから。

やがて、コルベールも自分の発明品がウケなかった事に肩を落としてしまう。と、その時だった。

「ルイズ、あなた、やってご覧なさいよ」

今日まで影の薄かったモンモランシーが、そんな事を言ってきた。すると、コルベールの顔が輝く。

「なんと！ミス・ヴァリエール！君もこの装置に興味があるのかねっ？」

「え、えっと、あの……」

ルイズは困った顔で首を傾げるばかり　　これはいかん。

「『土くれ』のフーケを追い払い、何か秘密の手柄を立てたあなたなら、あんなこと造作もないはずでしょ？」

「……！」

ルイズがキツとモンモランシーを睨む。あの小娘が、自分に恥を

かかせようと画策している事に気付いたのだ。

モンモランシーは概ね原作通りの性格で、嫉妬深く目立ちたがり……おまけに自尊心も無駄に高く、初期のルイズと非常に似通っている。恐らくは、あれがハルケギニアにおける典型的『貴族のお嬢様』の姿なのだろう。

全く呆れたものだ……。『夢食う虫も好き好き』などという言葉があるにはあるが、ギーシュもアレのどこに惚れたのやら……。

「やってご覧なさい？ ほら、ルイズ。『ゼロ』のルイズ」

「っー」

モンモランシーの挑発に、遂にルイズが立ち上がってしまった。こうなると、もう止めるのは難しい……。

ならば

「マスター・ルイズ」

「……何よ？」

ジロ

そこで俺を睨んでどうする……。

「……コツを教えよう」

「コツ……？」

小声で聞き返してくるルイズに、俺は小さく頷く。

「『発火』の呪文を唱える際、極々小さな光点をイメージするのだ」

「光点……？」

「そうだ。例えるなら、夜空に浮かぶ星の瞬き……。心を落ち着け、己の精神力をギリギリまで引き絞り、杖の先から一滴の雫を垂らす様に魔法に込めるのだ。精神力の制御が些か難しいと思うが、おぬしならばやってやれぬ事はないはずだ。試してみると良い……」

「……分かったわ」

頷き、杖を握りしめて教壇に歩いて行く。

以前から考えていた方法をアドバイスしてみたが、果たして上手くいくかどうか……。

ルイズの『フェイル・エクスプロージョン失敗爆発』あれも魔法である以上、使用者の意思である程度は威力のコントロールが可能なのではないかと、俺は考えた。

そして、仮にも爆発なのだから、威力にさえ注意すれば油を燃やす事も出来るはず……だと思っただが……。

「では、ミス・ヴァリエール！杖の先をこの穴に差し込み、『発火』の呪文を……ハッ！」

嬉々としていたコルベールが、そこまで言ったところでオロオロ

し始めた。ルイズの魔法が爆発する事に、今更ながらに気付いた様だ。

だが、ルイズはそんなことは気にせず……というか、何やら集中している様で、真剣な顔で杖を穴に差し込んでいく。

「あ、あ、ミス・ヴァリエール。その、なんだ……」

コルベールは慌てて声を掛けるが、やはり聞こえていないらしく、先程コルベールがそうしていた様に、ルイズはふいごを踏む。

シュコ、シュコ……

そして、ルイズは目を閉じ、大きく深呼吸をした。

多分だが、先程俺が言った事を自分なりに実践し、精神力のコントロールを試みている……。

これで成功させれば大したものだが……果たして？

「……ウル・カーノ」

ルイズの呪文詠唱 教室に緊張が走る。その直後

ポンツ、ボボボ……

「お……？」 「あ……！」

最初、やや大きめの破裂音が聞こえたが、装置が丸ごと爆発する事はなく、短いエンジン音も響いた。少しだけだが、ピストンも

動いた。

これは……成功だ！

「……や、やった……！出来たわっ！」

ルイズも、喜びに顔を輝かせる。初めて、目的通りに魔法を使えた事が嬉しいのだろう。

勿論、あれも『失敗爆発』には違いない。だが、それをコントロ

フェイル・エクスプロージョン

ール出来たというのは事実。大したものだ、ルイズは。俺の思い付きのアドバイスで、あっさりコントロールを成功させるとはな。

「お、おおおっ！す、素晴らしいですぞ！ミス・ヴァリエール！」

コルベールも一教師として、生徒の成長を純粹に喜んでいる……訳ではないだろうな。

あれは恐らく、自分の発明品の無事を喜んでいる割合の方が大きいと見た……。

「嘘だろ……？」

「『ゼロ』のルイズが、魔法を成功させた……？」

ざわざわざわ……

周囲の生徒達が騒がしい。ルイズの成功に、自分の目を疑っているようだ。

「…………ふん！」

見れば、モンモランシーは不機嫌な顔で鼻を鳴らし、そつぽを向いた。ルイズを貶める目論見が外れて、面白くないか……分かりやすい小娘だ。

その後、魔法を成功させたルイズは終始上機嫌　　ついでにコルベールも上機嫌で授業は円滑に終わった。

ルイズが教室を破壊する事もなかった為、夕食まで時間が空き、俺はその時間にコルベールの研究室を訪ねることにした　　。

「ここだな……」

本塔と火の塔に挟まれた一角、その中庭の隅の方にそれはあった。外観は、まるつきり『掘っ立て小屋』……吹けば飛びそうだ。

こんな所で研究しているのか、コルベールは……。薬品が爆発したら……って、それは古いネタだな。

思考の脱線を戻し、俺はドアを叩く。

コン、コン

「誰ですか？」

「ミスタ・コルベール。ジークフリートだ」

名乗ると、すぐにドアが開いた。

「おお、ジーク君！待っていたよ！ささ、入ってくれ！」

「では、失礼する」

招かれるままに、俺はコルベールの研究室に入る。が……

「……………」

俺の眼前に広がるこの空間を、一言で表すとすれば……『魔窟』だ。

全ての壁を覆い尽くす棚……。そこには薬品の壺や試験管等の器具が雑然と置かれ……。端から端までぎっしり書物が詰め込まれ……。地図に羊皮紙を貼り付けた天体儀が置かれ……。ヘビやトカゲや珍妙な鳥が入られた檻が積まれていた……。

更に、部屋全体を満たすこの異臭……。薬品か何かだろうか？

「……………」

俺はどうにも耐えきれず、マントの端で口元を押さえた。

「ははは！なあに、臭いはすぐに慣れる。しかし、ご婦人方には慣れるということはないらしく、この通り私は独身である」

聞いとらんし、知つとるわ、そんなこと……。あと、臭いにも慣れたくない！

コルベールは、こちらが腹立たしく思えるほどにこやかに笑いながら平然と椅子に座り、俺にも椅子を勧めてきた。

まあ、立っているのもなんだから座るが……。

「お茶でも飲むかね？」

「いや結構」

無いと思うが万が一、そこらに転がっているビールカーやフラスコで淹れられたお茶なんぞ出されたら、堪らんからな。

「そうかね？では、早速だが、話を聞かせてくれるかね！その、えんじん……だったか？先ずはそれについて！詳しくっ！」

「う、うむ……」

コルベールの催促にたじろぎつつ、俺はエンジンの事を話して聞かせた。

と言つても、俺も流石に専門家ではないので、エンジンの仕組みを詳しくなんて教えられない。それに、現代の自動車や船に使われているエンジンは、ハルケギニアの技術では再現する事は先ず不可能。仮に出来たとしても、やらない方が良い。

技術に限らず、物事は初步から始めて少しずつでも着実に進歩してこそ定着し、定着するからこそ意味がある。

そこでコルベールに教えるのは、ズバリ『蒸気機関』 後にコ

ルベールが『水蒸気機関』と名付けて自分で考え付く代物だが、その概要だけでも知っておけば、後の完成度が上がるかも知れないし、辿り着くのが早まるかも知れない。

という訳で、先程地球に戻ってネットで調べて覚えてきた蒸気機関の事を、SLをモデルとした図解でコルベールに説明。

今でこそ既に時代遅れとされている蒸気機関だが、その研究は紀元前2世紀〜3世紀という古代アレクサンドリアの時代から始まり、2000年以上もの長い時間を掛け、数多の学者達の思考錯誤が繰り返された結果、現代のガソリンエンジンに結びついた偉大な発明なのだ。

だが、コルベールはその『蒸気機関』をすっ飛ばし、ガソリンエンジンに近い代物を発明したのだから、恐るべき発想力の持ち主である。また、彼は理解力も半端ではない。『一を聞いて十を知る』なんて言葉があるが、正にそれだ。

俺の素人説明にも関わらず、コルベールはあっという間に蒸気機関の仕組みを理解してしまったのだ。

「うゝむ、素晴らしい……！私が夢見ていた事の全てが、実現している国があったとは……！」

話を聞き終えたコルベールが、説明の為に俺が描いたSLの簡易図を見つめながら呟いた。

「ジーク君！君は、一体、どこの生まれなのだね？じょうききかん

しゃ、や、じょうきせん、という物が造られているのは、一体、何
と言う国なのかねっ？」

おっと、にこやかに答え難い事を尋ねられてしまった……。

「……………」

さて……、どうしたものか。

ここで、俺の真実の一部を伝えるか……。それとも、ルイズにし
たのと大差ない作り話で誤魔化すか……。

「……………」

「ジーク君？」

俺の選択は……………

「…………ミスタ・コルベール」

「うん？何かね？」

「…………これからお話しする事は、他言無用に願いたい」

前者 自分が異世界から、ルイズの『サモン・サーヴァント』
で召喚された旨を明かす事にした。

「……………なるほど」

話し終わると、コルベールは何も言わず、顎に手を当てて頷いた。だが、驚いている様子はない。

「ミスタ・コルベール……話しておいて言う事ではないかも知れんが、疑うなり、驚くなりしないのか？」

「そりゃあ、驚いたさ。内心、ほんの少しだが疑いもしたよ。でも、冷静に考えてみると納得できたのだ。君の言動、行動、価値観、知識、全てがハルケギニアの常識とはかけ離れている。ふむ、益々面白い！」

ここまで柔軟な思考の持ち主は、現代の地球にも早々いない気がする。ちよつと、尊敬した。

「ミスタ・コルベール。以前から思っていたのだが……貴方は他のメイジとはどこか違うな」

「そうかね？ いや、そうかも知れないな」

そう言つて、コルベールは軽く笑った。

「確かに私は、変わり者だ、変人だ、などと呼ばれる事が多い。おかげで、未だに嫁さえ来ない。しかし、私には信念があるのだ」

「……それは何か、と聞いても……？」

原作を読んで知ってはいる……だが、俺は純粹に、彼の口から聞いてみたくなった。

「もちろんだとも。ハルケギニアの貴族は、魔法をただの道具……何も考えずに使っている筈のような、使い勝手の良い道具ぐらいにしか捉えておらぬ。私はそうは思わない。魔法は使い方で顔色を変える。従って伝統に拘らず、様々な使い方を試みるべきだ」

なるほど……文字を読むのと、実際に耳で聞くのでは、やはり趣が違う。上手く表現できないが……何か、沁み入るものがある。

本物の信念が感じられる、というべきだろうか。

「君を見ていると、益々その信念が固く、強くなるぞ。ふむ、異世界とな！ハルケギニアの理だけが全ての理ではないのだな！面白い！なんとも興味深い事ではないか！私はそれを見たい。新たな発見があるだろう！私の魔法の研究に、新たな一ページを付け加えてくれるだろう！だからジーク君。困った事があつたら、何でも私に相談してくれたまえ。この『炎蛇』のホルベール、いつでも力になるぞ」

そう言ってくれたホルベールに、俺は本当の尊敬を抱いた。思えば、人を心から尊敬したのは初めてかも知れない。

だからこそ、俺も彼の力になりたくなった。

「吾輩もです、ミスタ・ホルベール。この『無限』のジークフリート、いつでもお力になりましょうぞ。『火』の力を、人を生かす力とする研究……どうか、やり遂げて下され」

「ありがとう、ジーク君！」

俺とホルベールは、固く握手を交わした。

いつの日か、彼の研究が世界に認められる時が来る事を、そして彼の苦悩が報われる時が来る事を、俺は心から願う……。

Episode・15 『宝探し それは男の浪漫……』（前書き）

何とか書き上がりました。ペースが全然上がりません……。

時間がないと言つのもありますが、どうにもスランプに陥っている気がします。アイディアが浮かびません……。

ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。
す。

Episode・15 『宝探し それは男の浪漫……』

「う〜〜む……」

いきなりの唸り声、失礼。現在、俺は『ヴェストリの広場』の隅で脇に本の山に形成しつつ、少々頭を捻っている最中なのだ。

理由は簡単　ルイズが、結婚式で詔を詠みあげる巫女に選出されたからだ。

そして、王室秘蔵の本物の『始祖の祈祷書』をオスマンから渡され、詔を考える事になった。ルイズも、幼い頃からの親友であるアンリエッタ姫の為にと、意気込んでいたのだが……残念なことに、彼女は『詩』の類の才能がイマイチで、幸い、本人もそれを自覚している。

そこで、ルイズは俺を頼って来たのだ。

『良い詔が全然思い付かないのよ……。ねえ、手伝って……！』

普段強気なルイズが珍しく、やや恥ずかしそうではあったものの、素直に俺を頼って来た……。目が随分赤く充血させていた事から見て、かなり真剣に悩んでいた様だ。

そんな訳で、俺も詔を考えることになった訳だが……残念ながら俺も詩的表現については専門外だ。だから、日本に戻ってインターネットで検索したり、こちらで書物を漁ったりと、頭を悩ませている。

勿論、原作通りなら詔など考えても無駄になる。アンリエッタ姫の結婚式は、アルビオンの侵攻によって中止となり、婚約自体が御破算になる事になっているからな。

現在の状況から考えても、そうなる可能性は高いと思う……。

数日前、アルビオンに潜入しているカイナッツォから、軍が傭兵や亜人を大量に雇い入れ、商人などからも硫黄や水の秘薬、歩兵用の装備などを大量購入しているなど、軍備の強化を進めているという報告が入った。しかも、アルビオン各地の軍港や基地などに忍び込み、兵達の話盗み聞いた限り、『近々大規模な侵攻作戦がある』という噂が軍内に広まっているという……。

あらゆる道徳を排除し、ただひたすら『トリステインを攻め落とす』という点を突き詰め、合理的に考えれば……結婚式への参列を装ったの奇襲攻撃は、最も有効な策と言える。

だから、俺がここでこうして詔の事で頭を悩ませる意味はないとも言える。だが、物は考え様だ。

まだまだ先の話になると思うが、アルビオンのゴタゴタが片付き、ウェールズが再び王座に返り咲いたとする。ならば、その次に待っているのはやはり、彼とアンリエッタ姫の結婚だろう。障害はほぼ無くなる訳だし、自然な流れというものだ。

その時までにはアンリエッタ姫の関係が悪化していない限り、その際もルイズが巫女に選ばれるはずだ。ならば、その時を見越して詔を考えておけば、今の俺の行為も無駄にはならない。

という訳で、今日の昼頃ルイズに頼まれてから色々考えてはいる

の다가……中々、良い詩が浮かばん。

『随分、悩んでるみたいだな。相棒』

「デルフ、久しぶりだな」

『おいおい、酷えな相棒。ついこの間も喋ったじゃねえか』

「軽い冗談だ」

いや、本当に冗談だ。デルフとは他愛のない日常会話とかを、結構している。……本当だぞ？

「……丁度良い。伝説の剣よ」

『如何にも俺は伝説の剣だが、どうしたね？』

「吾輩は今、アンリエッタ姫殿下とゲルマニア皇帝の婚姻の儀の際、マスター・ルイズが巫女として詠みあげる詔を考えているのだが、上手い詩的表現が思い浮かばん。ここはひとつ、この『使い手』に知恵を貸せ」

『おいおい、相棒。無茶言ってもらっちゃ困るぜ。俺は伝説とはいえ剣だ。俺の仕事は、『使い手』のおめえに振るわれる事。それだけさ。戦いの知恵ならいざ知らず、詩だの詔だのなんて俺に分かるもんか』

「なんだ、役に立たん伝説の剣だな」

『酷え。でも許す。おめえは相棒だかね。ところで相棒、この前、

ちょっと思い出したんだが……」

「うん？」

『相棒、あのワールドとかいう隊長に『ガンダールヴ』とか呼ばれてたよな？』

何かと思えば、随分今更だな……。

「ああ、伝説の使い魔だそうだ。始祖ブリミルが使役したという四体の使い魔の一角……確か、こんな唄が残っていた 『神の左手ガンダールヴ。勇猛果敢な神の盾。左に握った大剣と、右に握んだ長槍で、導きし我を守り切る』 だったか」

『ああ、言われて思い出した。そりゃ、アレだ。ブリミルが故郷を想って奏でた唄の一節さ』

「ほう、そうなのか……」

知っているが……。

「で、その『ガンダールヴ』がどうかしたのか？」

『いやあ、ハッキリどうとは言えなんだが……、何しろ随分昔の事でな……。なんかこう、頭の隅に引っ掛かってるんだが……』

「……思い出したと言った癖に、何も思い出しておらんではないか」

『しょうがねえだろ。何千年前の事だと思ってやがるんだ。ちょっと思い出しかけただけでも褒めてもらいたいもんぜ』

「やれやれ……」

だが、今のやり取りをして俺も思い出した。

今さっきのやり取りは、原作ではアルビオンに行った時に済んでいたはずのものだ。俺の場合、ワルドとの戦いを避けた事で、デルフリンガーの記憶の回復が遅れたようだ。

とはいえ、そこは特に問題ない。既に知っている情報なら、改めてデルフリンガーから引き出す必要がないからだ。

今のところ、俺の原作知識は19巻まで……もうじき20巻が発売されるらしいが、そこは置いておく。

何やらブリミルと聖地を巡って、ややこしい裏事情があるのは確かな様だ。6000年前に何が起こったのか……それを、デルフリンガーが全て思い出してくれば、表に出ていない問題さえ一気に全て解決できる……糸口ぐらいにはなる、かもしれない……。

もしかしたら、俺のチート能力でデルフリンガーの記憶を取り戻させることが出来るのかもしれない。だが、能力はともかく……俺の頭では、今は人間側のゴタゴタを処理するだけで精一杯だ。

アチラもコチラもと欲張り手を広げ過ぎると、全てが中途半端になったり、最悪、全てを悪い方向へ導いてしまう恐れさえある。

焦らず、一つ一つ着実に積み重ねていく方が俺の性にも合っているしな。ここは、じっくりと腰を据えてかかるう。

という訳で、デルフよ。思い出すなら、自力で思い出してくれ。

.....

(.....ん?)

『風の精霊』から、人間接近の報が入った。人数は.....四人が。

連れ立って来ているところから見て、この四人は明確にここへ向かっている。目的は、『ヴェストリの広場』か、或いは俺か。

パタン

開いていた本を閉じ、その四人が来るのを待つてみる。

すると

「あ、ダーリン　ここにいたのね！」

先陣を切って姿を見せたのは、キュルケだった。

ということは、残る三人は.....

「.....」

タバサに.....

「こんばんわ、先生」

ギーシュに.....

「ジークさん、こんばんわ。さっき女子寮から出てくるのが見えて、ここかな？って。前にお好きだって言ってた『お茶』がまた手に入ったので、ご馳走しようと思ってお持ちしました！あ、皆様はここに来る途中でバツタリお会いして、ジークさんを探しておられるとの事だったので、お連れしました」

シエスタか……。そうか、彼女に見られていたのか……。別にコソコソしていた訳ではないので構わないが。

ちなみに『お茶』とは緑茶の事で、三日程前の夕食の後、厨房でマルトーとシエスタがご馳走してくれたのだ。東方『ロバ・アル・カリイエ』から来た商人から仕入れた珍品だそうだが、俺には非常に馴染み深い。元々、俺は緑茶が好みだからな。

「……で、キュルケ。何を当たり前の様に隣に座り、密着しているのだ？」

右肩にしな垂れかかってくるキュルケに、俺は冷静に質問を投げかける。

「うふん 恋する相手には、いつでもくっついていたいのに」

「……そうか。で？雁首を揃えて、こんな時分に吾輩に何の用だ？」

「んもう、相変わらずつれないんだから！でも、そんなところも好きよ」

唇を尖らせて拗ねた表情を見せるキュルケだが、取り合わない。下手な反応を返すと、キュルケみたいなタイプは逆に喜んでしまう

からな。

「はい、ジークさん！」

「ん、ありがとう」

シエスタが差し出してくれたティーカップを受け取り、静かに緑茶を啜る。

「うーん、美味しい。苦みと渋みが程良く調和している。香りも素晴らしい。申し分ない淹れ方だ」

口の中に広がる日本の味……これで、御茶請けの和菓子でもあれば最高だ。ちなみに、俺が淹れ方のコツを少しだけアドバイスした。

「ありがとうございます！ジークさんにそう言って頂けると、嬉しいです」

本当にこの娘は……無防備に可愛らしく笑うなあ。お兄さんとしては、純朴のままの君でいてほしいのだが……。

「ちょっとダーリン？こんなに傍で愛を囁いてるあたしを無視して、その娘と見つめ合うのは、いくらなんでもあんまりじゃない……？流石のあたしも、ちょっとぴり傷ついちゃうわよ？」

「そうか。では、こんな冷たい男にはさっさと見切りをつけ、愛に応えてくれる良い男を探すが良い」

「い・や 恋は困難や障害が大きい程、激しく燃え上がるものよ？」

そう言つてキュルケは妖艶な笑みを浮かべ、俺の右腕に腕を絡め、巨乳の谷間に挟みこむ。

むにゅ、むぎゅ

まあ……、これは役得として堪能させてもらつとしよう。

「……話を戻すが、本当に何用だ？タバサやギーシュまで連れて、吾輩を誘惑しに来た訳ではあるまい？」

「あ、そうそう！ねえ、ダーリン。ちょっとこれを見て」

キュルケはそう言つと俺の腕を離し、どこから取り出したのか知らんが、羊皮紙の束を差し出してきた。

「む？これは？」

取りあえず、受け取つて束を開いて見る。

これは……地図だな。しかも、地図上の一点に×印が……。

地図……×印……。

「これは……もしか、宝の地図か？」

「その通りよ！」

やっぱり……。

ということは、これは宝探しへの誘い　　上手い具合にシエスタ

もこの場に……『竜の羽衣』こと零式艦上戦闘機、通称『ゼロ戦』を回収するチャンス到来！

あ、いや、シエスタを利用しようとかそういう意味ではないのだから……ゼロ戦はこの先も必要になるだろうし、な？

「ねえ、ダーリン。貴族になりたくない？」

こらこら、そんなに顔を寄せて頬を撫でるな。くすぐったいではないか。

「……ゲルマニアで、か？」

「そうよ！ゲルマニアだったら、お金さえあれば、平民だろうがなんだろうが土地を買って貴族の姓を名乗れるし、公職の権利を買って、中隊長や徴税官になることだって出来るのよ」

「だからゲルマニアは野蛮だっていうんだ」

そう吐き捨てるように口を挟んだのは、ギーシュだ。

だが、言われた当のキュルケは、そんなギーシュを鼻で笑う。

「あゝら『メイジでなければ貴族にあらず』なんつって、伝統やしきたりに拘って、どんな国力を弱めているお国の人に言われたくない台詞だわ。おかげでトリステインは、一国じゃまるつきしアルビオンに対抗できなくて、ゲルマニアに同盟を持ち掛けたって話じゃないの」

「ええい！国の批判は他でやらんか！話を戻せ！」

全く……帰属意識が強いのは結構だが、それが自分達以外を軽視する方向に向かうのでは問題だぞ。

「要するにだ、キュルケ。おぬしは吾輩に、この地図でもって宝を探し出し、それを金に換えてゲルマニアで領地なり公職の権利を買って、貴族になれと言っただな？」

「そう、その通りよ！さすが、ダーリン　話が早いわ！」

はしゃいで、また俺に抱きついて来るキュルケ。

むにゅ

まあ、役得ってことで、どうか一つ……。

「なあキュルケ……今更だけど、この沢山の地図、どう見ても胡散臭いんだけど……」

ギーシュが地図を覗きこんで言った。

「そりゃあ、魔法屋、情報屋、雑貨屋、露天商……色々回ってかき集めて来たんだもの」

「やっぱり紛い物に決まってるよ。こうやって『宝の地図』と称して、適当な地図を売りつける商人を何人も知ってるぜ？騙されて破産した貴族だっているんだ」

「そうと知っていながら、何故キュルケについて来たのだ？ギーシュ」

「え……！？いえ、そのう……」

俺の突っ込みに、ギーシュが目を泳がせ始める。心なしか、背中に暗いオーラが漂っている気もするな……。

「ははあん……さては、また浮気でもしかして、モンモランシーあの金髪の娘の逆鱗に触れたな？」

「ち、違うんです先生！浮気とかじゃなくて、モンモランシーはこの間の任務の事を『浮気旅行』だと勘違いして、いくら違うと言っても取り合ってくれないんですッ……」

「……そ、そうだったのか」

なるほど……あの金髪縦ロールなら、ありそうな話だ。が、それはギーシュの日頃の行いが悪い事も原因の一つだ。

気の毒な気もするが、自業自得とも言える。

「日頃の女癖が悪いからでしょ」

「自業自得」

「ぐふっ！？」

キュルケ、タバサの順に容赦ない突っ込みが入り、ギーシュは大きなダメージを負って膝をついた。

所謂、orzの状態だ。

「……それで、もしかしたら一つぐらいは本当に宝があるのではないかと思い、それを見つけ出してあの娘に贈れば、見直してくれるのではないか、と考えた訳か」

「……………はい」

orzのまま頷くギーシュ。こんな状態でも、哀れに思えないから不思議だ。

「ねえダーリン、行きましょ。ダーリンほどの人が、いつまでもルイズの使い魔をしてるなんてもったいないわ。お宝見つけて、ゲルマニアで貴族になって……きちんと手順を踏んで、あたしにプロポーズしてね？」

むぎゅ

更に密着してくるキュルケ。

役得もいい加減飽きた……。話を進めよう。

「まあ、貴族やらプロポーズ云々は置いておくとして……宝探し自体は、中々面白そうだな」

「そうこなくっちゃ！」

「ダメですダメですダメですっ！」

キュルケがはしゃいでしがみ付いてきた時、シエスタが反対側から俺を引っ張った。

「ジークさんが結婚するなんてダメですっ！」

「あなた、好きな男の幸せを願わないの？」

キュルケがそう言うと、シエスタは一瞬ハッ！とした顔になったが、すぐに首を振った。

「貴族になるだけが幸せじゃありません！私の村にいらしてください！そのお金で葡萄畑を買いましょう！」

「……その葡萄で、吾輩にワインでも作れと？」

「はい！私の村では、良質の葡萄がたくさん採れるんです！素敵なワインを二人で作りましょう！銘柄はジークシエスタ！二人の名前ですよ！」

そう言ってシエスタが引っ張ると、キュルケが引っ張り返す。

「ゲルマニアにだって、良質の葡萄が採れる土地は幾らでもあるわよ。ワインが作りたければ、その土地を買って作ればいいわ。貴族にもなれて、葡萄栽培もワイン作りも出来る。これなら一石三鳥よ！」

グイ！

「き、貴族になったらお仕事が忙しくなって、畑の管理してる暇なんてきつとありません！丁寧にお手入れしないと、良質の葡萄は出来ないんです！」

グイ！

「だったら、人を雇って手入れさせればいいじゃない。そうすれば領地の管理で忙しくても、良質の葡萄酒が出来るわ！」

グイッ！

「いいえ！自分で一生懸命作る事に意味があるんですッ！」

グイッ！

右に左に引つ張られ、ゆらゆら揺らされる俺……。キュルケもさることながら、シエスタも一步も譲らない。

グイッ！グイッ！！グイッッ！！

いい加減、怒っても良いよな……。？と、思った時だった。

ブオオオオオ！！

「「きゃあぁっ！！？」」

突風がピンポイントでキュルケとシエスタを吹き飛ばした。

「……タバサ？」

風の出所に目を向けると、タバサが杖を掲げていた。

「あいたたたぁ、お尻打ったぁ……！」

「うう……いきなり酷いじゃない！タバサ！」

ヨロヨロと打ちつけた箇所を擦りながら、タバサに非難の目を向ける。

が、その目は次のタバサの台詞で驚きに変わる事となった。

「ジークが迷惑そうにしてる」

「「え……！？」」

「ジークに迷惑をかけるのはダメ。彼の未来は、彼が決めるべき」

一見、いつもの無表情に見えるタバサだが、やや眉が吊り上げられている……気がする。

声や言葉遣いも、以前よりハッキリしてきた……と思う。

少しずつだが、感情を表に出せる様になってきたのだろう……多分。

良い傾向だ　間違いなく。

「すまぬ、タバサ。おかげで助かった」

「私は貴方の騎士。いつでも、どんな事でも、何度でも、私は命を懸けて貴方を助ける」

タバサはきつぱりとそう言い切った。オルレアン夫人を癒し、ジョゼフ、イザベラと和解したあの日　タバサは俺に『騎士の誓い』

を立てた。

『私の全てを、貴方に奉げる。命を懸けて貴方を守る。タバサは……シャルロット・エレーヌ・オルレアンは、貴方の騎士になる』

勿論、俺は止めさせようとした。だが、タバサが頑として聞かなかった。

終いにはジョゼフとオルレアン夫人がタバサの味方につき、逆に俺が説得されてしまった。ああなったら、俺が折れるしかない。

と言った次第で、現在に至る。

「そう気張るな。その心だけでも、吾輩には過分というもの」

「そんなことない。貴方は私達を救ってくれた。だから、今度は私の番。これは、私の気持ちの問題」

「ははっ、分かった。吾輩の負けだ。元よりおぬしの人生、思うままに生きてくれ」

「そうする」

微笑みながら頷くタバサ。本当に、良い顔をする様になったな……。

「……あら？あらあら～！？タバサ～あなた、もしかして！？」

物凄く楽しいものを発見！と言わんばかりに顔を輝かせるキュルケ

「……」

フィ

キュルケの視線を受け、顔を逸らすタバサ。月明かりのみなので、ハッキリとは見えないが、やや頬を赤らめている気がする。

「うふふふ！なるほど、そうだったの〜！タバサあなた、ジークに恋してたのね」

「っ……違う。彼に奉げたのは忠誠」

「んもう、そんな言葉で誤魔化さないの！でも、そうね。そういうことならちよつと残念だけど、あたしは身を引くわ。親友のあなたの恋路を手伝ってあげる！」

「だから、違う。私は、彼に騎士の誓いを……」

タバサが、彼女なりに必死に否定しようとするも、キュルケは楽しげに笑い続けてまともに取り合わない。

だが、今のタバサの様子を見ると、キュルケの言う事は正鵠せいこくを射ている様に思える。

うーん、フラグ、立ててしまったのだろうか……？

『フッ』

「ハッ！？」

今……『してやったり』と言う笑みを浮かべたジョゼフが脳裏をよぎった様な……？

いやいやっ！まさかな……？

「っ……あゝ、おぬしら。また話が逸れておるぞ？宝探しの話はど
うした？」

「せ、先生も行かれるんですか！？」

ギーシュがorzから立ち直った。

「うむ、ちょうど何かで気分転換をしたいと思っていたのでな」

「決まりね！」

タバサを弄っていたキュルケが、俺の言葉に素早く反応する。

「わ、私も連れてって下さい！！」

シエスタが叫んだ。

「ダメよ。平民なんか連れてつたら、足手纏いじゃない」

「馬鹿にしないでください！わ、私、こう見えても……」

シエスタは拳を握りしめ、わなわなと震える。

「こう見えても？」

キュルケは、シエスタをまじまじと見つめた。キュルケだけでなく、ギーシュとタバサも同じくシエスタに注目する。

そんなに期待しない方がいいぞ……？

「料理ができるんです！」

「「知ってる（わ）よ！」

キュルケとギーシュが、即座にツツコンだ。

「でも！でもでも、食事は大事ですよ？宝探しって、野宿したりするんでしょう？保存食糧だけじゃ、物足りないに決まっています。私がいれば、どこでもいつでも美味しいお料理が提供出来ますわ」

「「……！」

シエスタのその言葉は、キュルケとギーシュを黙らせた。

それもそのはず 俺とタバサはともかく、キュルケとギーシュは生粋の貴族のお嬢さんとお坊ちゃん。不味い食事に耐えられるほど、辛抱強くない。

いつでも美味しい料理が出る、というのは魅力的なのだ。

「……でも、あなたお仕事あるでしょう？勝手に休めるの？」

しばし考え込んでいたキュルケがそう尋ねると、シエスタは元気よく頷いた。

「コック長に『ジークさんのお手伝いをする』って言えば、いつでもお暇はいただけますわ」

そう　俺は一応『メイジ』という扱いだが、マルトーは俺の事を気に入ってくれているらしく、色々と良くしてくれる。才人みたいに『我らの剣』とかは呼ばれていないがな。

だが、それでもシエスタの言う通り、俺の名前を出せば休暇を取る事は可能だろう。

「わかったわ、勝手にしなさい。でも、言っとくけど、今から向かう廃墟や、遺跡や森や洞窟には、危険がいっぱいよ？怪物や魔物がわんさかいるのよ？」

「へ、平気です！ジークさんが守ってくれるもの！」

キュルケにそう言い返すと、シエスタはまた俺の腕にしがみ付いた。だから、役得はもう飽きたと……。

「じゃあ準備して。そうと決まったら出発よ！」

「まあ待て、キュルケ」

このまま即出発しようとするキュルケを、俺は止めた。

「何よ、ジーク？」

「今すぐ出発は無理だ。吾輩もシエスタ同様、マスター・ルイズに話を通さねばならん」

「えゝ！？そんなの別にいいじゃない！」

「そうはいかん。筋は通さねば……」

と、言う訳で　ルイズの部屋に移動。本に囲まれて唸っていたルイズに、事情を説明した。

「……宝探しい？」

ルイズから疲れた声が返ってくる。

ちなみに、キュルケ達は各自の部屋に帰した。ルイズを説得するには、言っては悪いが邪魔にしかないからな。

「はぁ……あんた、何言ってるの？そんなもん却下よ！姫様の結婚式が近いってのに、遊んでる場合じゃないでしょうが！」

案の定と言うべきか、ただ事情を話しただけではルイズから許可は下りなかった。

「しかも……よりによってツエルプストーとだなんて！尚更ダメよ！！絶対ダメよ！！」

やはりネックはそこか……。

「落ち着くが良い、マスター・ルイズ。何も、キュルケと二人きりで出掛ける訳ではないのだぞ？タバサとギーシュ、それにシエスタも同行する」

「同じよ。っていうか、あのメイドは寧ろダメよ！それにさつきも言っただけど、姫様の結婚式までもう一ヶ月ないのよ？詔も全然出来てないし……ううう、こんな事じゃ結婚式に間に合わないかも……！」

これは、相当追い詰められているな……。

持ち前の責任感と真面目さが手伝って、ルイズは今回の巫女の件でかなりの重圧プレッシャーを感じている。それが証拠に、夜遅くまで詔を考えている所為で、目元に薄らと隈が浮いてきている……。

このまま放っておくと、鬱病……とまではいかなくとも、ストレスで体調を崩してしまうかもしれない。

そうなる前に……ルイズは、『ガス抜き』をする必要がある。

「マスター・ルイズ。これは提案なのだが……その為に、マスター・ルイズも共に宝探しに行かぬか？」

「え……？」

頭を抱えていたルイズが、疑問符を浮かべて顔を上げた。

「野に出て、己の眼と耳、そして身体全てで『火』『水』『風』『土』を感じると、案外良い詩が浮かぶかもしれないぞ。それに、このように自室に閉じこもってばかりいては、気分が落ち込むばかりだ。気分転換を兼ねて、少し外に出てみるのも良いのではないか？」

「……気分転換……」

ルイズが顎に手を当てて考え込む。もう一押しか……。

「案ずるな、マスター・ルイズ。道中、如何なる危険が待ち受けて
いようとも、おぬしの身は吾輩が必ず守り抜く」

「っ！そぞ、そうね！ここで色んな本を読んでも、詔はさっぱり
思い浮かばないし！あんたがそこまで言うんなら！しょうがないか
ら、宝探しに付き合ってあげるわっ！！その代わり！ちゃんと私を
守りなさいよねっ！」

「任せておくが良い」

そんなチヨ口いお前が愛おしい……。いつまでも、変わらず純粹チヨ
であつてくれい。

そうしてルイズを舌先三寸で丸め込んだ翌朝 俺達は宝探しへ
と出発した。

他の宝は正直期待していないが、本物のゼロ戦を見られるのは少
し楽しみだ。俺は戦闘機マニアではないが、飛行機が格好良く見え
る男心ぐらいは持っている。

いかん。柄にもなく、ワクワクしてきた……！

遅くなりまして、大変申し訳ありませんでした。大スランプ中の作者でございます……。

何とか1話書き上げましたが、この先どうしたものか……。

引き続き、ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。

学院を出発して8日目の夜……。

俺達は、宝を求めてやってきた廃墟の寺院の中庭で、焚火を囲んでいた。

つい先程まで、俺達はオーク鬼の群れと一戦交えていたので、皆、少々くたびれている。

ちなみにその際の作戦は原作通り 寺院をねぐらにしていたオーク鬼共を誘い出し、ヴェルダンデが掘った落とし穴に誘い込んで落とし、予め穴の底に用意しておいた油を燃やし、オーク鬼共を一網打尽。

俺がギーシュに念入りに釘を刺しておいたので、奴も勝手な行動は控えた。

おかげで、作戦通りにオーク鬼共を倒すことが出来た。焼け死んだオーク鬼共はそのまま土葬した。

その後、寺院の中を隈なく探した、のだが……。

「……で、その『秘宝』とやらはこれかね？」

皆が疲れている中、ギーシュが恨めしげに口を開いた。

奴が指さした先には、先程この寺院で見つけた宝……というには

余りにお粗末な品々がある。

色あせた装飾品数点、汚れた銅貨数枚……何もないよりはマシとはいえ、宝とはお世辞にも言えない。

「この真鍮で出来た安物のネックレスや耳飾りが、まさか件の『ブリーシングガメル』という訳じゃあるまいね？」

「……………」

キュルケは答えず、つまらなそうに爪の手入れをするばかり……。

まあ、キュルケもこれだけ探して悉くハズレで、面白くないのだろつ。

「……………」

同じ無言でも、タバサは相変わらず読書をしている。彼女は元々、宝などに興味がなかったので、特にこの状況に思う所はないらしい。

「全く、うるさいわね」

ルイズは俺の隣に座り、呆れた声で言った。

彼女が落ち着いているのは、詔が出来上がったからである。

『野に出て、己の眼と耳、そして身体全てで『火』『水』『風』『土』を感じると、案外良い詩が浮かぶかもしれんぞ』

あれはルイズを納得させる為の口実だったんだが……、やはりル

イズは大したものだ。

今日までの旅で様々な体験をする内に鬱憤も晴れ、四大系統に対する感謝の辞を、詩的な言葉で韻を踏みつつ、見事に書き上げた。タバサやキュルケからも何度かアドバイスがあり、出来上がった際に聞かせてもらったが、どこに出しても恥ずかしくない出来だったと思う。

肩の荷が下りたルイズはこの旅で大いに羽を伸ばし、上機嫌でいるという訳だ。

「なあキュルケ、これで七件目だ！地図をアテにお宝が眠るという場所に苦勞して行ってみても、見つかるのは金貨どころか精々銅貨が数枚！地図の注釈に書かれた秘宝なんか欠片もないじゃないか！インチキ地図ばかりじゃないか！」

「うるさいわね。だから言ったじゃない。『中には』本物があるかもしれないって」

「いくらなんでも酷過ぎる！廃墟や洞窟は化け物や猛獣の住処になつてるし！苦勞してそいつらをやって、得られた報酬がこれじゃあ、割に合わんこと甚だしい！」

ギーシュとキュルケの言い合いはまだ続いている。やれやれ……ギーシュも尻の穴の小さい男だ。

「ギーシュ、そのぐらいいにしておけ」

「先生！ですがっ！」

「おぬし、この旅の前に自分で言っておったではないか。この地図は紛い物に決まっている、と……」

「うつ……！？」

ギーシュは決まり悪そうに呻く。

すると、加勢を得てキュルケが勝ち誇った様な笑みを浮かべた。

「そうそう、ジークの言う通りよ。大体、化け物を退治したくらいで、はいはいお宝が手に入ったら、誰も苦労しないわ」

その通りだがキュルケが言うことではないな。うむ、黙れ

「キュルケ、何が無責任に他人事のようなことに言っておるか。おぬしに責任がない訳ではないのだぞ？」

「そら見たまえ！」

「ギーシュッ！」

「うつ……！」

睨み、鋭く怒鳴りつけると、ギーシュは再び萎んだ。

「この宝探しはこの場にいる全員が、宝など見つからぬ可能性を承知の上でやって来たのだ。故に全員に等しく責任があり、誰ぞ一人が悪い訳ではない！逆に、誰もが無責任であることも許されぬのだ！分かったな！？ギーシュ！キュルケ！」

「で、ですが……！」「ええっ、あたしもなの！？」

「分・か・つ・た・なッ！？」

「は、はい……」

俺の気迫に、ギーシュとキュルケが揃って萎んだ。ふん、これでも相手に有無を言わせないほど威圧する術ぐらい心得ているのだ！

「皆さーん！お食事ができましたよー！」

良いタイミングで、シエスタから声が掛かった。

そして夕食の時間 シエスタが焚火にくべた鍋からシチュー……

……いや『ヨシエナヴェ』こと寄せ鍋を盛り付け、それぞれに配った。

うーん、日本では嗅いだ事のない独特な香りだが、食欲をそそる良い香りだ

「こりゃ美味そうだ！と思ったらホントに美味しいじゃないかね！一体何の肉だい？」

ギーシュがシチューを頬張りながら騒ぐ。ルイズもキュルケもタバサも同じ感想らしく「美味しい美味しい」言い、笑みを浮かべながらシエスタの方を向いている。

すると、シエスタがニツコリと微笑んだ。

「オーク鬼の肉ですわ」

「「ぶはっ！」」

ギーシュとルイズが吹いた。

「……………」

キュルケも口元にスプーンを運んだ状態で固まる。

「もぐ、もぐ……………」

タバサは気にせず食べているな……。分かっているのか、それとも本当にそうだとしても気にしないのか……。

「じよ、冗談です！ホントは野ウサギです！罾を仕掛けて捕まえたんです」

シエスタは慌てた様子で、啞然としている三人にこの寄せ鍋の作り方を説明する。

それでようやく安堵したルイズ達は、盛大に溜め息を吐いた。

「あんだねえ…………… 心臓に悪い冗談はやめなさいよ！」

「まったく！おかげで思い切り吹き出してしまったじゃないかねっ！」

ルイズとギーシュが揃ってシエスタに抗議する。ただし、責任を追及する様な口調ではなく、知人同士の軽口といったノリだ。

この二人も随分丸くなったものだ。

それにしても、罾を仕掛けて野ウサギを捕獲するとは……シエスタも中々ワイルドだな。

「でも、あなた器用ね。こうやって森にあるもので、美味しい物を作っちゃうんだから」

「田舎育ちですから」

キュルケの褒め言葉に、シエスタは照れ笑いを浮かべる。

「これはなんていうシチューなの？ハーブの使い方が独特ね。あと、なんだか見た事もない野菜がたくさん入ってるわ」

「私の村に伝わるシチューで、『ヨシエナヴェ』っていうんです」

シエスタが鍋の中身をお玉でかき回しながら説明する。

「父から作り方を教わったんです。食べられる山菜や、木の根っこや……、父は、曾お爺ちゃんから教わったそうです。今では私の村の名物です」

「……」

話を聞いて今更ながらに思うが、シエスタの曾祖父 佐々木武雄氏は凄い人物だと思う……。

何の前触れもなく『異世界』等というあり得ない場所に投げ出され、それでも絶望せずにタルプの村に住みつき、その住人に受け入れられた上に子孫まで残しているのだから……。恐らく、今俺達

が食べている『ヨシエナヴェ』は、佐々木氏が何とか故郷の味を再現しようと考案した料理に違いない。

俺にはハルケギニアの予備知識があつた上に、あの声にチート能力を与えられている。『ワールド・ドア世界扉』で自在に地球とハルケギニアを行き来さえ出来るからこそ、こうして何とか余裕を持ってやっていているだけだ。

実際に佐々木氏と全く同じ状態でハルケギニアにやって来たとしたら、正直、俺は生きていける自信がない……。

「ジークさん、美味しいですか？」

「ん？ああ、うむ、美味しいな」

「良かった！おかわりは沢山ありますから、いっぱい食べてくださいね」

「うむ、頂こう」

その後、俺は2杯ほどおかわりをさせてもらった……。

食事が終わると、キュルケが再び地図を広げる。

「もう諦めて学院に帰ろう」

ギーシュがそう促したが、キュルケは首を縦に振らない。

「休日はまだ2日残ってるわ。あと一件ぐらいいけるわよっ」

そう言うとキュルケは、目を輝かせて選んでいた地図の中から一枚を地面に叩きつけた。

「これ！これよ！これでダメだったら学院に帰ろっじゃないの！」

「なんていう宝なのよ？」

ルイズが地図を覗き込んで尋ねる。するとキュルケは、腕を組んで呟いた。

「『竜の羽衣』」

その時、俺達が食べ終えてからシチューを食べていたシエスタが吹き出した。

「そ、それホントですか！？」

「何よあなた、知ってるの？場所は、タルブの村の近くね。タルブってどこら辺なの？」

そうキュルケが尋ねると、シエスタは少々慌て気味に答える。

「ラ・ロシエールの向こうです。広い草原があって……、私の故郷なんです」

そういった次第で、最後の目的地はタルブの村　目的の宝は『竜の羽衣』と決定した。

これでようやく、俺の当初の目的が果たせる。

ゼロ戦が手に入れば、そのエンジンを元にコルベールが蒸気船の動力を考案するだろう。

加えて、俺の能力を使えば、ガソリンも機関銃の弾も量産できる……戦力は確実に上がるはずだ。

という訳で、俺達は翌朝、シルフィードに乗ってタルブの村へと向かった。

俺たちは空の上でシエスタに『竜の羽衣』について説明を受けた。村の近くに寺院があり、そこに納められているという。

「どうして、『竜の羽衣』って呼ばれてるの？」

「それを纏ったものは、空を飛べるそうです」

ルイズの問いに、シエスタは言い難そうに答えた。

「空を？『風』系の魔法具かしら？」
マジックアイテム

キュルケが顎に指を当ててそう言つと、シエスタは困った様な表情を浮かべる。

「そんな……、大したものじゃありません」

「どうして？」

「インチキなんです。どこにでもある、名ばかりの『秘宝』。ただ、地元の皆はそれでも有難がって……、寺院に飾ってあるし、拝んでるおばあちゃんとかいますけど」

「なんだ、そうなの……」

聞いてつまらなそうに言ったのはルイズだった……。

まあ確かに、この世界の人々から見れば、動かないゼロ戦などただのガラクタ同然だろう。

それでも拝んでいる人がいるというのは、シエスタの曾祖父である佐々木氏が信頼されていたという証だと思う。

「実は……、その持ち主、私の曾お爺ちゃんだったんです。ある日、ふらりと私の村に、曾お爺ちゃんは現れたそうです。そして、その『竜の羽衣』で、東の地から、私の村にやってきたって、皆に言ったそうです」

「凄くないの」

キュルケがそう言うが、シエスタは首を横に振る。

「でも、誰も信じなかったんです。曾お爺ちゃんは、頭がおかしかったんだって、皆言ってます」

「どうして？」

「誰かが言っただけです。じゃあその『竜の羽衣』で飛んでみると、でも、曾お爺ちゃん、飛べなくって。なんか色々言い訳したらいいですけど、皆が信じるわけもなく。おまけに『もう飛べない』と言っただけの村に住み着いちゃって。一生懸命働いてお金を作って、そのお金で貴族にお願いして、『竜の羽衣』に『固定化』の呪文までかけてもらって、大事に大事にしてました」

「変わり者だったのね。さぞかし家族は苦労したでしょうね」

「変わり者などではない。立派な人物ではないか」

「……！？」

180度違う見解を述べた俺に、皆の視線が集まる。

「ただ1人、異国の地に降り立ち、見知らぬ土地で生きる事……それは言うは容易いが、おぬしらが思っておるより遥かに過酷な事だ。しかしシエスタの曾祖父殿は、絶望する事なく懸命に働き、己を示す事で村の者達にも受け入れられた。でなければ、シエスタは生まれてこなかったであろうからな」

「あ……はい。曾お爺ちゃん、『竜の羽衣』の件以外では、働き者のいい人だったんで。皆に好かれたそうです」

「うむ、やはりシエスタの曾祖父殿は立派な方だ。困難に立ち向かう勇氣と、逆境に屈さぬ強靱な精神を持っておられた。尊敬に値する」

「確かに……言われてみれば、その通りね」

ルイズが神妙な顔で言った。もしかして、俺の事を気にしているのだろうか？

「マスター・ルイズ、吾輩の事ならば気に病む必要はないぞ。吾輩とシエスタの曾祖父殿では、状況がまるで違うのだから」

「わ、わかってるわよ……！」

頬を赤くしてそっぽを向くルイズ。律義な奴だな……まさか、まだ気にしていたとは。

そうして話している間も、シルフィードは空を歩き、タルブの村を目指した……。

大した時間も掛からず、タルブの村に到着した俺たちは、すぐにシエスタに案内され『竜の羽衣』が納められているという寺院に向かった。

寺院というか……やはり、佐々木氏が建てたというだけあって見た目はまるつきり『神社』だった。

鳥居に板と漆喰の壁、木の柱に注連縄……ゼロ戦を納める為にこんな神社まで建ててしまうとは、佐々木氏の愛国心と信仰心は凄まじいものがある。改めて感心させられた。

そして肝心の『竜の羽衣』ことゼロ戦。それは社の中に鎮座していた。佐々木氏が懸命に働いて作った金で、貴族にかけてもらったという『固定化』のおかげで、錆び一つ浮いておらず、作られた

そのままの姿を見せていた。

正直な話……俺もゼロ戦の実物をこの目で見たのは初めてだ。だから、興奮を抑えるのは少々大変だった……。

だが、例によって言うか……ルイズ、キュルケ、ギーシュの三人は興味がなさそうだ……。それに比べて、タバサは興味を持った様で、ゼロ戦を見つめている。

「全く、こんな物が飛ぶ訳ないじゃないの」

キュルケが言うと、ギーシュも頷く。

「これはカヌーか何かだろう？それに鳥の玩具の様に、こんな翼をくつつけたインチキさ。大体見る、この翼を。どう見たって羽ばたける様には出来ていない。この大きさ、小型のドラゴン程もあるじゃないか。ドラゴンだって、ワイバーンだって、羽ばたくからこそ空を飛ぶ事ができるんだ。何が『竜の羽衣』だ」

ギーシュめ……知りもしないで知った様な事を得意げにペラペラと……。

「シエスタには悪いけど、これは確かにインチキね。これで空を飛べるとは到底思えないわ」

ルイズまで……。ええい、しょうのない奴らめ！

「いいや、飛べる」

「「「!?!?!」」」

俺がキツパリと言い切つてやると、否定意見を述べていた三人が振り返った。

「『竜の羽衣』が飛べなくなった理由は、燃料が足りなくなったからだ」

「ネンリヨウ……？何よ、それ？」

尋ねてくるルイズに、俺は説明する。

「うゝむ、何と言えば良いか……そうだな、船における風石に相当するものだ。『竜の羽衣』の場合は、特殊な製法で精製された特別な油なのだが……」

「じゃあ、その油があればこの『竜の羽衣』は飛ぶっていうの？」

「ああ、飛ぶとも」

ルイズに頷いて見せてから、俺はシエスタの方を向く。

「シエスタ」

「は、はい？」

「おぬしの曾祖父殿が残したものは、他に何かあるか？」

「えっと……、あとは大したもの……、お墓と遺品が少し残ってますけど」

「では、先ず墓に案内してくれ。曾祖父殿の墓前にて、祈りを奉げたい」

そして、シエスタに案内され、佐々木氏が眠る墓の前にやってきた……。

村の共同墓地の一面に、ただ一つだけ黒い石で作られた墓石があり、白い石で出来た幅広の墓石ばかりの墓地にある所為でかなり目立っていた。

「曾お爺ちゃんが、死ぬ前に自分で作った墓石だそうです。異国の文字で書いてあるので、誰も銘が読めなくて。なんて書いてあるんでしょうね」

シエスタが呟くように言った通り、墓石に刻まれた文字はハルケギニアの人間にはまず読み書きできない日本語であった。

日本の墓石は黒い石で作られる事が多い……だから、佐々木氏は最後まで日本人でありたいと、生前の内に自ら墓石を作り、己の墓碑銘を日本語で刻んだのだろう。

「『海軍少尉佐々木武雄、異世界二眠ル』……」

「はい？」

「この墓に刻まれている銘と言葉だ」

目を丸くするシエスタに教えてやってから、俺は墓に向かって両手を合わせ、目を瞑り、祈りを奉げた。

（佐々木武雄さん……同じ日本人として、あなたにこうしてお会いできた事、光栄に思います。あなたが身を投じていた戦争は既に終結しました。残念ながら日本は敗れましたが、今は平和になります。ここは異世界ではありますが、どうか、安らかに眠り下さい……）

しばし祈りを奉げ……俺は立ち上がり、シエスタに向き直る。

「シエスタ、不躰ながら頼みがある」

「は、はい！何ですかっ？」

背筋を伸ばし、やや上擦った口調で返事をするシエスタ。そんなに畏まらなくても良いのだが……。

「あの『竜の羽衣』、吾輩に譲ってくれぬか？」

その後、シエスタは実家に戻り、管理をしている父親にかけ合ってくれた。

まあ、大した悶着もなく、ゼロ戦は俺に譲ってもらえる事になった。原作通り、佐々木氏への義理立てに近い理由だけで管理していたらしく、ほぼ村の荷物扱いされていたそうだ。

それに、遺言で

『あの墓石の銘を読める者に『竜の羽衣』を渡してほしい』

という言葉も残されていた事も、一応理由の一つなのだそうだ。

無償^{ただ}で譲って貰うのも気がひけたので、俺はシエスタの父親に礼金として500エキューを支払った。シエスタを始め、彼女の家族が非常に恐縮し、最初こそ受け取る事を遠慮していたが、そこはそれ……俺が説得する事でなんとか受け取ってもらった。

シエスタの父親は最初こそ渋っていた癖に、いざ受け取る決心をして受け取ると……『これで葡萄酒が広げられる！』と大喜びしていたのだから、現金なものだ。

ただ、一つだけ佐々木氏に謝らなければならないのが、彼のもう一つの遺言については果たせそうにない事だ。

『なんとしてでも『竜の羽衣』を陛下にお返しして欲しい』

佐々木氏が言った『陛下』とは、先ず間違いなく昭和天皇の事だろう。ゼロ戦が作られ運用されていたのは昭和時代だからな。

当然の事だが昭和天皇は既に故人……。平成天皇はご健在だが、いくら俺が地球とハルケギニアを行き来できる特殊な人間だと言っても、地球での俺はただの一般庶民。天皇陛下にお会いする事など先ず不可能……。まして、ゼロ戦をお返しするなど100%不可能だ。

よって、佐々木氏の遺言は果たせない……。

申し訳ない、佐々木氏……。せめて貴方のご家族を護る為に使わせていただくので、どうかご勘弁を……。

交渉も終え、シエスタの家族に歓迎された事もあり、その日はシエスタの実家に泊まる事となった。

夕方になり、俺は村の傍に広がる草原を眺めていた。

夕陽が草原の向こうの山の間に沈んでいくのが、何とも言えず美しい……。

日本では北海道の牧場でも行かなければ見る事もできないであろう広い草原……所々に花が咲いており、実に美しい。こんな所で青空の下、昼寝でもしたら、最高に気持ち良いだろうな……。色々と片付いたら、そうするか。

「ジークさん」

と、考えていたらシエスタがやって来た。だが、先程までのメイド服ではなく、茶色のスカートに木の靴、草色の木綿のシャツ……飾り気はないが、シエスタの雰囲気と相まってとても素朴で親しみやすい服装だ。

「ここにいらしたんですか」

「うむ、この草原が美しくてな。つい時を忘れてしまった……」

「本当ですか？ 嬉しいです、ジークさんが気に入ってくれて！ 私、ジークさんを実家に」招待する事があつたら、この草原を見てもらいたかつたんです」

「そうか」

そう言って、俺が笑いかけると……シエスタがモジモジし始めた。

「あの……ジークさんは、メイジだけど……平民、なんですよね？」

「うむ、そうだ」

「じ、ジークさんは……その……こういう、田舎の風景って……嫌いですか？」

「嫌いなものか。このような美しい景色……吾輩は好ましく思う」

「そ、そうですね……！よかった……！」

安堵の声を上げ、頬を染めるシエスタ。これは、本格的に……のようだな。

「ち、父に、ジークさんの事を話したら……言っただけです。曾お爺ちゃんの国の文字を読む事ができた人と出会ったのも、何かの運命だろうって。メイジでも良い人みたいだし、もし、よければ、この村に住んでくれないかって……！そしたら、私も……その、ご奉公をやめて、一緒に帰ってきたらどうだって……！」

「……………」

良い人、と思ってもらえるのは素直に嬉しい。シエスタも、純朴で可愛いと思う。先程話をした時も、シエスタの家族は良い人達なのだと分かった。

だが……俺にも使命がある。いや、使命というのは大袈裟だな……

…自分の願望で、俺が勝手にやっている事だ。

その勝手に俺は決して少なくない人達に影響を与え、導いた。始めてしまったからには責任がある。ここで投げ出すなんて無責任な真似は絶対にしたくない。

「……すまぬ、シエスタ」

「……」

「吾輩には、やらねばならぬ事が残っているのだ。それを、やり遂げるまでは……」

「じゃ、じゃあ……待ってても、いいですか？私はただの、何の取り柄もない田舎娘だけど、待つ事ぐらいはできます。いつか、ジークさんが頑張つて、お仕事を全部終えて……、自由になったら……」

「……約束は、出来ぬ」

我ながら、情けない返答だと思う。だが、これが俺の精一杯だった……。

「約束なんていいです。私……待ってます。私って、結構忍耐強くて、諦め悪い方ですから！」

そう言つて微笑むシエスタに、少しドキツとしたのは内緒の話だ……。

それにしても……まさかシエスタまでも、とは……。学院ですれ違った時などは必ず挨拶を交わし、厨房で談笑などもよくしたが……

…フラグが立つほどではないと思っていた。

ちょっとした怪我をしているのを見て魔法で治療したり、地球から持ち込んだ手荒れに効くハンドクリーム（ロー製薬）を渡したり、昔話のハルケギニア風アレンジを話して聞かせたり……この程度で、大した事はしていないのだが……。

あの声は言っていないかったが……何かこう、原作キャラの女性達を惹きつけてしまう様な能力が、内緒で付与されているのだろうか？

その後、しばらく夕陽に染められた草原を眺め、シエスタの実家に戻り、夕食をご馳走になった。中々豪華で美味かった上に、タルブ銘産のワインまで出され、俺のみならずルイズ達も非常に満足し、夕食を終えると皆それぞれ宛がわれた寝室に引っ込んだ……。

翌朝……、昨日眺めた草原に俺はいた。ただし俺だけではない。

ルイズ、キュルケ、タバサ、ギーシュもいるし、シエスタとシエスタの家族もいる。おまけにタルブの村人達も集まっている。

そして……俺の横には『竜の羽衣』ことゼ口戦がある。『遍在』で出した分身達が、せっせと給油やオイル交換、機体各部の整備作業を進める光景は……やっている俺が言う事ではないが、ややシュールだ。

で、これから何をするつもりかというと、佐々木氏の名誉挽回即ち、誰もが「飛ぶはずがない」とバカにしたゼ口戦を飛ばして

みせる事で、佐々木氏は嘔吐きでも、頭がおかしかった訳でもない事を証明しようという訳だ。

「本当に、あんなのが飛ぶのかしら？」

「ジークは飛ぶって言うけど……」

「確かに……いくら先生の言葉でも、俄かに信じ難いね」

キュルケ、ルイズ、ギーシュが順に言う。半信半疑といった反応だ……。

タルプの村人達やシエスタの両親なども同じく、ゼロ戦が飛ぶとは信じられない様子……だが、気にしない。すぐにその微妙な顔も驚きに変わる。

それに、全面的に信じてくれる者もいる　　タバサとシエスタだ。

「ジークの言う事に間違いはない」

「ジークさんが飛ぶって言うんですから、『竜の羽衣』は絶対飛びます！」

ここまで全面的に信じられると、プレッシャー重圧も感じるが……まあ、信頼には応えねばな。

という訳で、今日は最初にシエスタ、次にタバサをゼロ戦の後ろに乗せ約束をしている。シエスタが先なのは、ゼロ戦が元々シエスタの家の所有物だった事を配慮した結果だ。

「では、始めるとしよう。シエスタ、こちらへ」

「は、はい！」

やや緊張した面持ちでシエスタはこちらにやってくる。そんなに緊張する事は……いや、あるな。油断大敵　つまらないミスでゼロ戦の操縦をしくじったりすれば目も当てられん。

後ろに乗せるシエスタの命は、一時的に俺の手に委ねられるのだ。気を引き締めねば……！

シエスタを姫だつこの形で抱え『飛行^{フライ}』で、操縦席まで浮き上がる。

「シエスタ、窮屈かもしれぬが辛抱してくれ」

「は、はい」

ゼロ戦は基本的に1人乗り戦闘機　多少余裕はあるが、操縦席は1人分のスペースしかない。故に2人で乗ろうとすると、操縦席に座った俺の膝の上にもう1人を乗せる形になる。

「……………」

「うつ……………！？」

何だつ、今の悪寒は……！？何かこう、ピンクと青のビームに当てられて感電した様な……い、いや、きっと気の所為だろう。

気を取り直して……離陸準備である。

遍在の1人がクランク棒を、機体右側力ウリング（エンジンカバ―）のすぐ後ろにあるクランク差込口に刺し、内部のクランクに繋いで回す。ゼロ戦は初期型のレシプロ戦闘機な為、現代のレシプロ機に付いている『電動スターター』という自動始動装置がないので、エンジンは人力の手動で回さなければならない。

クランク棒は座席の背もたれの裏に格納できるようになっている。不時着などした時に棒がないと再始動できないので、機体の備品として装備することになっている。と、レシプロ機マニアの友人から熱く聞かされた事がある。

佐々木氏のゼロ戦にも、しっかりと装備されていた。原作で才人は『道具がない』と言っていたが、恐らくそこまで詳しく知らなかったのと、『ガンダールヴ』のルーンでは『武器』ではない装備の有無までは把握できなかったのだろう。

（燃料コック、メインタンクに切り替え。混合比レバー、プロペラピッチレバー、『離陸上昇』位置へ。カウル・フラップ、オープン。潤滑油冷却器、クローズ……）

ブレーキを踏みしめ、左手で操縦桿を握り、準備を進めながら思う。

やはり、『ガンダールヴ』の能力は恐ろしいものだ……。車とバイクの免許しか持っていないこの俺が、こんな戦闘機の操縦方法が手に取る様に分かってしまう。

これは危険極まりない事である。しかも、俺はチート能力と併用

する事で……極端な話、戦艦でさえ1人で動かせてしまうのだ。

この能力を使うに当たっては慎重にならなければならない。その事が改めて分かった。

（プロペラの回転が安定してきたな……そろそろか）

緩やかに回転するプロペラを慎重に見つめながら、点火スイッチに右手を掛ける。

（……今だ！）

タイミングを見計らい点火スイッチを押し、ブレーキを弱め、スロットルレバーを全開。

ブルンッ！ブルロロッ……！！

プロペラの回転速度が一気に増し、エンジンが唸りを上げて始動。それと同時に、遍在はクランク棒を抜きエンジンから離れた。

そして、ゼロ戦が滑走を始める。

ガダカタ……

整備された滑走路ではないので、かなり揺れる。だが、この程度なら問題はない。

ゼロ戦はどんどん加速していく。

（油圧計……問題無し。他の計器も異常は無いな……よし、いける

ぞ)

「……っ！」

膝の上に座るシエスタが、不安げな表情で俺の服を掴む。

「シエスタ」

「は、はい……！」

「案ずるな。おぬしの曾祖父殿が残したこの『竜の羽衣』と、吾輩を信じよ」

「……はい！信じます！」

シエスタの顔から不安が消えた。

俺は頷き、再び操縦に集中する。

良い具合に加速がついた所で、操縦桿を軽く前に倒し、尾輪を地面から離してやる。

いよいよテイクオフだ。

「っ！」

更に速度が上がったところで操縦桿を引き、機体を持ち上げる。

ブウウウ……ンッ！！

俺とシエスタを乗せたゼロ戦は、低いプロペラ音を響かせ、空へ飛び上がった。

<SIDE：ルイズ>

「「「おおおっつ！」「」」

ジークの言った通り、『竜の羽衣』は空を飛んだ。それを見て、タルブの村人達が歓声をあげる。

「本当に……本当に『竜の羽衣』が、飛んだぞおっ！！」

「タケオさんが言ってた事は、本当だったんだ……！」

そう言ったのは、村の年長者達……多分、シエスタの曾お爺様を知っている人達なんだろう。

「ホントに……飛んだわっ！」

隣で、キュルケが驚きの声を上げる。

ちょっと癪だけど、私もキュルケと同じ様に驚いていた。

「信じられない……あんな物が本当に空を飛ぶなんて……！」

「彼の言う事に間違いはない」

「む……」

キユルケを挟んで向こうにいるタバサは、さも当たり前みたいに
呟く。何よ……ジークは私の使い魔なのよ？主人の私を差し置いて、
何でそんなにジークを信じ切ってるのよ……。

ベベベ、別に悔しくなんかないのよっ！？ただ主人と使い魔は一
心同体っていうか心で繋がってるっていうか　とととっ、とにかく
くそんな感じな訳だから！ジークを1番信じてるのは私であるべき
でっ……ってそうじゃなくて！

「……」チラ

内心モヤモヤしていると、タバサが向こうからこっちを見てきた。

「な、何よ……？」

「……クス」

「っ！？」

なななな何よ、今の笑いはっ！？何なのよ、今の『勝った』と言
わんばかりの表情はあッ！？

「「……」」

バチバチバチッ！！

「うゝむ、この目で見てもまだ信じ切れない……。僕は、夢を見て
いるんじゃないだろうか……？なあ、誰か僕の頭を軽く殴ってみて
くれないかね？」

「ふんッ！」「……」

バキッ！×2

「ふごッ！？」

私の右のパンチと、タバサの杖の一撃が綺麗に決まる。空氣の読めないギーシュには、このぐらいでちょうど良いのよ！

「あんた達、何やってるの？くだらない事やってないで、『竜の羽衣』を見なさいよ」

「ぼ、僕の理不尽な扱いを……く、くだらないとか……言わないで、くれたまえ……！」

ヨロヨロと立ち上がるギーシュ。案外、しぶといわね……。

まあ、ギーシュの事はどうでもいいわ。氣を取り直して、私は空を飛び回る『竜の羽衣』に視線を戻す。

「速いわねえー！タバサのシルフィードと良い勝負じゃない？」

「シルフィードより速い」

キュルケの言葉に、タバサはサラッと答えた。

シルフィードは風竜の幼生だけど、ここまで乗ってきた感じ、結構速かったわ……。魔法を使わずに、風竜より更に速く空を飛べるなんて……あんな物が造られてる国って、一体……？

ジークは『竜の羽衣』の事を知っていた。確か、私に召喚されるまであちこち旅をしていたって言うたわね……。じゃあ、『竜の羽衣』が造られた国に行った事があるのかしら？

後で、その辺りの事を聞いてみよう。

私は空を飛び回る『竜の羽衣』を見上げながら、ぼんやりとそんな事を考えていた……。

<SIDE:OUT>

「凄い！凄いですっ！私の村があんなに小さいですっ！！」

シエスタは窓に張り付いて、さっきから大はしゃぎしている。

「ジークさん！曾お爺ちゃんは、嘔吐きじゃなかったんですねっ！本当に、『竜の羽衣』に乗って東から飛んで来たんですねっ！！」

「勿論だとも。今、こうして我らが空を駆けておるのが、何よりの証だ」

「はいっ！」

良い笑顔で答えるシエスタ。空を飛ぶという初めての体験の興奮もそうだし、何より自分の曾祖父の汚名返上が成されたのが嬉しいのだろう。

ここまで喜んでもらえたなら、ゼロ戦を飛ばした甲斐があったというものだ。

その後もしばらく遊覧飛行が続き、タバサ、ルイズ、キュルケ、ギーシュもゼロ戦に乗せ、皆かなり驚いていた。

シエスタの家族も乗せようかと誘ったのだが、彼らは佐々木氏の汚名が雪げただけで十分だと言って、俺の申し出を断った。

村人達も、後で佐々木氏の墓に「嘘吐き」呼ばわりした事を謝りに行くと言っていた。

佐々木氏もきつと喜ぶ事だろう。

そして、その日は『竜の羽衣』が飛んだお祝いとかでタルブの村を上げて宴が催され、俺達も是非にと誘われ、参加する事になった。

タルブ名産のワインが樽ごと、料理も山のように振る舞われ、それはそれは盛大な宴だったとも……。

ルイズはあっさり酔い潰れるわ……、ギーシュは酔った勢いで村の綺麗どころにちょっかいを掛けまくるわ……、キュルケは酔いと場の熱っぽい雰囲気当てられたのかストリップショー紛いの事を始めようとするわ……、タバサは山と積まれた料理を片っ端から喰い漁るわ……、シエスタは絡み上戸で俺に絡んでくるわ……。

俺もなんだかんだで、かなりワインをがぶ飲みしてしまったので、

明日は二日酔いかもしれない……。まあ、楽しかったから良しとする。

そうして宴は夜遅くまで続き、大いに盛り上がった。

Episode・17 『足音 絶望と狂気が立てる音』 (前書き)

遂に2ヶ月も空けてしまいました……。現在もスランプ継続中の作者です……。

この先、どうしよう……？

引き続き、ご意見・ご感想、そして誤字・脱字の報告など、お待ちしております。

Episode・17 『足音 絶望と狂気が立てる音』

唐突だが、俺は今、日本の自宅に帰って来ている

あの大宴会の翌日、俺達はタルブ村を後にし、学院に戻った。ただ、シエスタはタルブ村に残った。

何故俺達がタルブにいるのが分かったのかは知らないが、村の方に学院から伝書フクロウが手紙を届けにきたのだ。手紙には、申請した休学の期日が迫っている為、俺達に帰還を促す文章と、シエスタの休暇の事が書かれていた。

アンリエッタ姫の結婚式の日が近付いている為、今戻ってもすぐにまた休暇になるだろうから、シエスタはそのまま少し長めの休暇に入って良いと書かれていたそうだ。

そういう訳で、シエスタをタルブに残し、俺とルイズはゼロ戦で、タバサ達はシルフィードに乗って学院へ戻ったのだ。シルフィードに合わせて、ちゃんとゼロ戦の速度は出来る限り緩めたぞ。

で、学院に着いた時はちょっとした騒ぎになった。学院の教師や生徒達が、見慣れないゼロ戦が空から降りて来たのを見て、集まって来たのだ。

「なんだ、これは!？」

「空を飛んできたぞ!？」

「だったら竜か何かの一種かつ？でも、こんな竜は見た事が無いぞ！？」

こんな感じで、口々にゼロ戦に関する憶測が飛び交った。そんな中、誰よりもゼロ戦に近付いてきたのがコルベールだ。

「じ、ジーク君！こ、これは何だねっ？よければ私に説明してくれないかねっ！？」

ゼロ戦からルイズを抱えて降りた俺に、コルベールは興奮状態MAXで詰め寄って来た。あのキラキラ輝く頭……もとい、瞳で詰め寄られた時は、正直、非常に気持ち悪かった……。傍にいたルイズ共々、ドン引きだった。

で、まあ、ゼロ戦……飛行機についてを、俺が知る限りで事細かに説明させられた。

「なるほど！回転させて、風の力を発生させる訳か！なるほど良く出来ておる！では、ジーク君！早速飛ばして見せてくれんかね！ほれ！もう好奇心で手が震えておる！」

と言うので、俺はコルベールをゼロ戦に乗せて飛んだ。男と狭い操縦席で密着するのは嫌だったが、尊敬するコルベールのたつての願いとあれば、断る訳にはいかなかったので我慢した……。

「おおおおっ！飛んだ！本当に飛んだぞっ！それになんと速いのだっ！これが『ひこつき』という物か！素晴らしいっ！素晴らしい発明品だっ……！」

飛んでいる間中、コルベールはずっと子供の様に大はしゃぎしていた。

その後、コルベールの研究に役立つだろうからと、ゼロ戦は彼に預けた。分解しても構わないが、一度分解したら必ずその日の内に元の状態に直しておく様にと注意してな。コルベールは嬉々として頷いていたが……あの好奇心に燃え上がった目を思い返すと、今更ながらに不安になってくる。

で、何故俺が日本に戻ってきたかというと……ゼロ戦の改良案を考える為だ。その道に詳しい友人に、メールで相談してみようと思っただのだ。直接会って相談するのは駄目だ……あいつはそれ以外の事では普通に良い奴なんだが……ことレシプロ機について話し出すと、幾らでも暑苦しく語り続ける。俺も別の友人と一緒にそいつに捕まり、酷い目に遭った事がある……。

という訳で、捕まる心配がなくすぐに話を打ち切れるメールでの相談が、最良の選択なのだ。

「え」と……『To: Mr. レシプロ Cc: ジークフリート 件名: ちょっと相談』、と……」

PCでメールを作成する。Mr. レシプロとは奴のハンドルネームである。俺達の仲間内ではプライバシーを守る為、ネット上においてはハンドルネームで呼び合うのが決まりなのだ。

「『よお、Mr. レシプロ。久しぶり。実はネットを見ていて気になり、ちよいと聞きたくなった事があるので、軽く相談に乗って欲しい。ゼロ戦についてなんだが、あれを現代の技術で改良するとしたら、どうしたらいいと思う？色々ネットで調べてみたんだが、ど

うにもよく分からん……。ここはその道の専門家たるお前の意見が聞きたい。ちなみにここで対象とするのは52型だ』……こんなところか」

カチ、カチ……

マウスを使い、出来たメールを送信する。あいつの事だから、10分も待てば返信が返ってくるはずだ。その間に株と為替のチェックでもしておくか……。今は全額、『円』に戻して口座に入れてあるのだが、まあ一応な。

総額？まあ……。『0がいっぱいだってばよ！？』ぐらいとだけ言っておこうか。

そして、10分後

『To: ジークフリート Cc: Mr. レシプロ 件名: Re・ちよつと相談』

「おつ、きたきた」

メールボックスをチェックすると、返信がきていた。早速、開いてみる……。

『よお、ジークフリート！ホントに久しぶりだな！それにしてもいきなりのメールでゼロ戦ときたか。遂にお前も、レシプロ機の素晴らしさが理解出来てきたようだな！よし、任せておけ！では、先ずは日本におけるレシプロ機の始まりから』

「誰がそんなところまで遡れと言ったかッ！！全く、あいつは……相変わらずレシプロ機の事になると大暴走だな……！」

折角メールにしたというのに、その文章はまるで大学の論文並の文字数……しかもそのほとんどが、俺が聞きたかった事とは関係のないレシプロ機関連のうんちくばかりだ……。

設計者が誰とか、製造会社がどこだとか……そんな事知ってどうしろと？

結局、散々読み飛ばして俺が最初に質問したゼロ戦関連の項目に辿り着いたのは、メール到着から1時間後の事だった……。

『……さて、ゼロ戦の基本を語り終えた所で、お前が聞きたがっていた改良について話そう』

「やっとかよ……」

遠回りにも程がある……。

『お前はネットで色々調べたが分からないと言っていたが、それは当たり前だ。第二次世界大戦以降、戦闘機がF-4みたいなジェット機にシフトしている現代において、骨董品同然のゼロ戦を改良する意味がないからな。だから、皆、分かる限りのスペックデータや見れる範囲の資料なんかから、ここをこうすれば良いんじゃないか？的な想像で語るしかないんだ』

うん……言われてみれば、確かにそうだな。

『かく言う俺も、残念ながらそういう口だ。加えて、ゼロ戦はゼロ戦としての美しさを愛でるのが俺の主義でもある。改良云々は専門外だ。具体的な改良案を出す事はできない。それに、機体にはその機体のバランスってもんがある。エンジンを馬力の強いヤツに換装すれば速くなる、っていう単純な話でもない。速度が上がれば、機体にかかる空気抵抗や諸々の負荷も上がるから、そこも強化しなけりゃならん。でも、フレームや装甲を強固にしたり厚くしたりするって事は機体重量も増すって事だ。それら全てのバランスを考えてやらんと、改良どころか改悪になっちまうからな』

これは、少し舐めていたな……。ゼロ戦をちょちよいと魔改造して戦力を上げよう、なんて単純に考えていたが……そうはいかなそうだ。

『そこで視点を变えて、ゼロ戦が持つ問題点を説明しようと思う。その問題点とは 』

という訳で、友人から情報を得た俺は、再びハルケギニアに戻ってきた。

そして、早速ゼロ戦の改良に取り掛かる。Mr・レシプロから教えてもらったゼロ戦の問題点は……例によって度々うんちくを挟んでくれたおかげで非常に読み難かったが、要点を纏めると以下の通りだ。

一、防弾装備が無い。

- 二、機体の構造が脆弱。
- 三、20mm機関銃などの武装の性能が悪い。
- 四、各種艤装品の信頼性が低い。
- 五、設計に余裕が無く発展性が殆ど無い。
- 六、高速域での操縦性能が悪い。

と、こんな所だ。 問題点一・二は、機体を1グラムでも軽くしようとギリギリまで削り、軽量化を徹底し過ぎた弊害だそう。

防弾装備に関しては、熟練パイロットによつては『要らない』と言った人もいたそうだが、やはり被弾に弱いという弱点は致命的欠陥とMr.レシプロのメールにはあった。防弾装備があれば、兵の生還率が上がり、それによつて熟練のパイロットが増えれば、その後に開発されたであろう、高性能機での戦果が期待できた……。

更に、機体の軽量化の為にフレームを削り過ぎた所為で、開発中も尾翼の昇降舵のマスバランスが突然破損し操縦不能になり空中分解する事故が起きたり、急降下時に突然 主翼がもげて空中分解するなどの事故が起きたんだとか……いずれも、テストパイロットが死亡しているらしい。恐ろしい事だ……。

更に更に、そうして軽量化を突き詰めた結果、機体の強度が低くなり、機関銃を発砲するとその反動で翼が激しく震動し、弾があちこちに散り、まるで如雨露で水を撒く様な状態になり、命中精度の低下を招いたそう。追い打ちをかける様に、搭載されていた照準器も決して良い物ではなく、パイロットの技量が余程高くなければ、命中は期待できなかったらしい……。

ついでに、積まれていた無線機も外国製品の劣化コピーだったらしく、雑音が多過ぎて使い物にならなかったとか……。知れば知る

ほど、欠陥が目立つ戦闘機だったのだな、ゼロ戦……。

だが、戦時中の日本ならともかく、俺が佐々木氏から譲り受けたゼロ戦を運用するのはここハルケギニア 戦闘機はおるか蒸気機関すら存在しない異世界。現行のスペックでも充分驚異的な戦闘力といえる。

なので、改良はあくまで俺の好奇心だ。ぶっちゃけ、俺がチート能力で最強の『固定化』を掛けてしまえば、物理法則を無視して機体構造の問題は一気に解決してしまう。それどころか、徹甲弾でもミサイルでも傷一つ付けられない化け物戦闘機になってしまう。まあ、中に乗っている人間は衝撃で大変な事になるだろうし、そもそもシラけるのでやらないが……。

とりあえず、俺が手を加えるのは機体構造の強度向上 ぶっちゃけ、最低限……魔改造なんてレベルじゃない。

仕方がないじゃないか！俺自身、飛行機については専門外だし！Mr・レシプロだって、レシプロマニアで知識量こそ凄まじいが、あくまで趣味の範囲で、強化うんぬんを研究している訳ではないのだから！

取り乱してすまない……話を進めよう。

まずはフレームから 軽量化の為に開けられた穴を全て塞ぎ、補強を加え、素材を軽量で強度に優れたチタン合金に換える。

続いて、『探知魔法』ディテクト・マジックを使い、他の細かい部品をチェック 螺子や配線、配線を包む被膜など、劣化している部品は『鍊金』で修繕・強化を施しておく。ゼロ戦も精密機械 部品の劣化が思わぬ

不調を引き起こすかもしれないからな。

そして、外装甲板　これはどうしようか迷ったが、結局、厚みは変えずに素材だけを換える事にした。厚みを変える事でどんな影響が現れるか分からなかったからだ。これも、チタン合金を採用　タングステン・カーバイドとどっちにするか迷ったが、硬度と重量のバランスを考慮してチタン合金にした。

風防のガラスも、防弾ガラスに換えた。これだけ、防御を固めれば充分だろう。

作業を終えた後、機体全体に劣化防止のための『固定化』を掛け直し、機体の改造は終了　後は、消耗品の備蓄作成だ。

エンジンオイル、ガソリン、翼に搭載されている『20mm機銃』と機首に搭載されている『7・7mm機銃』の弾丸　全てゼロ戦内に残っていた物を分析し、『鍊金』で複製した。

全て、向こう半年分と見積もって作成した。これだけ作っておけば充分だろう。

万全の整備を施したゼロ戦、それを操る『ガンダールヴ』の能力、あらゆる魔法を十全以上に行使できるチート能力……これだけの条件が整っていれば、如何にこれから始まるであろう戦争において、ハルケギニア天下無双と謳われしアルビオン竜騎士を相手取る事にあるうとも、敗北する要素は皆無　のはずなのだが……。

「何故だろう……？」

何やら冷たい風が吹き抜ける空を見上げる。

程良く雲が流れる青天……何一つ、不吉を示す要素などありはしないはずの空なのに、ゼロ戦の改修と整備を進めれば進める程、何故か嫌な予感が強くなるのは……何故なのだろうか？

<SIDE：アルビオン空軍旗艦『レキシントン号』艦長>

私は、ヘンリー・ボウウッド……アルビオン空軍、いや『レコン・キスタ』空軍において巡洋艦艦長であった者だ。先の内戦においてアルビオン貴族派の側に与し、何度目かの艦隊戦で敵艦を運良く二隻ほど撃破した功績で、出世した男だ。

今、私がいるのはアルビオン空軍工廠の街口サイス 首都ロン・ディニウムの郊外に位置する王立空軍の工廠である。

巨大な煙突から煙を上げる製鉄所が立ち並び、空き地には船の建造や修理に使う木材が山と積まれている。その中で、ひと際大きく赤煉瓦の外壁でその存在感を示す空軍の発令所が建っている。

その発令所には、誇らしげに『レコン・キスタ』の三色の旗が翻っている。貴族派が、奇妙な勝利によって手に入れたアルビオンの支配者の証。

つい先頃、アルビオン貴族派『レコン・キスタ』はアルビオン王党派との内戦に勝利を収めた。今は『革命戦争』などと呼び、華々

しい勝利を収めたかのように触れ回っているが、事實は違う。

最後のニューカッスル城の戦い……確かに、我らを彼の城を攻め落とした。人っ子一人いない、空っぽの城を……。

その前日までは確かに、残ったアルビオン王党派が終結し、立て籠もりながら懸命に抵抗していたはずだった。なのに……王党派は一夜にして消えた……消えてしまっていた。

誰もがその事実には戸惑い、不思議がり、また不気味に思ったものだ。だが、貴族派の指導者にして、『神聖アルビオン帝国』と名を変えた現アルビオンの皇帝オリヴァー・クロムウェルは、その事実を隠匿し、あたかも『我らは激闘の末、テューダー王家とそれに与する者達を討ち滅ぼした』という様に情報を都合よく改竄し、国内外に流布した。

ニューカッスルの実情を見た者達には、『王党派は我らに恐れをなし、無様に逃げ出したのだ』と告げ、自軍の優位に酔っていた多くの将兵は疑いもなくそれを受け入れた。結局、その後の調査もされぬまま有耶無耶になってしまったのだ。

こんな事で、果たしてこれからのアルビオンは大丈夫なのだろうか……？と常々不安に思う。

そうした経緯を経て、現在……私はこのロサイスでひと際目立つ巨艦『レキシントン号』の艦装主任として、艦の艦装工事の指揮を任されていた。艦装が完了した後は、そのまま『レキシントン号』の艦長に就任する事になっている。これが、先程述べた出世という

ヤツだ。

全く嬉しくないがな……。

「なんとも大きく、頼もしい艦ではないか。このような艦を与えられたら、世界を自由に出来る様な、そんな気分にならんかね？ 艤装主任」

そう言つて私に声をかけたのは、現アルビオンの支配者……神聖アルビオン帝国皇帝オリヴァー・クロムウェル。元は、一介の司教だった男だと聞いている。

「我が身に余る光栄ですな」

礼儀としてそう答えはしたものの、気が無い声になっているのは自分でも分かっている。

口には出さないが、私はこの男に忠誠心など欠片も抱いていない……。実のところ、私は心情的には王党派なのだ。

先の内乱では、上官であつた艦隊司令が反乱軍側に付いてしまった為、已むなく『レコン・キスタ』側の艦長として参戦していたに過ぎない。

『軍人は政治に関与するべからず』それが私の武人としての信念であり、代々アルビオン軍人の家系である我がボーウッド家の家訓でもあつた。それは、アルビオン伝統の『ノブレス・オブリージュ』……高貴なる者の義務を背負い、果たす努力を怠らぬ姿勢を必須とする。

自分で言うのもなんだが、私は『ノブレス・オブリージ』を
体現すべく努力を続けてきた。故に、我が拠りどころは未だアルビ
オン王国であり、アルビオン王家なのだ。

その我が拠りどころを……王権を篡奪し、勝手に『神聖』だの『
帝国』だのと、この『白の国』を塗り替えていく忌むべき男に、忠
義など抱けるはずもない。

何やら演説の才能があるとかで、テューダー王家に叛意を抱える
貴族達を言葉巧みに同志に加え、アルビオン貴族派を立ち上げ、王
党派に反旗を翻したらしいが……一体、この見るからに頼りない瘦
せこけた男の何処に、彼らは惹かれ、賛同したというのか……。

「見たまえ。あの大砲を！」

クロムウェルは、原則に突き出た大砲を指さした。

「余の君への信頼を象徴する、新兵器だ。アルビオン中の錬金魔術
師を集めて鑄造された、長砲身の大砲だ！設計士の計算では……」

「えー、設計書によりますれば……トリスティンやゲルマニアの戦
列艦が装備するカノン砲の射程の、おおよそ1.5倍の射程を有す、
とあります」

そう答えたのは、クロムウェルが連れていた共の男だった。

私も一応、あの新型大砲の仕様は、資料を読んで頭に入れてある。
何でも、少し前に東方『ロバ・アル・カリイエ』からやって来た技
師が設計したという代物だそうだ。

エルフが住まうサハラの砂漠の向こうに位置する東方には、我々の魔法の体系に沿わない新技術を多く有していると聞いた事はある。噂では、エルフとも交流を持ち、彼らから技術を学んだとも言われているが……真相は私には分かんし、大して興味もない。

「これで、『ロイヤル・ソヴリン号』に敵う艦は、ハルケギニアの何処を探しても存在しないでしょうな」

間違えた振りをして、この艦の旧名を口にしてやる。軍人なり、私なりの皮肉という奴だ。

「ミスタ・ボーウッド。アルビオンにはもう『王権』ロイヤル・ソヴリンは存在しないのだ」

クロムウェルは微笑みながらも、そう反論してきた。どうやら私の皮肉に、気付いてくれたらしい。

「そうでしたな。しかしながら、たかが結婚式の出席に新型の大砲を積んでいくとは、下品な示威行為と取られますぞ」

そう、現在『レキシントン号』の艦装を急がせているのは、間近に迫ったトリステイン王女とゲルマニア皇帝の結婚式出席の為だ。

式には、国賓として『初代神聖皇帝』兼『貴族議会議長』のクロムウェルや『神聖アルビオン帝国』の閣僚達が出席する事になっている。その際に彼らを送迎する御召艦が、この『レキシントン号』なのだ。

親善訪問に新型の武器を積んでいくなど、砲艦外交ここに極まり、だ……。アルビオンは他国から白い目で見られる事になるだろ

う。

「ああ、君には『親善訪問』の概要を説明していなかったな」

「概要？」

親善訪問に概要もクソもなかるうちに……という事は、また陰謀か。頭が痛くなる……今度は一体何を企んでいる？

クロムウエルは、そつと私の耳に口を寄せた。

「……………は？」

その瞬間、私は我が耳を疑った。顔から熱が失せていく……なのに、心臓は煩いくらいに高鳴り、胸が苦しくなっていく。

この親善訪問に乗じて……『奇襲』を仕掛けるだと　？！

「バカな！そのような破廉恥な行為、聞いた事も見た事もありませぬ！まして……！」

空軍の主力を投下して、一気にトリステインに侵攻し占領しようなどと……！

「軍事行動の一環だ」

事も無げに、クロムウエルは呟いた。何が軍事行動なものか！こんなものは最早軍事とは言わん！

「トリステインとは、不可侵条約を結んだばかりではありませんか

！このアルビオンの長い歴史の中で、他国との条約を破り捨てた歴史はない！」

私は激昂した自分を抑えられなかった。当然だろう、これではまるで人里を襲うオーク鬼の群れと同じではないか！！いや、オーク鬼より遥かに下劣だ！！こちらから持ち掛け、合意を持って締結した条約を一方的に破棄し、あまつさえその相手を卑劣にも騙し打ちで一方的に攻め滅ぼそうなどと……！

この男、一体どこまで道徳を踏み躪るつもりなのだ……！？

「ミスタ・ボーウッド。それ以上の政治批判は許さぬ。これは、議会が決定し、余が承認した事項なのだ。君は余と議会の決定に逆らうつもりかな。いつから君は政治家になった？」

「くっ……」

痛い所を突かれた……。軍人とは物言わぬ剣であり、盾であり、祖国の忠実な誇りある番犬だ。

犬は飼い主の命には従うもの……、我ら軍人は政府の命に従うもの……。

指揮系統の上位に存在するものの決定ならば、黙って従う他にない……だが！

「……アルビオンは、ハルケギニア中に恥を晒す事になります。卑劣な条約破りの国として、悪名を轟かす事になりますぞ。後の統治にも、多大な悪影響を及ぼすでしょう」

「悪名？ハルケギニアは我々『レコン・キスタ』の旗の下、一つに纏まるのだ。聖地をエルフ共より取り戻した暁には、そんな些細な外交上の経緯いきさつなど、誰も気に留めまい」

「条約破りが些細な外交上の経緯ですとっ？国とは人間の集まり！不当に踏み躪られた者達の怨嗟は根深く残るのです！恨みを抱く者が、その恨みの対象に従う訳がないッ！あなたは祖国をも裏切るつもりか！」

思わずクロムウエルに詰め寄ろうとする。が……

スッ

「くっ……」

クロムウエルの護衛と思しき衛士が杖を突きつけてくる。

「ミスタ・ボーウッド、先程も言ったが……これは、議会が決定し、余が承認した事項だ。変更は無い。君も軍人ならば、上位命令には従うことだ」

「し、しかし……！」

「話す事は以上だ。……君は、君の職務を全うしたまえ」

そう言い残し、クロムウエルは其の者達を引き連れて去って行った。

「……………」

その場に取り残された私は、呆然とクロムウエルの姿を見送るしかなかった……。

私は初めて、軍人という職に就いた事を後悔した。いや、言い訳に過ぎない……。全ては私が間違っていたのだ。

何故、あの内乱の時、『レコン・キスタ』の側に付いてしまったのだ？何故、家訓を言い訳に上官に付き従ってしまったのだ？

自らの心に従い、上官から離れ、王党派に付いていれば……せめて、忠誠を誓うテューダー王家と共に、誇りを持って死ねたらうに……。

果たしてこれからのアルビオンは大丈夫なのだろうか……だと？

「ふふ……ふははははは！」

何か大丈夫な訳があるものか！既に終わっているッ！

『ノブレス・オブリージュ』を体現すべく努力を続けてきただど？

何が『ノブレス・オブリージュ』だ！とんだお笑い草だッ！

私は自ら『破廉恥』だの『卑劣』だの『卑怯』だのと罵った行為の片棒を担ごうとしているじゃないか！そんな命令にも刃向えず、従っているではないか！！

「ははははははははははははははははッ……！」

愚かな道化……それは、私の事だ。

「ははは、は……………これが……………生き恥、か」

私は、無様だ……。

<SIDE：クロムウエル>

「私はしばし、執務を行う。君達は下がりましたえ」

「ははっ」「」

ボタン

執務室の扉が閉まり、室内には私だけが残る。

「……………う、ううううう……………！」

私は頭を抱え、机の上で頭を抱えた。他の者達の前では、『神聖皇帝クロムウエル』の役を演じているが、私はもう限界だった……………どうしてこうなった！？

私はアルビオンの地方に赴任していた一介の平民出の司教に過ぎなかった。アルビオン王国の役人とロマリア宗教庁の橋渡し……………いや、板挟みで神経をすり減らす毎日だった。

そんな私は、ある日 届け物があり、ガリア王国の首都リュテ

イスに赴いたあの夜、日々の鬱憤を晴らすと酒場で酒を食らっていた……。そして、物乞いの老人に一杯の酒を奢った。

ほんの気まぐれだったのだ……。その気まぐれが、全ての間違いの始まりだった。

「司教、酒のお礼に望むものを一つ、あなたにあげよう。行ってこらんない」

物乞いの戯言　そう思って聞き流しておれば良かったのだ。それを、あの時の私は……

「そうだな、王になってみたい」

などと言ってしまった。

その翌朝、あの女　シェフィールドと名乗ったあの女に言われた。

「あなたを王にして差し上げるわ。ついてらっしゃい」

その一言で、私の人生は変わってしまった……。

あの方……ガリア王ジョゼフ一世にそそのかされ、ラグドリアン湖で『アンドバリの指輪』を手に入れ、アルビオン王家に不満を持つ貴族を集め、私に恥をかかせたアルビオン王家に復讐を開始したところまでは楽しかった。それは楽しい、まるで夢を見ている様な時間だった。

だが、次第に恐ろしくなった……。私には荷が重過ぎたのだ。

アルビオン王党派を打ち倒し、私は新たなアルビオンの頂きに立ってしまった。誰もが私を『クロムウエル閣下』『神聖皇帝』などと呼び、私の意のままに動く。

だが、私はガリア王の傀儡に過ぎない。そのガリア王も……アルビオン王家が滅んだ途端に何の音沙汰もなくなった。以前は姿を見せていたシェフィールドも、私から『アンドバリの指輪』を回収して以来、一向に姿を現さなくなった。

もうこの先どうすればいいか分からないッ！今は、前から言われていたシナリオに沿って動いているが、この先の事は何も聞かされていないッ！

何故、唐突に何も言っておなくなったのだ！？何故、私に指示をくれないのだ！？

このままでは……このままでは、あのボーウッドが言った様に我が国は……いや、私はハルケギニア全土の人間達から恨まれてしま……！！

私は……私はただ、言われた通りにしてきただけなのに……！

どうすれば……どうすれば、私は助かる……！？

「うううう………そ、そうだ……『聖地』だ……！『聖地』さえ奪還すれば……ロマリアが……！！」

『聖地奪還』は、ブリミル教徒の悲願……それを成し遂げさえすれば、その功績できっとロマリアが私を救済してくれるに違いない！

ハルケギニア全土を統一し、エルフ共から『聖地』を奪還する
もうこれ以外に、私がこの地獄から抜け出す道は無い！！

「く、く、く、く、く……！これしかない……ッ！！」

そうだ……私は悪くない。

私に恥をかかせた、アルビオンの無能な王家が悪いのだ……。

私を王に仕立て上げた、ガリア王が悪いのだ……。

私を崇め、勝手に『閣下』などと呼び、私の気も知らずについて来る奴らが悪いのだ……。

私は悪くない……悪くない、悪くない……！

悪くない悪くない悪くない悪くない悪くない悪くない悪くない
悪くない悪くない悪くない悪くない悪くない悪くない悪くない

……ッ！！！！

「ふん……ふん、ふん、ふん、ふん、ふん、ふん、ふん、ふん、ふん、ふん、ふん、ふん、ふん……」

ソウダ……ワタシハワルクナイ……。

Episode・17 『足音 絶望と狂気が立てる音』 (後書き)

ゼロ戦改造に関してご意見を下さったくアホリエツタ様へ、大変貴重なご意見を頂いておきながら、殆ど活かす事が出来ず、申し訳ありませんでした。

作者も主人公同様、ゼロ戦どころか機械全般の技術的な事は殆ど分からなくて……色々調べはしましたが、今回の様な形でお茶を濁す事になってしまいました……。

この場を借りて、お詫び申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9291m/>

ゼロの原作ブレイクな使い魔

2011年9月27日14時26分発行